
SPICY GAME ~ 辛口的遊戯 ~

李中龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S P I C Y G A M E 〱 辛口の遊戯

【Nコード】

N 4 4 9 9 D

【作者名】

李中龍

【あらすじ】

思わぬ罠にかかり、無実を証明できぬまま会社をクビになってしまった営業マン・柴田俊作。だが親友・鳴海純に誘われ、彼が開いた探偵事務所に雇われる。俊作は純と共に事件の真相を暴くために立ち上がる！

1・その男、柴田俊作（前書き）

初投稿作品です。至らぬ点多々あるかとは思いますが、そこはご勘弁ください！

1話当たりが長めなので、携帯電話からだと読むのが辛いかもしれません（汗） あらかじめご了承ください。

1・その男、柴田俊作

ある秋の夕暮れ。

代々木公園のベンチに一人の男が座り込んでいた。

ビジネススーツに身を包んだその男は、懐からおもむろに自分の名刺だけを取り出すと、ただじっとそれを眺めていた。

“株式会社 マグナムコンピュータ

本社 営業部 法人営業一課

柴田 俊作”

名刺にはそう書いてある。

柴田俊作は、その名刺に向かって「チツ…」と舌打ちをしてみせた。

何故なら、その名刺は彼にとってもう必要のないものだからである。

柴田俊作は東京都板橋区出身の27歳。

都内の大学を卒業後、株式会社マグナムコンピュータに入社し、本社営業部・法人営業一課に配属された。

彫りの深い顔つきが印象的だが、特に不細工というわけではない。身の丈はおよそ180センチほどあり、体格もガツシリしている。

また俊作は小学生の頃から空手を習っており、十代の頃はかなりヤ

ンチャなこともやっていたようである。だが、正義感が強く男気あふれる性格のため、彼には多くの仲間が今でもいる。

ちなみに、株式会社マグナムコンピュータは、コンピュータ関連業界の大手企業であり、主にパソコンの周辺機器を扱う。

渋谷の、宮益坂を少し南へ下った所に地上12階・地下3階の自社ビルを構え、大手企業の威厳を放っている。

自社開発のPCメモリやスイッチングハブ、外付けハードディスクなどは同社の主力商品としてユーザーから高い評価を得ている。

また、その他にソフトウェアの開発及び販売も行っており、こちらもそれなりに好評である。

取引相手は各種法人と、インターネットによるエンドユーザーとの直接取引だが、収益の大半は法人との取引によるものである。

俊作のいる法人営業一課は、よその一般企業と直接取引をするセクションである。課員は16人。実際に外へ出て営業活動をする外勤部隊が俊作を含め11人、それをサポートする営業事務の女性が5人いる。

売り上げも上々で非常に活気のある課として有名なのだが、一人だけスランプ気味の社員がいた。

俊作である。スランプ気味というよりは、半年ほど前からイライラを抱えている状態だ。

彼が法人営業一課に配属された当時は、藤堂という40代半ばの男性が課長を務めていた。

この藤堂という男は凄腕のセールスマンで、成績は常にトップクラ

スだった。また兄貴分的な性格で人望も厚く、組織を束ねるのにふさわしい人物といえる。

もちろん俊作も、彼の下で営業のスキルを吸収していった。それまではよかった。仕事も難なくこなしていた。

しかし、半年ほど前の人事異動により、それまで課長だった藤堂が営業部長に昇進することが決まった。後任には藤堂の3年後輩である笹倉という男性が来た。

この笹倉、営業成績だけを見るとマネージャークラスでもおかしくないのだが、性格が粗暴で幼稚性を帯びていた。前の部署でも、自分と合わない人間がいるとすぐに個人攻撃に出ていたという。

俊作は、ものの3日で笹倉に嫌われた。

「お前は理屈っぽいから嫌いだ！」と、面と向かって言われたのだ。俊作は意味がわからなかった。こんなことを言われたのは生まれて初めてだったし、もともと理屈を言うタイプではないことを自覚していた。

「理屈っぽい」と言われるまでの経緯を考えてもおかしい。俊作は笹倉に、仕事上で自分の意見を率直に述べただけなのだ。それなのに「理屈っぽい」と一蹴されてしまうなんて、まずありえない話だ。納得がいかない俊作は、自分のどこが理屈っぽいのかを問い質^{ただ}そうとした。しかし、笹倉の「黙れ！ いいから仕事しろ！」という怒鳴り声にむなしく叩き潰されてしまったのである。

この男との相性は最悪だ　　俊作はそう悟った。

もともと他人とまともに議論ができない、かわいそうな性格なのだ。そうやって割り切ることができれば、仕事上での精神的負担は少なくなる。俊作は考えた。多少のイヤミや小言なら耐えられる。彼はあくまで大人の対応を心掛けようとした。

案の定、笹倉は俊作に対してイヤミや小言を言い始めた。

笹倉「柴田あゝ、この見積何だあ？ お前こんな値段で売れると思
つてんのかあ？」

口調からして嫌らしさを感じる。

俊作「いや、そんなに高くはないはずですが」

笹倉「バツカヤロオ！ これでしたら粗利取れんのかって聞いて
んだよお」

俊作「原価に約5割の粗利を上乗せしましたから、十分取れますよ」
笹倉は痩せこけた小さな身体で精一杯踏ん返り返ってみせた。

笹倉「フン、なーにが約5割の粗利だよ……半人前のくせしやがっ
て。外見だけカツコよく見せたって中身が伴わなきゃ売れねえんだ
よ。わかってんのか」

俊作は笹倉の、歳のわりには薄くハゲた頭に踵落としを炸裂させて
やりたくなった。

俊作「はい……。ですがこのユーザーとは今までこれでやってきまし
たし、定価からある程度値引きしてあげるのも顧客に対する心遣い
だと思っんですよね」

笹倉「……ああ、そう。じゃあこれで行ってこいよ」

投げやりに言うと、笹倉は見積書を俊作の目の前に投げ捨てた。し
かし俊作は何も言わず、その見積書を手に取って自分の席に着いた。

こんなやり取りは日常茶飯事である。無論第三者の目から見て気分
のよいものではない。

中でも、俊作と同期入社の高根伸子たかねのぶこは、笹倉への強い嫌悪感を表わ
にしていた。

伸子「何なの、課長のあの態度！」

伸子は初め総務部に配属されており、営業部・法人営業一課に来た
のは2年ほど前のことだったが、俊作とは同期のよしみもあってか、
入社当初から仲がよかった。二人はちよくちよく一緒にランチや飲

みに行ったりしているようだ。

また彼女はぱつちりとしたキレイな瞳が印象的な美人であるうえに性格もサバサバしており、男女問わずいろんな人から好かれている。

伸子「柴田くん、よく平気でいられるね」

俊作が見積書にケチをつけられた日の帰り道、伸子が素朴な疑問を俊作に投げ掛けてみた。

俊作「あの人は気の荒い人だからね。“そういうもんだ”って割り切っちゃえばさほど苦にはならないよ」

伸子「へえ、そうかあ……」

少し風の強い日だった。肩まで伸びた伸子の髪がふわりと、先の方だけ舞い上がった。

伸子「…あたしだったら我慢できないなあ」

俊作「まあ、そこを我慢できるのが大人の証ってヤツだな」

おどけながら、少し得意げに言ってみせた。

伸子「あらまあ、どの口が言ってるのかしら。ランチの時にクリムソーダ頼む人間が大人だとはいえないと思うけど？」

俊作は頬を赤らめ、黙り込んでしまった。

とにかく、気のおけない連中とこうやってくだらないことを言い合うことが、彼にとってストレス発散方法の一つとなっているのだ。

自分だけではなく、みんなも同じように何らかのストレスを抱えている。それを仲間同士で吐き出して共感すれば、少しは気が楽になるというものである。

しかし、笹倉の嫌がらせは日増しに強くなっていった。

そして笹倉が着任してから3ヶ月が過ぎた頃、俊作が笹倉に強い敵意を抱くトラブルが起きてしまう。

1 ・その男、柴田俊作（後書き）

俊作と笹倉課長との間に起こるトラブルとは…？

2・溝

その日、俊作は外回りを早めに切り上げて会社に戻り、事務仕事に打ち込んでいた。

昼間に株式会社 白鷺堂はくろどうという広告代理店から外づけハードディスク2台と会計ソフト1本の注文をもらってきたので、商品を仕入れる手続きをするためである。

この白鷺堂という会社は、俊作にとって初めての顧客だった。それだけに思い入れが強く、5年目を迎えてもなお、良好な関係が続いている。

商品を仕入れるのに必要な発注書をパソコンで作成する俊作。

画面上では完成し、あとはプリントアウトするだけの状態になったところで、俊作に話し掛ける者がいた。

俊作の3年先輩である会田修あいだおさむだった。

会田は法人営業一課の稼ぎ頭であり、若手社員のリーダー的存在だった。さっぱりとした短髪がよく似合う、まさに模範的なサラリーマンといった感じだ。

俊作とは特に仲良しでもなければ犬猿の仲というわけでもなかったが、俊作自身は何となくタイプが違うと感じていた。

俊作「会田さん」

会田「おっ、頑張ってるな。また白鷺堂から注文もらってきたんだって?」

俊作「さすが会田さん、情報早いつすね。…まあ白鷺堂はつき合い長いですから」

会田「ああ、そうだったな。ところで柴田、今度の木曜夜あいてる

か？」

俊作「木曜ですか？ あいてますよ」

会田「おお、よかった！ 実はさ、二課の羽村さんとかと飲みに行くんだけど、お前も来れるかなーって思ってる」

俊作「そうだったんですか。じゃあオレも参加させていただきます」

羽村さんとは、俊作たちがいる法人営業一課の隣である、法人営業二課で営業事務をやっている女性だ。フルネームは羽村佐知絵^{はむら さちえ}。俊作や伸子の2年後輩にあたる。

俊作と会田が話しているところへ、一人の女性を通り掛かる。

伸子と同じような中肉中背だが、伸子より若干背が低い。顔立ちも美形ではあるが、目鼻立ちが整っており、何となく妖艶なオーラがある。

この女性が羽村佐知絵である。

会田「羽村さん」

会田が佐知絵を呼び止める。

会田「木曜の話だけど、柴田も来てくれるってさ」

佐知絵「あっ、そうなんですかあ！」

佐知絵が笑顔で応える。

彼女の笑顔は素敵だと営業部内でも評判なのだが、人によってはどこか男に媚びたような印象を受けるといふ。

佐知絵「柴田さん、木曜はよろしくです！」

佐知絵は馬鹿丁寧に挨拶した。

俊作「何だよ、急に改まっちゃって」

佐知絵はエヘツと笑ってごまかし、小走りで自分の席へ戻っていった。

会田「じゃ、木曜な！ 詳しくは後でメールするよ」

会田も自分の席へ戻った。

俊作はわずかに胸を躍らせつつ、パソコン画面の印刷ボタンを押した。

木曜日。

時刻が午後2時を回った頃だった。

俊作が慌ててオフィスに駆け込んできた。事務仕事をしていた伸子が何事かと顔を上げる。

伸子「柴田くん、そんなに慌ててどうしたの？」

急いでパソコンをたちあげる俊作に伸子が尋ねる。

俊作「いや、ちょっと…」

今の俊作には、質問に答えている余裕はなさそうだ。よほどの緊急事態なのだと思いは悟った。

俊作「…あつ、やっぱり間違えてる！」

画面を見て、俊作は唸るように言った。

この時俊作が見ていたのは、発注書の入力フォームだった。

実は、先日株式会社白鷺堂から受注した外づけハードディスクに関して手違いが発覚したのだ。

先方が欲しかったのは250GBのハードディスクだった。しかし、実際に俊作が納めようとしたハードディスクは、2台とも160GBの容量しかなかった。

客先で初めてそれに気付いたため、俊作は一瞬にして頭が真っ白になった。

いまだかつて、こんなミスをやらかしたことはなかった。どうしよう。大事な顧客に迷惑をかけてしまった。

「すぐに新しい商品を手配します！」と深々と頭を下げ、俊作は大

急ぎで会社へ引き返した。

俊作「おかしい……どこで入力を間違えたんだ……？」

パソコンの画面とにらめっこしながら、俊作は必死に心あたりを捜していた。だが、いくら考えても出てこない。あるとしても、あとは印刷だけだというところで会田や佐知絵と軽く雑談したことぐら이다。それで最終確認を怠ったか。しかしその可能性も低いだろう。

突然、俊作は背後に邪悪な気配を感じた。

課長の笹倉だ。

笹倉がポケットに手を突っ込んだまま、やや半身になって俊作を睨みつけている。

笹倉「どうしたんだ？」

ゆっくりと、恐いくらい丁寧な口調で尋ねる笹倉。俊作も、堅く重い口をこじ開けた。

俊作「それが……白鷺堂に納めるはずのハードディスクに手違いがありました……容量が違ってたんです」

笹倉「ああ？　容量が違うだあ？」

俊作「はい……」

笹倉「入力ミスか？」

俊作「そのようです」

笹倉「ふざけたこと言ってるじゃねえぞ！！　てめえでやったんだろっが……！」

俊作「でも、どこでミスしたのか全然記憶にないんですよ……！」

笹倉「じゃあ何で間違った商品が届くんだ……！」

俊作「……わかりません」

笹倉「……ケツ、……わかりません」じゃ済まねえぞ。これからどうするつもりだよ？　客に迷惑かけてよお……！」

俊作「す、すぐ新しい商品を発注し直します……！」

笹倉「いいよ、そんなことしなくて」

俊作は一瞬耳を疑った。

俊作「…え？ いや、しかし…」

笹倉「発注し直さなくていいつつつてんだよ。それよりも柴田、ちよつと来い」

笹倉は俊作を、人気のない給湯室付近まで連れ出した。

俊作「課長、どういことですか？ 発注し直さなくていいだなんて」

ほんの数秒間をあけて、笹倉は口を開いた。

笹倉「…その前に、お前、どうしてミスをした？」

俊作「それが…本当にこれといった心当たりがないんです」

笹倉「そんなはずはない。よく思い出してみる。お前のことだからきつと何かあるはずだ」

俊作（“お前のことだから”ってどういことだよ、クソが）

俊作は少々ムツとしながらも、発注書作成時の経緯を思い返してみた。

俊作「そういえば、9割がた作ったところで会田さんと話してました」

笹倉「会田と？ そうか、会田としゃべってたから注意力が散漫になつて入力ミスをしたってんだな？」

俊作「いや、それはないんじゃないかと…。その時点でもうあとは印刷だけだつて段階でしたから」

笹倉「じゃあ他にどんな理由が考えられる？ 結局はおめえの不注意だろうが」

俊作はもう、何が原因なのかよくわからなくなっていた。考えれば考えるほど頭が混乱してくる。本当に自分の不注意だったのだろうか。そう言われればそうかもしれない……。

何も言い返せないでいると、笹倉が大きくため息をついた。

笹倉「…わかった、もういい。柴田、お前には白鷺堂の担当から外れてもらう」

俊作「な……！」

俊作は再度耳を疑った。そして笹倉に詰め寄る。

俊作「ど、どうしてですか!？」

笹倉「自分のミスを確認らんねえヤツは信用できねえ」

俊作「あれはホントに心当たりがないんです! それに今まで大きなミスなんかしたことがなかったじゃないですか!」

笹倉「ああ? 今日やったじゃねえか。今さっき、発注ミスをなあ! そして間違ったモノを客に納品しようとした! 違うか!？」

俊作「そりゃそうですね。ですが課長」

笹倉「うるせえ!! 客に迷惑かけたヤツが口応えすんな! だいたい、お前みてーないいい加減なヤツに顧客管理なんか任せらんねえんだよ」

俊作「どこが……オレのどこがいい加減なんですか!」

俊作がたまらず笹倉の両肩に掴みかかり、激しく前後に揺さ振った。笹倉「おつかねえヤツだなあ…終いにや暴力かよ。そんなことしたらクビだぞ?」

俊作は思わず手を離れた。気まずそうにうつむく俊作を見て、笹倉は不敵な薄ら笑いを浮かべる。

笹倉「まあ、そう落ち込むな。飛び込みでもやってりゃ、そのうち新しい客が見つかるさ」

機械的に言くと、笹倉はドレスシャツの胸ポケットからタバコを取り出し、喫煙室の方へ歩いていった。

大事な客を理不尽な形で奪われた俊作は、その場に呆然と立ち尽くすのがやっとだった。

3・白濁した権力（チカラ）

会田「なるほどな…。そりゃ確かに理不尽な話だよな」

俊作が笹倉の権力で大切な顧客を奪われた木曜日の夜は、会田や法人営業二課の佐知絵と飲みに行く約束をしていた日だった。

飲みには伸子も急遽加わった。落胆する俊作を励ますためだそうである。

4人は酔いもまわらぬうちから議論を展開する。もちろん、話題は俊作と笹倉のトラブルについてである。

佐知絵「ひどいですね、それは…」

伸子「ひどいでしょ？ あたしも頭にきちゃった！」

実は、あの後に伸子も抗議したのだが、「お前には関係のない話だ」の一言でつぶねられてしまったのだという。

俊作「傍若無人極まりないよ、あの男は」

ジントニツクを一気に飲み干し、俊作が吐き捨てるように言った。

伸子「そうだよねえ。いくらなんでもあれは職権乱用だよ」

佐知絵「柴田さん、これからどうするんですか？」

佐知絵が半ば心配そうな目で俊作の顔を覗き込む。照れ臭そうに目をそらす俊作。

俊作「うーん……もう一度課長に掛け合ってみようかな…」

会田「だけど、課長がちゃんと話聞いてくれるとは思えないぞ」

俊作「そこなんですよね…。あの人、オレの話なんか聞こうともしないから」

伸子「じゃあ、藤堂部長に相談してみるの？」

俊作「ああ、なるほど、それはいいかもな。藤堂さんならわかつてくれるはずだ」

会田「そうだなあ。でも藤堂さんも部長になってから会議やら何やらで忙しそうじゃない？」

俊作「確かに。なんとか時間を作ってもらうしかないですよね」

佐知絵「柴田さん、頑張ってくださいね」

佐知絵が、また心配そうな目で俊作をじっと見つめながら言う。

俊作「お、おう。ありがとう」

言うタイミングが唐突に感じられたので、俊作は思わずたじろいでしまった。

伸子「でも、ホントにそれしか方法がないもんね。柴田くん、何かあったらあたしも協力するから！」

俊作「サンキュー、のぶちゃん」

ちなみに、俊作は伸子のことを入社以来ずっと“のぶちゃん”と呼んでいる。

新入社員歓迎会の時に、俊作が酒の勢いでそう呼んでしまったのが始まりなのだそう。もつとも、伸子本人はそれをまったく気にしていない。それよりか、伸子も俊作のことを時々“シバちゃん”と呼ぶことがあるらしい。

会田「よし！ それじゃあ気を取り直して飲むぞ！今日はオレのおごりだ！」

俊作「えっ？ いいんですか会田さん？ 給料日前なのに……」

会田「気にすんな！ とりあえず柴田には元気出してもらわないと困るしよ！」

俊作「……すみません、会田さん」

自分には仲間がいる。そう思うと、俊作は胸の辺りにあるモヤモヤが少しずつ解けていくのを感じた。今夜は会田の好意に甘えることにした。

翌日。

俊作は午前中一番に顧客とのアポイントがあつたので、朝礼が終わるやいなや、颯爽とオフィスを後にした。藤堂部長には帰社後に時間を作ってもらうつもりでいた。

午前10時17分。

客先から出てきた俊作の携帯電話が鳴る。

笹倉からだ。

とりあえず会社に戻れとのことだった。

俊作「“とりあえず”って何だよ」

訝しげに首を傾げながらも、やはり何の話か気になるので、俊作は会社へ戻ることにした。

会社に戻った俊作は、サツとオフィスを見渡した。

藤堂部長はいない。会議だろうか。

そして笹倉もいない。人を呼び戻しておいて不在とは……。

伸子「柴田くん！」

後ろから伸子が声をかけてきた。

伸子「課長に呼び戻されたのね。喫煙室まで来いって言ってたよ」

俊作「何でわざわざそんな所へ呼び出すんだ？　ここじゃ話せないことなのか？」

伸子「わかんない……。でも気をつけてね。なんだかイヤな予感がす

るの」

俊作「ああ……。とりあえず行ってくる」

だいたい察しはつく。昨日の“顧客取り上げ事件”についてだろう。俊作は、5メートルほど先から心配そうにこちらを見つめる佐知絵を横目に、やや重い足どりで喫煙室へ向かった。

喫煙室のドアを開けるなり、白濁した煙が束となって俊作にまとわりつく。それはまるで呪縛のように俊作から離れようとはしなかった。

軽くむせ返しながら奥へ進むと、笹倉が窓に向きながらタバコを吸っていた。

俊作「課長、今戻りました」

笹倉「柴田か」

笹倉が俊作に背を向けたまま答える。

俊作「あの……。どういう用件ですか？」

笹倉はフーツと大きく煙を吐いた。

笹倉「柴田……。ごめんなあ」

俊作「はい!？」

俊作は自分が何を言われているのか理解できなかった。構わず笹倉は続けた。

笹倉「白鷺堂だけだな、あそこは会田に任せることにしたよ。あいつならしっかりとやってくれそうだ」

俊作「はあ、そうですか」

俊作は気のない返事をした。そんな報告はむしろ不要である。

笹倉「それと……。もう一つお前に謝りたいことがある」

俊作「何でしょうか」

受け返しにも力が入っていない。

笹倉「オレが法人営業一課の課長になってから、お前には何にもしてやれなかったよなあ」

遠い目をしながら、笹倉は言う。

この男は何を言ってるんだ、と俊作は思った。やはり笹倉の言動は理解できない。

笹倉「…昨日のこともあって、オレ思ったんだよ。お前を一から鍛え直さなきゃダメだったな」

俊作「鍛え直す……？」

笹倉は俊作に向き直った。

笹倉「ああ。明日から飛び込み最低50件行ってこいよ」

俊作「と、飛び込みですか!？」

俊作の目が思わず大きく見開いた。

飛び込み　読んで字の如く、飛び込み営業のことである。まったく取引のない会社へアポイントもなしに訪問し、営業活動をするというアレだ。

俊作「今頃飛び込み50件ですか？」

どうして入社後5年目の人間が新人と同じことをしなければならぬのだ。入社後ずっと売れない状況であればまだ納得もできるが…というか、そもそも売れなかつたらきつと5年経つ前に辞めてしまっただろうが)、それなりに業績もある自分がそれをやるのはどう考えてもおかしい。

笹倉「不満か?　基本から鍛え直してやろうってんだぞ?　それと、

“最低”50件だ。そこんどこ間違えないように」

俊作「でも、今のボクには顧客もいくらか抱えてるし、同時に新規開拓もやってます!」

笹倉「1日あたり何件だ?」

俊作「3〜4件と行ったところですよ」

笹倉はタバコをくわえ、ニヤニヤ笑いながら、なれなれしく俊作の肩に手をポンと置いた。

笹倉「柴田あ、中途半端に慣れるってのは怖いモンだなあ、おい。

いい機会だ。基本に戻って自分を見つめ直せって」

この男はこういう時だけ恐ろしくまともなことを言うな、と俊作は感じた。同時に、俊作の体内は腹のほうからグツグツと熱く煮えたりぎっていた。

俊作の胸の中で、その熱い塊が一気に弾け飛んだ。

次の瞬間、俊作は素早く笹倉の手を肩から振り払った。

俊作「ですが断ります!!! 課長は自分が何をしてるのかわかっ

てんですか!!! これは、明らかに指導の域を超えていますッ!!!」

笹倉はキョトンとして俊作を見ている。

俊作「白鷺堂の件について言えば、確かにボクが悪いのかもしれない。でも、ここまでされるのはどう考えてもおかしい! 今更“自分を見つめ直せ”だなんて、こんな時に無理矢理正論じみたこと言わんで下さい!」

笹倉「…お前、何言ってるの? 自分の立場わかってるわけ?」

俊作「立場もへったくれもないでしょう! やりすぎですよ! そんな理不尽な指示は聞けません!!!」

言い切ると、俊作は顔を真っ赤にし、「はあ…はあ…」と肩で息をしていた。

笹倉「…残念だよ。まさか柴田がここまでバカだとはな。よくそんなことが言えるよな。へまやらかしたらペナルティが当たり前だろう?」

俊作「それがやりすぎだと言ってるんです!」

笹倉「妥当だろうが! お前みたいな体力バカは朝から晩までドサ回りしてるのがお似合いだ」

俊作「妥当じゃないですよ。勝手に決めつけるのはやめてください」
笹倉「あーん？ 勝手に決めつけるなだあ？ オレは一般的なお前の印象を言っただけだぜえ？」

確かに、俊作は体力には自信があった。だが笹倉なんかには体力バカ扱いされるのはシヤクだったし、ドサ回りがお似合いだという不名誉なキャラクター像を一方的に決めつけられて屈辱だった。

俊作「とにかく、ボクは絶対その指示には従いませんから！」

笹倉「あつ、そう。オレの言うことが聞けねえっつーんだな。てめえの評価が下がってもいいんだあー」

まるで捨てゼリフみたいに、かつ意地悪に笹倉は吐き捨てた。

笹倉「わかったよ。後で悔やんでも知らねーからなあー」

言つと、笹倉はタバコを灰皿に投げ捨てて喫煙室を出ていった。

後で悔やんでも知らない。

その言葉は決して捨てゼリフなんかではなかった。

次の日から、俊作は笹倉にビツタリとマークされ、ことあるごとに「早く飛び込み行ってこい」と呪いのような言われ方をされるようになった。

決してみんなに聞こえるぐらい大きな声では言わない。あくまで小さいボリュームで、ブツブツと俊作の耳元で囁くのだ。

俊作は断固としてそれを聞き入れようとはしなかった。頭の程度が低い人間だと割り切つて受け流すと決めた。

一方の笹倉もなかなか諦めない。むしろ楽しんでいるようにも見える。

第2段階ともいえる嫌がらせは必然的にエスカレートしていき、“顧客取り上げ事件”から2ヶ月が経つ頃には、口答だけではなく、

社内メールや電話を用いるようになっていた。

ここまでくると、俊作もさすがに耐え抜くのが難しくなってきた。白鷺堂の時と同じような発注書の作成ミスや、顧客との面会時間を間違えるなどの、今までしたことのないミスを立て続けにやらかすようになったからだ。

ミスをする度に、笹倉の、関節技よりもしつこい説教が始まる。笹倉はやはり呪文のようにブツブツと、普通なら失礼にあたるような言葉をぶつけまくった。

これでは仕事に集中できないはずがない。笹倉の嫌がらせは、俊作の精神と身体に、確実に影響を及ぼしていた。

3・白濁した権力（チカラ）（後書き）

執拗に俊作を追いつめる笹倉！

てゆーか、ここまでくるともうパワハラの域を超えていますよね（汗）

4・藤堂のアシスト（前書き）

笹倉の執拗な嫌がらせは続く…！

4・藤堂のアシスト

笹倉の容赦ない攻撃により、ストレスがたまる一方の俊作。精神的に追いつめられていくだけである。

しかし、その間も伸子や佐知絵、会田が気遣ってくれているおかげで、なんとかギリギリのところまで自我を保つことができている。

中でも佐知絵は、就業時間中はあまり傍目にはわからないが、出退社時などに出会うと少し大袈裟に心配そうな顔をする。

会田「羽村さん、かなりお前のことを心配してたぞ」

初めはたいしてそれを気に留めなかった俊作だったが、会田にそう言われてはどうしても気になってしまっていた。

会田は人の噂話には敏感である。

更に会田はこうも言った。

会田「もしかしたら、彼女、お前に気があるんじゃないの？」

俊作は一気に恥ずかしくなった。

俊作「ちよっと、変な冗談やめてくださいよ！」

そう切り返すのが精一杯だった。

しかし、よく思い返してみると、確かに佐知絵は「もしかしたら自分に気があるんじゃないか？」と思えるようなそぶりを見せているといえれば見せていた。

仕事の帰りが同じタイミングになると、二人は渋谷駅まで歩いてくる。

二人の分かれ道となる渋谷駅に着くと、佐知絵は、「柴田さんは、

もうまっすぐ帰っちゃうんですか？」などと言って、もう少し構ってほしそうな顔をするのだ。
しかもそのようなことが2、3回あったので、俊作も一度「じゃあ何か食ってく？」と食事に誘おうとしたことがあった。しかしその日は都合が悪いとのことで断られてしまった。

更にいうと、この頃彼女は女性らしさを強調した服装、つまり胸元が大きく開いた服やボディラインがくつきり出るような服を着て来ることが多い。

株式会社マグナムコンピュータの内勤女子社員に服装の規定はないが（外勤女子社員はスーツ着用が義務づけられている）、こうも色っぽい恰好をされては、健全な一男性である俊作も目のやり場に困ってしまう。

そういえば、最近仕事中に佐知絵とよく目が合うようか気がする。まさかとは思うが、会田の言うことも一概に否定することはできない……。

そんな中、俊作の状況が好転しそうな気配が見えてきた。

“顧客取り上げ事件”から2ヶ月経って、ようやく藤堂部長に相談する機会を得たのだ。

得た、というよりは、らしくないミスを連発する俊作を心配して、藤堂の方から二人で話す機会を設けてくれたといった感じだ。

まだ暑さが残る、ある日の夜、宮益坂交差点付近にある小さな居酒屋“ぼんぼん”。

この店は藤堂の行きつけである。女将の人柄と料理に母親の温かさ

を感じる、というのがいちばんの理由だそうだ。俊作も藤堂に連れられて何度か来たことがある。

カウンター席に着く二人。

藤堂「ほれ、お疲れさん」

ビールで一杯になったグラスを、藤堂は俊作の目の前に差し出した。

俊作「あ、お、お疲れ様です」

緊張気味にグラスを合わせる俊作。

藤堂「何でそんなに固くなってんだよ。昨日今日会った間柄じゃあるまいし」

俊作「すみません、なんか最近、藤堂さんとサシで飲む機会がなかったもんですから……」

先述の通り、以前は仕事帰りに俊作は藤堂と二人で時々この店へ飲みに来ていたのだが、藤堂が昇進してからはそんな機会もめっきり減ったため、俊作にはこの時間が懐かしく、かつ配属当初の緊張感を思い出させるものとなっていた。

藤堂「ああ、そういやこうしてお前と飲むのは久しぶりだったな。オレも部長になってからは会議がいっぱいあって忙しいしな」

言うと、藤堂はグラスのビールを一気に飲み干した。すかさず俊作が瓶を差し出す。

藤堂「おお、すまん。そうだ、何か食い物頼むか？ 腹減ってたんだろ？」

俊作「はい。おつまみじゃなくて普通にメシ食っちゃってもいいですか？」

藤堂「ああ、いいよ。そんな遠慮すんなって、オレの前なんだから俊作はお言葉に甘え、この店のオススメである水沢うどんを注文した。」

群馬県にある水沢観音の近くで生まれ育った女将が作る、自慢の一品だ。俊作もこれが大のお気に入りだった。非常にコシがあつて食べ応えも十分な上に、女将の地元で採れた舞茸の天ぷらが入っているのが人気の秘密である。

藤堂「…柴田よ、お前さん最近らしくないミスばかりかしてるけど、何かあつたのか？」

おいしそうに水沢うどんを啜る俊作に、もういいだろうと藤堂がこの日の本題を切り出した。

俊作の手が止まる。

今噛んでいるうどんをしっかりと飲み込んでから、俊作はこの数カ月にあつたことをゆっくりと話し始めた。

藤堂「…そうか、笹倉とそんなことが…」

ことの全てを聞いた藤堂は、カウンターの方向を向き、そう言いながらため息を吐いた。

俊作「確かに、白鷺堂の件について言えばオレのミスだと思うんです」

藤堂「まあ、そうだな。小さいことだけど、最後にもう一度見直しをするのは大切なことだからな」

俊作「はい…。でもそれだけで顧客を取り上げるなんてありえるでしょうか？」

藤堂「いや、それはやり過ぎだろう。過失の度合いにもよるが、この場合まずはお前が誠意を以て信用の回復に努めるべきだと思う」
俊作「実はオレもそう思ってます。だけど、あの課長の下にいます、なんだか自分が間違つてんじゃないかって……」

藤堂「柴田は笹倉に嫌われてるからなあ。お前の行動や言動が受け入れられないんだろうな」

俊作「どうして嫌われたんだろう……」

藤堂「そればかりは、オレも笹倉じゃないからわからん。だがこのままだとお前さんがやばい。何とかしないとな」

俊作「…なるでしょうか？」

藤堂「いや、何とかしなくちゃいけないんだよ。営業職つてさ、ただ数字をあげりゃいい”みたいなところあるだろ？」

俊作は小さく頷く。

藤堂「もちろん数字をあげることは最重要事項だ。でもな、それ以前に、己のモチベーションを上げさせてくれるような職場環境を作らなきゃいけないんだよ。…まあ、これを言つとキレイ事だとか理想論だなんて批判されるんだけどな」

藤堂は苦笑いをしながら枝豆に手を伸ばした。

俊作「…オレはそんなことないと思いますよ。藤堂さん、法人営業一課にいた頃はいい環境作つてくれてたじゃないですか」

藤堂「まあ、あれはお前や、他のみんながちゃんとして来てくれたおかげだよ。だが今はどうだ？」

俊作「今は……」

俊作は言葉に詰まってしまった。

藤堂「オレが見る限り、今の法人営業一課は決していい空気だとはいえんぞ。実際、ここ数ヶ月の課での売り上げも落ちてきてる。いかにモチベーションが大切かがわかるだろ？」

俊作「は、はい…。そうですね」

藤堂の力強い目に、俊作は何も言えなくなっていた。

藤堂の指摘通り、現在の法人営業一課の空気は一人の男によって汚染されているといっても過言ではない。しかも俊作自身はいちばんの被害者である。

藤堂「ちよつと笹倉と話し合ってみるか……」

藤堂が、今度はカウンターの奥を見つめながら独り言のように言っ

た。

翌日、俊作は午後一番に笹倉から呼び出しを受けた。

笹倉「このチクリ魔。おめえ部長に何を吹き込みやがった？」
いきなり何という切り出し方だろう。

俊作「…何のことですか？」
だいたい察しはついていたが、俊作は念のため何の話かを確認してみた。

笹倉「とぼけやがって。オレに客を取り上げられたからって部長に告げ口するヤツがあるか！ おめえ弱すぎる小学生か！ 今朝“白鷺堂の担当を柴田に戻してやれ”って言われたよ」

弱すぎる小学生って、なんてセンスのない例えだろうと俊作は思った。イマイチわかりづらい。そもそも俊作に、笹倉の言動をしっかりと噛み砕いて解釈しようなんてつもりは微塵もないのだが。

しかし藤堂はさっそく行動に移してくれたようだ。彼の、このフットワークが軽いところはいつでも感心させられる。

俊作「…白鷺堂は、ボクにとって初めてのお客様ですからね」

笹倉「あーうるせーな！ とにかく、部長に頼んだって無駄だぞ！

絶対客は返さねーからな」

まるでガキ大将のような怒鳴り方だ。小学生はどっちだ、と俊作は言いたくなかった。ここまできると、もう笹倉は意地を張っているようにしか見えない。

さっさと返してくれればいいのに。

やはり、すんなりと返してくれそうにはないようだ。事態は持久戦に持ち込まれそうな雰囲気だった。

しかし、それから半月ほど経ったある日、俊作は再び笹倉に呼び出された。

笹倉「白鷺堂だけどなあ……あそこの担当をお前に戻すよ。今まですまなかつたなあ」

俊作「…え？ ほ、本当ですか？」

笹倉「ああ。でも今はまだ担当が会田だから、あいつが次に行く時にでも一緒に行つて引き継ぎの挨拶をしてこい」

笹倉が、なんだか気色悪く映った。

こんなに優しい口調で話すのは初めてだからである。

俊作にとっては逆に怪し過ぎる光景だ。

今度は何を企んでいるのだろう。

何故ここへきて急激に態度を180度変えたのか。

しかし、ここでへたに笹倉の胸中を詮索して機嫌を損ねられたりでもしたら白鷺堂の担当返還はご破算になる。そう判断した俊作は、黙って笹倉の指示を受け入れることにした。

とにかく、俊作に大事な顧客が戻つたのだ。

5・俊作と佐知絵（前書き）

笹倉から大事な顧客を返してもらった俊作。周囲の反応は？

5・俊作と佐知絵

伸子「ホント？ よかったじゃん！」

会田「そうか！ やっぱりあそこの担当はお前が適任だよ」

佐知絵「柴田さん、これで一安心ですね」

白鷺堂の担当を返してもらえたという話を聞いて、伸子たちもすく喜んでくれた。

特に伸子は、俊作と席が隣り同士だったため、彼の苦悩が痛いほど伝わってきた。それだけに喜びも人一倍大きかったことだろう。

藤堂「柴田、お客さんついに返してもらえたんだってな！」

藤堂も、伸子と同じぐらいこのことを喜んでいた。

俊作「はい！ これも藤堂さんのおかげですよ！ ありがとうございまして！」

俊作は、ここ最近見せることのなかった、爽やかな笑顔で礼を言った。

藤堂「なーに言ってんだよ！ オレのことなんか気にしなくてもいいって。それより、もう二度と取り上げられないように頑張れよ！」
藤堂は俊作の肩を力強く叩いた。

俊作「はい！」

その日の帰り、俊作は佐知絵と道玄坂のダイニングバーで食事をし

ていた。

先述のような、いつものパターンである。

帰りのタイミングが偶然同じで、渋谷駅まで来ると佐知絵が淋しそうな顔をするという、あのパターンだ。

機嫌がよかったのか、俊作はまた食事に誘ってみた。

以前は断られたが、この日は素直に俊作の誘いを承諾した。

佐知絵「柴田さんってえ、ホントすごいですよねえ」

佐知絵は早くも酔いがまわったようで、先程から同じような発言を繰り返している。

俊作「お、おい、大丈夫か？」

俊作は「この子はこんなに酒が弱かったっけ？」と少々疑問に思いながらも佐知絵を気遣った。

結局、二人が店を出る頃、佐知絵は相当に酔っ払ってしまっており、まっすぐ歩くことができなくなっていた。

俊作は佐知絵を自宅の近くまで送ることにした。

佐知絵の家は渋谷区松濤方面で、二人がいた店からはホテル街を抜けるのが近道だという。

正直恥ずかしい。

俊作は佐知絵の手を引き、さっさとホテル街を抜けた。

会田「柴田あ、昨夜羽村さんと飲んだんだって？」

翌朝、俊作が出社するなり、会田がニヤニヤしながら顔を近づけて

きた。

俊作はまいったな、といった具合に苦笑した。もうその情報を手に入れるとは、さすがだ。

俊作「もう耳に入ったんですか？ まさか彼女本人から聞いたとか？」

会田「ん？ うん、まあな」

会田はややぼかしを入れるような答え方をした。

ちなみに佐知絵は俊作よりも早く出社していた。昨夜あれだけ酔っていたのにもかかわらず、何食わぬ顔でパソコンに向かっている。

身体の調子は大丈夫なんだろうか？
後で聞いてみよう。

会田「ところで、飲んだ後どうしたんだ？ 何かしたのか？」

ポリウムを落とし、イヤらしい目をしながら会田が俊作に尋ねる。

俊作「やだなあ、何を言い出すんですか！ 何もしてないですよ」

会田「ふーん：それならいいけど」

会田の目は明らかに俊作を冷やかしていた。ホテル街を通ったとはいえ、俊作は本当に何もしていない。昨夜はちゃんと佐知絵を自宅付近まで送り届けた。

と、会田は次の瞬間いつもの顔に戻り、全身を俊作に向かい合わせた。

会田「あ、そうだ、お前来週の金曜ってアポ入ってる？」

俊作「来週の金曜は：午前中に1件だけですけど」

会田「そうか！ じゃあ午後3時頃一緒に引き継ぎの挨拶をしに白鷺堂へ行こうか」

俊作「いいですよ！ わかりました！ でも、ちょっと間があきま

すね。今日は火曜じゃないですか」

会田「…まあ、オレもいつぱい客抱えてるからな」

俊作「そうですね…」

確かに会田は今のところ法人営業一課のエースだ。業務の量もそれなりに多いだろう。

会田「…あと、明後日の夜にお前の白鷺堂返還祝いをやろうと思うんだけど、平気か？」

俊作「平気ですよ！　なんかすいませんねえ、そこまでしてもらっちゃって」

会田「いいんだよ！　じゃ、メンバーはオレが揃えとくよ」

そこへ「何だ？　楽しそうな話だな」と、藤堂が通り掛かった。

藤堂「会田、合コンか？」

会田「違いますよー！　ほら、柴田がお客さん返してもらえたでしょ？　明後日の夜に、それを祝って飲もうかって話をしてたんです」

藤堂「おお、それはいいことだな！」

俊作「藤堂さんもどうですか？」

藤堂「いやあ、オレさあ、来週から出張なんだよ。今はその準備で忙しいから、明後日は難しいなあ…」

会田「そうですね…。わかりました。しかし出張とは忙しいですね」
藤堂「そうなんだよ。オレもお前らとゆっくり酒でも飲みたいんだけどな」

会田「じゃ、また今度飲みましょうよ！」

藤堂「そうだな！　よろしく頼むぜ」

そう言つて、藤堂は自分のマグカップを持って給湯室へ向かって歩いていった。

朝礼後、俊作が外回りへ行こうとすると、エレベーター付近で、トイレから出てきた佐知絵とすれ違った。

俊作「羽村さん、二日酔いとか…大丈夫？」

佐知絵「あっ…はい、なんとか」

いつもの、オーバーなぐらいの、佐知絵自慢の笑顔はやや陰りを見せていた。一見大丈夫そうに見えても、やはり昨夜の酒が抜け切らないのだろう。

俊作「…そうか。あんま無理すんなよ」

佐知絵「はい。お気遣いありがとうございます」

それだけ言葉を交わすと、佐知絵は自分の席へ戻って行った。それを見送ってから、俊作はエレベーターのボタンを押した。

2日後、俊作の顧客返還祝いと称した飲み会が道玄坂の居酒屋で開かれた。

出席者は俊作、会田、佐知絵の3人だけだった。会田が何人か他の社員にも声をかけて回ったらしいのだが、みんな都合が悪かったようで断られてしまったのだそうだ。しかも、いつもならこういう飲み会に出席するはずの伸子がない。俊作が会田に尋ねたところ、「用事があるから来れない」とのことだった。

俊作は、「まあ、みんなそれぞれ都合つてもんがあるからしょうがねえか」と、特に気にしなかった。

ちなみに、この居酒屋は先日俊作と佐知絵が食事をしたダイニングバーのすぐ近くである。

会田「今回の主役は柴田、お前だ！　今夜は遠慮せずガンガン飲んでくれよ！　金はオレが出すからな！」

会田にこう言われては飲まずにはられない。俊作は序盤から酒をガンガンあおった。

しかし、俊作は特別酒豪というわけでもなかった。

しまった、調子に乗りすぎた。

そう思った瞬間、俊作の耳に子守唄が流れ込んできた。全身がフワーツと軽くなったような、そんな気がした。

佐知絵「柴田さぁん！」

俊作がビクリと身体を震わす。

子守唄が一瞬にして消え去った。

時計の針が、午後１１時３０分を指している。

今、はつきりと、俊作は状況を飲み込んだ。

どうやら長いこと眠っていたようだ。それほど強くもないのに、初めからあれだけ酒を飲めば眠ってしまうのは当然の話だ。

佐知絵「もお、いつまで寝てるんですかあ！　早く帰りましょうよお！　明日も仕事あるんですよ！」

佐知絵も酔っ払っている。先日同様、呂律が十分に回っていない。

ここで俊作は、会田の姿がないことに気づいた。

俊作「…あ、あれ？ 会田さんは…？」

佐知絵「会田さんならあ、とっくに帰りましたよお！」

俊作「帰ったの？」

俊作は少し淋しい気持ちになった。

佐知絵「それより早く出ましょ〜！」

俊作「あ…ああ、そうするか。羽村さん、今日は一人で帰れる？」

佐知絵「あたしなら大丈夫ですよお」

言うと、佐知絵はサツと席を立った。だが、立った瞬間にフラフラとよろめいてしまった。

俊作「お、おい、大丈夫か？」

素早く俊作が佐知絵の身体を支える。

俊作「心配だから今日も送るよ」

佐知絵「いや、大丈夫ですってえ！」

俊作「大丈夫じゃねえって。こないだ送った所まで一緒に行こう」

佐知絵「う〜……」

俊作は、千鳥足の佐知絵を肩に抱えながら、先日同様足早にホテル街を通り抜けていった。

その際も、佐知絵は「大丈夫ですう」とうわ言のように繰り返していた。だが彼女はどう見てもまともに歩ける状態ではない。俊作は「いいから、無理すんな」と佐知絵を説き伏せつつ松涛方面を目指した。

しかし、この夜の出来事が後に大事件を引き起こすきっかけとなってしまう。

5 ・俊作と佐知絵（後書き）

俊作の知らないところで不穏な影が動いている…？

6・疑惑

俊作「会田さん、昨日はオレが酔って寝てる間に帰ったらしいじゃないですか。何か用事でも？」

翌朝、俊作は昨夜会田が先に帰った訳を尋ねてみた。

会田「ああ、ごめんな。ちょっと野暮用だったんだ」

また何かぼかすような答え方をしている。
どうせ女か何かだろうな。

俊作はそれ以上深く聞かなかった。

会田「それより、羽村さんは大丈夫なのか？」

言われて、俊作は営業法人二課の方へ目をやった。

確かに佐知絵がない。二日酔いがひどいのだろうか。

会田「…お前、やっぱり何かしたか？」

俊作「だから何もしてないっすよ！ 変な冗談やめてください」

会田「ふうーん……」

会田はこないだよりも冷ややかな目で俊作を見た。

俊作は少しだけイヤな気分になった。冗談混じりとはいえ、変なこととは何もしていないのに疑われるのは不快なものだ。

今日は金曜日だ。きっと佐知絵もこの週末で体調を整えてくること

だろう。

しかし、週が明けても佐知絵が会社に来る気配はなかった。

何かあったのだろうか。

週も半ばに差し掛かると、さすがに佐知絵を心配する声がチラホラと聞こえてきた。

当然ながら、俊作の不安も大きくなる。

そんな時だった。

笹倉「柴田、ちょっといいか？」

電話をし終えたばかりの笹倉課長が俊作を呼び付けた。

俊作が課長席まで歩いてくるなり、笹倉はスクツと立ち上がり、「ついて来い」とだけ言うと、さっさとエレベーターの方へ歩いていってしまった。

俊作「ちょ、ちょっと、課長ッ!？」

慌てて後を追う俊作。

俊作「課長、どこへ行くんですか？」

笹倉「……」

笹倉は何も答えなかった。

虚しく、エレベーターの動くモーター音だけが鳴り響く。

笹倉「降りる」

着いたのは2階だった。

このフロアには様々な広さの会議室が5〜6部屋あるだけだ。

ワケがわからずキョロキョロ辺りを見回す俊作の腕を、笹倉は強引に引っ張った。

笹倉「こっちだ」

引っ張られて着いた先は、会議室の中でも一番小さなF会議室だった。

こんな所まで連れ出して、いったい何をしようというのだろうか。

俊作にはおおよそ見当などつくはずもなかった。

中に入ると、男が独りで椅子に腰掛けていた。

パツと見た感じ、年齢は30歳前後だろうか。円い小さなレンズの眼鏡が印象的だ。

そして彼は、シャープな輪郭で、黒い髪をオールバックにしているが、不思議なぐらいそれが似合っている。

俊作が不思議そうにその男を見てみると、彼のほうから立ち上がり、俊作に向かって軽く一礼をした。

インテリな空気が俊作にブワツと押し寄せる。

何だ、このオーラのようなものは？
確かにインテリだが、どこか冷たい。

俊作の身体が自然と強張る。自分が一礼を返し忘れてしまっただ。

男「あなたが柴田俊作さんですか？」

眼鏡の男は、冷たい空気と共に丁寧な口調で話し掛けてきた。

俊作「は…はい。そうですか」

おそろおそろの返答する俊作。

男は目にもとまらぬ速さで懐から名詞を取り出し、俊作の目の前に差し出した。

この間約2秒。

本当に素早い。

男「申し遅れました。私こういう者です」

俊作は視線を名刺に落とした。

“ 戸川法律事務所
弁護士 戸川 とがわ 昭雄 あきお ”

名刺にはこう書いてあった。

俊作「弁護士…？」

俊作は、視線を今度はスーツの襟に移した。

男の襟には、金色のバッジが輝いている。

これって、弁護士バッジってヤツじゃないだろうか？
どうして弁護士が自分に会いに来るのだ？

戸川と名乗る眼鏡の男は、口元だけで笑みを作った。

戸川「突然お呼びだてして申し訳ありません。実は柴田さんにお話
がありました」

俊作「お話…ですか」

笹倉「…まあ、立ち話もなんですから座りましょうや」

3人はゆっくりと椅子に腰掛けた。

俊作「それで、私にお話というのは何なのでしょう？」

一瞬、俊作は、自分が法律事務所にヘッドハンティングされるので
はないかと思った。

しかし、彼は法律の知識は初級者程度のものしか持ち合わせていな
いし、そもそも、この笹倉課長がそんな話を持ち込んでくるとは到
底考えにくい。

では、いったい何の話なのだろうか。

戸川「私は無駄話をするのが好きではないので、単刀直入に申し上
げます」

じつと戸川の顔を凝視し、俊作は息を呑んだ。

戸川「…こちらに、羽村佐知絵さんという女性が勤務されていると
お聞きしております。柴田さんと同じ、営業部にいらっしやるそう
ですね？」

俊作「…はい…」

佐知絵の名が突然飛び出し、俊作の頭は再びビジー状態になり始めていた。

戸川「先週の金曜日から会社を欠勤なさっている、とのことですが？」

俊作「…はい、その通りです。ずっと休んでるんですよ。こんなに休みが続くとさすがに気になっちゃって……」

変な緊張感からか、俊作は必要以上に言葉を発していた。それでもしないと心が落ち着かないのだ。

笹倉「…フン。とぼけてんじゃねえよ、柴田」

俊作は思わず、笹倉のいる方向へ首だけを半回転させた。そこには仁王像のようなギラついた目で俊作をにらみつける笹倉がいた。

……とぼける？ 何を言ってるんだ？

戸川「その羽村さんが、“柴田さんからセクハラを受けた”と、先日私の所へ相談しにいらしたんですよ」

俊作「……………は??？」

俊作の頭はいよいよ混乱した！

戸川の言ったことがよく理解できなかったようだ。

俊作「セ、セクハラって…：どういことですか？ おっしやること
がよくわかりませんが」

戸川「言葉通り、セクシャルハラスメントですよ。ご自分で心当た
りはないんですか？」

俊作「あるわけないでしょう！ 私は彼女に対して何もしてませ
んからね！」

戸川「ほう…。では何故彼女は私の所へ相談しに来たのでしょうか？
あなたが何もしていなければ、相談なんかする必要はないはずで
すよ」

俊作「…：じゃあ、私が羽村に何をしたというんですか！」

戸川は眉間に中指を当て、眼鏡の位置を直した。

戸川「…：まず、“以前からジロジロとイヤらしい目つきで見られて
いた”ことと、“仕事が終わった後、執拗に食事に誘ってくる”と
いうことをおっしゃっていました」

俊作「し、執拗にだなんて…！ しかもそれは彼女が構ってほしそ
うな素振りを」

戸川「あのね柴田さん、セクハラした人って、そういう言い訳をよ
くするんですよ。“セクハラされるほうにも落ち度がある”といっ
た意味あいのね。彼女に何の罪があるというのですか？」

俊作「うぐ…：で、ですが実際に私は…：」

戸川「次に！」

強引に戸川が口から出かけた俊作の言葉を遮断した。

戸川「次にですね…：柴田さん、こちらのほうが重罪ですよ。あな
た、彼女を強引にホテルへ連れ込もうとしたでしょう」

俊作「な…：！ そつ、そんなこと…：」

あまりにも事実とかけ離れたことを言われ、俊作は驚きのあまりか

えって言い返す言葉が出てこなくなっていた。

俊作「事実を捏造しないでください！ 何を証拠にそんなことを…

…！」

戸川「証拠…？」

戸川はフン、と鼻で笑い、名刺と同じぐらいの素早さで懐から一枚の写真を取り出すと、俊作の目の前につきつけた。

写真には一組の男女が写っている。

俊作はその写真を見て、一瞬で頭が真っ白になった。

写っていたのは、ホテル街を歩く、ほろ酔い気分の俊作と半ば泥酔状態の佐知絵だった。

しかも、ラブホテルのちょうど入り口前で俊作が佐知絵を抱きかかえるような構図になっている。

何故こんな写真が……？

俊作は想定外の“証拠写真”をつきつけられ、背筋が凍りついた。いつの間に撮られていたのだろう。

戸川「どうです？ これでもまだシラを切り通しますか？」

俊作「ど…どうしてそんな写真が撮れるんだ…？」

戸川「私にそんなことを説明する義務はありません。今、大事なのは、あなたがセクハラ的事实を認めるかどうかということです」

俊作「認めませんよ、私は。セクハラなんて根も葉もない話だ」

戸川「ほう…」

俊作「それに、そもそもどこからそんな話が出てくるんだ！ 彼女は特に思い悩んでる感じじゃなかったぞ！」

戸川「それは職場のみなさんに迷惑をかけたくないから平静を装っ

ていたのではないですか？　しかし、もう我慢の限界だったのですよ。」

笹倉「柴田あ、おめえよお、何であの子の気持ちを考えてやんねえんだ？　あ？」

俊作「考えるも何も、オレは何もしてないッ！　だいたいこの写真も、泥酔した彼女を家の近くまで送って行ったものだ！　それをセクハラ扱いするなんて、被害妄想も甚だしい！」

戸川「いいですか柴田さん。セクハラになるかどうかというのは、相手の考え次第なんです。つまり相手がセクハラだと感じたら、そこでもうセクハラなんですよ。」

俊作「しかし今回のケースだと　」

戸川「羽村さんは」

戸川が再び俊作の言葉を遮断した。

戸川「彼女は、これまでずっと我慢してきました。余計なトラブルは起こしたくない」と、誰にも相談することなくひたすら耐えてきたんですよ。お友達にも、ご両親にも、上司にも、そして恋人にも」

ちよつと待て。

俊作の耳に、戸川が発した言葉の中で、最後の単語が引っ掛かる。

俊作「恋人……？」

笹倉「知らなかったのか？　あの子には彼氏がいるんだぞ」

ヒートアップした俊作の顔が、少しだけ冷めた。

羽村佐知絵は、交際している男性がいながら自分を誘うような素振りを見せていた、というのか？

俊作は彼女の神経を疑った。

笹倉「お前よお、彼氏持ちの子に手エ出すなんて、何考えてんだ？」
戸川「彼氏さんは大変お怒りだそうです。怒りに任せて、いつあなたを襲いに来てもおかしくない状態でしょう」

俊作は、ただ黙って聞いていた。

戸川「そして羽村さんなんですが、“柴田さんが会社を辞めるまで出社はしない”とおっしゃっています」

俊作「な、何だと…！」

戸川「…まあ、当然ですよ。いつも通り会社へ行けば、あなたにまた何かされるかもしれないんですからね」

俊作「……」

不意に、戸川が身を乗り出してきた。

そして俊作の目に、その冷たい視線を突き刺す。

戸川「さあ、いかがなさいます？」

俊作「そう言われたところで」

戸川「あなたに選択の余地はないはずですよ！」

三度、^{みたひ}俊作の言葉は遮られた。

笹倉「おい柴田」

俊作が笹倉の方に振り返る。

会議用長机の上に、A4の白いコピー用紙とペンが置かれていた。

笹倉「退職届を書け。今なら自己都合退職で処理してやる」

7・“罨”？（前書き）

俊作に退職強要の危機…！

7 “罾”？

俊作「退職届!？」

笹倉から退職を奨められる俊作。

いや、これは強要だ。

さつきから笹倉と戸川は無理矢理セクハラ行為を認めさせようとしているようにしか思えない。

笹倉「どうした、早く書けよ」

俊作「イヤです。何で書かなきゃいけないんですか」

戸川「柴田さん、あなたこの後に及んでまだそんなことを言うんですか？ 事を大きくしたくないから自己都合退職で済まそうとしているのに……。このままだと解雇になりますよ？ 破廉恥な行為が公になりますよ？ それでもいいんですか？」

笹倉「それに、解雇となると失業保険も出ないぞ。今、ここで責任とって辞めといたほうが賢明だぜ？ お前ならわかるはずだ」

俊作「わからん！ まったくもってわからん！ あんたがたはオレに虚偽の事実を認めろってのか！」

笹倉「柴田……お前は どうしていつもオレの言うことを聞けないんだ？ お前のためを思ってるのに……」

戸川「柴田さん、あなたは日頃の勤務態度もあまりよろしくないそうですね。この半年で人事評価も下がるいっぽうだとか」

俊作「それは、この笹倉課長が理不尽な仕打ちをするから……」

笹倉「ああ？」

笹倉の眉がピクリと動く。

戸川「おやおや、責任転嫁するつもりですか？」

俊作「違つツ！」

笹倉「…まったく、今の若いヤツは、ちょっと厳しくあたるとすぐ“いじめられた”だの“人格を否定された”だの言いやがる。被害者意識が強いっつーか、何ていうか」

俊作「実際にオレがそう感じてんだよ！ てゆーか、さつきと云つてることが矛盾してるぞ。オレがいじめだと感じたらいじめじゃないんかい」

戸川「あなたの場合は別です！ れっきとした事実なんですよ」

俊作「何だそりゃ！？ そんな屁理屈が通じると思ってたのか！」

俊作は、机に鉄槌てつちを思い切り食らわせた。

“ドゴン！”という、机が壊れてしまいそうなぐらいの激しい音が廊下まで響き渡る。

戸川「…責任転嫁の次は威圧ですか。よほどご自分の罪を認めるのがイヤなんですね。これだけ明白なのに」

俊作「もとからオレは無実だ！」

笹倉「まだそんなことを言うのか。そこまで往生際の悪いヤツだとは思わなかったぞ。さっさと罪を認めて、退職届を書けよ。楽になれるぞ」

戸川「そうですね。我々はあなたの罪を極力最小限に食い止めようと配慮してあげているのです。今、誰にも知られることなく会社を去れば、今後みんなから白い目で見られずに済みますよ」

笹倉「なあ、悪いことは言わねえよ。認めちまえて」

笹倉が紙とペンを突きつけてきた。

俊作の中で、何か、堰のようなものがブチツと切れた。

俊作「ふざけんな！」

俊作は笹倉の手にあつた紙とペンに向けて逆水平チョップを放つた。紙とペンが勢いよく弾け飛ぶ。

俊作「オレは断固として認めねえッ！！　これは濡れ衣だ！　ウソを認めるなんて要求のめるかッ！」

笹倉と戸川は何も言い返さず、そして哀れむような冷たい目で俊作を見ていた。

俊作はそれを気にする様子もなく、スッと椅子から立ち上がるとドアに向かって歩き出した。

笹倉「どこ行くんだ？」

俊作「仕事に戻ります」

先程から一転して、落ち着いた口調で答える俊作。

笹倉「退職届は書いたのか？」

見れば書いていないことぐらいわかるのに。

笹倉は明らかに嫌味を言っている。

俊作「書く気はないと、今言つたはずですよ」

戸川「後悔することになりますよ？」

俊作「それはこっちのセリフだ。無実の人間に濡れ衣を着せたらどうなるか、一端の法律家ならわかるでしょう」

戸川「……」

俊作と戸川は、数秒の間にらみ合った。

その後、^{のち}何も言わずに俊作は退室した。

背中に浴びる、笹倉と戸川の視線がむず痒く、うつつしい。
早くこれから逃れたいのか、俊作は無意識のうちに速足でエレベーターホールへと向かった。

エレベーターを待ちながら、俊作は会議室であったことを頭の中で整理してみた。

どう考えてもおかしい。セクハラなんて濡れ衣だ。

俊作には、心あたりというものがまったくなかった。

イヤらしい目つきで見られる。

頻繁に食事に誘われる。

無理矢理ホテルに連れ込もうとする。

どれも“こじつけ”だ。

笹倉と戸川、そして被害を訴えている佐知絵は、どうあっても自分を悪者に仕立てあげようとしている気がする。

しかも、あんな“証拠写真”まで用意しているところがまたイヤらしい。

そもそも、どうして写真なんか撮られたのだろう。そこまですて自分を追い詰めたいのか？

まだ納得のいかない部分はある。

何故“笹倉だけ”があの場合にいたのか？

佐知絵が所属する、営業法人二課の課長はどうした？

普通、こういった話をする時は両課長が立ち会うべきなのではないだろうか。

それが、何故。

俊作は、それらの不審な点を踏まえて考察してみた。

！

まさか……！

一つの推論が、流星の如く俊作の頭の中を横切っていった。

まさか、これは“罨”か？

今の段階ではまだ推測の域を出ないが、笹倉たちが自分を会社から追い出す目的で仕組んだ罨だと考えれば、合点がいく。

罨を仕掛けて退職に追い込もうとするならば、多少無理矢理にでも自分を罪人にしてしまうのが、変な話自然だろう。

もつといえ、現に笹倉は初めから俊作を敵視していた。彼の性格も考えると、追い出したい動機はある。

エレベーターが到着し、ドアが開く。

乗ろうとしたところで、俊作の足が止まる。

階下が何やら騒がしい。

ちなみに、株式会社マグナムコンピュータの自社ビルは、エントランスホールが2階までの吹き抜けになっており、受付嬢が来客に應對している様子が日頃からよく聞き取れる。

しかし、この時は様子がおかしかった。

エントランスホールの異変が気になった俊作は、吹き抜けの近くへ駆け寄り、上から覗いてみることにした。

髪をライトブラウンに染めた、どう見てもホストのような恰好の男が受付嬢に詰め寄り、何か怒鳴りつけているようだ。

中肉中背なホスト風の男と、受付嬢のやり取りに注目する俊作。

受付嬢「し、少々お待ちください！ 只今お呼びしておりますので……」

受話器を片手に、受付嬢が必死に男をなだめる。

どうやら、この会社の誰かに用があるらしい。

男「早く呼べよオ！」

今にも噛み付きそうな勢いで怒鳴る男。

受付嬢「……あっ、そうですか、わかりました。失礼します」

受話器を置くと、受付嬢は勇気を振り絞ったような表情でホスト風の男に向き直る。

受付嬢「た…大変申し訳ありません、只今席を外しているとのことです」

男「どこにいったよ？」

受付嬢「…さあ……そこまでは……」

男「バカかおめーはア！？ それじゃ話になんねーだろーがア！！」

男は両手をカウンターに思い切り叩きつけた。“バアン！”という音と共に、受付嬢の身体が縮こまる。

それとタイミングを同じくして、警備員が駆けつけ仲裁に入る。

警備員「あなた何やってるんですか？ ちょっと落ち着いてください！」

男「何だてめーは！！ 引っ込んでろよ！！」

男が警備員を突き飛ばす。2、3歩後ろによるめく警備員。

男「それよりも、柴田って野郎はまだか！！」

俊作「……え？」

男「どこにいるんだ、営業の柴田ってのはよオ！！」

俊作「…オ…オレ……？」

上でやり取りを見ていた俊作は、一瞬にして凍りついた。

あのホスト風の男が、佐知絵の彼氏……？

男が再び受付嬢に詰め寄る。

男「早く呼んでこい！」

受付嬢「す…すみません…：営業の方も所在がわからないそうで…
…」

恐怖に怯えながらも、受付嬢は懸命に対応する。

男「わからない”だあゝ！？ オレはそんなことを聞いてんじやねえぞオオ！！”

男が受付嬢の腕をつかみ、強引に引っ張った。

受付嬢「あつ…！！”

痛さで思わず小さなうめき声が出る。

男「じゃあ、てめえが捜してこい！ 5分以内にだ！」

受付嬢「ちよつと、やめてください…！！”

警備員「やめなさいッ！」

警備員が止めに入ろうとするが、今度は男に腹部を蹴られ、そのまま後ろへスリッパダウンしてしまった。

まずい！

はっと我に返った俊作。

あの受付嬢が危ない！

しかもあの男は自分に用があるようだ。

“彼氏さんは大変お怒りだそうです。怒りに任せて、いつあなたを襲いに来てもおかしくない状態でしょう”

戸川弁護士の言葉が脳裏をよぎる。

まさか、こんなに早くそれが現実のものになるとは。

俊作「チッ…！」

俊作は小さく舌打ちをした。

とりあえずは、早急にこの場を鎮めなければならない。

俊作は猛然と階段を駆け下りた。

俊作「やめろッ…！」

俊作は、受付嬢を無理矢理カウンターから引きずり出そうとしているホスト風の男に向かって叫んだ。

7. “**腕**”？（後書き）

鉄槌^{てつづい}とは？

主に空手で使用する技の一つ。

握り拳の小指側の、肉が厚くなっている部分で敵を攻撃したり、敵の攻撃を防御したりする。

8・解雇（前書き）

突然、会社に押しかけて来たホスト風の男。
この男が佐知絵の彼氏…？

8・解雇

俊作「やめろッ！ オレが話を聞く！！！」

俊作が勢いよくダッシュで近づき、男を取り押さえる。

男「離せエ！ 何モンだてめえ！」

男も激しく抵抗する。

俊作「オレが営業の柴田だ！」

男「何イ…？」

男は抵抗をやめた。

ゆっくりと、男が俊作に振り返る。

しばらく俊作をにらんだ後、男が受付嬢の腕をぱつと離す。

その場に崩れ落ちる受付嬢。半分泣きそうな顔をして、やや荒い息遣いでうずくまっている。

男「てめえが柴田か」

俊作「そうだ。あんたこそ何者だ？」

男「柴田ア、探したぞオ！ このイカレキン マがア！」

なんて低レベルなボキャブラリーなんだ。

呆れつつも、俊作は平常心を保とうとした。

俊作「待て。名を名乗れって言うてんだよ」

男「名乗る必要はねえ！ 人の女に手エ出したカス野郎にはな！」

俊作「人の女？ 何の話だ？」

なんとなく気付いてはいるが、確認の意味も含めてあえて聞いてみる。

男「羽村佐知絵だよ！ オレの彼女だ！ てめえあいつを無理矢理やろうとしただろうが！」

やはりその話か。

俊作「おい、冗談はよしてくれ。オレは何もしてないぞ」

男「ふざけんな！ あいつはお前に肉体関係を迫られたって言うてんだよ！ 酒飲まされて、酔っ払ったところを狙われたってなア！」

俊作「だから何もしてないって」

男「しただろうが！ しかも、お前あいつにしつこくつきまとってらしいじゃねーか！」

つきまとう？

何だそりゃ。

男「佐知絵はイヤがつてたんだ！ “態度で示してもわかってくれない” って悩んでたんだ…！」

“態度で示しても”……？

そんなことが今まであっただろうか？

俊作「ちよつと待てよ、彼女はそんな態度を一度も示してないぞ」
男「あーあ、これだから空気の読めないヤツは困るよなあ！ それとなく顔に出してたんだよ。急に態度が変わったとか、心当たりぐらいあんだろ？」

心当たりは……ない。

いや、自分が気付いていないだけなのだろうか。
しかし、仮にそうだとしても、心境の変化に気付かないぐらい佐知
絵の愛想はよかった。気付けと言うほうが難しいだろう。

俊作「…いや、心当たりはないな。それよりか、“つきまとう”っ
てどついう意味だよ？」

男「このポケナスがア！ それをオレに聞いてどうすんだ！？ 全
部でめえでやったことだぞ？」

俊作「だからオレは知らねーつつってんだろ。そうやって人を変態
扱ひするのはやめてくんねえかな」

男「はあ〜！？ 今更知らぬ存ぜぬで通す気かあ〜？ カッコつけ
たつて自分がやったことは消えないんだぞ〜！」

まるで子供のようなモノの言い方だ。

俊作はため息をついた。

これ以上こんなアホとはつき合えん。

それに、そろそろ事態を收拾しないとまずいだろう。

とにかく相手の目的と要求でも聞いておくか。

俊作「あのさあ、お前失礼だよ。いきなりやって来てありもしない
ことばっか言いやがって。そもそも何がしたいわけ？」

男「バアーカ！！ クサレ営業マンの、カスの寄せ集めみてえな脳
味噌でもわかんねえか！？ 悪者退治だよ！！ 人の女に手エ出し
たんだから、罰を受けねえとなアア！」

俊作「悪者退治？ わからんな。無実の人間をどうやって退治する

んだ？」

男「そうやってとぼけてる。今から洗いざらい全部吐かせてやる。あとは前科者にでも何にでもなりやがれ！」

俊作「いやあ、時間の無駄だと思うけどな。オレからは何も出てこねえぜ」

男「うるせえな！ てめえのような低レベル野郎は黙って罪を認めりゃいいんだよー！！」

男は右の拳を振り上げ、大股で左足から踏み込んできた。

よく見ると、大股で踏み込んできているために足元がスキだらけである。

俊作は、男の左足が地に着く寸前を狙い、右足で足払いを仕掛けた。

“スパーン！”と音がした。

タイミングはばっちりだ。

見事なまでに転倒するホスト風の男。

俊作「低レベルなのはどっちだ？ 公衆の面前でバカみてえに騒ぎ

やがって」

男「なんだとお……！」

俊作「早く帰れよ。ここは会社だ」

男「てめえが…てめえが早く罪を認めりゃ済む話だろうがアー！！」

男は素早く立ち上がり、今度は左手で俊作の胸倉、ネクタイの結び目より少し下辺りをつかんだ。

男「これで転ばされる心配はねえぜー！」

が映った。

会田だった。

会田「柴田ッ！ 何をやってんだ！ やめろッ！」

俊作と男の中に割って入り、二人を引き離す会田。

俊作「会田さん……！」

会田「お前何やってんだよ！？ こんな所で騒ぎを起こすなんて……」

俊作「悪いのはこいつです！ いきなり会社へ押しかけて来て、受付の人に乱暴したり、オレを変態扱いしたりするからちよっと懲らしめてやるうとただけです！」

男「デタラメめかすんじゃねえよてめええ！」
いきり立つ男を制し、会田は俊作に向き直った。

会田「柴田、もうちよっと場所考えろよ。こんな人目につくような所で暴れるな」

俊作「こいつが先に殴りかかってきたんですよ！ オレは暴れるつもりなんか……」

男「ああー！？ 先に殴ったのはてめーだろうが！！」
会田「わかった！ わかったから！ とりあえず場所を変えて、落ち着いて話し合おう。オレも立ち会う」

俊作たちは、使用していない来客用の応接室へ移動した。

入室するなり、会田は俊作とホスト風の男を椅子に座らせた。

会田「さあ、話を聞こうか」

ところが、この話し合いはまったく進展しなかった。

俊作が事情を話す。

男がそれに反論し、机を叩きながら騒ぎ立てる。

そしてその男を、会田が必死になだめる。

ずっとこれの繰り返しなのだ。

これでは話し合いなど成立するはずもない。

このようなやり取りのせいで、30分もの無駄な時間が流れた。初めは冷静だった会田にも、次第に苛立ちが目立ち始めた。

会田「いい加減、まともな話し合いをしようぜ……」

その時、応接室のドアが開いた。

ドアの影から、ぬっと現れる黒い影。

笹倉だった。

笹倉「状況はどうだ？ 警備員からここで話し合っていると聞いたが……」

会田「いやあ、それがまったく進展しないんですよ。“この男が羽村さんの彼氏”ってことと、“柴田と羽村さんとの間で何かあった”ってことぐらいはわかったんですが……」

あの状況でそれだけ理解できれば十分である。さすがは売れっ子営業マンだ。

笹倉「そうか…」

言っと、笹倉はタバコに火をつけた。

笹倉「柴田、これでわかつただろ？」

笹倉はわざとらしくタバコの煙を俊作に吹き掛けた。

当然ながら咳込む俊作。素早く煙を振り払った。

俊作「な、何がですか…？」

笹倉「こんな騒ぎになったのは誰のせいだ？ お前のせいだよなあ！」

俊作「それは違うって言ってるじゃないですか！」

笹倉「お前のせいなんだよ！ まったく、ホントにバカなヤツだなあ！ もう会社にはいらねえぞオーツ！」

笹倉の目は笑っていた。俊作には“あからさまに他人の不幸を喜んでいる”としか思えなかった。

俊作「課長は、人を精神的に追いつめるのが楽しいですか？ 人を追いつめようという真似をして面白いのですか？」

俊作は、殺気が十分にこもった目で笹倉をにらみつけた。

笹倉「ああーっ！？ 何だそりゃ！？ 全てはオレが仕組んだことだっつてのわ！？」

激昂した笹倉は思い切り机を叩いた。

笹倉「そうか、てめえの得意技は“なすりつけ”か！ 実にふざけた野郎だ！ 根拠もなしに人を悪者にしようとしやがって！」

俊作「“なすりつけ”？ 事実そんなんじゃないのか？ それに――」

笹倉「うるせえ！ こうなったら今までのことを全部人事に報告してやる！ 覚悟しとけ！ てめえは終わりだア！」

まるで捨てゼリフのような言葉を俊作に投げつけ、笹倉は応接室を飛び出していった。

会田「柴田、あんなこと言って大丈夫なのかよ……？」
俊作「……」

翌日、俊作は解雇を言い渡された。

羽村佐知絵に対するセクハラ行為。
その抗議に現れた佐知絵の彼氏に対する暴力。
勤務態度の悪さ。

以上3点が解雇の理由である。

当然、どれも納得できない内容である。それ以前に、全て事実ではない。

俊作は激しく抗議した。

しかし、人事サイドは既に俊作の味方ではなかった。笹倉のデータメな報告が通ってしまったのである。

何故だ！

こんな時は藤堂部長に相談すれば何とかかなりそうなのだが、バッドタイミングなことに彼は今、出張で不在だ。

何という不運！

もともと社会なんて理不尽なことだらけだとは思っていたが、ここ
まで理不尽なことが起こってよいものだろうか!?

まったく自分の言い分が通らないなんて!

一方的に会社の要求を呑まねばならないなんて!

おかしい!

どう考えてもおかしすぎる!

“俊作解雇”の報せが響き渡る営業部のオフィス。

伸子「何で!? ウソでしょ!? 何で柴田くんがクビになるの!」

伸子は憤る。

会田「すまん。今回ばかりは力になれん」

会田は謝ることしかできない。

そして、課長席では笹倉が嘲笑う。

笹倉「柴田…残念だったなあ」

その瞬間、俊作の体内で“怒り”という感情が爆発した。

笹倉の胸倉を掴み、そのまま壁に体ごと叩きつけた。

会田「柴田ッ!」

俊作「ふざけてんじゃねえぞ!! 人事にデタラメ吹き込みやがっ

て！ そんなにオレが憎いか！ 邪魔か！ 何を企んでやがる！？
言え！ 言ってみろオオツ！！」

笹倉「ぐ……」

笹倉は答えなかった。いや、正確には胸倉を掴む俊作の力が強すぎるために、苦しさでしゃべれないのだ。

会田「柴田、よせ！ やめるんだツ！」

会田が必死に俊作を笹倉から引き剥がそうとするが、逆に俊作に突き飛ばされてしまう。

そう悪戦苦闘しているうちに警備員が4〜5人駆けつけ、やっとのことで俊作を引き離し、取り押さえた。

激しく息を切らしながら笹倉が叫ぶ。

笹倉「こっ、このバカをつまみ出せエ！」

笹倉の指示通り、俊作は警備員によって社外へとつまみ出された。

そして、もう二度と会社に入内りすることは許されなかった。

頭が真っ白になる俊作。

今、自分が地面に立っているのかどうか、しっかりと呼吸しているのかどうかさえわからなくなっていた。

無情だ。

これから、自分はもうどうしたらいいんだろう……。……。

気付けば、俊作は代々木公園のベンチに独り、ただただ座っていた。

ある秋の夕暮れだった。

8・解雇（後書き）

ようやく、作中の時間が第1話の冒頭に戻ってきました！
前置きが長くてすいません！（汗）

9・親友・鳴海純（前書き）

なす術なく会社を解雇された俊作。彼の運命は……？

9・親友・鳴海純

ある秋の夕暮れ。

この日の代々木公園も、散歩やデート、明治神宮への参拝を目的に、多くの人が訪れていた。

その中を、1匹の子猫が駆け抜けていく。

見事なまでの真っ白な子猫。高級な皮製の首輪を身につけており、どことなく上品な印象を受ける。

ふと、その子猫は後ろから追いかけて来る男の気配に気付いた。

子猫の約5メートル後ろに、1人の男が迫っていた。

身長は175センチほどだろうか。スマートな体型で、白地にカート・コバーンの顔写真がプリントされたロングTシャツの上にグレーのニットカーディガンを羽織っている。そして下衣はブルージーンズとコンバースのオールスター（黒・キャンバス）を着用している。

ほぼ真ん中辺りで分けられたオシャレな無造作ヘアは、うなじにかかるぐらいの長さだ。

特に彫りが深いわけではないが、男っぽい顔立ちだ。アゴにたくわえたヒゲもよく似合っている。

見た感じ、年の頃は20代半ばだろう。

子猫は、その男の様子をじっとうかがっている。

シリシリと、イライラするほどゆっくり子猫との距離をつめる男。

残り、目測で約3・5メートル。

子猫はまだじつとこちらを見ている。

残り3メートル……2・5メートル……2メートル。

勝負は一瞬。

ちなみに言い忘れていたが、この男は今、目の前にいる子猫を捕まえようとしている。

男が一気に飛び掛かる。

しかし、子猫はこれをいとも簡単にかわし、そのまま走り出してしまった。

「くそっ」と舌打ちをして、猛ダッシュで後を追う男。

しかしその数秒後、男は勝利を確信したかのようにニヤリと笑った。

子猫が走って行った先にはベンチがある。

ベンチには、男と同世代ぐらいだと思われる、サラリーマン風の男性が座っている。

子猫は、うなだれて座っている男の右足に顔をかすめた。

男は驚きのあまり身体をびくつかせ、子猫を凝視する。子猫のほうもビククリしたのか、顔をサラリーマン風の男に向けて目を見張っている。

それと同時に、男の声で「おーい！」と叫ぶのが聞こえてきた。

見ると、カート・コバーンのロングTシャツにグレーのニットカー
ディガンを羽織った男が全速力で走ってくるではないか。

あの男は……。

サラリーマン風の男ははつとした。

カーディガンの男が再び叫ぶ。

「そこにいるのは、柴田俊作だなッ!？」

そう、回りくどい言い方をして申し訳なかったが、このサラリーマ
ン風の男は柴田俊作だったのだ。前話で思わぬ罨によって会社を解
雇されてしまった、あの男だ。

俊作「そういうお前は……鳴海純!」

子猫を追って来た男の名は、なるみじゅん鳴海純。俊作とは幼い頃からの親友で
あり、共に青春時代をヤンチャしながら過ごした仲でもある。

ちなみに2人は、街中で偶然出くわすと十中八九、今のように、某
有名マンガのワンシーンを思い起こさせるやり取りをかわす。

俊作「てゆうか…純、お前こんなとこで何してんだ!？」

純「説明は後だ! 猫だ! その子猫と一緒に捕まえてくれ!」

俊作「子猫……?」

俊作は、つい今し方自分の足に突進してきた子猫に目をやる。

子猫は、その白い毛を夕日に照らされつつも、目だけを見開き、じ
っと俊作を見ていた。

俊作「あいつか？」

純「そうだ！ ちょっと捕まえるの手伝ってくれ！」

純は、眉間にシワを寄せ、鼻の穴がやや広がっている。

こういう時の純は相当必死である。何らかの緊急事態でも起きたか。

俊作「よし、やるか。あの猫を捕まえりゃいいんだな？」

純「おう！ 助かるよ！」

白い子猫を捕獲するために急遽手を組んだ俊作と純。

早速2人は、それぞれ子猫の頭側とシツポ側に分かれ、子猫と対峙した。

頭側に回った純が、俊作にアイコンタクトをする。

“2人同時に飛び掛かるぞ”という合図だな、とシツポ側に回った俊作は解釈した。

3、2、1……。

俊作と純は、目だけを合わせながらカウントダウンをした。

ゼロ！

二つの大きな黒い影が、子猫を挟み打ちにする。

ところがどっこい、子猫は自分から見て左の方向に飛びのいた。つまり、縦方向から攻めたが横方向へ逃げられてしまったのだ。ここは広い代々木公園。こうなる可能性は十分にある。

純「くつそお、またしても失敗か！」

俊作「しょうがねえ、追うぞ！」

2人は慌てて子猫の後を追った。

しかし、さすがに猫は素早い。あっという間に茂みの中へ隠れてしまった。

辺りを捜すものの、一向に見つかる気配はない。

俊作「見失ったか……。てゆーかさあ、お前どうして子猫なんか追っかけてんの？」

純「仕事だよ、仕事」

俊作「仕事？ ……ああ、そーいや便利屋やってるって言ってたっけ」
純「違う！ 探偵だ！ 私立探偵！」

鳴海純の職業は私立探偵である。

純は四年制大学を卒業してから1年間、アメリカに留学していた。どうやらその時に探偵業をやりたいと思い立つたらしく、帰国後間もなく探偵学校へ通うと同時にアルバイトで事務所開業の資金を貯め、1年半前によく自身の探偵事務所を開いたのであった。

純「ウチの近所に犬山さんっていただけ？ あの猫はその犬山さん家の猫なんだって。なんでも一昨日ここへ連れてきたらはぐれちまつたんだと」

俊作「やれやれ……あの人の猫好きも困ったもんだな」

言いながら、俊作はあるものに注目した。

俊作「純、あれを利用してみねえか？」

見ると、100メートル近く先にたこ焼き屋があった。

屋台では、ねじりはちまきをした中年男性がたこ焼きを焼いている。

純「たこ焼き…？ そんなの使ってどうすんだよ？」

俊作「たこ焼きにはかつお節が乗っかってるだろ？ その匂いで子猫を誘き出すんだよ」

純「なるほど…：…うまくいくかわからんが、手段を選んでるヒマはなさそうだな」

作戦決定。

俊作はたこ焼きを買いに行き、純は辺りを見回し、行き止まりを作るのに適切な場所を探した。

俊作がたこ焼きを買い終えて戻ると、純が、まるで恋人のように寄り添い、空に向かって背伸びをしている2本の大きな桜の木の間から顔を出して手招きしてきた。

純は、周りから適当に拾い集めたダンボールで高さ80センチほどのパーティーションを作り、桜の木の間にわずかな奥行きだけを設けて、あとは完全に塞いでいた。

俊作「おお、これなら捕まえられそうだな」

純「それと、こんなモンが落ちてたぜ」

純が得意げに差し出したものは、なんと虫とり網だった。

俊作「何でそんなのが落ちてんだよ！」

思わず俊作が吹き出す。

純「ウケるだろ？ でも、これがあればより確実に猫を捕獲できるよ」

俊作「そうだな。早いとこやっちまうか！」

2人は早速作戦に移った。パーティーションの奥にたこ焼きを置き、

木の陰に隠れながら様子を見る。

待つこと約5分。

叢の奥から、白い影がヒョコヒョ近づいて来るのが見えた。

Bingo!

計算通り、犬山さんの白い子猫が、たこ焼きに使われているかつお節の匂いにつられてやって来た。

たこ焼きを目の前にして、ピタリと動きを止める子猫。完全にたこ焼きしか見えなくなっているようだ。

俊作は“チャンスは今だ!”と純に目で合図した。

純もコクリと頷き、気配を殺しつつ子猫の背後に忍び寄った。

息を呑む純。

子猫はまだ気付いていない。

息を吐くと同時に、純は虫とり網を子猫目掛けて振り下ろした。

「フギャツ！」と子猫が叫び声をあげるが、時既に遅し。

純の放った虫とり網がスツポリと子猫の全身を被^{おお}っていた。

捕獲成功!

俊作と純は小さくガツポーズを作った。

俊作「これで犬山さんも一安心だな」

純「そうだな」

網ごと子猫を抱き上げ、純も安堵の表情を浮かべる。

俊作「ところで純、その猫をどうやって犬山さん家まで連れて行くつもりだ？」

純「オレの車で連れて行くよ。近くのコインパーキングに車を停めてあるんだ」

と、純はあることに気付く。

純「そういや俊作、お前仕事じゃないのか？ いいのか、こんな所で油売ってて？」

俊作は、急に黙りこんでしまった。“セクハラ疑惑をかけられてクビになった”なんて言いづらい。

純「……その顔は、何かあったな？」

俊作は小さく頷いた。

純も、俊作がなかなか言いづらそうにしているのがわかったようだ。

純「……よし、じゃあ一緒に板橋まで帰るか。話は帰りの車の中でゆっくり聞こう」

そう言っただけで純はニコリと笑った。純は笑顔が大変爽やかである。

俊作「……おう。悪いな」

俊作も笑顔で応えるが、どこか哀愁が漂っていた。

純「さあ、帰るぞー！」

純が、俊作の肩をポンと叩いた。

9・親友・鳴海純（後書き）

（登場人物おさらい）

柴田 俊作（27）：本編の主人公。空手使いでケンカが強く、昔はヤンチャだった。思わぬ疑惑により会社を解雇されてしまう。

鳴海 純（27）：俊作の親友で、共にヤンチャな青春時代を過ごした。職業は私立探偵。アメリカに留学した経験あり。

高根 伸子（27）：俊作の元同僚。美人で性格もよく、みんなから好かれている。会社では俊作と一番仲がよかったようだ。

会田 修（30）：俊作の元同僚。やり手の営業マン。

羽村 佐知絵（25）：俊作の元同僚。俊作からセクハラ被害を受けたと訴える。

藤堂部長（45）：（株）マグナムコンピュータ営業部長。かつては俊作たちの課で指揮をとっていた。

笹倉課長（42）：俊作の元上司。俊作を目の敵にし、いつも嫌がらせをしていた。

戸川 昭雄（30）：戸川法律事務所の弁護士。佐知絵からセクハラ被害の相談を受けている。

10・脱サラ探偵誕生（前書き）

会社を解雇された俊作は、代々木公園で偶然にも親友の鳴海純と出会った……！

10・脱サラ探偵誕生

代々木公園から板橋へ戻る車の中、純はハンドルを操りながら俊作の話を聞いていた。

後部座席では、先程捕獲した白い子猫が丸くなって眠っている。

純「マジか……そりやおかしいな」

俊作が全てを話し終わると、純はいかにも不可解といった感じの表情を浮かべた。

俊作「だろ？ 変だろ？ だから納得いかねえんだ」

純「その羽村って女の行動もわかんねえし、お前の上司がしゃしゃり出過ぎだ」

俊作「ああ。あのハゲはいつもオレに嫌がらせしてたとはいえ、あそこまで出て来られるとかえって怪しい」

純「それに弁護士と“証拠写真”ってのも気になる。法律をチラつかせて、有無を言わさずお前をクビにしたかったとみえるな」

俊作「法の力でオレをいかようにも裁ける””っていう間接的なメッセージをオレに認識させたってことか」

純「まあ、そういうことだね」

俊作「フン、法律家がバツクにいれば怖いものなしってワケか。下っ端のヤンキーみてえだな」

純「ケンカに強いヤツを後ろ楯にするクチだろ？」

俊作「そうそう。たいがいてめえ一人じゃ何もできねえタイプだ」

車が、交差点に差し掛かる。

赤信号が見えた。

純は、落ち着いてブレーキを踏んだ。

純「なあ俊作」

赤信号を見ながら、改まった感じで純が言う。

俊作「何だ？」

純は、ゆっくり顔を俊作の方に向けてこう言った。

純「オレと一緒に探偵をやらないか？」

「へっ？」と、きわめて素っ頓狂な声を出す俊作。

あまりに唐突だった。

純は俊作がまったく予測しないような発言をした。

俊作「た、探偵？ オレがか？」

目をパチクリさせながら俊作が問い返す。

やはり、純は黙って頷いた。

俊作「お、おい、マジで言ってるのか。いきなり話題変えるなよ。ビックリしただろ」

再び、純は目線を前に戻した。

純「今やってる仕事はさ、さっきみたいに、いなくなった猫や犬を捜すようなモンばっかだけど、将来的にはもつとでかい仕事をやりたいんだ。…将来的につーか、ホントはそっちがもともとの目的なんだけど」

俊作「何なんだ、それは？」

純「クライアントは一般企業。その企業を競合他社のスパイから守ったり、またはその企業が表沙汰にできないトラブルを請け負って解決したりする仕事をやりたいんだ」

俊作「なんだかスケールがでけえな」

純「もちろん、企業だけじゃなくて個人の依頼も受け付けるけどね」

信号が青になった。

純は勢いよくアクセルペダルを踏み込んだ。

俊作「いでっ！」

発車の反動で、俊作はシートに側頭部を思い切りぶつけた。

それでも構うことなく、純は仕事の将来的なビジョンを語り続けた。

純「今、事務所はオレ独りでやってる状態だ。やりたい仕事には大きな危険が伴う。オレ独りの力じゃどうにもならなくなってくるだろう」

俊作「…なるほど、そこでオレの力が必要になってくるってわけだな」

純「そう。お前は相当な空手使いだ。ケンカも強い。そして営業で培った洞察力と判断能力も持ち合わせてるだろう」

もつとも、純が俊作を必要としている理由はこれだけではない。長い付き合いの親友だからこそ、彼の性格は熟知している。それを踏まえ、純は“この柴田俊作という男こそ信頼できるパートナーにふさわしい”と判断したのである。

以前にも述べたように、俊作は男気にあふれていて、正義感が強い。ということは、簡単に物事を諦めない性格だということである。これは探偵をやるにあたって必要な要素なのだ。一つの案件を調査す

るのには時間がかかる。しかも、アクションゲームのように一筋縄でいくとは限らない。最後まで調べ抜く根気がなければできない仕事ではない。

俊作はそれらの条件をクリアしていた。それに彼は冷静なところもある。

純が俊作をスカウトした最大の理由が、実はこれだった。

俊作「そうか……でも一つ言っとくぞ。探偵になってもいいけど、その前にオレは今回のことについて自分の無実を証明してえ」

俊作はややうつむき加減で言った。

しかし純はこう言った。

純「それぐらいオレも手伝うよ！ さっきも仕事手伝ってもらったしな！」

俊作「え？ いいのか……？」

純「ああ。てゆーか、自分の潔白を証明するのを初仕事にすればいいじゃん」

純はまた、あの爽やかな笑顔を見せる。

俊作「お前……」

純「お前……」じゃねーよ！ 辛気臭え顔してねえで、とつとと真相を説明するぞ！」

俊作「……フツ」

俊作は、静かに笑みを浮かべた。

純「何だよ急に？ お前らしくない笑い方だな」

俊作「いや、なんだか昔を思い出しちゃってよ」

鼻の下を指で軽く左右に擦りながら、俊作は懐かしさと照れ臭さを感じながら言った。

純「ハハツ！ まるでケンカでもしに行くみてえだつてか！」
俊作「ああ。オレらは巨悪に立ち向かおうとしてるんだぜ？」
純「違いねえ！ ちょっとオーナーかもしんねえけど、そう言われ
てみると確かに昔を思い出すなあ！」
俊作「だろ？ なんだか急激に血が疼いてきたぜ！」

代々木公園にて捕獲した子猫を無事に犬山さんの自宅へ送り届けた
後、俊作と純は、純の探偵事務所へと向かった。

事務所とはいっても、実際は、純が、彼の実家近くにある分譲賃貸
マンションの一室を借りて、自宅と兼用で使用しているものである。

部屋番号は202号室。南向きである。

1LDKで、10畳のダイニングルーム（うちキッチン3畳を含む）
と8畳のリビング、6畳の寝室から成り立っている。

これだけ広いと家賃が心配されるところだが、幸いにもこの部屋の
オーナーが友人の父親であるため、かなり安くしてもらっているそ
うなのだ（それでも詳細な額は不明である）。

表札には、鳴海純という名前の他に“ホットスパイス・エージェン
シー”と書かれたプレートが備え付けられていた。

リビングに通され、少々アンティークな匂いがするソファアに腰掛
ける俊作。

俊作「あのさあ、“ホットスパイス・エージェンシー”って、この
事務所の名前？」

コーヒーをいれにキッチンへ行った純に尋ねる俊作。

純「そっだよ」

俊作「辛そうな名前だな。まあ、辛いもの好きなお前らしいネーミングだけど」

純は、辛い食べ物が好きだった。COCO壱に行けば必ず5辛のカレーを食べるし、更にいえば、このマンションの近所にタイ料理屋がある。言うまでもなく、純はその店の常連である。

純「粹なネーミングだと思わないか？ レッド・ホット・チリペツパーズからヒントを得ただけどさ」

俊作「ええ！？ レツチリ？ ホットしか合っていないじゃん！」

純「そうか……そうだよな」

純は肩を落とした。

俊作「おい、そこへコむとこじゃねーだろ（笑）」

すかさずツツコミを入れる俊作。

純「わかってるよ！」

大きな声で笑い合う2人。

解雇の衝撃で傷ついた俊作の心も、少しずつ癒されつつあるようだ。

純「そうだ、それよりも早いとこミーティングに移ろうぜ。次にオシらがどう動くべきかを話し合うんだ」

俊作「ああ、そうだな……」

俊作の表情がスツと真剣になる。

純「今回の目的は、俊作の無実を証明することだ。しかも、これは俊作に対する罠である可能性も高い。けど今は何の手がかりもない。この場合、まずは敵を知ることから始めるべきだと思うんだけど、お前はどう思う？」

純はタバコに火をつけた。

俊作「オレも同じことを考えてた。疑問点はいくつかあるのに、そこへ辿り着く術がないもんな。それに刑事ドラマとかを観ても、ま

ずは関係者の身元を洗い出すことから始めてるし」

純がニヤリと笑う。自分たちが次にとるべき行動がほとんど導き出されたようなものだし、きっと俊作と同意見だろうという確信があったからだ。

純「よし、じゃあ笹倉つてのと羽村つて女の身元から調べてみるか」
俊作「ああ。そこからあたってみるのが近道のような気がする」

以上、ミーティング終了。

ここまで意見が一致するのも珍しいのではないか。いや、この2人だからこそなのかもしれない。

兎にも角にも、こうして“脱サラ探偵・柴田俊作”がここに誕生した。

親友・鳴海純と共に巨悪を叩きのめせ！

10・脱サラ探偵誕生（後書き）

いよいよ反撃開始だ！

11・行動開始！（前書き）

“脱サラ探偵”として始動した俊作だが…

11・行動開始!

一方、俊作と純は、俊作が解雇された翌日から羽村佐知絵及び笹倉課長の身辺調査に乗り出した。

この2人を徹底的にマークして、俊作が無実となる証拠を全て洗い出す作戦だ。一系のほころびすらも逃さぬ覚悟である。

まずは佐知絵から。

2人は中年のサラリーマンに変装し、昼休みのタイミングを狙って株式会社マグナムコンピュータのビル付近へ出向いた。

佐知絵は、昼休みになると同期の女子社員を2人連れて会社近くの Pasta 屋へ行くことが多い。そこで事件に関する話が聞けるかもしれないと判断したのだ。

1人は末広真智子。すえひろ まちこ

サラサラしたロングヘアに狐のような切れ長の目が特徴的で、一部では“狐面”キツネツラと呼ばれているらしい。また、やや細身で、伸子よりも背が高い。

もう1人は秋葉梨乃。あきは しの LAN構築などの提案をする、システム営業課の営業事務をやっている。

小柄で、顔がリスに似ており、茶色に染めたショートヘアがよく似合う。それに加えてアニメ声のため、一部の男性社員には人気があるようだ。

しかし、昼休みになってビルから出て来たのは真智子と梨乃の2人

だけだった。

俊作「まさか、休みか…？」

純「とりあえず、後をつけよう」

真智子と梨乃が Pasta 屋へ入ると、俊作と純もすかさず店内へ傾れ込む。

2人がウェイトレスに案内された席は、真智子と梨乃の席からそう遠くない位置だった。

真智子と梨乃に気づかれないうつ、純はICレコーダーをセットした。

どうやら彼女たちは、2人ともカルボナーラを注文したようだ。

ちなみに俊作はAランチセット、純はCランチセットを頼んだ。

ランチセットに含まれているコーヒーをチビチビすすりつつ、俊作と純は聴覚を真智子と梨乃に集中させた。

真智子「佐知絵、まだ来ないね」

梨乃「そうねえ。まあ、昨日の今日だからしょうがないんじゃない？」

やはり、羽村佐知絵はまだ欠勤していた。

真智子「やっぱり、事が事なだけに精神的ダメージも大きいんだろ
うね」

梨乃「うん…だってセクハラだもんね」

真智子「柴田さん、何考えてんだろね」

梨乃「そんな人には見えなかった」

真智子「人は見かけによらない”ってこのことかもね”

梨乃「そうね」

そう言つて、クスクスと笑う真智子と梨乃。

真智子の細い目が更に細くなる。

俊作「……好き勝手言いやがって、このクソガキどもが」

真智子と梨乃の会話を聞いて、俊作は小さく、まるで地鳴りのような声で唸つた。

純「まあまあ」

純が優しくなだめる。

梨乃「…だけど、佐知絵も急に休んじゃったから心配したよ」

真智子「今思えば、あの子、ちよつと悩んでたような節があつたかも」

俊作「！？」

俊作は少し身を乗り出した。

真智子「先週……いや、先々週からだつたかなあ。なんか、いつもよりテンションが低そうに感じたんだよねえ」

俊作「……！」

先々週といえば、俊作が佐知絵と2人で食事した頃だ。

酔つ払つた佐知絵を介抱しつつ、道玄坂のホテル街を恥ずかしさに耐えながら彼女の自宅近くまで送つた、あの夜だ。

そういえば、あの次の日から佐知絵のテンションに微妙な変化が見られた。

初めは酒が抜けていないためかと思つていた。

しかし、真智子の話から察すると、“自分と食事をしたことが原因で気分が落ち込んだ”というようにとれる。

まさか、羽村佐知絵は本当に自分からセクハラを受けたと思っているのか……？

そんなバカな。

もしそうだとしたら、佐知絵の思い込みは常識はずれなものになる。

そもそも、何故そうなるのかわからない。

彼女を送る際に道玄坂のホテル街を通りはしたが、連れ込むようなことはしていない。

では、酔った佐知絵を介抱する際、彼女の身体に触れたことだろうか？

それもおかしな話だ。

まず、身体に触れずして介抱するなど不可能である。

それに、介抱が必要になるほど泥酔した状態の女性が、男性に抱えられてセクハラだと認識する余裕が果たしてあるだろうか？

普通はないだろう。いつも通り呼吸をするだけでも辛いはずである。

もし佐知絵がセクハラだと感じていたとしたら、彼女は酔っ払ったふりをしていたということになる。

もちろんこれは俊作の推測にすぎない。だがこの推測が的中すれば、

羽村佐知絵の性悪ぶりが浮き彫りになる。

俊作は、悪い意味で佐知絵に対する興味を膨らませていった。

彼女が悪事に加担している可能性が極めて高い。いったい何を考えているのだろうか。そこまでして自分を悪者にした理由とは？
結局、真智子と梨乃はそれっきり事件のことを話題にすることなく、食事を終えて店を出ていった。

これ以上は有力な情報が出ないだろうと判断し、俊作と純は彼女たちの後を追って店を出るようなことはしなかった。

ふう、と多く息を吐き、純はICレコーダーのスイッチをオフにした。

純「お前、途中からすげえ話に食い付いてた感じだったけど、何か思い当たることでもあるのか？」

俊作はコーヒーを一口飲むと、つい今しがた組み立てた自分の推論を純に話した。

純「なるほど。有り得ない話じゃないかもな。だけど、羽村が“お前から食事に誘われたこと自体がセクハラだ”と感じたって可能性もあるんじゃないか？」

俊作「まさか」

純「何も身体を触ったり下ネタを連発したりするだけがセクハラじゃないからな。プライベートな関係を強要してもセクハラになる。

ヘタすりゃケータイの番号を聞いただけでもアウトらしい」

俊作「プライベートな関係なんて強要してねえよ。あの時は彼女もイヤがってはいなかったし、第一向こうが構って欲しそうな素振り

を見せたんだぜ」

純「それを立証することはかなり難しいぞ」

俊作「だから羽村を徹底マークするんだろ？ それに、セクハラだと感じたらまず誘いにのらねえはずだ」

純「“相手が先輩だから断れなかった”って言うかもしれないぞ」

俊作「それなら泥酔するまで酒を飲まねえだろ。酔ったフリをするのも不自然だし」

俊作は純をじっと見据えた。

純は、中年男性に扮した親友の、真面目に自分を見据える姿がなんだがおかしくて、つい吹き出してしまった。

俊作「何で笑うんだよ！」

純「いや、わりーわりー。おっさん姿のお前がなかなかおかしくてな」

俊作「真面目にやれ（笑）」

純「Sorry」

俊作「しかし、これからどうするよ？ 肝心の調査対象が休みじゃ

あ、真っ向から探りを入れらんねえぜ」

純「うーむ、少し回り道をするか」

俊作「彼女の関係者をあたるんだな？」

純「ああ」

俊作「今はそれしか方法はなさそうだな」

純「ここは別行動にしよう。オレはさっきの子たちをあたってみる」

俊作「何で？ 会社関係ならオレが行ったほうがよくない？」

純「俊作、お前は会社をクビになってんだぞ？ 今、会社の周りをつろついでみる。抗議しに来たのがバレバレだぞ」

俊作「……あ、そうか」

俊作は、自分の頭脳が少し間抜けだったことに気付いた。

会社には、笹倉課長がいる。

彼にこちらの行動がわかってしまえば、まだ見ぬ無実の証拠を隠滅されるだろう。それどころか、新たな“不祥事の実”を“捏造”されかねない。

今、俊作がマグナムコンピュータ周辺をうろつくのは危険だ。

純「…まあ、会社関係はオレに任せとけて」

俊作「わかった。…あつ、そーいや、オレの同期で羽村佐知絵と同じ大学出身のヤツがいるよ。そいつに話を聞いてみるのもいいんじゃない？」

純「That's good! 何て名前だ、そいつは？」

俊作「よなもち みきお米本幹夫。人事部にいる」

純「人事部か……」

俊作「ああ。うまくいけば笹倉がオレについて何て報告したか、その辺がわかるかもしれねえ」

純「なるほど、お前がクビになった経緯が詳しくわかるってことか」

俊作「ああ」

純「いいねえ、そういう情報はかなり有力だよ」

俊作「それと、もう一つ」

純「何だ？」

俊作「オレと同じ課にいた、同期の女の子が気がかりなんだ」

純「女の子？ 一応名前を聞いとこうか」

俊作「高根伸子。営業部・法人営業一課で営業事務をやってるよ」

純「何で気がかりなんだ？」

俊作「オレがクビになった時、すげえ憤慨してたからさ。同期だったし、その子とは仲もよかつたんだ」

純「……なるほど」

純は、そう言っつて残りのパスタを口に放り込んだ。

仲間想いの俊作らしいや。

純はそう思った。

同時に、会社にそれほど仲のよい女性がいるのを羨ましく感じた。

しかし、そんなに気がかりならメールの一つでもよこせばよいのではないか。

多くの人はこのように考えるだろう。

だが、今回の場合、俊作は会社を解雇された身である。なかなか自分からはメールしづらい。しかも、そこまで気を回せる余裕が今の俊作にはないのだ。

幼い頃からの親友である純は、そんな俊作の心境を理解していた。

純「OK、会社に潜入したらついでにその高根伸子って子の様子を見てくるよ」

純はニコリと笑った。

俊作「すまん、頼むわ」

純「そのかわり、俊作は羽村佐知絵と笹倉の身元をちゃんと洗ってこいよ。後で探偵っぽい身辺調査のやり方教えるから」

俊作「おう、わかった。早速取り掛かるうぜ」

純「ちょっと待った」

席を立とうとした俊作を、純が止めた。

俊作「何だ？」

俊作が、不思議そうに純の顔を覗き込む。

純「探偵をやる上で、お前に会わせたい人物がいる」

俊作「オレに？」

純「ああ。身辺調査の前にそこへ行こう」

11・行動開始！（後書き）

純の行きたい所とは？

12・リサイクルショップ・ロッキー（前書き）

行動を開始したばかりの俊作と純が向かった先とは…？

12・リサイクルショップ・ロッキー

俊作と純は、一旦板橋に引き返していた。

純の言う“会わせたい人物”を俊作に紹介するためである。

純の愛車・日産ウイングロードは明治通りを北上する。

俊作「なあ純、“オレに会わせたい人物”ってどんな人なんだ？」

運転席の純は、タバコを吸うために窓を少しだけ開けた。

純「探偵をやる上で必要不可欠な人物だ」

俊作「情報屋か何かか？」

純「うん…まあそんなとこだな。でも実はお前もよく知ってるヤツだぞ」

俊作「オレも知ってるヤツ？ 誰なんだ？」

純「ふふふ…会えばわかるよ」

純は、タバコをくわえながらニヤリと笑った。

当然、俊作はそれが誰か気になって仕方がなかった。

そんな俊作の気持ちを無視するかのようには、車は板橋区内へと入っていく。

やがて、車は東武東上線・大山駅から北へ少し離れた所で停まった。

ここは俊作や純が住んでいる所から程近い。

純「着いたぞ。ここだ」

言われるままに車を降りる俊作。

目の前には、よく見るコンビニエンスストアぐらいの大きさがあるリサイクルショップがあった。

“リサイクル&バラエティーグッズ ロッキー”

看板にはそう書いてあった。

木製だが、1920〜30年代のアメリカを思わせるお洒落なデザインだ。

俊作「ロッキー……？」

俊作は思い当たる節があった。

まさか、と思いつつ純の後を追って店内に入る俊作。

店内もまた、古きよきアメリカンテイストがふんだんに盛り込まれた作りになっている。

型落ちしたパソコンや古着などが丁寧に並べられた商品棚を通り抜けると、奥にカウンターが見えた。

カウンターには、最新型のレジとノートパソコンが置かれている。レジの脇には“お会計はこちら”と書かれたプレートが立てられている。

しかし、今はそこに誰もいない。

純「まったく、無用心だなあいつは」

純は、カウンターの隅に設置されているインターホンを押した。レジを離れているスタッフを呼び出すのに使う、アレだ。

程なくして、レジの後ろにあるスタッフ専用出入口から一人の男が出てきた。

赤を基調としたチェックのネルシャツ、ブラックジーンズに身を包んだその男の背丈はさほど高くない。170センチ前後だろうか。ダークブラウンに染まった髪は、つむじからごく自然な流れを作り、程よい長さでとどまっている。

また、顔は童顔なのだが肌が小麦色に焼けている。

俊作「あ……お前、ロッキーじゃんか！」

ロッキーと呼ばれたその男は、「よっ！」と軽快に挨拶した。

この、ロッキーと呼ばれた男の名前は黒木創クニキ 創。俊作や純とは中学・高校時代の友人である。

“ロッキー”と呼ばれているのは、単に苗字が“黒木”だったからであり、決して某大ヒット映画に由来するものではない。

純「驚いた？」

俊作「かなり」

創「久しぶりだなあ、俊作」

俊作「2年ぶりぐらいか？」

創「そうだな。それぐらい会ってなかったかもな」

俊作「しかし驚いたな。ここ、お前の店か？」

創「ほお、まだ何も説明してねーのによくわかったな」

俊作「だって、店の名前が“ロッキー”だぜ？ ベタすぎるだろうよ」

創「はっはっはっ！ それもそうだな！」
3人は大きな声で笑った。

黒木創は、十代の頃から雑貨を集めるのが好きだった。生活に必要なものから遊び心いっぱいの一風変わった玩具、リサイクル品などありとあらゆる雑貨を収集していた。

その趣味がこうじて、自分の店を持つと考えるようになったのは大学4年生の時。大学で知り合った雑貨好きの友人と協力して大学卒業後もアルバイトをしながら開業資金を貯め、一年半ほど前にようやくこの店をオープンさせた。

開店に伴ってアルバイトを2人雇い、計4人でのスタートとなった。看板にも書いてあるように、雑貨全般とリサイクル品を取り扱っている。

俊作「へえ、お前もたいしたモンだなあ」

開店までの経緯いきさつを創から聞き、俊作は心底感心していた。

創「なんだよ、ちょっと上から目線じゃねーか」

俊作「そんなことねーよ！ ホントにすげえと思ったんだよ」
創「あつそ」

俊作と創は互いにニヤニヤしている。明らかに冗談まじりに会話している証拠だ。

純「だけど、それから一悶着あつたんだよな」

ツツコミを入れるようなニュアンスで、純が話題を続行させた。
やれやれ、というような顔をする創。

俊作「何があつたんだ？」

創「……店を開いて半年が過ぎた辺りだったかな、レジの金が帳簿と合わないことが多くなつたんだ。まあ、よくある話だけどな」

俊作「確かにありがちな話だな。店の誰かが盗つたんか？」

創「オレもそう思つて、純に相談したんだ。ちょうどその時探偵事務所を開いたばかりだったらしくて、たまたまウチの店の前でピラ配つてたからさ」

純「そうそう。オレもまさか最初の依頼人がロッキーだとは思わなかつたよ」

創「なあ！」

純と創は再び笑つた。

俊作「……で、結局犯人は誰だつたんだ？」

創「それが、一緒に店を開いたヤツだつたんだよ！」

俊作「マ、マジか！」

創「もう驚いたし、何よりショックだつたよね」

純「あれにはオレも驚いた。まさか、夢を叶えるために頑張つてきた仲間が店の金を盗むとはな」

俊作「そうだよな。でも、何で店の金に手をつけたんだ？」

創「女だよ。キャバクラの女にのめり込んじゃまつたんだ」

俊作「うわあ〜」

純「またその女がすっぱーキレイでな。ありゃあ、ほとんどの男がほつとかねーよ」

俊作「ところが、いざ近づいてみたら男に金品買がせるようなひでえ女だつたつてことか」

創「ああ。ハマる男も男だけどな」

俊作「女にハマるのは自由だが、てめえの金で何とかするのが筋だよな」

創「だろ？　いくら仲間でもそれは許せなかつたから、すぐそいつをクビにしたよ。ただ、警察には言わなかつたけどな」

俊作「ほお、何でだ？」

創「…御仏の慈悲つてヤツだ」

俊作「寛大だな」

創「そうだろあ？ そう思うだろあ？」

急に創は得意げになった。

俊作「はいはい、わかったわかった」

わざと冷たく突き放す俊作。もちろん創が冗談で得意げになったのを理解しての言動である。

純「まあ、その事件がきっかけでロッキーはウチの大事なビジネスパートナーになったわけなんだけども」

俊作「ビジネスパートナー？」

純「ああ。オレが仕事で変装しなきゃいけない時に、ロッキーから変装するための道具を借りたり、いろんな情報を提供してもらったりするんだ」

創「店開く金を集めるためにバイトしてただろ？ その時にいろんな人と知り合っつてさ。今でもよくしてもらってた。だからいろんな情報を教えてもらえるんだよね。まあ、その代わり純にはたまに店を手伝ってもらってたけどな」

俊作「お前ら、オレの知らない所でそんな関係になりやがって」

創「へへへ、羨ましいだろ？」

俊作「別に」

純「出た、微妙にタイムリーじゃない流行語！」

俊作「うるせーよ！」

そしてまた大きな声で笑う一同。

創「ところで、俊作は今日仕事休みだっけ？」

俊作「いや、今仕事中だ」

創「あれ？ お前営業マンじゃなかったの？」

俊作「それなら昨日付けでクビになった」

創「は！？ 何があっただ？」

目を丸くして驚く創。

俊作は、解雇までの経緯を、純にしたのと同じように説明した。

創「……お前がそんなヤツだったとは」

俊作「セクハラなんてするわけねーだろがッ！ 真面目に聞けよ！」

創「いや、すまん。場を和ませようと思ってな」

俊作「そんなのいらん！」

創「だけど、変な話だな。聞く限りじゃ俊作は何も悪くないじゃん」

俊作「そうなんだよ。だから純と真相の解明に乗り出してんだ。探

偵としてな」

純「そこで、オレと探偵をやる上で心強い味方であるロッキーの店に俊作を連れてきたっちゅうわけよ」

創「なるほど、それは正解だ」

純「実際結構助かってるしな」

創「実際お前はオレを頼りすぎだけどな（笑）」

純「実際言うほど頼ってねーけどなあ？」

創「ウソつけ！ 週に何回ここへ通ってたよ！」

純「知るか！ そんなのいちいち覚えてねえ！」

俊作「実際どつちだっついていいだろ。ビジネスにギブアンドテイクは

必要なんだから」

純「……そうか」

創「……そうだよな」

2人とも言い争いをやめた。

もつとも、これも冗談半分なのだが。

創「まあ……俊作よ、何かあったらここへ来い。ところで純、今はど

こまで真相の解明ができてんだ？」

純「どこまで……って、まだ何もわかってないよ。今日から調査を始

めたんだから」

創「ああ、そうか。いや、オレもできる限りの協力をしようと思っ
てな。誰の情報が欲しい？」

俊作「さっき話した、オレの元上司・笹倉と後輩の羽村佐知絵って
女だ」

創「写真か何かあるか？」

俊作「これだ。ちょっと見にくいけどな」

俊作は、ポケットから笹倉と佐知絵の写真を取り出し、創に見せた。
写真といっても、月に1回配られる社内報に掲載されている写真を
スキャナで取り込み、パソコンでL版に拡大・画質処理を施した後
にプリンタで出力したものである。

創「ほお…この子が羽村佐知絵。なかなかカワイイじゃん」

俊作「鼻の下をのばすのは写真だけにしとけ」

創「わかってるよ。この女、男に媚びを売りそうなツラをしてやが
る。そんなのはオレのタイプじゃねえ」

俊作「え？ そうだったっけ？」

創「あれ？ お前知らなかったの？」

俊作「うん、知らなかった」

創「……まあいいや。ところで、もう1枚のほうに写ってんのが笹
倉とかかってヤツか？」

俊作「笹倉な」

創「ふーん……器の小さそうな野郎だな」

写真を眺めながら、創がボソツと呟いた。

純「じゃあロッキー、情報提供頼んだぞ」

創「わかった。お前らはこれからどうするんだ？」

純「オレは俊作の会社に潜入してみる」

創「どうして純が俊作の会社に？」

純「調査対象は俊作の元上司と同僚だぞ？ ツラがわれてる上に探

偵未経験の人間を潜り込ませるほど間抜けな話はねえ」

創「あ、なるほど。で、俊作はどうするんだ？」

俊作「オレはそれ以外の所から情報をかき集めてくる」

創「聞きこみか。それなら早急に変装グッズがいるな。ちょっと待ってろ」

一旦、創は奥の部屋に引っ込んだ。

ゴトゴトと部屋を引っ掻き回す音が聞こえてくる。

やがて、大きなサンドバッグ型のカバンを抱えた創が戻って来た。

創「待たせたな。お前の変装グッズがこの中に入ってる。とりあえずこれで一通りの仕事はできると思う。また何か必要になった時は言ってくれ」

俊作は、創から変装グッズを受け取った。

俊作「サンキュー、ロッキー」

それからしばらく雑談をし、俊作と純は“リサイクル&バラエティ
ー ロッキー”を出た。

俊作「ロッキーのヤツめ、一人前になりやがったな」

車に乗り込むやいなや、俊作がそう言った。

純「ははは、ビックリしたみたいだな」

俊作「ああ、すげえ驚いた」

車が走りだした。

純「さて、これからの行動を確認しよう。オレはお前の会社に潜り込む」

俊作「オレは周りから情報を集める」

純「よし。どんな細かいことでもいいから、とにかく有力だと思っ
た情報はすぐに控えるんだ。お互いに報告しあうことも忘れずにな」

俊作「わかった。オレの同期に会うのも忘れるなよ」

純「OK！ ついでに笹倉って野郎の動向も探ってきてやるよ」

俊作「“ ついで ” かよ。それもメインの業務だろうが」

純「わりい。お前と同期の女に会うのがメインだと思ってた」

俊作「……やれやれ」

12・リサイクルショップ・ロッキー（後書き）

心強い味方だぜ、ロッキーこと黒木創！

13・論文から英語を学んでみよう(前書き)

俊作は独り、佐知絵の交友関係を洗い出すため、千代田区某所へと来ていた。

13・論文から英語を学んでみよう

千代田区にある私立大学。

“神田中央大学”と書かれた正門の前で、どこにでもいそうな学生に扮した俊作が仁王立ちしている。

茶色のユーズドコーデュロイパンツにアディダスのスーパースター（白地に黒の三本線）を履き、赤を基調としたチエツクのネルシャツに紺のダウンベストを重ねるといった、定番中の定番スタイルだ。誰も俊作を部外者だとは思わない。

この神田中央大学は、羽村佐知絵の出身大学である。

俊作は、ここで佐知絵と仲のよかった人物を割り出し、彼女の人物像や近況により深く迫るつもりでいる。

しかし、どうやって割り出すのだろうか？

俊作は、佐知絵との会話をこと細かに思い返していた。

羽村佐知絵は、外国語学部英語学科の学生だった。

3年生になってからゼミに入り、“世界各地に根付いた英語文化”の研究を始めた。

そして、それを卒業論文として発表した。

その論文は、ゼミ生全体の文集に収められ、教授と佐知絵を含むゼミ生全員に配られた他に、1部だけ学生課前にある英語学科のゼミ紹介コーナーに展示されているという。

したがって、その文集を見れば佐知絵を知る人物が簡単に割り出すことができるというわけだ。

俊作は学生課を目指して歩きだした。

途中、元気いっぱいにはしゃぐ無垢な学生たちとすれ違い、思わず「若いっていいなあ……」と呟いてしまった。

学生課は、キャンパスのおよそ中心部に位置していた。

向かい側に、かなり広いスペースで、全学部のゼミを紹介するコーナーが設けられていた。

その一角に英語学科のブースを見つけると、俊作は素早くそこへ駆け寄り、目的である文集を探し始めた。

英語学科で開講されているゼミも一つだけではない。

しかも、全てのゼミが卒業論文を文集にしている。

さすがにゼミの名前までは聞いていなかった。こうなったら、片っ端から文集を調べていくしかない。

俊作は、いちばん左端にあった文集から手をつけた。

佐知絵の名前はない。

間髪入れずに隣の文集をめくる。

この文集にもない。

仕方ない、次だ。

これを繰り返すこと約10分、6冊目でようやく佐知絵の名前と論

文を見つけた。

どんな内容なんだろう。

俊作は少し論文を読んでみることにした。

イギリスを起点とし、アメリカやカナダなどに広まり、それぞれの地で発達した英語の訛りや言い回しなどを中心に論じられている。いわば、方言の英語バージョンといったところか。

よくここまで調べたものだと感じしかけた俊作の背後で、何やら人の気配がした。

振り向くと、上品な感じの中年男性が立っていた。

いや、中年というよりは初老という感じが。

三つ揃いのスーツをきっちりと着こなし、落ち着いた雰囲気を出している。

男性は敵意を示すわけでもなく、むしろ温かく迎え入れるような目でこちらを見ている。

男性「何やら、熱心に文集を読みあさっておられるようですが、興味でもおありですか？」

俊作は一瞬身構えた。

体育館の裏で喫煙しているのを先生に見つけた高校生の気分になった（もっとも、俊作はタバコを吸わないのだが）。

しかし、更にその次の一瞬で冷静さを取り戻した。

ここで大学時代の恩師と会えるなんて、願ってもないチャンスだ。

佐知絵の交友関係を割り出す前に、彼女の人となりを聞き出すことができる。

俊作「…あなたは？」

男性「これは失礼。私はそのゼミを受け持っている南方みなみかたという者です。閲覧のお邪魔でしたかな？」

俊作「いえ、そんなことはないですよ。ただ、英語について勉強しようと思っただけにある文集を読んでいたら、ちょうどこの論文に少し興味をひかれたもので」

俊作は、佐知絵の論文が書かれているページを開いて、南方と名乗る男性に見せた。

男性「南方「ああ……それは羽村さんの論文」

俊作「これ、英語文化についてこと細かに書かれていますね」

南方「そう、それには私も感心しましたよ。よくここまで調べたものだと」

俊作「ええ。英語を知る上で大変参考になります」

南方「そうですか。それはよかったです」

南方は優しく微笑んだ。

俊作「……この論文を書いた人は、結構優秀だったんじゃないですか？」

南方「はい。大変優秀な子でしたよ。素直で感じもよかったですから、ゼミのみんなに好かれていましたよ」

俊作「へえー…友達の多いタイプだったんですね。しかし、どうやってここまで立派な論文を書き上げたんですか？」

南方は、ほんの少しだけ眉間にシワを寄せた。

南方「どうやって……さあ……それは私にもわかりませんな。外国人留学生のお友達がいっぱいいたんじゃないでしょうか」

丁寧に回答する南方。この時点で、俊作は南方の丁寧で腰の低い立ち振舞いが気に入っていた。

きつとこの人もゼミ生から慕われていたに違いない。

俊作「…おそらくそうでしょうね。みんなから好かれるタイプなら外国人の友人がいてもおかしくはないですから」

俊作は2、3ページめくった。

いたって何気ない動作だったが、意外にもそれが南方には興味深そうに見えた。

南方「もしよろしければ、その論文をコピーしていかれてはいいかがですか？」

俊作「えっ？ いいんですか？ “盗用防止の為、コピーすることを禁ずる” って貼り紙がしてありますよ？」

俊作は、自分のすぐ近くにあつた貼り紙を指差した。

確かにその貼り紙にはコピー禁止と書かれている。

南方「もちろん内緒ですよ、これは」

俊作「え…？」

南方「あなたはともまつすぐな目をしている。決してウソをついたり、不正を働くことのない目だ」

俊作「……」

俊作はすでに身分を偽っているのだが。

俊作が何も言い返さず黙っていると、不意に南方が微笑んだ。

南方「人間関係は信頼のもとに成り立っています。あなたのような人にその論文を役立ててもらえたら、きつと羽村さんも喜ぶでしょう」

俊作「すみません……」

俊作は、本当に申し訳ない気持ちになった。
営業マン時代にも巧みな話術で相手をその気にさせてきたが、この場合は半分詐欺だ。ましてや、南方のような人格者を前にすると、なおさらそう思ってしまう。

しかし、これも自分の身の潔白を証明するため。今の俊作に迷っているヒマはない。

俊作「ありがとうございます。……あ、それなら、コピーする前に羽村さん以外の論文も拝見していつてよろしいですか？ 参考になりそうなものは吸収したいんで」

南方「ああ、いいですとも。どんどん勉強に励みなされ」

俊作「ありがとうございます」

南方「そうだ、羽村さんの他にはこの人の論文を参考にするといいですよ。ちょっとよろしいですか？」

南方は、俊作から文集を手渡されると、ちょうど真ん中辺りのペー
ジを開いて俊作に差し出した。

“楽しみながら英語力をアップさせる方法

外国語学部英語学科

えんごが
えんごが
江坂千里”

紙面にはそう書かれている。

俊作「これは実用性がありそうなタイトルですね」

南方「そうですね？ この子もいい論文を書いたんですよ」

俊作「江坂さん…というんですか」

南方「はい。彼女は羽村さんと仲がよかったようで、よく2人で一緒にいるところを見ましたねえ」

俊作「ほお。それで、今も2人は仲良しなんですか？」

南方「さあ…そこまではわかりません」

俊作「ちなみに、その江坂さんは、卒業後どんな仕事に就いたんですか？」

南方「アパレル関係だと聞きました。今は新宿で働いているそうです」

俊作「あまり英語とは関係なさそうな……」

南方「はっはっはっ。まあ、本人が決めたことですからね。私ごとやかく言う権利はないですよ」

俊作「そうですね」

南方「…ささ、他にはれるとちょっと厄介です。手早くコピーを済ませなされ」

俊作「あ、はい。ありがとうございます」

他にはれることなくコピーを済ませた俊作は、南方に軽く会釈をしてからゼミ紹介コーナーを後にした。

帰り際、1人の男子学生が学生課の方向へ歩いていくのが見えた。

とてもお洒落な服装だ。

秋らしいダークブラウンのジャケットがまだ真新しい。おそらく買ったばかりなのだろう。

俊作は無意識にその学生の後を追っていた。

彼の服装がお洒落だったということ、もしかしたら彼が南方のゼミ生ではないかと直感的に思ったことがその理由だ。

俊作は、南方から江坂千里の勤務先を詳しく聞いていなかった。キーワードが「アパレル関係」と「新宿」だけでは特定するのに骨が折れる。

しかし逆を言えば、江坂千里がアパレル関係の仕事をしているということは、洋服の販売員をやっている可能性が高い。そうになると、彼が着ている服のどれかが江坂千里の勤める会社から販売されていれば、彼女を探し出すのはより簡単になる。

そのためには、学生と南方の会話をしっかりと聞き取り、うまくファッションの話題から江坂千里の話題に流れていくことを願うしかない。

まあ、その話題にならなかつたとしても彼に接触して直接聞き出せばよいのだが。

わずかな足音を出すことなく、俊作は男子学生を尾行し続けた。

彼はやがて、学生課を抜けて教員棟に入ってしまった。

文字通り、ここは神田中央大学の各教員たちが各々の仕事をするための個室が集まる所である。

階段で2階まで上がり切った所で、学生の足が止まった。

学生の目の前にはドアがある。教員の部屋だ。

ノックをし、「失礼します」と一声かけて入室する学生。

すかさず、かつ静かに部屋の前まで駆け寄り、ドアの脇に掲げられたネームプレートを確認する俊作。

Bingo!

ズバリの中！

男子学生が入ったのは南方教授の部屋だった。

瞬間、俊作は自分が少し恐ろしくなった。

どうしてあの学生を見た時に、「彼は南方教授のゼミ生ではないか？」と思ったのか？
自分でもよくわからないのだ。

探偵未経験のくせによく勘を的中できたものだ。

おっと、感心している場合ではない。

学生と南方の会話をよく聞き取らなければ。

息を殺し、聴覚を研ぎ澄ます俊作。

中から学生と南方の声が聞こえてくる。

南方「おっ、カッコいいジャケットだね。どこで買ったの？」

学生「あ、これ千里さんの店で買ったんですよ」

！

いきなり来た！

あとは店の名前を知るだけだ。

頼む。店の名前を言ってくれ。

南方「江坂さんは新宿で働いてるんだよね？ 店の名前は何ていうのかな？」

学生「あ、先生もこのジャケット欲しくなつたんですか？」

南方「うん…なんか、いい感じだからね」

学生「“キャミイ&ジミー”ですよ」

“キャミイ&ジミー”だつて？

略して“キャミジミ”。

俊作もこのブランドの洋服は好きだつた。だが、このジャケットまではチエックしていなかつたようである。少しだけ悔しがる俊作。

しかし、これで江坂千里に会うことができる。俊作は勘の冴え具合に改めて驚いていた。

次の目的地は決まつた。

アルタの裏にキャミイ&ジミー新宿店がある。

13 論文から英語を学んでみよう(後書き)

次の目的地は、新宿だ！

14・“清掃員”・鳴海純（前書き）

俊作が新宿へ向かおうとする中、純は…？

新宿へ向かうため、俊作はJR神田駅にいた。

中央線のホームに立った時、純から電話がかかってきた。

純「おう、頑張ってるか？」

俊作「まあな。今さっき羽村の大学へ行ってきたよ」

純「ほう。それで何かわかったか？」

俊作「彼女のゼミの先生に会って話聞いたんだけど、あの子学生時代から友達の多いタイプだったみたいだな」

純「…まあオレは彼女をよく知らないけど」

俊作「…そうだったな。だけど先生の前じゃ優等生で通ってたみたいだぜ」

純「優等生？」

俊作「ああ。彼女の卒論を先生が高く評価してたよ。オレも読んでみたけど、なかなかいい内容だった」

純「何感心してんだよ」

俊作「感心なんかしてねーよ。オレはただ見たままを言ったただけだ」
純「まあいいや。他にわかったことは？」

俊作「羽村と仲のよかった人間が、新宿のキャミジミで働いてる」とがわかった」

純「おつ！ それはNiceだ。名前は？」

俊作「江坂千里っていうそうだ。これから会いに行こうと思う」

純「わかった。だがくれぐれも警戒されんなよ。行っていきなり羽村の情報を聞き出そうなんて思っな」

俊作「ああ。その辺は飛び込み営業と同じだな」

純「まあそういうことだ。あくまでも自然に接するんだぞ」

俊作「わかった。ところで、お前はとうなんだ？ 何かわかったか

？」

純「いや、まだこれといった情報は掴んでない。だが、米本ってヤツの顔は確認した。隙を見て接近してみる」

俊作「そうか。羽村の同期の様子はどうか？」

純「2人ともこれといった大きな動きはないな。おとなしく仕事してるよ」

俊作「のぶちゃん……いや、高根伸子は？」

純「“のぶちゃん”って、お前そんな親しい間柄だったの？」

俊作「そんなことはどうでもいいから早く答えろ」

純「すまんすまん。彼女は見た感じ平気そうだよ。ただ、内心はどうだかな。先輩に気遣われてる感じだったし」

俊作「…そうか」

純「たまには連絡してやれよ。お前と仲良しなんだろ？ 絶対シヨツク受けてるって」

俊作「ああ、わかってる…」

純「それからな、笹倉ってヤツのことだけど、ありやお前と合わないな。妙に偉そうだもんよ」

俊作「だろ？ 人の上に立つタイプじゃないよ、絶対」

純「あんな調子じゃ、すぐ平社員に降格させられそうなのがするんだけどなあ」

俊作「うん。それはオレも疑問だ」

純「こいつも調べ甲斐がありそうだ」

俊作「しつかり頼むぞ」

純「OK！ とりあえずお前はのぶちゃんにメールでもしとけ！」

俊作「お前が気安く呼ぶな！」

純「はっはっはっ！ じゃあな！」

電話は切れた。

俊作は、タイミングよくホームに滑り込んできた快速電車に乗り込

んだ。

純は、清掃会社“ハワイアン・クリーン株式会社”のスタッフとして株式会社マグナムコンピュータに潜入していた。

少し前に請け負った案件で、今回同様、一般企業に潜入しなければならなかった。

その時、創から紹介されたのがこのハワイアン・クリーンだった。

なんでも、この会社はかつて創がアルバイトをしていた所だったらしい。

企業規模としてはあまり大きくないのだが、アットホームでチームワークも抜群である。

この社長は創を気に入っており、創が自分の店を開いた今でも付き合いがある。そんな縁で純とも知り合ったのだ。

更に奇遇なことに、ハワイアン・クリーンは株式会社マグナムコンピュータの清掃業務を請け負っていた。

社長は純の頼みに対し、今回も快く承諾してくれた。

したがって純は、比較的簡単にマグナムコンピュータへ潜り込むことができたのである。

しかし、さすが大企業。

美女がたくさんいる。

純のテンションは少し上昇していた。

純「いけねえ、しつかり仕事しねえとな」

壁の拭き掃除をしながら、純は営業部の様子を注意深く観察した。

法人営業一課では、笹倉が伸子を呼びつけた。

遠くから見る限り、仕事上の軽い打ち合わせなんて雰囲気ではない。叱責だ。

伸子の作成した資料が発端となっているようだ。笹倉がその資料をバンバン叩きながら伸子を責めている。

純も、さりげなく、あくまで掃除中を装って話し声が聞こえる位置まで移動する。

伸子で作った資料は、どうやらミーティングに使うもののようなようだ。俊作解雇に伴い、法人営業一課内で担当区域や予算額（平たくいえばノルマである）の練り直しを行うのだろう。

笹倉「ふざけてんのか!」

伸子「ふざけてなんかいません!」

笹倉「ふざけてんじゃねーかよ! 何だこの内容は!」

伸子「どこがふざけているというんですか?」

笹倉「今期の売上見込みだ。どうしてこうなるんだ?」

伸子「…柴田くんがいなくなってしまったので、彼の予算額を課の人数で割って、課員それぞれの予算額に上乘せしたのでこうなりました」

笹倉「あゝ? 柴田だあゝ?」

笹倉は耳に手を当て、わざとらしく大袈裟に“よく聞こえなかった

からもう一度言ってくれ”と言わんばかりの態度をとった。当然、伸子は不快な気分になった。

伸子「…はい。彼の抜けた穴を埋めるにはそれが妥当なやり方だと思いますが」

笹倉「それでこんな数字になったのか？」

伸子「はい」

笹倉「ダメだな、これじゃ」

伸子「え？ どうしてですか？」

笹倉は個別予算額の項を見た。

そこにはしっかりと、個別の予算額とその内訳が記されている。

笹倉「…お前、さっき“柴田の予算額を課の人数で割って、それぞれの予算額に上乘せした”つつたな？」

伸子「はい。言いましたけど…」

笹倉「高えんだよ、上乘せした額が」

伸子「え？ そんなはずはないですよ！ 以前の資料を参照しながら作っただからですから」

笹倉「何であいつに配慮してんだよ。こんなに高く上乘せする必要はねえの」

伸子「え……？」

笹倉「この額は、もともと柴田が自分から通常より高めにしてくれつつ希望したモンなんだよ」

伸子「柴田くんが……？」

伸子は資料に視線を落とした。

確かに、俊作の予算額は年齢のわりには高くなっていた。

しかし、彼が自ら望んで予算額を高くしてもらった、という話は聞いたことがない。俊作も他の営業マンと同様にノルマを煩わしく思っていたはず。伸子は少し疑問に思った。

伸子「柴田くんが、そんなことを……」

笹倉「…まったくよお、何であんなカスのケツ拭かなきゃいけないんだよ。あいつの分を上乘せしたら他のメンバーに迷惑だろうが」
伸子「迷惑……？」

笹倉「あのバカは己の欲求に溺れた低俗な変態なんだぞ？ そんな男の尻拭いを、誰がするんだ？ あ？ オレはそこが気に入らねえんだ」

伸子「柴田くんは低俗な変態なんかじゃありません！」

さすがにこの発言は許せない。

伸子は思わず声を張り上げていた。

笹倉「ああ！？ 口答えする気がッ！！ 事実ヤツはセクハラやらかしてクビになってんだろうが！」

伸子「それは何かの間違いです！」

笹倉「あれがどう転んだら間違いになるんだ！ 頭おかしいんじゃないのか！」

伸子「あたしはいたって正常です！」

笹倉「おかしいんだよ！」

その時、事態を見かねた会田がサツと仲裁に入った。

会田「まあまあ、仕事中ですし、言い争いはこの辺で止めませんか？」

伸子と笹倉は、お互いの顔を一瞬だけ見合わせると、気まずそうに下を向いた。

伸子「…すみません」

会田が笹倉に向き直る。

会田「課長、柴田の穴埋めはオレがやります。それでいいですか？」

伸子「え……？」

伸子はビククリして会田の顔を見た。

笹倉「む……しかし大丈夫か？」

会田「大丈夫です」

会田は笹倉の目を見据え、キツパリと言い切った。

笹倉「…そうか。お前がそんなに言うんだったら任せるよ」

会田「ありがとうございます」

会田は軽く頭を下げた。

伸子「……」

伸子は不安そうに、席へ戻る会田の後ろ姿を見ていた。

純「ほほう……あの会田つての、なかなかやるなあ。自ら2人分のノルマを背負うとは。しかし、それにしても俊作はひでえ言われようだな。オレならたぶん3ヶ月もたねえ」
傍で伸子たちのやり取りを見ていた純は、会田の行動に感心するとともに、笹倉の態度を不快に思うのであった。

その日の夕方。

缶コーヒーを飲もうと給湯室脇の休憩室にいた会田を、伸子が呼び止めた。

伸子「会田さん」

会田「おお、どうした？」

伸子「…あの、大丈夫なんですか？」

会田「ん？ 何が？」

伸子「柴田くんの穴埋めをするって話ですよ。2人分も引き受けて大変なんじゃないですか？」

会田「平気平気。なんとかなるよ」

伸子「でも……」

会田「まあ、本来なら柴田の予算額を課の人数で等分して……ってやるべきなんだろうけど、あんな状況ならしょうがないよ」

伸子「はあ……」

会田「とにかく、ここはオレに任せて。こっちは大丈夫だから、うん」

伸子「……はい」

それでも伸子は不安そうな顔をした。

自分ひとりのノルマを達成するだけでも大変なのに、2人分も負担するなんて無茶な話だ。法人営業一課の稼ぎ頭である会田といえど、これは相当厳しいのではないか。

会田「そんな不安そうな顔すんなよ。高根さんは自分の仕事に集中してればいいからさあ」

休憩室奥にある自動販売機の前に立ち、百円玉を投入しながら会田は伸子を安心させようと努める。

伸子「…わかりました。でも無理しないでくださいね…」

会田「大丈夫。意外とタフな体してるんだ、オレ」

会田は取り出し口に転げ落ちてきた缶コーヒーに手を伸ばした。

会田「それに、もうちょいしたら正式なテリトリー再編のミーティングがあるだろう。そこで予算額の調整もされるはずだから、柴田の数字はちゃんと均等に再分配されるんじゃない？」

伸子「……だといいんですけど」

会田「心配いらないよ。大丈夫だって！」

言っと、会田は爽やかな笑顔を残して自分の席へと戻っていった。

伸子「……」

仕方なく、伸子も缶コーヒーを買って自分の席に戻った。

同時刻、純は羽村佐知絵の同期である秋葉梨乃に探りを入れていた。

14・“清掃員”・鳴海純（後書き）

笹倉は、精神的攻撃の標的を伸子に変えたのか？

15・大森には何がある？（前書き）

千里を探る俊作と、梨乃を探る純。
佐知絵の人間像はつかめるか…？

15・大森には何がある？

清掃の仕事を終えた純は、サングラスをかけ、頭にはニットキャップをかぶっただけの格好で、マグナムコンピューター前の喫煙スペースでタバコを吸っていた。

当初の予定通り、末広真智子か秋葉梨乃を待ち伏せ、会社から出てきたところを尾行する。

さすがに両者をいっぺんにつけるのは無理だ。真智子か梨乃の、どちらか先に出てきた方を尾行しよう。

待つこと約20分。

出てきたのは、秋葉梨乃だった。

急いでタバコを灰皿に押し込み、彼女の後を追う純。

秋葉梨乃は、果たして佐知絵に関する有力な情報を持っているだろうか。少しばかり期待する純。

少し時間を巻き戻すこと今から1時間ほど前、俊作は江坂千里が勤務する、キャミー&ジミー新宿店の前にいた。

店の外から様子をうかがう。

江坂千里本人はすぐに確認できた。

“江坂”と書かれた名札を胸につけている。

どちらかといえば、南国的なイメージの美女という感じだ。身の丈は伸子より若干高く見える。それにスレンダーな体系も手伝って、仕草や立ち振舞いが爽やかで健康的に感じられる。

彼女は現在接客中だ。

相手は大学生ぐらいの男性。

客を装って店内をうろついていれば、そのうち向こうから話しかけてくるだろう。

俊作は店の中へ足を踏み入れた。

中はさほど広くない。千里の他にも別の女性店員が接客をしていた。だが、俊作から見ると、接客態度は千里のほうがよかった。

“類は友を呼ぶ”というヤツだろうか。佐知絵も愛想はよかった。第一印象は決して悪くない。

いや、そう決め付けてしまうのは早計だ。

俊作は江坂千里をよく知らない。今、初めてその姿を見ただけだ。実際に会話をしたわけでもないの、人となりまではわからない。俊作は、急いで頭の中に浮かんだ言葉を打ち消した。

とりあえずここは江坂千里を観察しよう。

俊作は、目の前にあったロングTシャツを手に取り、じつと眺めながら注意を江坂千里に向けた。

20分、いや30分ほど待ってみたが、千里は依然として同じ男性客と話し込んでいる。

明らかにこの男は常連客だ。

もしかしたらあの会話の中から、何かヒントになるようなものが見

つかるかもしれない。
あまり気が進むものではないが、俊作はこっそり近づいて彼女らの立ち話を盗み聞きすることにした。

千里のそばに陳列されていたカッターソーを手に取った瞬間、俊作は少しばかり身体力が抜けた。

彼女らが“小学生の頃によく使っていた文房具”の話で盛り上がっていたからだ。

俊作「何だそりゃ？」

俊作は心の中で叫んだ。

それでも一応粘ってはみたが、話は一向に終わる気配を見せない。これ以上同じ場所にいると怪しまれる。少しだけ移動しよう。

俊作は、カッターソーから隣のジャケットへ視線を移した。

俊作は思った。

これなら店員に声をかけてもらったほうがマシだ。いつもは若干うざったく感じられる店員も、こういう時に限って誰も応対しに来ない。周りには自分がどう見えているのだろうか。せめて“何を買おうかなかなか決められずに迷っている優柔不断な客”ぐらいに思ってくれたら幸いなのだが。

しかし、それでも千里と男性客の会話は終わらなかつた。

見えない何かに押し出されるかのように、俊作は店を出ていった。

俊作「くそっ、話が長すぎんだよ」

俊作は唸った。

しかし、あれでは千里に接触するのは無理だ。ここはひとまず退却しよう。

それにしても、少し喉が渴いた。コーヒーでも飲んでひと休みするか。

俊作は、近くにあった喫茶店に入った。

アイスコーヒーを一口飲み、大きく息を吐く。

肩の力が抜けていくのを感じる。

探偵の仕事が初めてだったためか、無意識のうちに緊張で身体全体が強張っていたのだろう。ここで一息ついたのは正解だったのかもしれない。

ちびちびとコーヒーを飲みながら、先程神田中央大学で手に入れた卒業論文のコピーに目を通す。

佐知絵の論文を読むと、彼女とのこれまでのやりとりを思い出す。

信じられん。

まさかあの子に悪者扱いされるなんて。

どこがセクハラなのか、どう逆立ちしてもわからないし納得できない。

仕事帰りに食事をしただけではないか。食事をした店のスタッフに聞いても、きっとセクハラ行為などしていなかったと言っだろう。

俊作は、コーヒーカップを手に取ろうとしてやめた。

食事をした店のスタッフ……？

俊作は、わりと大事なことを忘れていたのに気づいた。

そつだ、まだ実際に店のスタッフに確認をとっていない。彼らの証言は強力な証拠能力を発揮することだろう。江坂千里に近づくのはその後でも遅くはない。

更に、店の付近で、実際に羽村佐知絵をホテルへ連れ込もうとする柴田俊作を見た人がいるかどうか、聞き込みをすればベターである。誰も見ていないか、“見たがホテルへ連れ込もうとする様子ではなかった”という証言が得られれば俊作のセクハラ疑惑はかなり薄くなるに違いない。

携帯電話の電話帳から、純の番号を探し出す俊作。

そして、通話ボタンを押した。

純「俊作か？　わりい、これから電車に乗るんだ。後でこつちからかけ直す！」

通話開始と同時に、まくし立てるような純の声が飛んできた。

俊作「あ、ああ、わかった」

つられるように、俊作の口調も慌ただしくなる。

「すまん」と言おうとした時には、既に通話が終了していた。

仕方ない。純がかけ直してくるまでしばらく待つか。

帰途についた秋葉梨乃の後をつけていた純は、山手線に乗り込んで品川方面へ向かっていた。

どうやら彼女の家がこっちの方角らしい。

電車に乗っても、梨乃に変わった様子は見られない。

電車が品川に到着すると、今度は京浜東北線・大船行きに乗り換えた。

梨乃は、品川から二つ目の大森で降りた。

海岸方面とは反対側の出口を出ると、彼女は駅前の坂道をせっせと上った。

ふと、純は上を見上げた。

パチンコ屋が入ったビルの最上階にスポーツジムがあるではないか。

純「…そーいや最近運動不足だな……」

誰にも聞こえないぐらい小さな声でつぶやいた。

純が視線を前方に戻すと、梨乃がバッグから携帯電話を取り出していた。

電話か？ それともメールか？

彼女が送信側か？ それとも受信側か？

念のため、純はICレコーダーをセットした。

実はこのレコーダー、高性能集音マイクがカスタマイズされていて、かなり遠い場所の音も拾うことができる。

そして、元がレコーダーであるため、拾った音は即時に保存することができるとができる。

しかも、外見がポータブルMP3プレイヤーに似ているため、誰もICレコーダーだとは気づかない。

一言でいえば、すごく便利なのだ。

ちなみにこれは、純が探偵事務所を開く際に黒木創から記念として贈呈されたものである。

たまたま仕入れたICレコーダーがポータブルMP3プレイヤーに似ていたため、同じくたまたま仕入れた小型高性能集音マイクを取り付けたのだという。

それにしても、相当の改造技術である。

そんなエピソードが詰まったICレコーダーを、梨乃の方向へ向けた。

梨乃が、携帯電話を耳にあてた。

電話だ。

しかも彼女から誰かにかけた様子。

しばらく経つと、梨乃が携帯電話をバッグにしまい込んだ。相手が何らかの理由で出なかつたらしい。

純も、ICレコーダーをマウンテンパーカーのポケットにしまい込んだ。

結局、この時はこれ以外梨乃に目立った動きはなかった。

とりあえず大森駅前まで戻り、俊作に電話をする。

純「遅くなつてすまん。秋葉梨乃をつけてたもんでな」

俊作「何かわかつたか？」

純「さつき誰かに電話してたみたいだけど、出なかつたらしい。それ以外は特に変わった様子はなかった。そっちはどうだ？ 羽村の友達には接触できたのか？」

俊作「いや、長いこと接客中で無理だった。顔は確認できたけどな。今は近くの喫茶店にいる」

純「そうか。それでいい。へたに周りをうるついで怪しまれたらちよつとまずいからな」

俊作「あのさ、今から渋谷に向かおうと思つてんだけど……」

純「何で？」

俊作「オレと羽村が食事をした店のスタッフに聞き込みをするためだよ」

純「聞き込み？」

俊作「ああ。オレがセクハラで訴えられたのは、彼女と食事をした時の行動が引き金になったわけだろ？ それなら、食事をした店のスタッフや店周辺、道玄坂のホテル街へ出向いて聞き込みをして、セクハラは事実無根だ”って証言を得れこつちも少しは有利になるんじゃないかねえ？」

純「なるほどな。いや待てよ、ホテル街で聞き込みをするのはちよつと面倒だぞ。羽村の訴えによれば、お前は彼女をラブホに連れ込もうとしたんだよな？」

俊作「そうだけど？」

純「だつたら、ラブホの防犯カメラをチェックしたほうが早くないか？」

俊作「ああ、なるほど」

純「確か、お前と羽村がラブホへ入ろうとする“疑惑の写真”があ

「つたんだよな？ どのラブホかわかるか？」

俊作「いや…それがな、あの写真、うまいことホテルの名前がわからないように写してあるんだ。しかもアップだったから周りの風景もよくわからなかったし」

純「でも、ホテルの一部分は写ってるんだろ？ そこからこのホテルか割り出せない？」

俊作「うーん……わりとありふれた外観だったよつな……」

純「そうか……」

俊作「あの写真さえあればいいんだけどな。実際の風景と照らし合わせてホテルを割り出すことができる」

純「そうだな……。お前、その写真の持ち主わかるか？」

俊作「わかんねえ」

純「だよな…。ちよつとここはロッキーの力を借りるかな」

俊作「ロッキーの？」

純「正確にはロッキーの人脈を頼るんだ。あいつは仕事を通じていろんな情報屋と知り合ってるからな」

俊作「そうか、その情報屋にお願いしてあの写真は誰が持っているか調べてもらうんだな？」

純「そうだ。幸い持ち主の見当はついてるし」

俊作「羽村佐知絵か、戸川って弁護士か」

純「ああ。的がだいたい絞れてるから、すぐにでもわかるだろう」

俊作「よし、写真はロッキーの人脈にお願いしよう。オレは今から渋谷へ向かう」

純「いや、店の聞き込みならオレがやろう。お前には羽村の友達に探りを入れる仕事がある」

俊作「だけだよ……」

純「いいんだ。オレは今日もうやるのがねえ。店の名前を教えてください」

俊作は、仕事帰りに佐知絵と2人で食事した店と、白鷺堂返還祝と称して佐知絵、会田の3人で飲んだ店の名前を教えた。

純「……よし、わかった。お前は引き続きキャミジミへ行ってくれ。調査が終わったら今日はお互い直帰しよう。ただし、メールで簡単に調査報告することを忘れずに」

俊作「ああ。わかった」

純「あと、キャミジミ近辺でいい店あったら教えてくれ」

俊作「どんな店だ？」

純「もしアレだったら歌舞伎町まで足を伸ばしてもいいぞ」

俊作「……まさかお前……」

純「いやあ、たまには息抜きもねえ……」

俊作「そういうのは自分で調べるよ！」

純「Just kidding!（冗談だよ） 真に受けんなって」

俊作「……やれやれ」

電話を切り、純は大森駅から京浜東北線に乗り込んだ。

俊作も、素早く会計を済ませて再び江坂千里のいる店へ向かった。

16・ニューアイテム(前書き)

初日の調査結果はいかに…？

16・ニューアイテム

翌朝9時半、ホットスパイス・エージェンシー。

俊作と純は、互いに前日の調査報告をするため、ソファアーに向かい合って座っていた。

純「江坂千里には接触できたのか？」

俊作「ああ、できたにはできたんだけど、普通に接客されて終わってたよ。羽村のことは何も……。でも、今日改めて行こうと思う」

純「おつ、何をしたんだ？」

俊作「カッコいいジャケットがあつてさ、“買うかどうか一晩考えさせてくれ”つつつたら“じゃあ、明日もお店にいるんで是非来てくださいね”って言われたんだよ」

純「マジ？ いい感じだね。少しでも仲良くなつていたほうが突っ込んだ話も聞き出しやすいからな」

俊作「それは営業でも同じだよ。いきなり客の所へ行つてモノが売れるなんてまずないからな。人間関係の下地作りも大事なんだよ」

純「なるほど、お前も慣れっこだったつてわけか」

俊作「ところで、純は何か新たな情報は手に入ったか？」

純「いや、特に何もなかつただけど……」

俊作「…？ 何だよ？」

純「なーんか引つ掛かるんだよなあ、店員の態度がよ」

俊作「変なヤツでもいたのか？」

純「なんか…ものすげえムカつく」

俊作「あ…？ ただ無愛想なだけじゃねえ？」

純「そうじゃないんだ。愛想は悪くない。事件の話を持ち出した瞬間、急に受け答えが事務的になつた感じがしたんだよ」

俊作「む…何だそりゃ？」

純「わからん。だが、オレには向こうが事件の話を避けたがってるように見えた」

俊作「何て言われたんだ？」

純「あの日のことはよく覚えてない”ってさ。お前と羽村がメシ食ったダイニングバーの店員も、お前が羽村と会田って人と3人で飲んだ居酒屋の店員も同じことを言ってた」

俊作「2件とも同じか？」

純「ああ。まったく一緒だった」

俊作「うーん……あり得ない話じゃないけどなあ……」

純「何か引つ掛かる。念のためこの2件もマークしとくか」

俊作「そうだな。今日も行くのか？」

純「いや、今日は行かない。ガンガン行きすぎて警戒されかねないからな。それに、まだお前の同期にも会ってないし」

俊作「米本ね。そっちが先か」

純「そうだ。明らかにそっちのほうが低いリスクで情報収集ができる」

俊作「確かに。でも二つの飲み屋はどうすんだ？ 手薄になっちゃうだろ？」

純「ロッキーに頼もう」

俊作「また？ 大丈夫か？」

純「あいつの人脈と情報網をなめちゃあいけねえぜ。これぐらいの量ならどうってことねえよ！」

「その代わりタダ働きだけどな！」

俊作と純は、驚きのあまり、座ったままの姿勢でソファーから跳ね上がった。

玄関を見ると、創が仁王立ちしている。

手には小さめのスポーツバッグを提げていた。

“噂をすれば影がさす”とはまさにこのことか。

創「何だよ、2人してツエペリってんじゃねえ！」

純「ロッキー！ いつの間に！」

創「今来たばつかだよ！」

純「つーか勝手に入ってくんなよ！ ビックリするだろ！」

創「インターホン直しとけて！ ボタン押しても鳴らねーじゃんかよッ！」

純「……そうか。そりやすまない」

俊作「……で、どうしたんだ？ こんな朝早く」

創「そうそう、2人に新しいアイテムを持ってきたんだよ」

俊作「アイテム？」

創「ああ。まずは俊作専用のモノから」

創は、バッグからモスグリーンのスプレー缶を取り出した。500ミリリットルの缶ジュースと同じくらいの大きさだ。

俊作「何だそれ？」

創「ヘリウムガスだ。つまり、変声スプレー」

俊作「あの……よく東急ハンズとかロフトなんか売ってるヤツか？」

創「まあ、そうだ。でもなあ、これは市販のモノより良質で、効果てきめんなんだぜ」

俊作「ほう。ちなみに純はもう持ってんの？」

純「おう。なかなか便利だぜ」

創「へへへ、そうだろう！ ただし、効果は約2分だから、そこんところ気をつけてくれよ」

俊作「2分か……」

純「2分もありゃあ充分だろ」

創「そんで、次はお前ら2人にだ」

創は、バッグから携帯電話を2台取り出した。

純「何だそれ？ ケータイじゃん」

創「アホウ。これをただのケータイだと思うなよ。これはな、外見こそ携帯電話だが中身はハードディスク内蔵のデジタルビデオカメラなんだぞ！」

純「ほお……」

イマイチ反応が薄い俊作と純。少し不満そうな顔をしながらも、創は説明を続けた。

創「それだけじゃないぞ。これには今まで純が使ってたICレコーダーと同じように、高性能集音マイク機能も搭載してるんだ。つまり、今度はちよつと遠くの音声と映像が記録できるってことさ」

純「おおつ、それはいい」
「だんだん食い付いてきた。」

創「さらに！ 撮影できるのは動画だけじゃねーぞ！ 動画を撮ってる時に写真撮影も可能だ。決定的瞬間を画像として保存できるぞ。しかもこれでメールもできるから、保存した画像や動画、音声ファイルをいつでもパソコンや他のケータイに送ることができる！ どうだ、すげー便利なアイテムだろ？」

純「便利だな！ さっそく使わせてくれ！」

俊作「オレにも！」

創「いいよー！ その代わりタダ働きだけどな！」

俊作&純「結局そうなるのかよ！」

創「文句言うなって。ビジネスはギブアンドテイクだよ？ 仲良くやっていこうぜ」

純「あつそう……」

純はニヤついた顔で俊作の目を見た。俊作も純が言いたいことを瞬時に見抜き、純同様ニヤリと笑った。

俊作「じゃあロッキーよ、もう1コ仕事頼むわ」

創「な、何だよ？」

純は、俊作が佐知絵を連れ込もうとしたとされるホテルを割り出すために、佐知絵と戸川弁護士のどちらが“証拠写真”を持っているかを調べてほしいことと、事件の聞き込みに対し不審な点が見られた道玄坂のダイニングバーと居酒屋に探りを入れてほしいことを打診した。

創「…そんなにやるの？」

明らかに創の顔が引きつっている。

俊作「そうだよ。どうせタダでお前の店手伝うなら、オレらがいくら仕事を頼もうが同じことだろ？」

創「うっ……」

純「ビジネスはギブアンドテイクじゃん！ ロッキーちゃんよ」

創「ぐっ…わかったよ。やるよ。弁護士と道玄坂はオレが受け持つから、羽村佐知絵はお前からやってくれ」

俊作「そうしたいんだけど、今ちょうど羽村の身辺調査で手一杯なんだよ」

創「じゃあ、羽村はハワイアン・クリーンのスタッフにサポートしてもらおうか」

純「そうしてもらえると助かる」

創「まったくよオ、後でホントに店手伝えよな！」

俊作「わかってるって」

純「ちゃんと報酬は払うから心配すんな」

創「はいはい」

それから15分ほど雑談した後、創は開店準備のため事務所を後にした。

俊作「さて…オレらも行くか」
純「…ああ」

16・ニューアイテム(後書き)

創から新たなアイテムをゲット!

17・彼女の人間像に迫れ(前書き)

再び(正確には三度だが)キャミー&ジミーを訪れる俊作。
佐知絵の過去は聞き出せるか？

17・彼女の人間像に迫れ

千里「いらっしやいます」

午前11時半、開店直後のキャミィ&ジミィはさすがにまだ客足もまばらだった。

千里「あつ、昨日の…！」

千里は俊作に気づくと、爽やかな笑顔を浮かべながら歩み寄ってきた。

千里「来てくれたんですねえ〜！ 嬉しいです！」

この笑顔の中に何パーセントぐらいの営業的要素が含まれているのだろうと、少しひねくれた感情を胸の奥底にしまい込み、俊作も笑顔で応える。

俊作「やっぱりあのジャケットが忘れらんなくて」

千里「あははっ。相当惚れ込んだみたいですね」

千里は、素早く昨日俊作が目をつけたジャケットを手を取った。

千里「こちらの商品でしたよね？」

「少々お待ちください」と告げると、千里はジャケットを丁寧にハンガーから外し、目の前にある商品ケースの上に置いた。

千里「お荷物お預かりします」

千里は、俊作が持っていたバッグも丁寧かつ手慣れた手つきで商品ケースの隅っこに置いた。

実際のところ、俊作はこのジャケットを本当に買おうかどうか迷っていた。
非常にシンプルなデザインだったので、いろんな服と合わせやすいのだ。

ジャケットを羽織り、何度も着心地を確かめる俊作。念のため、他のジャケットも試着してみる。

時折雑談も織り混ぜながら、和気藹々と買い物を楽しむ俊作。楽しさのあまり、本来の任務を忘れそうになるほどである。

俊作「うーん、やっぱり最初に着たヤツがいいっすね。これに決めます」

結局、前日から目をつけていたジャケットを買うことにした俊作。

千里「はい！ありがとうございます！」

千里は爽やかに微笑むと、ジャケットを折り畳むためにそこへ手を伸ばした。

不意に、つい不注意で、千里のヒジが商品ケースの隅っこに置いてあった俊作のバッグにあたってしまった。

“バサツ”と、バッグは無造作に床へと落下した。

落ちたはずみで、バッグの中身が勢いよく飛び出た。

千里「あつ！ すつ、すいません！」

サツとしゃがみ込み、バッグを元に戻そうとする千里。

俊作「ああ、別に平気ですよ」

俊作もそれを手伝おうとした。

ふと、千里の動きが止まった。

俊作「？」

千里「これは……！」

千里はバッグに向けて右手を伸ばした。

そして、落ちたバッグから飛び出た1枚の紙を手にとった。

俊作「ああ、それが」

千里が手に取ったのは、彼女が大学時代に書いた卒業論文のコピーだった。そう、前日に俊作が神田中央大学で手に入れたモノである。

千里「えっ！？ これ、あたしの論文じゃん！ 懐かしいーッ！

どうして持つてるんですかぁ！？」

俊作「え…？ もしかして、この論文を書いた本人……？」

知ってはいたが、当然ここは無知を決め込む。

千里「そうなんです！ あたしが大学時代に書いた論文なんです！

てゆーか、お兄さんも神田中央大学の方なんですな！」

俊作「ええ、まあ。英語を勉強しようと思っただら、南方教授からこれを薦められたもんで……」

千里「ホントですかぁ！？ 先生は元気でした？」

俊作「はい。とても」

千里「そうかぁ…よかったぁ…。最近会ってなかったんで気になってたんですよ！」

俊作「そうだったんですか。これをきっかけに、また連絡をとってみたらいいんじゃないですか？」

千里「そうですね！ だけどビックリしたなぁ」

俊作は、千里の論文を、「ここが素晴らしい」だとか「あの部分に納得させられた」などと、ここぞとばかりにベタなぐらい好評価した。千里も謙遜していたが、まんざらでもなさそうだ。

もう少しで“本題”に入れる。

俊作はにこやかに会話しつつ、その“本題”に入るチャンスをつかがっていた。

話題が、“論文”から“ゼミそのもの”に移った。南方教授の人柄、講義の内容、ゼミでの思い出など、次から次へと話が飛び出す。

この江坂千里という女、もしかしたら話し好きなのかもしれない。接客態度がよいのも頷ける。

千里「それでね、あたしの友達が“世界に根付いた英語文化”をテーマに論文書いてたんですよ」

来た！

佐知絵のことだ。

俊作「“世界に根付いた英語文化”…？」

俊作は、何かを思い出したかのように言った（もちろん、これも芝居なのだが）。

千里「ええ。かなりワイルドワイドな題目なんですけど…」

俊作は、まだ床に落ちたバッグを漁り始めた。

やがて、その中からまたしてもレポートとおぼしき冊子を取り出した。

俊作「これのことですか？」

俊作が取り出したのは、羽村佐知絵の卒業論文だった。

千里「そう！ それよ！ もしかして、それも南方先生のオススメ？」

少し興奮気味の千里。

俊作「はい。そうです」

千里「そうかあ……確かにすごくいい論文だったからなあ……」

俊作「うん、これかなりいい論文ですよ。よく調べたなって思えますよ。外国人の友達でもいたんですかね？」

千里「えっ？」

俊作「いや、どうやって論文の材料を集めたのか気になりました」

千里「ああ、はいはい」

一瞬、訝しげになった千里の顔が元に戻った。質問の意図を理解したようだ。

俊作「論文の至るところに本人の体験と思われる記述が見られますからね。これ、どう考えても書物で調べたモノだけじゃないでしょ」

千里「お兄さんよく読んでますね！ 実際そうみたいです。彼女、外国人の友達が結構いるんです」

俊作「へえ〜。留学の経験でもあるんですか？」

千里「いいえ、彼女は留学目的で海外へ行ったことはないって言うてましたね」

俊作「じゃ、どうやって外国人の友達を？」

千里「あの子、クラブ通いが趣味なんです。都心のいろんなクラブ知ってて。中でも渋谷のスペイン坂にある“R Y U - J I N”^{リュウジン}って店がお気に入りだったんです。あたしも何度か行ったことあるんですけど、そこって外国人がいっぱい来る店なんですよね」

俊作「なるほど、そこで外国人の友達を作ったわけですね？」

千里「はい」

俊作「今でも行くんですか？」

千里「あたしはほとんど行かなくなりましたが、彼女は今でもよ

く行ってるみたいですよ」

俊作「へえ、ホントにクラブ好きなんですねえ」

千里「お兄さんは行くんですか？」

俊作「あんま行かないっすね」

そう言つて俊作は照れながら笑つた。

今、俊作は「あまりクラブには行かない」と言つたが、これ、実は真つ赤なウソである。

俊作は十代の頃、かなりのやんちゃ坊主だった。

恐喝や窃盗などには手を出さなかったが、純や創らと共にケンカや夜遊びを繰り返し、バカばかりやらかしていた。

したがつて、当然クラブにもよく入り浸っていた。

渋谷・スペイン坂の“RYU-JIN”か。話に聞いたことはあるが実際に行ったことはない。あの辺りでは大きなクラブで、外国人だけでなく有名人も時々訪れるそうだ。

とにかく、これで羽村佐知絵の人間像に一步近づいた。もう少し迫つてみるか。

俊作「…あつ、ちなみにこの論文を書いた…羽村さんって人とは今でも会つたりするんですか？」

千里「ええ。職場も近いんで」

俊作「仲いいんですね。お姉さんと今でも付き合いがあるなんて、相当馬が合つんじゃないですか？」

千里「そうですね…仲よかったですねえ。あの子基本的にいい子でしたから。あたしだけじゃなくて、ゼミのみんなとも仲良くしてたんですよ」

俊作「なるほど」

俊作は深くうなずいた。

今は、この辺りでやめておいたほうがいいだろう。これ以上佐知絵のことを聞くと逆に怪しまれる可能性が高い。

会計を済ませて店を出た俊作は、購入したジャケットを自宅に持ち帰ろうと思い、一旦帰路に着いた。

純「　　そうか、わかった。また何かわかったら連絡くれ」

俊作が新宿のキャミー&ジミーでジャケットを購入していた頃、純は自分とつながりのある情報屋と連絡をとっていた。

もしかしたら、羽村佐知絵は“セクハラを恐れて会社を休んだフリをしている”のではないだろうか？

そして、それを利用して、事件の更なる裏工作のために動いたりしないだろうか？

そう考えた純は、念のため情報屋に佐知絵の動向を探らせていたのだ。

しかし、今のところこれといった情報は入ってきていない。

純「まあ、しょうがねえな」

ふと腕時計を見る。

間もなく正午だ。

純はマグナムコンピュータ本社ビル近くの定食屋に入り、一番奥の席に着いた。

この後、俊作や伸子の同期である米本幹夫がここへ来ることになっている。午前中、人事部付近を掃除している時にうまく呼び出すことができたのだ。

間もなく、米本がやって来た。

背が高いわけでもなければ低いわけでもなく、髪が長いわけでもなければ短いわけでもない米本の顔は、ムード歌謡が好きそうな某お笑い芸人に少し似ていた。

米本は、純に気づくと軽く会釈をした。純はスツと立ち上がり、純から見て向かい側にある席へ米本を誘導した。

純を不審そうに一瞥しながら、米本はゆっくりと、床に対して垂直な姿勢を保ったまま腰掛けた。

純「安心してくれ。オレは怪しい者じゃない」

純は自分の名刺を差し出した。

米本「探偵……？」

純「ああ。私立探偵の鳴海つて者だ」

米本「ふーん……。会社内でいきなりオレを名指しで呼び止めたところを見ると、一応信用してもよさそうだな」

純「まあ、警戒するのも無理ねえか。だけど、こうしてここへ来てくれたのはありがたいぜ」

米本「で、オレに何の用事なんだ？」

純「その前にさ、何か注文しない？ 腹減ってるっしょ？」

米本「…あ、ああ」

言われるがまま、米本は日替わり定食を頼んだ。

純はカツカレーを既に注文済みである。

純「タバコ、吸ってもいいか？」

米本「別に構わんが、自分の頼んだメシが来たらやめてくれ。食事
中にタバコを吸われると不快になるんでな」

米本はやや険しい顔で言い放った。

純「そ、そうか。わかった」

純は、申し訳なさそうにタバコをくわえ、火を点けた。

「堅苦しいヤツだな」と純は思った。この男から佐知絵についての
有力な情報を聞き出せるだろうか？ 少し純は不安になった。

米本「…で、オレに何の用事なわけ？ 鳴海さん」

純「ん？ ああ、そうだったな。すまん。実は、柴田俊作の事件を
追ってたんだ」

米本「え？ 柴田？」

米本の表情から、少しだけではあるが、確実に警戒の色があせた。

米本「柴田はどうしたんだ？ 突然会社クビになっちまうしよ、同
期のオレとしてはわけがわかんなくて。話によればセクハラが解雇
理由らしいけど……」

純「どうやらそうみたいだな。しかも被害を訴えたのは、あんと
同じ大学出身の羽村佐知絵だ」

米本「信じらんねえ。なあ、あいつはホントにセクハラなんてした
のか？」

純「いや、してない。本人が断固として否定している。オレはあい
つとはガキの頃からの付き合いだが、セクハラなんてするようなヤ
ツじゃねえ」

米本「そうだよな！ じゃあ、あいつは今何を…？ じつと動かず
に無実を叫んでるだけか？」

純「心配するな。俊作は今、オレと一緒に事件の真相を追ってる。
ウチの探偵としてな」

米本「探偵？ 柴田がか？」

純「ああ。あいつは上司に苦しめられた拳げ句、罨にハメられクビになって怒り心頭だ。徹底的に、どこまでも敵を追い詰めるだろうぜ」

米本「それを聞いて安心したぜ。柴田に泣き寝入りは似合わんからな」

純はニコリと笑った。

純「そこでだ。俊作の無実を証明するために、あんたにも協力してもらいたいことがある」

米本「何だ？」

純「二つある。一つは、羽村佐知絵について知ってることがあれば教えてほしいこと。そしてもう一つは、笹倉つて野郎が俊作の行いを人事部に何て報告したかを調べてほしい。事実とかなり異なってるのは間違いない」

米本「なるほど、それを探れば事件のクラクリが明らかになるってことか」

純「そういうことだ。米本さんなら何かと都合がいい。だが、これだけは気をつけてほしい」

米本「何をだ？」

純「“事実と異なる報告”が通ったってことは、何か裏がある可能性が高い。笹倉本人か他の誰かはわからんが、“見えざる力”を働かせた人物がいるってことだ。へたに動けばその力に潰されかねない。目立った行動は避けるよう、くれぐれも注意してくれ」

米本「そうだな。了解した」

その時、純が頼んだカツカレーが運ばれてきた。

純「いやー、すんなり頼み事を聞いてくれてよかったぜ。俊作の手柄に感謝しなきゃな！」

純はタバコをくわえながら、ひと安心といった表情で料理を自分の

もとへ手繰り寄せた。

すると米本は急に表情を曇らせ、大きく咳払いをした。

純「…？」

米本「……タバコ、消してくれ」

純「…あ、ああ、そうか。すまん」

純はあわててタバコを灰皿に押しつけ、笑ってその場をこまかした。

17・彼女の人間像に迫れ（後書き）

佐知絵の出没スポットを聞き出すことに成功した俊作。米本という協力者を得た純。

より深く佐知絵の人間像に迫れ！

18・クラブ「RYU・JIN」

秋がだんだんと深まり、夕方ともなれば肌寒さをひしひしと感ずることができるようになってきた。しかし、ここ渋谷センター街は、夕方になっても未だ肌寒さを知らないままだった。

ブラックジーンズ（古着）に白のブランドロングTシャツを合わせ、その上に薄手のレザージャケットを羽織った俊作がそのセンター街を、スペイン坂に向かって歩いている。

少し暑かったかな、と俊作は感じた。センター街の若者たちは彼より薄着でいる者が多かった。

これも人混みのせいだろう。俊作は気にせずABCマートを右折する。

井の頭通りに入ってすぐ右折し、路地に入る。ムラサキスポーツを左手に見ながら坂を上ると、目の前にパルコが見えてくる。

スペイン坂周辺に到着した。

千里が言っていたクラブ「RYU・JIN」はこの辺りだ。

俊作の記憶だと、ここから少し東急ハンス方面に行った所にあっただけ。俊作はその方向へ足を向けた。

まさに今、歩き出そうとしたところを、後ろから誰かに肩をポンと叩かれた。

脳より先に肩の細胞が早く反応した。俊作は何も考えずに後ろを振り返った。

いわゆる「反射的に」というヤツだ。

誰だ？

警戒する俊作の視界全体に、爽やかな笑顔の男性が映った。

純だった。

俊作「な、何やってんだよ？」

純「米本さんから、羽村がこの辺のクラブによく来るって聞いてさ。もしかしたら彼女本人が来るんじゃないかと思って出向いてみたんだ」

俊作「オレもだ。江坂千里から同じことを聞いた」

純「マジか？ こりゃ、高い確率で羽村が現れるとみて間違いなさそうだな」

俊作「そうだな。運よく今日現れりゃいいんだけど」

純「確か、店の名前は“RYU-JIN”だったな」

俊作「ああ。オレは行ったことないけど」

純「オレはあるよ」

俊作「ホント？ いつ？」

純「事務所を開くちよつと前だったかな。でも、あそこは有名なDJとかがしょっちゅうイベントやってつから、チケット代が高いんだよ」

俊作「へえー。あの子、学生時代から通ってたって話だよな？ よく通いつめる金があったな」

純「そう言われてみりゃ……。まあ、おおかた時給のいいバイトでもしてたんだろう」

俊作「…だろうな。とにかく行ってみようぜ」

俊作と純の前に、中華テイスト溢れるごつい建物が現れた。

ここが「RYU・JIN」である。

入り口のドアは閉まっている。

鉄製の、真つ黒で重厚感ある観音開きのドアだ。それぞれの扉に描かれた龍がこちらを睨んでいる。

その左脇に、かわいくデフォルメされた子供と思しき龍が「INFORMATION」と書かれたプラカードをくわえている。

今夜は、DJ タザイ Dazaiなる人物が主催する「テキサス・ナイト」というイベントが行われるようだ。実力派のDJが集まるらしい。更に目玉企画として、DJ タイシヨウ Dazaiと、現在注目のヒップホップアーティスト・Thai: Showによるコラボレーションが見られるという。しかもこのイベントは来週半ばまで行われる。

純「ほう。こりゃ面白そうだな」

少し値が張るチケット代を支払い、店の中へ。

内装も、どこか中国の匂いを感じさせるものになっている。

まず目に入ったのがコインロッカー。ここに荷物を預けることが可能。しかも1回100円とかなりお得。

そこから更に奥へ行くとバーカウンターがあり、ここで飲み物を注文できる。

周りにはいくつかテーブル席が設けてあり、そこに腰掛けて頼んだ飲み物を飲めるほか、店内の各所に設置されている立食パーティーで使うテーブルでも飲むことができる。しかし、実際はみんなそれ

それぞれでも好きな場所で飲んでいる状態である。

バーカウンターを右に折れると階段が見える。ライブショーケースなどが行われるフロアへ降りる10段ほどの階段と、それを見下ろせるギャラリー用通路へ上がる階段に分かれている。

その通路はフロアを囲むように造られており、まるで学校の体育館に似ている。

ジンジャーエールを注文した（アルコール類は任務中なので避けた）俊作と純は、上のギャラリー用通路からフロアを見下ろすことにした。

すでにフロアでは、実力派のDJが腕をふるっていた。客も楽しそうに、DJが流す音楽にあわせて踊っている。

しかし、まだ目玉企画まで時間があるせいか、客の数はさほど多くない。

さりげなく、ざっと店内を見回す俊作と純。
佐知絵及び彼女に関係する人物の姿はない。

今日は来ないのだろうか？

いや、来るだろう。

千里も米本も同じことを言った。

俊作と純がほぼ同時刻に、まったく接点のない2人にそれぞれ聞き込みを行い、その2人から同じような情報を得ることができた。

何の偶然だろう。

あり得ない話ではないが、あまり聞かない話である。そしてその偶然は、俊作と純に、「出現する確率が高いなら、もしかしたら今日“RYU-JIN”で遭遇できるのではないか？」という期待を抱かせた。

なんか、羽村佐知絵と遭遇できそうな気がする　こんな思いが俊作と純の頭から離れなかった。特にこれといった根拠はなかったのだが。

それにしても、店内に流れる音楽が心地よい。仕事を忘れてしまいうそうだ。

と、突然、雑に歪んだ騒音がそれをかき消した。

俊作「　!？」

純「なんだ？」

バーカウンターの方から聞こえてくる。

よくよく耳を傾ければ、騒音ではない。声だ。それも若い男性の。

バーカウンターの前で若い男性が5〜6人、バカでかい声で会話しているのだ。

純「ちっ……やかましいヤツらだ」

純が舌打ちをする。

一方の俊作は、会話の中心にいる男に注目していた。

俊作「…おい純、顔を見られないようにサングラスか何かしとけ」
純「え？　どうして？」

俊作「あの連中の中に、ギャル男だかホストだかわからんヤツがいるだろ？」

俊作は、会話の中心にいる、髪をライトブラウンに染めた男を指差した。

純「ああ…あのジーンズに黒のスーツジャケットを着たヤツか？」

俊作「そうだ」

純「そいつがどうかしたのか？」

俊作は、その男に見覚えがあった。

俊作「あの男は、羽村佐知絵の彼氏だ」

純「えっ？」

純は目を見開いて俊作の方向に振り返った。

純「彼氏って、お前の会社まで怒鳴り込んできたっていう……？」

俊作「ああ。まさか羽村より先にヤツと遭遇するとはな」

俊作と純が抱いた期待は、少しずつ確信へと変わりつつある。

佐知絵の彼氏と名乗る、あのホスト風の男がここに現われたのだ。

佐知絵は今日、ここに来る。

ホスト風の男は「黒野」と呼ばれており、連中の中心格であることは誰の目から見ても明らかだった。

それにしても、話し声が非常にうるさい。フロアで踊っていた客の一部が不快感を露にしている。

俊作と純はサングラスで素顔を隠し（更に俊作はニット帽もかぶったらしい）、創からもらった携帯電話型マルチデジタルカメラをセツトした。

純「二手に分かれよう。同じようなカッコをした2人が揃ってケイタイいじってりゃ怪しまれるかもしれん」

俊作「そうだな。オレが反対側の通路へ回ろう」

純「よし、そうしてくれ。オレが連中全員の顔を写真撮影する。俊作は動画の撮影に専念してくれ」

俊作「わかった」

俊作は気配を殺しながら反対側の通路へ回った。

撮影開始。

依然として、連中の話し声はポリウムダウンする気配がない。会話の内容も、ただの世間話だ。

粘ること約10分。

連中の一人がこんなことを黒野に尋ねた。

「黒野、今日は彼女来ないの？」

俊作と純の意識が更に集中する。

黒野「ああ、もうじき来るよ」

俊作「！」

佐知絵が来る！

何か事件について重要な証言が聞けるかもしれない。

黒野の仲間が問い返す。

「でも大丈夫なのか？ 黒野の彼女って、会社の先輩にセクハラされたのがシヨックで会社休んだらしいじゃん」

俊作「ぐ……」

無意識のうちに、俊作のカメラを握る力が強くなる。

黒野「まあ、リハビリってヤツだ。いつまでも引きこもりのヒッキーちゃんってわけにもいかないしな」

「何が“ヒッキーちゃん”だ」と、俊作は思った。今すぐにも黒野をぶっ飛ばしてやりたかった。

「さすが黒野さん！ 優しいっすね！」
別の、後輩らしき仲間が単純に感心している。

黒野「当然だ。傷ついた彼女の心をケアするのはオレの役割なんだからな！」

黒野は得意気な顔をした。

「おお、言うねえ」
周りもはやしたてる。

俊作は思った。

俊作「野郎……そんなでかい口叩いてられんのも今のうちだぞ。調子にのってんじゃねーぞ、このクソガキめが。オレの無実が明らかになるのは時間の問題。その時は秒殺してやるから覚悟しとけよな」

黒野「おーし、んじゃフロアの方へ行こうぜ！」

黒野たちがドリンクを片手にフロアへ移動した。

反対側の通路にいた純がメールを送ってきた。

『バーカウンターの人に連中のことを聞いてみる。お前は引き続き撮影を続けてくれ』

すかさず俊作は、向こう側の純に『了解』とアイコンタクトを送った。純もそれを確認し、親指を立てて答える。

純「すみません、ジンジャーエールもう一杯」

バーカウンターに移動した純は、プラスチック製のカップを差し出した。

デトロイト・ピストンズのキャップをかぶった、三十路ぐらいの男性スタッフが愛想よく応対する。

会話の切り口として、純はその男性に「バスケットが好きなんですか？」と尋ねてみた。

すると、「たまに観る程度だ」という返答が来た。

バスケットの話題は途切れたが、そこからスポーツの話を少しだけしたため、うまく会話の糸口を見つけることができた。

そこで初めて、黒野たちのことを聞いてみる。

純「なんか、さっきの連中やかましいっすね。よくここに来るんですか？」

男性「そうですねえ、最近ちよくちよく来ますよ」

純「最近？ 前からいたわけじゃないんだ？ それにしちゃあずいぶん態度がでかいつつーか、マナーがなってないっつーか」

男性「…あ、確か初めて来たのは半年近く前……『ゴールデンウィークぐらいだったかな。ここの常連で“サチエちゃん”って子がいるんですけどね」

純「…！」

“サチエちゃん” 羽村佐知絵のことだな。

男性「最初はサチエちゃんが連れてきたんですよ。“彼氏の紹介だ”って言ってるね」

純「へえ、やりますねえ」

男性「もうそりゃあラブラブでしたね」

純「あらあら」

男性「そのうち彼も1人で来るようになって、気づいたら仲間を引き連れてたって感じですね」

純「いつもああやって騒いでるんですか？」

男性「はい。正直ちよつと迷惑してまして」

そう言つて、男性スタッフは苦笑した。

当然だろう。あんなに騒がれたら、誰だって不快になる。

男性「でも、彼女にしては珍しいなあ」

純「何がですか？」

男性「いや、あの子理想が高いのか派手好きなのかわからないんですけど、付き合う男はそれなりに地位や名誉がある感じの人なんですよ。一流の商社マンだったり、モデルだったり……。今回みたいな人は初めてですね」

純「やっぱ一般人のほうがよくなつたんじゃないですか？」

不意に、男性スタッフがカウンターから身を乗り出して顔を純に近づけた。

男性「一般人ついても、あんな半分チンピラみたいな人ですよ？ ビックリしちゃいました」

チンピラ……か。この男性は内心、黒野をかなり迷惑がっているな。しかし純は、あえて次のような質問を試してみた。

純「チンピラって、あの人一流ホストか何かじゃないんですか？」

男性「違いますよ。まあ、確かに以前はホストをやってたみたいなんですがね、今はどんな仕事してるのかもよくわかりません」

純「いや、でもチンピラは少し言い過ぎなんじゃない？」

男性「あなた、この店に来るの初めてみたいだから教えますけどね、

あの連中、店を半分私物化してるんですよ」

純「……と言いますと？」

男性「大音量で騒ぐのはさっきも言いましたよね。それを注意しようものなら、因縁つけたり、ひどい時は人目につかない場所へ連れていって暴力をふるったりしてるらしいんです」

純「そりゃひでえな」

男性「それだけじゃありません。その日のDJが気に入らないと、ブーイングを飛ばすどころか物を投げつけたりもするんです。こないだなんか勝手にVIP席を陣取るうとしましてね。さすがにその時はスタッフ全員で説得して止めましたよ」

純「……やりたい放題つすね。でも、それなら何で出禁（出入り禁止）にしないんですか？」

男性「情けない話なんですけど……復讐が怖いんです。これは噂ですが、あの連中って前に原宿のあるクラブとトラブルを起こしたことがあるらしいんですよ。聞いた話だと、今みたいな彼らの迷惑行為を店側が注意したのが事の発端だったみたいで。そしたらそのクラブ、どうなったと思います？」

純「……さあ」

男性「なんでも、営業停止に追い込まれたそうなんです」

純「えっ、何で？ そんなことあり得るんですか？」

男性「詳しいことはわかりません。普通はあり得ないと思いますよ。だけど現実起こった以上、他人事には思えないじゃないですか。ウチは、有名な方がよくいらっしやる所です。“ここが好きだから”と言って来てくださる方もいます。へたに揉めて、店を潰したくないんですよ」

純「……」

純は、何も言えなくなっていました。

男性「……あっ」

しばらく沈黙が続いた後、男性スタッフが何かに気づいて声をあげた。男性スタッフは入り口の方向を見ている。純も、つられてこちらを振り向く。

入り口のほうから、女性が歩いてくる。

派手目だが、見覚えのある女だ。

純は、ハツとした。

純（まさか　　）

男性「ああ、サチエちゃん」

羽村佐知絵だ。

羽村佐知絵が現れた。

佐知絵「あら、こんにちは」

佐知絵は笑顔であいさつすると、まっすぐバーカウンターまで歩いて来た。

佐知絵「カシスオレンジもらえますか？」

男性スタッフは手早くカシスオレンジを作り、スッとカウンターの向こうにいる佐知絵に差し出した。

佐知絵「どうも。ところで黒野くんは？」

男性「もう来てますよ。フロアにいるんじゃないかな」

佐知絵「そう。どうも」

佐知絵はニコリと微笑んだ。そして、カシスオレンジをチビチビ飲みながらフロアへ下りていった。

俊作が言う通り、人懐っこいがどこか媚びたような感じのする笑顔だ。

純「…あんな子が常識知らずの無法者と付き合うとはねえ」

ボソツと、純が男性スタッフに言う。

彼は、再び苦笑いを浮かべた。

男性「…そうですね。ちよつと男を見る目つてのを疑っちゃいましたよ」

俊作は、いつも会社で見ていたのとは違う姿の佐知絵を、何も考えず画像に収めた。

プライベートなので多少服装が派手になるのは当然だとしても、ここまでイメージが変わるなんて。会社の人間が見たら驚くだろうな。

フロアに下りた佐知絵は、黒野たちを見つけると笑顔を浮かべながら駆け寄る。

黒野の取り巻きが、「大丈夫か？」と口を揃えて言う。

佐知絵「大丈夫だよ。心配かけてごめんね。会社も週明けから復帰する」

俊作「！！」

「よかったね」と歓声が起こる中、俊作は無心になって携帯電話を操作した。そして佐知絵が週明けから職場復帰する旨のメールを、バーカウンターにいる純に送信した。

俊作は更にマルチカメラによる録画を続ける。

佐知絵「ねえ黒野くん、次の月曜なんだけどお、あたしの会社の友達連れて来てもいい？ 長いこと休んじゃったから、お詫びが

したいのオ」

俊作「うげ……」

俊作は、ひいてしまった。

この女、彼氏の前だとこんな猫なで声になるのか。

傍から見るとかえって気色悪い。

黒野「おう、いいぜ！」

佐知絵「ホント？ やった！」

佐知絵は胸の前で両手を合わせる仕草をして喜んだ。

俊作は絶句していた。

佐知絵も佐知絵なら、黒野も黒野だ。

こんな連中のために職を失った自分が情けない。しかし、だからといって泣き寝入りするのはイヤだ。早いところ真相を明らかにせねば。

純「よし、月曜の晩もう一度RYU・JINへ行くぞ。昼間は勤務中の羽村を徹底マークだ」

帰り道、車の中で純がそう言った。

俊作「黒野って野郎のこと調べとく必要があるな。少なくともどんな人間なのかがわかる」

純「ああ、そうだな」

とにかく、次に2人がとるべき行動が決まった。

18・クラブ「RYU・JIN」(後書き)

佐知絵、ついに職場復帰！
本格的な調査開始だ！

19・月曜日、給湯室にて（前書き）

羽村佐知絵、ついに職場復帰…！

19・月曜日、給湯室にて

月曜日。

俊作が株式会社マグナムコンピュータを解雇されて、3営業日が過ぎた。

営業部では、“俊作によるセクハラ被害”で休職していた佐知絵が復帰した。

出社するなり、法人営業二課の社員に「ご迷惑をおかけしました」と詫びて回る佐知絵。

高根伸子が出社したのは、佐知絵が、課長を含めた社員全員にお詫びをし終えて、末広真智子と雑談していた時だった。

伸子「羽村さん……！」

伸子は、しばらく佐知絵の様子をじっと見ていた。

「もう大丈夫なの？」と気遣う真智子に対し、笑顔で「大丈夫だよ」と応える佐知絵。

そう、あの自慢の笑顔だ。

信じられない。

伸子は納得がいかなかった。

彼氏がいたというのも初耳だったが、何よりも俊作をセクハラで訴

えたことに驚いた。

彼女の目から見ても、佐知絵は俊作をイヤがっているようには思えなかった。

以前、俊作が笹倉に顧客を取り上げられた時なんか、「柴田さん頑張ってくださいね」と言っていたではないか。

前にも述べたが、伸子は入社当時から俊作とは仲がよかった。4年以上も一緒にいれば、彼がどんな人間かということぐらいはわかる。俊作も健全な男性だ。セクハラ行為なんてするはずがない。確実にない。

絶対に何かの間違いだ。

伸子はそう確信していた。

その時、伸子の背後で声高に挨拶する者がいた。

笹倉だ。

笹倉が、まるで雨上がりの空みたいにスッキリした顔つきでオフィスに入ってきた。

その足どりは軽く、スキップしているようにも見えた。

法人営業一課の社員が、覇気があるともないともいえない朝の挨拶を返す。

笹倉は颯爽と、そんな課員の脇をすり抜けて課長席に着いた。

この男も露骨である。

俊作の解雇がそんなに嬉しいのだろうか。そうに違いない。

現に笹倉は、常日頃から俊作に対して嫌がらせをしたり、罵倒もいえる言動を繰り返したりしていた。それにあの時 俊作が解雇された時も、笹倉はイヤミなほどのイヤらしい薄ら笑いを浮かべていた。

笹倉が俊作を嫌っているのは明らかであった。

……いや、嫌っているというよりは、笹倉が俊作の存在そのものを否定したといったほうが適切なのかもしれない。

伸子に理由はわからない。もしかしたら生理的に受け付けられないのかもしれない。

しかし、どんな理由があつたとしても、笹倉の言動や行動はゆき過ぎだ。社会人として、それ以前に人としてやってはならないことである。もしやっつけてしまえば、人間的レベルの低さを露呈してしまうことになる。

どうも気に入らない。

仕事の合間に一息つこうと、給湯室へコーヒーをいれに行く伸子。

給湯室には先客が2人いた。

真智子と梨乃だ。

彼女たちは給湯室で雑談をしていた。

話の雰囲気から察するに、どうやら誰かの噂話をしているようだ。会話を夢中なのか、自然と声が大きくなり、給湯室の外まで聞こえてくる。

梨乃「ホント、信じらんないよねえ」

真智子「そうだよねえ。まさか柴田さんがセクハラするなんて」

梨乃「佐知絵もかわいそうに」

真智子「いくら佐知絵がかわいいからって、セクハラはないよねえ」

梨乃「うんうん。いったい何を勘違いしたんだか」

真智子「なんか、前に柴田さんが笹倉課長にユーザー取られてへこんでるところを励ましたことがあるんだって」

梨乃「ああ、それが。それを勘違いしたのね」

真智子「単純そうだもんね、あの人」

俊作のことだ。

伸子の胸に、何やらキリキリしたものが引っ掛かる。

彼女たちはすっかり佐知絵の言うことを信じてしまっている。この2人は佐知絵とは入社時から仲がよかったので、信じてしまうのもわからないわけではないが、それでもやはり伸子にとっては不快なものだった。

伸子が給湯室の前まで来た時、ちょうど梨乃と目が合った。

一瞬、梨乃が気まずそうな顔をした。真智子もそれを察して平然を取り繕うとしている。

梨乃「あっ、こ、ここ使います?」

梨乃の声が1オクターブ上がっている。明らかに慌てている様子だ。しかし伸子は落ち着いた表情で受け返す。

伸子「うん。もう大丈夫かな?」

梨乃「は、はい。どうぞッ」

真智子「ウチらもうコーヒーいれ終わってたんで」

真智子と梨乃はそそくさと給湯室を立ち去った。

そんな2人の後ろ姿を、伸子は思い切り不愉快そうな顔つきで睨みつけていた。

伸子「…だから柴田くんはやってないっつーの」

伸子が小声でその言葉を発したのと同時に、藤堂部長が給湯室へやって来た。

藤堂「高根さん、なんか機嫌が悪そうだな」

伸子「ぶ、部長！」

今度は伸子が慌てふためいてしまった。パツチリとした大きな瞳が更に開かれたようにも見えた。

藤堂は、俊作が解雇された翌日に出張から戻った。

戻るやいなや、彼は人事部に呼び出された。

そこで俊作が解雇されたことを聞いてシヨックを隠せずにいた。

合わせて、“今回はいち社員の不祥事なので、後で検討するが、もしかしたら人事評価に影響してくる可能性があるということを中心に留めておいてほしい”と告げられた。

会社という組織にいる以上、部下の責任は上司の責任にもなっていくのがルールである。

それはずいぶん前から認識していたが、いざ自分がその立場になると、やはり辛いものがある。しかも、ここまで事が重大なのは初めてだった。

しかし、彼も伸子同様、まさか俊作がセクハラなんてするはずがないと信じていた。

それと同時に、“もし自分がもう少し早く出張から戻っていれば、

かわいい部下を、仲間を助けることができたかもしれない”と悔やんでいた。

藤堂「柴田への処遇が納得いかないのか？」

伸子「……ええ」

ややトーンダウンしたものの、伸子は力強くハッキリと返事した。

藤堂「オレもあれにはビックリしたよ。まさか柴田が急に解雇されるなんて……」

藤堂はインスタントコーヒーの容器を手を取った。

伸子「あたし、セクハラなんてウソだと思います。彼はそんなことするような人じゃありません」

藤堂「オレもそう思う。何でそうなったのか不思議なぐらいだ。確か被害を訴えたのは法人営業二課の羽村さんだったな？」

伸子「はい。でも、彼女、柴田くんをイヤがってる感じは全然なかったですよ？」

藤堂「見る限り、仕事でも柴田が羽村さんにちよっかい出したりしてる様子もなかったな」

伸子「でも、訴えられたっていうことは、そうじゃなかったってことになりますよね……」

実は、伸子や他の社員たちには俊作の解雇について詳しい内容が発表されず、“柴田俊作が羽村佐知絵にセクハラ行為をはたらいて解雇されたようだ”という大雑把な情報だけが出回っていた。

藤堂「あの子、いったい何を考えてんだ」

伸子「わかりません。同じ女のあたしでも……」

藤堂「ところで、柴田とは連絡とってるのか？」

伸子「一応、何があったのか聞くためにメールは送ってるんですけど、返ってこなくて」

藤堂「あいつも何をやってんだ。連絡さえとれりゃ真相がわかるっ

てもんなんだけどなあ」

伸子「ええ。あたしも心配で……」

2人はしばらく沈黙していた。

その後、藤堂が何かに気付き、口を開いた。

藤堂「そっぴや、柴田がクビになってから笹倉は人事に呼び出され
たか？」

伸子「いえ、呼び出されていなかったと思いますけど……」

藤堂「そっぴか……」

伸子「どうかしたんですか？」

藤堂「今回の一件がいち社員の不祥事として処理されるなら、当然
上司も責任を負うことになる。オレは人事に呼ばれた。笹倉だけ何
もないってのは、ちよつと変じゃないか？」

伸子「そう言われてみれば……。ちなみに部長はその時何て言われ
たんです？」

藤堂「“人事部で検討してみますが、もしかしたらあなたの人事評
価に関わってくるかもしれないので、そのつもりでいてください”
だつてさ」

伸子「じゃあ、笹倉課長も同様のことを言われてるはずですよ」

藤堂「ああ。そっぴやなけりやおかしい」

伸子「あたし、その辺人事に聞いてみます！」

藤堂「いや、オレがいくよ」

実を言うと、藤堂が人事から評価云々の話をされた時は、俊作解雇
のショックが大きすぎて笹倉のことを聞き忘れていたのだった。

伸子「えっ？　しかし、部長は忙しいんじゃ……」

藤堂「気にすんなつて。それより、キミには女同士で話し合つべき

相手がいるはずだ」

マグカップにお湯を注ぎながら、藤堂は伸子に向かってはにかむ。

伸子「……あ、羽村さんですか？」

藤堂「そうだ。彼女にも事情を聞いたく必要があるだろ」

伸子「そうですね。わかりました」

いれたてのコーヒーにミルクを加えながら、藤堂に対して微笑みを返す伸子。

藤堂「じゃ、通常業務に支障を来さない程度に頼むよ」

藤堂は伸子より先に給湯室から立ち去ろうとした。

伸子「藤堂部長」

藤堂の背後から、伸子が呼び止める。

藤堂が「何だ？」と振り返る。

伸子「ありがとうございます！」

爽やかな表情で、伸子は軽く頭を下げた。

藤堂「よせよ照れ臭いなあ。まだ始まったばかりじゃねえか。そういうのは全て事が済んでから言うモンだぜ」

伸子「あっ、すいません」

伸子は恥ずかしそうに笑ってごまかした。

藤堂「まったく……」

クスツと笑った後で、藤堂は温かいコーヒーが入ったマグカップを手に、自分の席へ戻っていった。

伸子は今、ものすごく藤堂に感謝したい気持ちでいっぱいだった。

やはり彼は人の上に立てる器を持ちあわせている。

藤堂部長は、みんなが仕事に行き詰った時はいつもこうやって元気づけてくれる。

営業は辛い仕事だと思う。

“ノルマ”に追い立てられる毎日。

態度の悪い客がいても、原則的には感情をむき出しにしてはいけない。

自然とストレスもたまる。

しかし、きつと俊作も藤堂部長のバックアップがあったからこそ今まで頑張ってきたのだろう。

営業の辛さを知っている藤堂部長だからこそ、部下に対してこういった気遣いができるのだ。

人間が大きい。

みんなから慕われるのも納得がいく。

今の笹倉課長とは雲泥の差だ。

なんだか、伸子に活力が湧いてきた。

いち早く事の真相を掴む必要がある。

何とかして佐知絵と2人きりで話すチャンスを作らなければ。

そのチャンスは意外と早く、その日の夜に訪れた。

20・伸子の聴取

時刻は午後7時をまわっていた。

伸子は、自分の席で頬杖をつきながらパソコンの画面と睨み合っていた。

ふと、何気なく藤堂の席をちらっと眺めてみる。

藤堂部長は、まだ会議から戻っていない。

やはり部長ともなると、忙しさが何倍にもなるのだろう。

頬杖をついたまま「ふうっ」と短くため息を吐くと、伸子は再び画面に向き直った。

来週初めのミーティングで使う資料を作成していた伸子は、作業に一応の区切りがいたので、残りを翌日に回して帰宅することにした。

伸子が帰りの支度をしていると、喫煙室から戻ってきた会田が話し掛けてきた。

伸子「会田さん」

会田「もう帰るの？」

伸子「はい。キリのいいところまでいったんで。会田さんは帰らないんですか？」

会田「うん。もうちょっとやっついていこうかなと思う」

伸子「そうですか。あまり遅くならないでくださいね」

会田「ああ、ありがとう」

伸子はバッグを手に取った。

会田「そうだ、高根さん」

踵かかを返そうとした伸子の足が止まる。

会田「あれから柴田とは連絡とってんの？」

この質問は今日2度目だ。

伸子「……メールは送ってるんです。でも返事がなくて」

会田「……そうか。あいつも、メールできるような精神状態じゃないのかな」

伸子「わかりません。元気でいてくれたらいいんですけどね……」

会田「そうだな。でも事が事だけに、今は元気でいるのは難しいだろうけど」

伸子はため息をついた。

伸子「ねえ、会田さん」

会田「ん？」

伸子「やっぱり、人事の決定は覆らないんですか？」

会田「え……？」

伸子「柴田くん、ホントにもう戻って来れないんですか？」

会田「……」

会田は答えることができなかった。自分の力ではどうにもならないからだ。

伸子「……すいません。何でもないです。それじゃ、お先に失礼します」

伸子は軽く会釈すると、逃げるようにオフィスを後にした。

きつと、会田は伸子の背中を見つめながら、ただ無言で立ち尽くしていただろう。しかし伸子は無性に気まずくなり、それを見ることなくエントランスホールへと向かった。

何であんなこと聞いたんだろう。

会田に聞いたところで、どうなるわけでもないのはわかっていたはずだ。

会社の決定は納得いかない。

やはり不満なのだ。

どうにかして俊作の無実を晴らしたい。

さっきはそんな思いが強く表れてしまった。

あまり感情を先走らせてしまうと、うまくいくものも失敗しかねない。

不意に、少しだけヒンヤリとした風が伸子を包む。

会田に対する無茶な質問からいろんな考えを巡らせているうちに、いつの間にか会社の外へ出ていたようだ。

入社してから、こんなことは初めてだ。

オフィスからどうやって会社の外まで出てきたか、覚えていないくらいだ。

伸子は、何気なく株式会社マグナムコンピュータの自社ビルを振り

返った。

地上12階建てのそのビルは、改めて見ると高い。

そういえば、かつて俊作が“恵比寿ガーデンプレイスからこのビルを肉眼で確認できた”と言ったことがあった。

恵比寿ガーデンプレイスタワー内にある会社へ営業で行った時に見たそうなのだが、本当だろうか？
今度確かめてみよう。

伸子は正面に向き直り、駅に向かって歩き出した。

が、すぐに足を止めた。

佐知絵がいた。

佐知絵が、会社のはす向かいにあるコンビニエンスストアから出てくるのが見えたのだ。

チャンスだ。

まさかこんなにも早くチャンスが訪れるとは。

伸子は、渋谷駅方面へ黙々と歩き出そうとしている佐知絵の後を追った。

周りは仕事帰りのビジネスマンやOLでいっぱいだったが、伸子は一瞬たりとも佐知絵の姿を見失わなかった。

その甲斐あつてか、すぐに追いつくことができた。

伸子「羽村さん！」

名前を呼ばれて振り返った佐知絵の顔は、その目つきのみ驚きと気まずさがごちゃごちゃに入り混じっていた。

佐知絵「高根さん……」

吐く息に絡めたような声で応える佐知絵。

音量は極めて小さい。

伸子「お疲れ様。帰るタイミングが一緒だったんだね」

佐知絵「…そうみたいです」

佐知絵は急いで愛想笑いを作った。

明らかに伸子を警戒している。

まずは当たり障りのない話題から。

伸子「今日、雨降らなかつたね。今朝の予報だと降るって言ってたんだけど」

佐知絵「なんかそうみたいです」

伸子「一応、折りたたみ傘を持ってきたんだけど、必要なかつたね」

佐知絵「そうなんです」

伸子「ねえ、駅まで一緒に行かない？ どうせ方向同じでしょ？」

佐知絵「あ、はい。別にいいですけど」

佐知絵は、受け答えも事務的で、伸子をまいてしまいたいと言わんばかりの速足で駅の方へ歩く。

伸子も、佐知絵を見失ってなるものかと言わんばかりの速足でついていく。

伸子「あれ？ 急いでるみたいだけど、この後何か予定でもあるの？」

佐知絵「……ええ、まあ」

佐知絵は少しだけムツとした。

これで伸子は確信した。

佐知絵は自分を避けたがっている。その理由も、なんとなくわかる。“場の空気を読む”のが、人としての心得だというのは重々承知している。しかしここは、あえてそれに従ってはならない。少々胸が痛むのを我慢し、伸子はいよいよ核心に迫ろうとした。

伸子「ああ、予定あったのね。じゃあゆっくり話してるヒマもないか」

佐知絵「すみません」

そう言いながら、佐知絵はバッグに手を忍ばせた。おそらく携帯電話を取り出そうとしたのだろう。

だが、伸子は佐知絵にそんな余裕さえ与えなかった。

伸子「……もしかして、彼氏かな？」

佐知絵の動きが、ピタリと、体ごと止まる。

同時に、彼女の表情も一気に曇っていく。

伸子「聞いたよ。つき合ってる人がいるんだってね」

佐知絵「…はい、いますよ。知らなかつたんですか？」

伸子「うん……今回のことで初めて知った」

佐知絵「今回のこと？」

伸子「柴田くんのことよ。噂になってるの。“羽村さんが柴田くんにセクハラされて、彼氏が抗議しに来た”って」

佐知絵「……」

ここで、筆者はひとつ言い忘れていたことがあるのをお詫びしたい。

前話で、今回の一件について、伸子たちには“柴田俊作が羽村佐知絵にセクハラをして解雇されたようだ”という情報しか流れなかったと述べたが、実は併せて“佐知絵の彼氏が会社へ抗議をしに現れた”という情報も流れていた。しかし、依然としてセクハラ疑惑の詳細はふせられたままである。

伸子「ねえ羽村さん、教えて。柴田くんと何があつたの？」

佐知絵「何……って、知つての通り、柴田さんからセクハラされたんですけど」

伸子「そうなの……でもね、あたしには信じられないんだ。柴田くんとは同期で、入社時から一緒だったけど、そんなことするような人じゃない。だから、あなたとの間にセクハラ以外で何かあったんじゃないかって思つて」

佐知絵「別に……セクハラ以外には何もありませんよ」

伸子「ホントに？」

佐知絵「……ええ」

佐知絵は、じつと伸子の目を見た。

伸子も、それを観察するように見据える。

伸子「じゃあ聞くけど、柴田くんはあなたにどんなセクハラ行為をしたの？」

佐知絵「はあ？」

佐知絵の眉がアーチ状につり上がる。おそらく“イラッ”ときたの

だろう。

伸子「だって、訴えるぐらいなんだから、柴田くんのセクハラ行為は相当なモノだったってことになるよね？ あたしが見た限り、彼はセクハラだと思われるようなことはしてなかった。あなたも彼をイヤがつてるようには見えなかった」

佐知絵「……」

佐知絵は口を固く閉じ、目線を落とした。

伸子「あたし、どうしても納得いかないの。羽村さん、答えて。柴田くんと何があったの？ ついこないだまで仲は悪くなかったじゃない」

しかし、佐知絵は何も答えなかった。それどころか、伸子と視線すら合わせようとしない。

伸子「羽村さん……！」

「ちょっと高根さんッ！」

伸子が佐知絵に、今まさに詰め寄ろうとしたその時、背後から伸子を呼び止める声が響いてきた。

声の主は末広真智子だった。横には秋葉梨乃もいる。

真智子「高根さん！ 佐知絵に何してるんですか！？」

いかにも噴火寸前といった表情で、真智子が怒鳴る。

伸子「…柴田くんの一件がどうも納得いかないから、詳しく事情を聞こうとしただけよ」

真智子「それじゃあ、まるで警察の取り調べじゃないですか！」

伸子「いや、そんなつもりはないんだけど……」

真智子「現に佐知絵はイヤがつてますよ」

梨乃「この子は今日復帰したばかりなんです！ 事件を蒸し返すような真似はしないでください！」

伸子「蒸し返す？ あたしの中じゃまだ終わってないの。よく考えてみて。突然、何の前触れもなくふって湧いたような話だよ？ おかしくない？」

真智子「おかしくなんかありませんよ。事実、柴田さんは佐知絵にセクハラしたんですから」

伸子「でも、柴田さんと接してた時の羽村さんは迷惑そうな感じじゃなかった。それがいきなりセクハラで訴えるなんて、どう考えても納得いかないのよ」

真智子「だったら何だっというんですか？ 佐知絵が悪意を持って訴えたことだとも言いたいんですか？」

伸子「そこまで言っただけでしょ！」
つい、伸子は声を荒げてしまった。

真智子「言っただけじゃない！ あなた何様のつもりよ！ 被害者を悪者扱いしようとするなんて！」

狐のような真智子の細長い目が見えない怪光線を放ち、伸子を一瞬だけ金縛りにした。思わず伸子は次の言葉が出なくなってしまった。

伸子は、横目でチラリと佐知絵を見た。

佐知絵は黙り込んだままうつむいている。

間髪入れず、梨乃が一步前へ歩み出た。

梨乃「とにかく、佐知絵をそっとしてあげてください」

言うつと、真智子と梨乃は伸子に頭を下げることにせよせずに佐知絵を連れて、まるでバケモノから逃げるかのようにして渋谷駅の方へ歩

き去って行ってしまった。

独り取り残され、その場に立ち尽くす伸子。

自分は、ただ真実が知りたかっただけなのに……。

失敗だ。

詳しいことが何ひとつ聞けなかった。

羽村佐知絵は、本当に俊作からセクハラをされたのだろうか？
その疑問だけが伸子の中で大きくなっていく。

しかし、佐知絵は明らかに伸子を警戒し、避けようとしている。
おそらく俊作とは同期であるうえに仲良しだからだろう。

自分にセクハラをした人間と繋がりがあから、なんとなくイヤな
のではないか。

これでは事情を聞くにも聞けない。
こんな時はどうすればよいのだろう。

独り思案する伸子の身体を、だんだんと深まりつつある、秋の冷たい
夜風がむなしく吹き抜けていった。

20・伸子の聴取（後書き）

正面からぶつかってもダメなら……どつする伸子？

21・新宿ダイナー・見え始めた片鱗

佐知絵の聴取に失敗し呆然と立ち尽くす伸子を、遠くから見つめる男が2人ほどいた。

俊作と純である。

佐知絵を尾行するため、マグナムコンピュータ本社前で待ち伏せしていたのだ。

俊作「……まったく羽村のヤツ、いつちよまえに被害者ツラしやがってこないだクラブで見せてた顔とまるつきり正反对じゃねーか」

純「会社に来てからイヤな思い出がフラッシュバックすることもあんだろ。まあ羽村の場合は芝居だろうがな」

俊作「よし、羽村佐知絵を追うぞ」

俊作は踵を返そうとした。

しかし純に肩を掴まれ、前に進むことができない。

俊作「何だよ？」

純「羽村ならオレ独りで追う」

俊作「あ？ 何言ってるんだよ。オレも行くって」

純「お前はここに残れ」

俊作「しかし」

純は、俊作の肩を掴む手に2割ほど力を上乗せした。

俊作をじっと見据えて純が言う。

純「お前、彼女からのメールを返信してないらしいな」

俊作「！ どうしてそれを？」

俊作が動揺する。

純「あの子が藤堂って人と話してんのを聞いた」

実は、伸子が給湯室で藤堂と話している時、純はその付近を掃除していたのだ。

純「ありやお前のことかなり心配してんぞ。それなら、お前があの子の前に出ていって一言“オレは大丈夫だぜ”なんて言ってみてやるべきじゃない？」

俊作「う、うむ……」

純「とりあえず彼女を安心させてやれよ。もしかしたら、これをきっかけに愛が芽生えるかもしんねーぞ？」

そう言つて純はいたずらに笑つた。

俊作「バツ…バカなこと言つてんじゃねえ！」

俊作が再び動揺する。今度は赤面のおまけつきだ。

純「とにかくだ。俊作はのぶちゃんと一緒にいる」

俊作「“のぶちゃん”って！」

純「Do you understand? わかった」

俊作「わ、わかつたよ…」

純「よし。ただし、声をかけるのは会社から離れた場所にしろよ。

今話しかければ、笹倉に見つかる可能性がある。そうなったら彼女を足掛かりにこっちの動きがばれるかもしれねえ」

俊作「ばれたら、調査が難航する」

純「そうだ。気をつける」

「何かあつたら連絡しろ」と言い残し、純は佐知絵の後を追つた。

さて、どうやって伸子に声をかけるか。

俊作は考えながら、とぼとぼと駅へ向かう伸子の後に続いて歩き出した。

渋谷を出るまでは話しかけないほうがいいだろう。

確か、伸子は中野区で独り暮らしをしていたはずだ。

俊作自身は板橋区在住。

俊作「…よし」

俊作はジャケットのポケットから携帯電話を取り出した。
メール作成画面を開く。
宛先は伸子。

『返事遅くなつてごめん。
オレは大丈夫だよ。』

ところでいきなりなんだけど、今からメシでも食いに行かない？
腹減つたよ』

このようなメールを送った。

2分後、伸子から返信あり。

『ホントいきなりだね（笑）
いいよー（＾Ｏ＾）
どこで食べる？』

よし。

『新宿にしよう。東南口で待ち合わせしない？』
これに対し伸子は、

『了解！
着いたらメールするね！』

これで自然に伸子に会えるぞ。

およそ30分後、俊作と伸子は新宿駅東南口前にある大型スクリーンの真下でおち会った。

今日の伸子は髪をアップにしている。少しクールに見える。

俊作を見つけるなり、伸子はとびきりの笑顔で彼を迎え入れた。

俊作「よう」

伸子「…もお、“よう”じゃないってば。連絡もよこさないで何やってんのよ！心配したんだよ？」

伸子は胸の内にたまっていたモヤモヤを一気に吐き出すかのように言った。しかし、それでも彼女の顔は心なしか嬉しそうに見えた。

俊作「ああ、すまなかつた。会社辞めたからヒマになったわけじゃないんだよ」

伸子「え？何よ、それ？」

俊作「後で話すよ。それより早くメシ行こうぜ。腹減ってんだろ？」

伸子「……それはあなたでしょ、柴ちゃん」

俊作と伸子は、以前のように楽しくおしゃべりしながら歩き出した。

帰りのことを考え、駅に近いコジヤレた定食屋に入ることにした。

伸子「……それで、柴田くんは会社辞めてから何してんの？」

さつき俊作が「後で話す」と言った話題を、伸子が再び持ち出した。

俊作「ああ……」

俊作は、お冷やを一口飲んだ。

俊作「実はさ、事の真相を探ってたんだよ」

伸子「えっ、マジで？」

少し伸子の声が大きくなる。

俊作「しっ！声が大きい！誰に聞かれるかわかんねーんだぞ」

伸子「あ、ごめん」

俊作「……オレの親友が探偵やっててな。そいつと組んで事件を追ってる」

伸子「へえー、そうなのお。じゃあ、柴ちゃんも今は探偵さん？」

俊作「んー……まあ、そういうことになるな」

伸子「すごいねー。ふふふっ」

伸子は子供っぽく笑った。

俊作「何で笑うんだよ？」

伸子「いやね、今の話聞いたらあたし、なんか嬉しくなっちゃったのよ」

俊作「へ？ 嬉しい？」

俊作の声が、頭の上から抜けていった。

伸子「だって、いきなりクビだって言われて、あんなに激しい怒りを見せた柴田くんがこの3日間、なーんにも音沙汰なかったんだよ？ それが“実は自ら反撃に出ることにしました”なんて聞いたら、嬉しくなっちゃうでしょ」

俊作「……まあ、それもそうだな」

伸子「あたしもあの仕打ちは納得いかないの。柴ちゃんが何にもしてなかったら、あたしが会社を訴えちゃおうかって思ったぐらいよ」

俊作「…そうだったんだ。そいつは頼もしいな」

伸子「ちよつと、他人事みたいに言わないでよ。自分のことじゃん」

俊作「わかつてる。そこまで思ってくれてたから、ちよつと驚いただけだよ」

伸子「もう……長い付き合いじゃない。柴ちゃんがセクハラなんてするような人じゃないってわかつてるから心配だったのよ？ あたしだけじゃなくて、藤堂部長も心配してたし」

俊作「藤堂さんも？」

伸子「うん。部長も今回のことを不審に思ってるよ」

俊作「そうか……」

伸子、米本、そして藤堂。

みんなに迷惑をかけたのか。

俊作は、少しばかり罪の意識を感じた。

伸子「それに部長は、人事から呼び出されたみたい」

俊作「え？ 何で？」

伸子「自分の部署の社員が起こした不祥事”ってことらしいわ。

“何らかの影響があるかもしれない”って言われたんだって」

俊作「マジ？ じゃあ笹倉も同じように人事から呼び出されたのか？」

伸子「ううん。課長は呼び出されなかったみたい」

俊作「ああ？ 何だそれ？」

伸子「ね？ おかしくない？ 課長のほうが近くで柴ちゃんを見てるはずなのに」

俊作は考えた。

自分の“不祥事”を人事に報告したのも笹倉だった。

その報告もでたらめで、俊作にとって不利なものであったことは間違いない。

そして、笹倉だけがお咎めなし、という人事の対応。責任をとらせる順番が違っただろう。

この二つが、何か1本の糸でつながっているような気がしてきた。

笹倉は、人事部の誰かと関係している？

こんな推論が、俊作の中に浮かび上がる。

そういえば、藤堂には以前俊作の顧客返還に協力してもらったことがある。笹倉からすれば面白くない。同時に、藤堂は俊作の味方だ

とみなしてしまうだろう。」

それを踏まえれば、藤堂だけ人事から呼び出されたのも説明がつく。

俊作「…おそらく、人事にヤツの仲間がいるんだろうな」

伸子「ああ……その可能性はあるね。それを割り出せば、一気に真相に近付けられるかも」

俊作「そうだな」

伸子「でも、どうやってやるの?」

俊作「人事には米本がいるだろ? あいつにも協力してくれるよう頼んである。米本ならうまくやってくれるさ」

伸子「米本くんも?」

俊作「ああ。あいつが人事部にいたことが、こっちにとっちゃ好都合だぜ」

伸子「そうだね。情報収集しやすい所にいるんだもんね」

ああ、と俊作が頷く。

伸子が水を飲む。

ちょうどそのタイミングで、俊作と伸子の注文した料理が同時に運ばれてきた。

俊作「…さて、食うか!」

待ちかねたのか、俊作の顔が幸せそうな色に一瞬で染まった。

伸子「うん! いただきまーす!」

伸子も給食を目の前にした小学生のように無邪気な笑顔を浮かべた。

羽村佐知絵は、末広真智子と秋葉梨乃を連れてクラブ「RYU-J」

IN」へ入っていった。

つかず離れずの距離でその後を追う純。

ここに来るまで、彼女たちが話したことは全て録音している。

会社を急に休んで迷惑をかけたので、そのお詫びに佐知絵が真智子と梨乃を連れて来たらしい。チケットとドリンクの料金は佐知絵のおごりである。

そういえば、彼女は先日黒野にそんなこと言っていたな。

ということは、当然事件のことが話題に上る可能性が高い。

純は、サングラスの位置を直した。

佐知絵たちがバーカウンターに立つ。

ドリンクを注文している際に、純はサッとギャラリ専用通路へと駆け上がる。

ざっと、フロア全体を見回してみる。

客の入りは前回来た時より気持ち多めか。SFテイストな黄色いレゾのサングラスをした青年がターンテーブルを自在に操っている。その前で、好きに踊ってみたり、足でリズムをとってみたり、客が各々のやり方で楽しんでいる。

黒野はまだ来ていなかった。これは来るまで待つしかない。

純は、タバコに火をつけた。

ふう、と一息ついてから、再度フロアを見下ろした。

佐知絵たちがフロアへおりてきた。さりげなく録音の準備をする純。

梨乃「ホントにおごってもらっちゃっていいの？」

佐知絵「いいよ！ 2人には心配かけちゃったし」

真智子「そんな、心配だなんて…。気にしないでいいのよ」

梨乃「あたしが電話しても出なかったのはさすがに心配したけど、元気になってよかったよ」

純「電話…？」

そういえば、前に梨乃を尾行した時、彼女は途中で電話をしていた。

もしかしたら、梨乃は佐知絵の身を案じて電話をかけたのかもしれない。

純「……わりと友達思いなのかもしれないね、秋葉梨乃って子は」

真智子「その点に関してはあたしも心配だった」

佐知絵「ごめんね、2人とも」

梨乃「ホントだよお」

真智子「まあ、梨乃が心配性なのわかってるでしょ？ もう心配かけちゃあダメよ！」

佐知絵「……うん」

佐知絵は小さく頷いた。

真智子「…まあいいわ。今日は楽しもうよ！ 梨乃もいいよね？」

梨乃「うん！」

梨乃の顔が、まるで霧が晴れたように明るくなった。

純は思う。

もし、これが佐知絵の策略（計画したのは彼女だけではないが）だとわかったら、真智子と梨乃はどう思うだろう。佐知絵は、自分を

心配してくれている同期の友人を騙していることに気づいているのか。そういう後ろめたさがまったくくないのなら、いよいよこの女は「どうしようもないカス」だ。

そんな考え事をしてしていると、大音量で騒ぐ男の声が入り口のほうから響いてきた。

この下品な騒ぎ方は、あの男しかない。

黒野だ。

21・新宿ディナー・見え始めた片鱗（後書き）

何日かぶりに再会した俊作と伸子。

一方、純は再びクラブ「RYU・JINN」へと向かう。

22・「RYU・JIN」 Again (前書き)

再び「RYU・JIN」へ単身乗り込んだ純だが……

我が物顔で歩いてくる黒野。

佐知絵「あつ、黒野くうーん！」

佐知絵も黒野に気づくと、他には目もくれずにそちらへ駆け寄った。黒野「おお、来てたのか」

佐知絵「うん。今来たばかりだけどね。それよりね、こないだ話した会社の友達連れて来たの！」

黒野「おつ、どこにいるんだ？」

佐知絵「こつちだよ！」

佐知絵は黒野の腕を引っ張りながらフロアへおりていった。

そんな佐知絵の顔を見て、純は思う。

まあ、なんともイキイキした顔つきなこと。果たしてそれは本音がらくるものなのだろうか？

真智子と梨乃がいる場所に戻った佐知絵は、黒野と横一例に並んだ。佐知絵「紹介するね。あたしの彼氏で、黒野くん」
まずは真智子と梨乃に黒野を紹介する佐知絵。

この時、純は、黒野を初めて見た時の真智子と梨乃の表情を動画に収めた。

この2人が黒野に対してどのような印象を持つかを見たかったのだ。

カメラ越しに見える真智子と梨乃は、意外そうな顔をしていた。それはほんの一瞬だけだったが、純には確かにそう見えた。

真智子「…どうも、末広です」

真智子が軽く会釈する。

黒野「おお。下の名前は？」

真智子「えっ？」

どこか馴れ馴れしい。

真智子も思わず聞き返した。

黒野「だから、“末広”何ていうのかなーって」

真智子「あ、ああ、ま、真智子です」

黒野「真智子ちゃんかあ。いい名前だ。……で、こっちの子は？」

梨乃が、背後から脅かされたように体をびくつかせる。

梨乃「あつ、あたしですか!？」

黒野「そうだよ」

梨乃「あつ、秋葉…梨乃です。よろしく……」

思い切り黒野を警戒している。よく観察すれば、真智子より梨乃のほうで黒野に対してあまり良い印象を抱いていないように見える。

黒野「そんなに恐がんなって。捕って食ったりしねーからさ」

黒野がニヤリと笑う。

梨乃「はい……」

梨乃にはどう映っただろうか。

純「……」

バーカウンターの男性が話していたことや真智子と梨乃の意外そうな態度から察するに、この黒野という男はもともと佐知絵が好むようなタイプではないようだ（“そもそもこんな偉そうな態度の男はモテないのでは？”なんてツツコミはさておき）。

佐知絵はどのようにして黒野と出会い、交際するまでに至ったのか。惚れたのはどちらか。告白したのはどちらか。次第に、その辺りを

探りたい欲求にかられる純なのであった。

「黒野さん、ごちそうさまっす！」

話が一段落したところで、後輩らしき取り巻きの1人が、ビールの入ったプラスチック製のコップを左手に近寄ってきた。

黒野「おお。いいってことよ」

佐知絵「あら、お酒おごったの？」

黒野「おう。もうすぐバイト代がガツポリ入るからな！今日は前祝いだ！」

黒野はバカに大きな声で笑った。

後輩「さすが黒野さんっすね！」

黒野「やっぱ人の上に立つ男はこうでなくちゃあな！」

誉められて、黒野は完全に得意気だ。

佐知絵「黒野くん」

突然、佐知絵が黒野を、話の輪から少し離れた所へ連れ出した。

純「む…？」

純は素早くマルチカメラを構えた。

佐知絵と黒野はピタリとくっつき、内緒話のように何やらこそこそと話をしている。

マルチカメラの高性能集音機能でも話し声を拾うことができるかどうか。

佐知絵「…バイトの………今日………らしいの……」

ダメか。

声が小さいのと周りの音楽で、断片的にしか聞き取れなかった。

しかし佐知絵は、「バイト」という言葉に反応していた。

黒野がちゃんとしたアルバイトをしているのであれば、わざわざ反応する必要などない。彼はいったいどんなアルバイトをしているのだろう。

次に純は、黒野の表情に注目してみた。

つい数分前から一転し、顔の至るところが曇っている。

純「あいつ、何を言われたんだ？」

黒野は、先程ビールの礼を言いに来た後輩に向かって、肩をいからせながらズカズカと歩いていった。後輩も何かと思い、ビールを保持のまま固まってしまった。

後輩「な、何すか？」

黒野「もうバイトのことは言うな」

後輩「え…？ 急に何で……」

黒野「いいから言うな！ 絶対にな。わかったな」

後輩「は…はい」

今度ははっきりと聞こえた。カメラもその声をすっかり拾った。

黒野は他人に言えないようなアルバイトをしている可能性が高い。

純「…ヤツのバイト先も調べてみるか」

純はカメラを作動させたまま、バーカウンターへおりていった。

カウンターの向こうでは、先日と同じ男性スタッフがドリンクを作っていた。

純「どうも」

男性「ああ、こないだの。今日も来てくださるなんて光栄ですよ」

純「いやいや。オレ、クラブとか来るの嫌いじゃないっすから。あ、ジンジャーエールください」

男性「ありがとうございます。少々お待ちくださいね」

男性スタッフは少し照れながら軽く頭を下げると、ジンジャーエールを素早く作り、純に差し出した。純も「どうも」と、ニコリと微笑んでそれを受け取った。

純「しかし、こないだのうるさい連中もまた来てますね」

今度は苦笑いをする男性スタッフ。

男性「ええ。迷惑さえかけなきゃいいんですがねえ」

純「まつたくです。何とかならないもんですかね」

男性「難しいと思いますよ。ヘタにつつけば逆に力でねじ伏せられますから。先日も話したでしょう、原宿のクラブのこと」

純「ああ、はいはい。あれもひどい話ですよ。秩序もへったくれもない」

男性「だから、このままにしておくのがいいんです」

純「うーん……」

純は、ジンジャーエールを一口飲んで考えた。

そして、そのコップを静かにテーブルの上に置いた。

純「…その、営業停止になった原宿のクラブですけど、何て名前の店なんすか？」

男性「“Harajuku 302 (サンマルニ)”です」

純「そのオーナー、今どこで何してんですか？」

男性「確か、道玄坂で知り合いの飲み屋を手伝ってるって聞きましたよ」

純「店の名前は？」

男性「“源”^{げん} っていう店です」

純「え……？」

「源」だつて？

純はこの名前に聞き覚えがあつた。

この「源」という店、実は前に俊作が佐知絵と食事をしたダイニングバーの名前だったのだ。

何の因果だろうか。

普段、日常生活においてこのような偶然に出くわすことは少なからずあるだろう。

しかし、今の純にとってこの偶然は、事件との関連性を疑わずにはいられない。

再び「源」へ行くつう。

いや、行かねばなるまい。

「源」というダイニングバーの名前は、純を一瞬にしてそう決断させた。

純「あの、その人の名前わかります？」

男性「名前ですか？ 秋池^{あきいけ}さんっていう方ですけど」

純「空き地？」

男性「いえ、四季の“秋”に“池”と書いて“秋池”です」
純「詳しいっすね」

男性「いや、この話は渋谷・原宿界隈の同業者の間じゃ有名ですからね。だけど、お兄さんこそこの話に食い付きますよね。どうしてそこまで知りたがるんです？」

純「…何ででしょうね。あの連中が傍若無人な行いをしてるって知ったからかな」

男性「…なるほど、そうですね」

それだけ言って、男性スタッフはうつむき加減で小さく微笑んだ。

純も、「フツ」と微笑み返した。

男性「では、ごゆっくり」

純「どうも」

純はドリンクを片手に、再びギャラリ―用通路へと上がっていった。そして、再び黒野や佐知絵の観察に入った。

しかし、黒野と佐知絵は間もなく退店していつてしまった。

このまま後を追うか？

いや、今日はやめておこう。深追いして気づかれたりしたら具合が悪い。

それよりも、今は「源」へ行こう。

秋池に会って、黒野とのトラブルについて詳しく話を聞くのだ。そうすれば、今回の事件につながる話も聞き出せるかもしれない。

純はカウンターの男性スタッフに「ごちそうさま」と一言告げると、その足で「源」へ向かった。

金髪頭の少年少女たちをかきわけて、坂から坂への小規模な移動。

小規模とはいえ、人が多いせいで移動に時間が少し余計にかかってしまう。

そして、渋谷は坂の多い街だと、つくづく感じさせられる。歩くだけで足腰が鍛えられそうだ。

そんなことを考えているうちに、純は「源」に到着した。

まさか、このような形で再度訪れることになるうとは。

ドアを開け、店内に入る。

「いらっしやいませ」と、20代前半の女性店員が出迎える。

女性店員「何名様ですか？」

純「あ、1人です」

純はカウンター席に通された。

ノンアルコールカクテルとつまみを数品頼むと、タバコに火を点けながら、和風の匂いがする店内を見渡した。

カップルで来るにはいい感じの店だ。

ちなみに、先日純の聞き込みに応じた店員はいないようだ。

数分後、ドリンクを運んできた男性店員に純は秋池について尋ねてみることにした。

男性店員「えっ、秋池ですか？ 確かにウチの店にいますけど…」
30歳前後の男性店員は、少し驚いた顔をして答えた。

男性店員「お知り合いか何かですか？」

純「ええ。ちよつとね。今日います？」

男性店員「すいません、今日は休みなんですよ」

純「そうですか…」

純は残念そうにうつむいた。

男性店員「何か用事でも…？」

純「あ、いや、ずーっと借りてたモノがあつたもんだから、食事が
てら返そうと思つてね。あ、明日は来ます？」

男性店員「え、ええ。来ると思いますよ」

こいつ、同僚のシフトをちゃんと把握しているのか？

慌てたような受け答えに、純は彼の、スタッフとしての資質に疑問
を抱いた。

しかし、目的の人物がいないのであればどうすることもできない。

純はドリンクとつまみを空にすると、手早く会計を済ませて店を出
た。

今日のところは引き返すでしょう。

純は、ジーンズのポケットに親指を引っかけるように突っ込んで歩
き出した。

微妙ではあるが、冷たい風が吹き始めた。

……こりゃ、もしかしたら雨でも降るかもしれないな。

純の足は自然と速度を上げていた。

歩きながら、純は携帯電話から創にメールを打つ。

彼は創と繋がりのある情報屋に、事件のきつかけとなった夜の目撃証言（俊作が佐知絵にセクハラ行為をしていないという証明）を得るために「源」を探らせていた。

もしかしたら秋池の情報を仕入れているかもしれない。とりあえず聞いてみるか。

創にメールをしたのはそういった理由からである。

しばらく経って、創から返事が来た。

秋池は現在29歳。

「Harajuku 302」が営業停止になった後、知人の紹介で「源」の手伝いをしているらしい。

住所は渋谷区神宮前。つまり原宿に住んでいるというわけだ。

どうやら、それ以上詳しいことはわかっていないようだ。

純は、まだ秋池の顔を知らない。

『秋池の写メとかある？』

創に、そうメールを返信した。

約10分後、創から返事が来た。

『こんな顔らしいよ』

メール本文の後に男性の顔を隠し撮りした画像が添付されてきた。

純「こ…こいつは…！」

そこには、以前純が「源」へ聞き込みに行った際に応対した男性が写っていた。

この男が秋池だったのだ。

22・「RYU・JIN」

Again(後書き)

意外なつながり発覚！

23・想定外の空振り（前書き）

目撃者とされる人物、秋池は意外にもちかくにいた…！

23・想定外の空振り

まさか、あの男が秋池だったとは。

秋池は純の聞き込みに対し、「何も覚えていない」と答えた。それも事務的というか、何かカンニングペーパーでも読んでいるかのようだ。

あんな態度では、その言動をどうしても不審に思ってしまう。

それに秋池は黒野とトラブルになっている。

ただの偶然だろうか？

何か、これらが何か一つの糸で繋がっているような気がする。いや、職業柄これは疑わなければならぬだろう。

純は、すかさず俊作に携帯電話からメールを送った。

『お楽しみのところすまないが、至急事務所に戻ってくれ！』

俊作「至急事務所に戻って、何かあったのか？」

伸子との食事の最中、俊作は自分の携帯電話とにらめっこをしていた。

伸子「どうかしたの？」

俊作「うん…至急事務所に戻ってさ」

伸子「ホントに？ 何かあったのかな？」

俊作「たぶんな。だからそろそろ行かないと」

伸子「…そうだね」

伸子は残念そうに言った。

俊作「また今度、ゆっくりメシ食おうぜ」

伸子「うん…」

2人は会計を済ませ、店を出た。

新宿駅を目指して歩く俊作と伸子。

ここで俊作は、伸子の口数が少なくなっていることに気づく。

俊作「どうした？ さっきから黙ったままだけど……」

伸子「え？ どうもしないよ？」

どこか動揺しているような感じだ。

俊作「……そうか」

伸子「……」

そうこうしているうちに、新宿駅の東南口が見えてきた。

やはり伸子は口数が少ない。もともとおしゃべりなほうではないが、ここまで静かだとどうしても気になってしまう。

俊作「なあ、やっぱりのぶちゃんさっきから変だぞ。どうしたんだよ？」

伸子は言い辛そうにしていたが、やがてゆっくりと口を開いた。

伸子「…柴ちゃん、あたしも一緒に行つていい？」

俊作「え？ 事務所にか？」

意外な発言に、俊作は目を丸くする。

伸子「…うん」

俊作「でも、事務所は板橋だし、のぶちゃんはかなり遠回りになる

ぞ？」

伸子「わかってる。だけど柴ちゃんの力になりたいの」

俊作「……」

伸子「笹倉課長は邪魔者がいなくなったとばかりにイキイキしてるし、末広さんや秋葉さんは羽村さんの言うことを信じてるのよ。何で柴ちゃんがそんな扱い受けなきゃいけないわけ？」

俊作「そりゃこっちが聞きてーよ。この事件でいちばんムカついてるのはオレなんだぜ」

伸子「あ、そうか。でも、腹が立ってるのは柴ちゃんだけじゃないからね！」

不意に、俊作はニコリと微笑んだ。

俊作「ありがとうよ、のぶちゃん」

伸子「え……？」

俊作「でも、わざわざ今すぐ事務所に来なくてもオレらを手伝うことはできる」

伸子「何をすればいいの？ 課長や羽村さんの様子を探るのかな？」

俊作「それもそうなんだけど……のぶちゃんには今日みたいに時々こっやってメシにつきあつてほしいんだ」

伸子「…え？」

俊作「今日、3日ぶりにのぶちゃんの顔を見たら、なんだか安心してね。だから、時々一緒にメシでも行けたらなあーって。それにたまには息抜きも必要だしな」

伸子は「プツ」と吹き出した。

伸子「なあに、そんなこと？ 別に改めて言わなくてもいいじゃん

！ ご飯ならいつでもつきあうよぉー！」

俊作「そうか！ あはは！」

伸子「柴ちゃんつたら変なのぉ。でも、事件のほうも手伝わせてもらうからね！」

俊作「ああ、わかった。何かあったら事務所へ来るといい」

伸子「うん！ 何かあったら連絡するね！」

山手線の池袋・上野方面行き電車に乗り込む俊作を見送ると、伸子もホームの反対側に滑り込んできた中央線各駅停車の三鷹行きに乗ろうとした。

その時、背後から伸子に声をかけてくる者がいた。

会田だった。

ビックリして足を止める伸子。

伸子「会田さん、こんな所で何やってるんですか？」

会田「学生時代の友達と西新宿で飲む約束をしててね。今から向かうんだ」

伸子「それにしてもちょっと遅くないですか？」

会田「ああ、そいつ今仕事が終わったみたいで。だからこんな時間になっちゃったってわけ」

伸子「そうなんですか……」

ホームに発車ベルとアナウンスが流れる。

伸子「あっ、すみません、そろそろ電車出ちゃうんで行きますね！」

会田「ああ、じゃあまた明日」

伸子「はい！ お疲れ様です！」

伸子は急いで電車に飛び乗った。

会田が軽く手を振ると同時に電車が動き出す。伸子も軽く会釈して応える。

会田「……」

ある程度電車がホームから離れていくのを見送ってから、会田は地下通路へ続く階段を降りていった。

事務所に戻った俊作は、純から調査報告を受けていた。

俊作「なるほど、てめえの店エ営業停止に追い込まれたクラブのオーナーがあのお店でね……。しかも、やったのはあの黒野って野郎か」
純「それに聞き込みでのあの態度……つつつても、お前は見てないがな。なーんか臭いと思うんだよな」

俊作「そうだな。何らかの関連性はあるそうだな。さっそくその秋池つてのを調べてみる必要があるな」

純「ああ。ちなみに今のところわかってんのは、ヤツが29歳ってことと原宿在住だっただけだ」

俊作「うーん……まだ情報が足りねーな」

純「ああ。すまないが、俊作は黒野と秋池の周辺を洗ってくれ。オレは引き続き社内の様子を探る。でも、夕方からだったら手を貸すよ」

俊作「わかった」

純は、タバコに火をつけた。

純「そーいやさ、ふと気になったんだけど、お前が羽村佐知絵と“源”に行った時、どっちから“あのお店に行こう”って言ったか覚えてるか？」

俊作「え……あ、確か彼女のほうからだっただな」

純「確かか？」

俊作「ああ。オレは“源”なんて店は知らなかったし……あ、これつてもしかして」

俊作が何かに気づいて純の顔を見る。

純「羽村佐知絵に何らかの意図があつてあのお店へお前を連れて行った可能性があるぞ。“たまたま知ってる店が近くにあるからそこを選んだ”ように見せかけてるけど、何か裏があるかもしれない。それを念頭において調査に臨むんだ」

俊作「そうだな。……あ、秋池の顔写真か何かあるか？ ターゲット

の顔がわからなくちゃあ、調査に出ても意味がねえ」

俊作は、まだ秋池の顔を知らなかった（…というより、もしかしたら見た顔かもしれないが名前と一致しないだけだといったほうが正確のような気もするが）。

純「ロッキーから送ってもらった写メがあるよ」

純は、秋池の画像を俊作の携帯電話にメールで送信した。

その画像とにらめっこをしながら俊作が言う。

俊作「ああー……確かにこんなヤツがいたなあ。こいつならオレと羽村のやりとりを見てるかもしれない」

純「だとしたら、“あの日のことは何も覚えてない”って言い張るのはおかしくなってるよな？」

俊作「そうだな。何か言えないわけでもあるのかねえ」

純「そう考えるのが妥当だろう。あと、黒野が言ってた“バイト”ってのも気になる。普通の仕事じゃねえと思うんだ」

俊作「よし、その辺ちゃんと聞き出してくるか」

純「頼むぞ。それと、わかってると思うけど、これからは敵と接触する可能性が高くなってくるだろう。無闇にケンカを仕掛けんよ」

俊作「わかってるよ。ガキじゃねーんだ。無用な戦闘は避けるさ」

純「Good！それでこそ大人の俊作だ」

俊作「…ふん。ああ、それから、高根さん……のぶちゃんも協力してくれるってよ」

純「…今、何で“のぶちゃん”って言い直した？」

俊作「…別に答える必要はねーだろ」

純「そうか、オレも気兼ねなく友達になることを許可するってんだな？ いやー、よかった。勝手に話しかけたりしたら俊作に怒られそうだなあ」

俊作「うるせーな！ 協力者が増えたんだぞ！ 素直に喜べよ！」

純「はっはっはっ！ I know, I know！ わかってるって！ 彼女はどう動くって言うてる？」

俊作「いや、たぶん羽村の様子を探るんじゃないか？」

純「あ、そう……」

純は、半分以下の長さになったタバコの煙を吐き出した。

純「まあいいや。明日直接会って話してみるよ、“のぶちゃん”に
俊作“のぶちゃん”だけ語調を強めんよ」

純「はっはっはっ！ いいじゃないの！」

俊作「……」

翌日、株式会社マグナムコンピュータ3階・人事部前。

藤堂営業部長は、人事部長の大成おおなりに会うためここを訪れていた。

昨日、藤堂は「柴田俊作の解雇に関して不明な点がいくつかある故、
早急な回答を願う」といった旨のメールを大成人事部長に送った。

しかし、一晩明けた今でも一向に返事がない。

返事が来ないのであれば直接聞きに行くべし。

藤堂が人事部を訪ねたのはそういった理由だった。

人事部のフロアへやって来た藤堂にいちばん早く気づいたのは米本
だった。

米本「藤堂営業部長！」

藤堂「ん…ああ、米本くんか」

米本は足音をたてずに藤堂のもとへ駆け寄った。

米本「聞きましたよ！ ウチの部長に柴田のことで抗議のメールを
送り付けたそうじゃないですか」

藤堂はビククリして目を丸くした。

藤堂「えっ？ 何でそれを知ってるんだ？」

米本「昨夜、高根さんがケータイのメールで教えてくれたんですよ」
藤堂「そうか、キミと高根さんは同期なんだよな」

米本「はい。ボクらは柴田の同期として、今回の事件は納得がいきません。だからあいつの無実を晴らしてやりたいんです」

藤堂「それはオレも同じだ。みんなで協力して柴田の無実を証明しよう」

米本「藤堂部長……」

藤堂「ところで、大成さんはいるかな？ そのメールの件で用事があるんだ」

米本「はい。いますけど、何かあつたんですか？」

藤堂「まあな。ありがとう」

藤堂は足早に大成人事部長のデスクへと向かった。

フロアのいちばん奥にあるデスクで、狸のような外見の中年男性が書類に目を通してている。

この中年男性が大成である。

藤堂「大成さん」

藤堂が名前を呼ぶと、何だろうといった感じで大成が顔を上げる。

大成「おおっ、これは藤堂さん」

体格に似合わず低音のきいた声だ。

しかし、少し驚いたようなリアクションだ。藤堂がなぜ、ここを訪れたのかわかっているのだろうか。

大成「藤堂さんが自分からここへ来るなんて珍しいですね。どうしたんですか？」

まさか、本当に知らない……？

藤堂「い、いや、どうしたって、メールの件ですよ」

大成「メール……？」

大成がぼかんとした顔をしている。

藤堂「ほら、柴田のことでメールしたじゃないですか」

大成「柴田……？ こないだ解雇した営業部の柴田ですか？」

藤堂「そうです」

メールボックスを確認しながら、大成が言う。

大成「……いや、そのようなメールは来てませんよ」

藤堂「え……？」

メールが来ていない？

藤堂は一瞬、思考回路がフリーズした。

おかしい。

確かに送信したはず。

藤堂「あつ、あの……ホントに来てないんですか？」

大成「ええ。いつ頃送られました？」

藤堂「昨日ですが」

大成は再度、自分のメールボックスを確認した。

大成「うーん……やっぱり来てないですねえ」

……そんなバカな。

藤堂の思考回路も、再度フリーズしていた。

更に、大成人事部長の言葉が藤堂に追い討ちをかける。

大成「でも、仮にメールが来ていたところで結果は同じだと思いますよ」

藤堂「は？」

大成「だいたい予想はつきます。“柴田の解雇を取り消せ”という内容で送られたんでしょう？」

藤堂「ええ、そうです」

大成「それは無理ですよ。既に決まったことですし、そもそも証拠まであがっているんですから。それとも、柴田の無実を証明するものが何かあるんですか？」

藤堂「いや、それはないんですけど……」

大成「うーん……残念ですが、それなら柴田の解雇は取り消せないですね……」

この時は何故か、これ以上藤堂の思考回路が働くことはなかった。

彼は、大人しく営業部へ戻るしかなかった。

23・想定外の空振り（後書き）

メール届かず！
送信ミスか？

24・藤堂の疑念

送ったはずのメールが届いていないのはなぜだ？

そんな疑問符をまとりつかせながら、藤堂は営業部のある5階へと戻ってきた。

ふと、前方に気配を感じて視線をそちらに移す。

笹倉だ。

笹倉が藤堂の前に立ちふさがっていた。

笹倉はこちらを見ている。明らかに何か言いたげだ。

藤堂「…笹倉、どうした？」

たまらず藤堂から話しかけた。

笹倉「どちらへ行かれてたんです？」

どうしてそんなことを聞いてくるのだろう。いつもなら気にする「とがないのに、なぜ今だけ？」

藤堂「な、何だいきなり？」

笹倉は「フツ」と鼻で笑ってみせた。

笹倉「答えなくてもわかりますよ。人事部に行ってたんでしょ？」

藤堂「！」

どうしてわかったのだ？

藤堂は言い返せなかった。

笹倉「やはりそうでしたか。まあ、おおかた柴田の件ってとこですかね」

藤堂「う……」

笹倉「今更騒いだって無駄ですよ。第一にあればもう処分が下ってるじゃありませんか」

藤堂「しかし、どう考えても納得のいかない部分がある」

笹倉「は？ 何を言ってるんですか？ もしかして、自分に責任が及ぶのを嫌がっているんじゃないでしょうね？」

藤堂「なっ！？ 何を根拠にそんなことを」

笹倉「部下の失態は上司が責任をとるのが社会の常識じゃないですか」

藤堂「オレは責任逃れしようなんて考えてねえ！ それに、責任をとらなきゃいけないのはお前だって同じことだろう！」

笹倉「私は柴田の直属の上司として、できるだけ社会的ダメージを少なくしようと配慮したつもりだったんですよ。それをあいつは自ら断ったんです。私が責任をとる必要はないはずですよ」

藤堂「断るのも当然だ。柴田だって納得がいかなかったはず。そもそもあいつは無実を訴えてるんだ」

笹倉「藤堂さん、あなたまでそんなこと言っんですか。柴田はクロです。決定的な証拠だってある」

藤堂「証拠？」

笹倉「柴田が羽村をホテルに連れ込もうとする写真ですよ。ご存知ありませんでした？」

藤堂「何だ、それは？ オレは知らんぞ」

笹倉「……でしょうね。事件発生時は出張中でしたからね」

どうして自分がいない時にこんな事件が起きてしまうのだ。藤堂の胸に改めて悔しさがこみあげる。自分が出張などに行っていないければ柴田俊作の解雇を防げたかもしれない。

藤堂「その写真はどこにあるんだ？」

笹倉「さあ。私は知りません」

たぶん笹倉は写真の持ち主を知っている。顔つきを見ればわかる。

笹倉「　　というか、どうしてそんなことを聞くんですか？　あなたには必要のないモノですよ」

藤堂「何故不要なのか、逆にこつちが聞きたいね。その“証拠写真”とやらを確かめたいと思うのは、部下の無実を信じる人間にとつて当たり前のことだぜ？」

笹倉「部長……わからない人ですねえ。柴田は現実にセクハラ行為などでクビになってるんですよ？　今、あなたがやるうとしていることは全て無駄なことなんです」

藤堂「……いや、無駄じゃないぞ。さつきも言つたろう。この事件には納得のいかない部分があるつてな」

笹倉「納得いかないなんて、そんな往生際の悪い」

藤堂「柴田はクビになったつていうけど、人事は柴田の言い分も聞いたのか？」

笹倉「それはわかりません。私は事実を報告しただけですから」

藤堂「……そもそも、オレたちには“柴田が羽村さんにセクハラ行為を働いて解雇された”という大雑把な内容しか知らされていない事実を報告するなら、人事よりオレにするのが先じゃないのか？」

笹倉「だから、藤堂さんが出張中だったからやむを得なかつたんですよ」

藤堂「じゃあ何でオレの出張中に事件を処理したんだ！　出張の後でもいいだろう！」

笹倉「それは、被害者の気持ちを考えた上で迅速に事態を收拾するためです」

藤堂「收拾できてねーだろがッ！　処分が一方的すぎる！　おかしいと思わなかつたのかよ！」

笹倉「いえ、まったく……」

笹倉は、さも当たり前のような顔をして答えた。

藤堂「……くそつ、何でこんな理不尽なことが当然のように起こるんだ。絶対におかしい」

藤堂は舌打ちをした。

笹倉「部長、もう過ぎたことですよ。あれこれ言うのはやめてください」

藤堂「だからこれはまだ過去形じゃねえつつつてんだろ……」

笹倉をにらみつける藤堂。

一方の笹倉はどこか勝ち誇ったかのような目をしている。

藤堂はその目を見て、ある一つの可能性に気づく。

藤堂「……まさか、お前何か変なこと企んじゃあいねえだろうな」

笹倉「……は？」

笹倉の目つきが嘲笑に変わる。

藤堂「お前は柴田を嫌ってた。だから“何とかして自分の視界から排除しよう”と画策した”なんて可能性もあるんじゃないかってな”

笹倉「……ふん、バカバカしい。笑えない冗談ですね。私が柴田を故意に追い出したとでもいうんですか」

藤堂「可能性の話だ。決めつけたわけじゃない」

笹倉「ふうー……」

笹倉は大きくため息を吐いた。そして、数秒の間ややうつむき加減のまま黙り込んだ後、ゆっくりと視線を下から上へ摺り上げた。

笹倉「とにかく、この件に関してはあまり首を突っ込まないほうがいいですよ。藤堂さんも処分されかねませんからね」

藤堂「構わんさ。かわいい部下の一大事に何もしないでいるほうがオレにとつちや罪だ」

笹倉は不適に笑った。

笹倉「臭いセリフですねえ。やはり、あなたはそう言うと思いますよ。でなけりゃ、人事部長に抗議のメールを送ったりしませんよね」

藤堂「！」

藤堂は、心の真つ芯が金縛りにあったような感覚に襲われた。

虚をつかれた、とでもいうのだろうか。

とにかくこの時、藤堂の思考回路が一時的に停止したのは間違いなかった。

何故、笹倉がメールのことを知っているのか。

藤堂が把握する限り、メールのことを知っているのは伸子だけだ。もちろん笹倉にはそのような話はしていない。

笹倉「驚いているようですね。まあ当然でしょう。ああ、“何でお前がそのことを知ってるんだ”といった質問は一切受け付けませんよ。答えるつもりはありませんから」

藤堂「……な…何故だ？ 何故答えようとしない？」

笹倉は、少しムツとして藤堂につめ寄った。

笹倉「私が答えたらあなたが何か得でもするんですか！？ 部長、もうヘタに事件を蒸し返さないでくださいよ！ いいですねッ！」

ものすごい剣幕でまくし立てると、笹倉は足早にその場を立ち去った。藤堂が呼び止めようとしたが遅かった。

それにしても、笹倉はどうやってメールのことを知ったのだろう。自分の席でメールを作成していた時にパソコンを覗いていた人間でもいればまだ合点がいく。しかし、あの時は誰にも覗かれていない。

それどころか席の周りには誰もいなかったはず。では、どうやって

伸子「部長ッ！」

藤堂「はっ!？」

伸子「どうかしたんですか？ ボーッと立ったままでしたよ」

どうやら、メールのことが気になっていたために伸子が呼んでいるのに気づかなかつたらしい。

藤堂「あ、ああ、すまん」

伸子「それと部長、今チラツと笹倉課長と言い合うのが見えただけですけど、何かあったんですか？」

藤堂「……あいつ、メールのことを知っていやがった」

伸子「えっ!？ どうしてですか？」

伸子も信じられなさそうな顔をした。当然である。

藤堂「わからん。今それを考えていた」

伸子「誰かにパソコンを覗かれたとか？」

藤堂「いや、それはない」

伸子「じゃあ……あたしたちの会話を盗み聞きされた……としか考えられないですよね」

藤堂「あの時、給湯室の近くに笹倉がいたってことか？」

伸子「ええ」

藤堂「あいつは確か自分の席にいたはずだ。盗み聞きは不可能だ」

言い切らないうちに、藤堂は突如「はっ」と顔を上げた。

藤堂「いや、間接的になら盗み聞きは可能だ」

伸子「？ どういうことですか？」

藤堂「あの“噂”がホントだったら、の話だな」

伸子「“噂”？」

藤堂は話し声をボリユームダウンさせた。

藤堂「ここから先はあまり大きな声じゃ言えない。誰に聞かれるかわからん。場所を変えよう」

その時、伸子は前日の晩に俊作から言われたことを思い出した。

伸子「それだったら、今夜一緒に柴田くんの所へ行きませんか？」

藤堂「柴田？ あいつと連絡とったのか？」

伸子「いえ、本人に会いました」

藤堂「ホントか？ 今、何やってんだ柴田は？」

伸子「ご心配なく。彼も無実を晴らすために闘ってますよ」

藤堂「そうか……」

藤堂は嬉しそうな顔をしている。

伸子「柴田くんは是非“噂”の話をしてあげてください」

藤堂「そうだな。ところで、柴田ん家^ちつて板橋だっけ？」

伸子「はい。でも、正確に言うと今夜行くのは彼の“転職先”です」

藤堂「…え？」

「おーっと、それから先は小声でもしやべらないほうがいいですよ」

藤堂が頭の上にクエスチョンマークを浮かべていると、物陰から、頭にバンダナを巻いた清掃員がよたよたと近づいてきた。

実は純のことだが、伸子と藤堂はまだ彼の顔を知らない。

藤堂「何だ？ 清掃員が何か用か？」

警戒する藤堂に対し、いつもの爽やかな笑顔で応対する純。

純「まあまあ、そう警戒しないでください。決して怪しいモンじゃないですから」

藤堂「だったら何者なのか答えてもらおうか」

純は辺りを見回した。

今のところ、自分たち以外に人の気配は感じない。

純「…盗み聞きされる危険性があるんで多くは話せませんが、今は

“柴田の連れ”とでも答えておきます」

藤堂「柴田の……？」

伸子「連れ……？ あ、もしかして……」

伸子は再び昨夜俊作と話した内容を思い出した。

純もそれに気づくと、「後でちゃんと自己紹介はするから今は黙っていてくれ」といったニュアンスのアイコンタクトを送った。

純「詳しいことは後で話します。業務終了後にこのビルの裏にある来訪者専用駐車場まで来てください」

伸子「うん。わかったわ」

純「よし。ただし、何食わぬ顔で来てくださいよ。挙動不審な態度は厳禁です」

藤堂「……わかった。あんたを信用しよう。裏の駐車場だな」

純「はい。よろしくお願いします。では、仕事がありますので、この辺で失礼します」

純は軽く一礼すると、清掃用具を抱えて階段から階下へ去っていった。

藤堂「あの清掃員は、いったい何者だ？ “柴田の連れ”って……」

伸子「大丈夫ですよ。彼は味方です」

藤堂「味方……か。まあ怪しいヤツじゃあなさそうだがな」

伸子は微笑んだ。

伸子「ここは彼の言う通りにしましょう！」

藤堂「そうだな。そうしよう」

藤堂も微笑み返した。

25・カフェ「鴨川家」(前書き)

秋池を張り込む俊作だが……

25・カフェ「鴨川家」

純と伸子たちが接触している頃、俊作は、秋池の自宅前を張り込んでいた。

秋池は原宿のマンションで一人暮らしをしていた。2階の角部屋であるため、張り込みをしやすい。

今のところ、特に動きはない。出勤まで外には出ないつもりだろうか。

俊作は腕時計を見た。

午前10時半を回ったばかりだ。

「源」の開店は午後5時。ここから徒歩で20〜30分、自転車で10〜20分といったところだろうか。開店準備も考慮して、遅くとも、おそらく午後3時半には家を出るのではないか。

しかし、それは「出勤まで一步も外出しない場合」だ。ちよつとした用事で出かける可能性もある。

もし秋池に会うなら、今すぐに会ったほうがいい。遅くなれば出勤時間と重なってしまうので相手にされなくなる。

先に黒野の身辺調査を行ってもよいのだが、ここは秋池に会うべきだと俊作は考えていた。

「源」で羽村佐知絵と食事をした時、秋池も店に出ていた。俊作も頭の片隅に記憶していた。そうになると、秋池は俊作と佐知絵の様子を見ているはずである。俊作は秋池に、黒野とのトラブルについて聞き出すのと同時に、自分の無実を証言してもらおうとしていたの

だ。

黒野ともめたことが原因で自分のクラブが営業停止になってしまったのであれば、彼に対して恨みの感情を抱いているはずだ。協力を得るのはそう難しくないだろう。

携帯メールを打つふりをしながら秋池が出て来るのを待つこと約30分。

やはり秋池は家から出て来ない。

これ以上の張り込みは近隣の住民に怪しまれる恐れがある。創お抱えの情報屋に替わってもらおう。

俊作は、いったん秋池の自宅前を離れた。

次に向かった先は、今は営業停止になっているクラブ「Harajuku 302」だ。黒野の身辺調査である。

今、そこへ行ったところで誰もいないのはわかっている。しかし、何らかの手がかりはあるはず。そう信じる俊作の足は自然と速くなっていた。

「Harajuku 302」は、秋池の自宅マンションからそう遠くない位置にあった。具体的にいえば、神宮前交差点から少し表参道方面へ進んだ所にある。

小さなセレクトショップやカフェなどが立ち並ぶ中に3階建ての小さな雑居ビルがある。

そのビルの脇に、地下へ降りる階段が見える。「Harajuku 302」はその先でひっそりと息を潜めている。

階段の上から、まずは店の外観を眺めてみた。

ここからだと、店のドアしか見えない。いたって普通の、どこにで

もありそうな出入口だ。

階段を降りてみる。

ホコリやチリがたまり放題かと思われたが、それほどではない。

ドアには、よく見ると豆電球で飾りつけられた、店名のロゴをあしらった看板が取り付けてあった。

だが、やはり静かである。生气というものがまったく感じられない。もちろんドアには鍵がかかっており、開けることはできない。

俊作は、しばらく辺りを見回してみた。特に荒らされた様子もない。

俊作「誰か、事情を知ってる人間に聞き込みでもしてみるか」

そう思って、ぐるりと回れ右をしようとした時だった。

「おい！」

階段の上から、俊作を乱暴に呼びつける者がいた。

ヒップホップ風の男が、じっと俊作を見下ろしている。見た感じ、歳の頃は21〜2ぐらいだろうか。

男「ここで何やってんだ！」

まるで不審者を発見した警官のように大声をあげる男。しかしそれでも、俊作は動じることなく男を見据えていた。

俊作「いや……久しぶりに通рикаかったら閉まってたから、どうしたんだろうと思ってな。閉店したの、ここ？」

当然ながら、何も知らないふりをして尋ねてみる。

男「……そのクラブ、今はやってない」

俊作「ああ、やっぱり閉店したんか。どうしたんだろう。何かあったのかな？」

男「お前には関係ない！ わかったらさっさと行け！」
それだけ言うと、男はどこかへ行ってしまった。

俊作「何だったんだあいつは……」
だが、場所を変えたほうがよいのは事実だ。この辺りに情報交換に適した場所はないか。俊作は再び歩き出した。

小さく網目のような道で構成された原宿の街並を、右に左に蛇行しながら明治通り方面へ進むこと約10分、俊作は前方に小さなカフェを発見した。

レトロな雰囲気、コジヤレた店だ。

近づいて、窓の外から店内の様子をさりげなくうかがう。

カウンターでは、30代半ばと思しき男性が棚の整理をしている。アメリカンカジジュアルがよく似合っていることから、わりとオシャシな人物なのだろう。

彼ならこの辺りの事情に詳しいのではないか。まずはここで情報収集するとしてよう。

俊作は、木製のドアを開けた。

男性店員「いらっしやいませ。空いているお席にどうぞ」

いちばん奥の席に腰掛ける俊作。
なんだか、温かい雰囲気のお店だ。俊作は、ごく自然にふう、と大きく息を吐き出した。

すぐさま、テーブルを拭いていた女性店員が歩み寄って来る。こちらには見た目、俊作より少し年下に見える。25歳前後といったところ

るか。女子アナにいそうな美形だ。

女性店員「ご注文はお決まりですか？」

物腰柔らかく尋ねてくる。俊作も自然と微笑む。

俊作「アイスコーヒーを」

女性店員「かしこまりました。少々お待ちください！」

女性店員は勢いよくカウンターに向き直った。

女性店員「お兄ちゃん！アイスコーヒーひとつ！」

男性店員「はいよお！」

俊作「お兄ちゃん？」

俊作は思わず甲高い声をあげた。

女性店員「はい。ウチら、兄妹でこのお店をやってるんです。マスターは兄で、あたしは従業員」

男性店員「そうそう。仲良し兄妹が温かく出迎えるアットホームなカフェ“鴨川家”といえば、この辺りじゃ有名なんですよ。お察しの通り、店名は我々兄妹の苗字からとりました」

なんだか、どこぞのお笑いコンビを連想しそうな店名である。

俊作「すみません、知りませんでした……」

男性店員（＝鴨川）「別に謝ることはないですよ。有名なのはこの界隈だけですから」

女性店員「オーバーだよ、お兄ちゃん」

鴨川「うるさいぞ、ヒナコ！」

「ヒナコ」とは、この妹の名前だろう。

ヒナコは「えへへ」と笑って、ヒナコはまたテーブルを拭き始めた。

鴨川「でもね、別に日本一有名なカフェにする気はないんです」

俊作「何故です？」

鴨川「地元の人々に愛される店でありたいんです。あ、自分ら生まれも育ちも原宿なんですよ。長いこと住んでると、やっぱり愛着が湧くでしょう？」

俊作「ええ、そうですね」

鴨川「そうになると、地元之恩返ししたくなつてね。思い切つてカフェを始めちゃいました」

マスターの鴨川は、照れ臭そうにうつむいた。

俊作「好きなんですネ、地元が」

鴨川「はい。好きです。ところで、お客さんは地元どこなんですか？」

俊作「板橋です。自分も、生まれてからずっと板橋区民なんですよ」
鴨川「そうなんですネ。なんか似てますネ、育ち方が」

俊作「あはは、そうですね」

俊作と鴨川が笑っていると、ヒナコがこちらを睨む。

ヒナコ「お兄ちゃん！ おしゃべりはいいから早くコーヒーいれてあげなよ。お客さんの喉が渴いちゃうでしょ！」

鴨川「はいはい、ただ今やりますよお〜！ すいませんねえお客さん。ちよつとしゃべりすぎました」

俊作「いいえ、構いませんよ」

1分ほど待つと、俊作の前に注文したアイスコーヒーが香ばしい香りと共に差し出された。

一口飲んでみる。

俊作「あつ、美味しい」

なんとも味わい深いコーヒーだ。

鴨川「でしょ？ ウチは豆といれ方にこだわりがあるんですよ。企業秘密だから言えませんがね」

鴨川は得意気な顔をして笑った。

ヒナコ「お兄ちゃん、調子にのらない！」

鴨川「のつてないよ。美味いって言うてくれたから喜んでるだけだよ」

ヒナコ「……もう。お兄ちゃんはいつもこうなんだから」

俊作「ははは…ホントに仲がいいんですね」

鴨川「あ、いや、お恥ずかしい」

もう一口、コーヒーを飲む俊作。

飲みながら、先程までの会話を頭の中で反芻する。

確か、この兄妹は生まれも育ちも原宿である。ということは、「Harajuku 302」について何か知っているかもしれない。よし、聞いてみるか。

俊作「あの、先程生まれも育ちも原宿だって仰いましたよね？ ちよっとお聞きたいことがあるんですが」

鴨川「何でしょう？ 自分が知ってる範囲内ならお答えしますよ」

俊作「……この近くに“Harajuku 302”ってあったじゃないですか」

鴨川「…！」

鴨川の表情が微妙に険しくなる。更に俊作の視界の端っこでは、ヒナコのテーブルを拭く手が止まっていた。

俊作「あそこ、閉店しちゃったんですか？」

鴨川「……いや、違います。営業停止みたいですよ」

何やら含みのある答え方だ。

俊作「営業停止？ どうしてですか？」

鴨川「それは……あの……」

鴨川は言葉を詰まらせた。

俊作「何か言えないような理由でも？」

鴨川「いやぁ……まぁ……」

鴨川が次の言葉を思索していると、背後でドアの開く音がした。新たに客が入ってきたのだ。

ヒナコ「いらっしやいませ」
最後まで発音しきらないうちに、ヒナコの言葉が途切れた。鴨川の表情も更に強張る。

客は男性2人組。

できることなら来店してほしくないタイプだということが、鴨川兄妹のリアクションからうかがえる。

しかし、2人組の片方は俊作も見覚えがあった。

それもそのはず。その男は先程出くわしたヒップホップ風の男だった。

「ちっ、また会ったか」と、俊作は心の中で舌打ちをした。

ヒナコ「う、ご注文は……」

ヒナコが恐る恐る近づく。

男「コーヒーだ」

ヒップホップ風の男が高圧的に吐き捨てる。

ヒナコ「お一つでよろしいですか？」

次の瞬間、もう1人の男が力いっぱいテーブルを叩いた。

硬直するヒナコ。

それを睨みつけるもう1人の男。マンガ「北斗の拳」に登場するジャッカルのようなゴツイ服装に加え、鼻にピアスをつけている。

ジャッカル男「てめーオレをシカトする気か！？ オレにもコーヒー持ってこいよー！」

ヒナコ「すっ、すいません！ かしこまりました！ ホットとアイ

スがありますが……」
ジャツカル男「アイスに決まってんだろが！ こっちゃん喉が渴いてんだよ！」
ヒナコ「ア…アイスですね。かしこまりました。少々お待ちください」
「
気まずそうにその場を退くヒナコ。俊作は横目でその様子を見ていた。

なんと横暴な態度なのだろう。いや、それ以前にあのようなガラの悪い連中が、しかも男2人組でカフェを訪れるなんてあまりないのでは……？

男たちがタバコに火をつけた。鴨川兄妹が注意しないところを見ると、この店は特に禁煙だというわけではないようだ。もっとも、鴨川兄妹が連中を恐がるあまり注意できないだけかもしれないが。

ヒップホップ風の男が、テーブルに灰皿が置かれていないことに気づき、ヒナコにそれを持って来るよう命令した。

その際、「タバコの灰がテーブルや床に落ちたから掃除しろ」とか「ガムシロップが少なくなっているから補充しろ」などと、ヒナコをまるでパシリのように扱った。

更に連中は、鴨川兄妹や店の文句を言い始めた。

仕事がトロい、態度がなつちやあいない、センスがない……等々、これでもかというほどの罵詈雑言を浴びせた。

さすがに、俊作もこれを黙って見ているわけにはいかなかった。

俊作「おい！ うるせーぞ！」

男たちの動きが止まる。

俊作は席を立った。

25・カフェ「鴨川家」(後書き)

先程の男と鉢合わせ！
これは偶然か？

26・「鴨川家」その2（前書き）

俊作の正義感が疼き出したか…？

26・「鴨川家」その2

俊作は席を立つと、即座に2人組の男を睨みつけた。

男たちの話し声も止まり、俊作に視線を集める。

俊作「さっきから聞いてりや、随分ひでえこと言ってるじゃねーか。この人たちは何もしてねーだろ」

ジャツカル男「あゝ？ なんだあてめーは！」

男「あ…お前はさっき“Harajuku 302”にいたヤツじやねえか」

俊作「ああ、また会うとは奇遇だな」

男「こんなトコで何やってんだよ！」

俊作「コーヒー飲んでただけど。しかしお前ら、マナーがなってねえな。人として恥ずかしいとは思わんのかね」

ジャツカル男「うるせーな！ こっちや客なんだよ！ 客が何しようとして勝手だろ！」

俊作「そーゆーのを今じゃ“モンスターカスタマー”っつーんだろうな。いくら客でも、てめえのワガママが通るなんて考えるのは大きな勘違いだ。客商売も“人づき合い”の一つ。マナーを守らなきゃお互いイライラしてしょうがねーだろが」

営業マンだった俊作だからこそ言える台詞だ。

ジャツカル男「なんだよてめー偉そうに！ やったるかあ！」

ジャツカル男が立ち上がり、俊作の胸ぐらを掴む。

俊作「…別にオレはお前らとやり合う気はねえよ」

いきりたつジャツカル男の殺気を、さらっといなす俊作。

同時に、ヒップホップ風の男も更にもう一步、俊作に詰め寄った。

男（以後ヒップホップ男）「一つ聞くけどよ、お前、ホントに通らずがりか？」

この男はいきなり何を言っている？
まさか自分の正体に気づいているのか？

俊作「どういう意味だ？」

こう切り返すのは当然の流れ。

ヒップホップ男「質問してんのはオレだ。勝手に聞き返すな」

俊作「何言ってるんだお前？ 質問の意図がわかんねーんだよ」

ヒップホップ男「だから、お前がホントにあのクラブの前をたまたま通りかかっただけかって聞いてんだよ」

ジャツカル男「さっさと答えろよ！」

ジャツカル男が、更に強く俊作の胸ぐらを掴みあげる。

俊作「おい、その手エ放してくんねえ？ しゃべりづらいんだけど」

ジャツカル男「うるせえっ！ てめーごちゃごちゃほざいてんじゃねえーっ！！」

ジャツカル男が両手で俊作の襟元を掴み、そのまま壁へ押しつけようとした。

だが、いつの間にかジャツカル男の視界はクルリと一回転していた。

ジャツカル男「？」

ジャツカル男の突進にあわせて、俊作が足払いを仕掛けていたのだ。床につけようとした右足を狙って払ったため、ジャツカル男は簡単に転ばされてしまった。

ヒップホップ男「てめえ！」

俊作「ふう…これでしゃべりやすくなった」

ジャツカル男「野郎……！」

ジャツカル男は拳を握りしめて立ち上がろうとした。

俊作「おい待てよ。オレは自分がしゃべりやすくなるように掴まれた手を振り払っただけだぜ？」

ジャツカル男「うるせえええーッ！！ てめーみてーなヤツがただの通りすぎりなわけがねえーッ！」

俊作「……やれやれ」

ジャツカル男は大振りの右フックを放った。

それをあえてよけず、左手でガードしながら相手の懐に飛び込む俊作。その流れからジャツカル男に組み付き、両方の腕で首をがっちりとロックした。

ムエタイやキックボクシングの「首相撲」である。

相手を掴んだまま、左足を軸にし、コンパスのように体を旋回させる俊作。面白いように引きずられるジャツカル男。

間髪入れず、俊作の大きな剣の切っ先のようなヒザ蹴りがみぞおちに突き刺さる。

ジャツカル男「おごお……っ……」

ジャツカル男の呼吸が、一瞬にして途切れた。

その場に崩れ落ちるジャツカル男。

俊作「あ、悪い悪い。条件反射だ。でもよ、“ただの通りすぎり”に手を出したお前らも悪いぞ」

ヒップホップ男「てめえ……何者だ！」

俊作「だから“ただの通りすぎり”だって。ちゃんと質問に答えた

ぜ。それより、ここに倒れてるヤツを早く連れて帰りなよ」

ヒップホップ男「……………」

やはり、本能的にこの男と戦えば勝ち目はないと感じていたのだろう。ヒップホップ男は、腹を抱えてうずくまるジャツカル男を抱き抱え、足速に退却していった。

俊作「まったく…何だったんだ、あいつらは」

何気なく振り替えると、鴨川兄妹が、口を無用心にあけたまま立ち尽くしていた。

俊作「……………あ、すみません、店の中で暴れてしまつて……………」

鴨川「……………あ……………いや、それはたいしたことなかったからいいんですけど……………お客さん、あなたは今の連中知ってるんですか？」

俊作「いえ、知りませんよ。誰なんですか？」

鴨川「やっぱり……………。ヤツら、“ロック・ボトム”のメンバーなんですよ」

俊作「ロック・ボトム？」

鴨川「この辺りじゃ有名な不良のチームで、アタマの黒野って男を筆頭にやりたい放題やらかす連中なんです」

俊作「黒野……………!?!」

黒野だと……………?

すると、さっきの2人組は黒野の仲間もしくは舎弟だということか。

俊作がこの名前に食い付かないわけがない。

鴨川「どうしました?もしかして黒野を知ってるのか……………?」

鴨川も、明らかに黒野の名前に反応した俊作の表情を見逃さなかった。

俊作「ええ…まあ」

しまった。

俊作は、つい本当のことを言ってしまった。

鴨川「ホントですか？ お友達か何かで……？」

俊作「いや、そんな平和的なモンじゃないですよ」

ヒナコ「じゃあ、何かあつたんですか……？」

俊作はしばらく考えた。

今更へたにごまかすのもおかしい。正直に事情を話そう。たぶんこの兄妹なら大丈夫だろう。

俊作「……実は今、わけあつて黒野のことを調べています。“H a r a j u k u 3 0 2” について聞いたのもそのためです」

鴨川「黒野を調べる？ へたにかぎ回るのは危険ですよ？」

俊作「承知の上です。それに、今さつき黒野の子分に手を出したんで、もはや安全とはいえないでしょう。あいつらはオレを怪しんでいた様子でしたし」

鴨川「……お客さん、あんた何者ですか？」

俊作「こういう者です」

俊作は、作りたての「探偵として」の名刺を鴨川に手渡した。

鴨川「探偵……ですか」

俊作「はい。黒野について何か知っていることはありますか？ 別にヤツのことじゃなくてもいいですが」

鴨川「……探偵さん、一つ忠告しますがね、あの黒野って男はとにかくヤバイヤツですよ。ここら一帯で乱暴狼藉傍若無人やりたい放題、例えるなら現代版芹沢鴨ってところですね。気に入らないことがあればすぐに暴れるし、ヤツに逆らうなど自殺行為に等しい！」

俊作「芹沢鴨か……うまい例え方しますね」

鴨川「そんな呑気なもんじゃないですって！ この辺りに店を構える者はみんな頭抱えてるんですから！ 探偵さんが知りたがってる

“Harajuku 302”だつて黒野のせいで営業できなくなつたんですよ!”

俊作「その話なら聞いたことがあります。なんでもオーナーと黒野がトラブルを起こしたとか」

鴨川「ええ。でも、まさか営業停止に追い込まれるなんて……オーナーの秋池さんがかわいそうだ」

俊作「何があつたんですか？」

鴨川「詳しいことはわかりません。連絡が急にとれなくなりましたから」

俊作「そうか……詳しくは本人に聞くしかないのか」

鴨川「そうですね……。我々も心配です。道玄坂で友人の店を手伝つているみたいなんですが……」

鴨川も大まかな情報しか知らないようだ。しかし、会話の内容からして、鴨川は秋池と付き合いがあると思われる。俊作は鴨川から秋池について聞き出すことにした。

俊作「ところで、マスターはその秋池さんと親しいようですね」

鴨川「はい。付き合いは長いですよ。もう6〜7年になるかな。でも、秋池さんがどうかしたんですか？」

俊作「…今、オレが追つてる事件に彼が関係してる可能性があるんです」

鴨川「えっ？ 秋池さんが？」

鴨川兄妹は目を丸くした。

ヒナコ「何かやつたんですか？ 強盗とか傷害とか……」

俊作「いえ、そうじゃありません。事件の“鍵”を握っているかもしれないんです」

ヒナコ「鍵……ですか」

鴨川「あービックリした。あの人が悪事など働くはずがないですからね」

秋池は、どうやら悪人ではないらしい。

俊作「もともと秋池さんって、どんな方なんですか？」

鴨川「いい人ですよ。感じがよくて気さくだし。あのクラブだって初めは秋池さんの人柄に惚れた人たちがいっぱいいたんですから」
俊作「へえ……」

鴨川「それにマメなんです。我々兄妹は毎年誕生日を祝ってもらってるんですよ。クラブの常連さんでも誕生日の人がいれば誕生日パーティーを開いたりしました。ちゃんと覚えてるんですよ、あの人マメな性格……か。

俊作「それはすごいですね。じゃあ、お客さんの顔なんか忘れることはないでしょうね」

鴨川「それはないです。“人の顔をしっかりと記憶できること”が秋池さんの特技ですから」

素晴らしい特技だ。是非とも営業職としてスカウトしたいくらいである。

俊作「ということは、1週間ぐらい前に来た客も当然覚えてますよね」

鴨川「もちろんです。秋池さんならまず忘れることはないと思います」

なるほど、そうになると「何も覚えていない」という発言はなおさら怪しくなってくるわけだ。どのような事情があるのだろうか。

鴨川「……だけど、やっぱり気になるなあ」

俊作「何がですか？」

鴨川「秋池さんですよ。いったいどんな事件に巻き込まれたんですか？ だってキーマンなんですよ？ 半年近く前から急に見かけなくなつた上に、探偵さんの事件に関係してるって聞いたら、やっぱり心配になっちゃいますよ」

ヒナコ「そうよ。ウチら、秋池さんにはお世話になつてるんです。

あの人が困ってるんだつたら力になりたい！ 探偵さん、秋池さんとの間に何があったか教えてくれませんか？」

一瞬、俊作は事情を話すか否か考えた。本当は部外者に詳細を教えるのはまずい。

しかし、この兄妹の目は少しも薄汚れてはいなかった。純粹に、秋池の身を案じている目だったのだ。

俊作「……別にオレと直接関係があるわけじゃないですよ」

そう付け加えて、俊作は自分に起こったことと秋池の関係を話した。

鴨川「……そうだったんですか。まさか探偵さんご自身が被害者だったとは……」

俊作「いや、ちゃんとした証拠をあげるまでは建前上加害者ですよ。不条理な話ですがね」

ヒナコ「でも、秋池さんがそんな最近のことをまったく覚えてないなんて、ウチらからしたらちよつと変ですね」

鴨川「ああ、確かに。特に記憶障害のような病気になったなんて話は聞いてないし、裏に何か事情があつてそんなことを言つてるとしか思えないですよ」

俊作「裏の事情……ですか」

鴨川「ええ。これは確かめてみないとわかりませんがね」

俊作「そうですね。早急に調べてみます」

鴨川「お願いします。我々も秋池さんが心配ですから。何かわかったらこちらからもご連絡いたします」

俊作「じゃあ、さつき渡した名刺に書いてある番号まで連絡ください」

鴨川「わかりました。この番号は探偵さんのケータイですか？」

俊作「はい。睡眠時以外は電話に出るようにします。どんな小さい

「ことでも構いません。何かわかったら連絡ください」

鴨川「わかりました。しかし、黒野のような輩が一般のOLさんと付き合っていたなんて驚きですね」

俊作「ホントですよ。世の中にはわからんこともあるもんですね」
俊作と鴨川は、そろって苦笑した。

苦笑しながら、俊作は鴨川に黒野の女性遍歴について尋ねてみることにした。

26・「鴨川家」その2（後書き）

黒野の女性遍歴とは？

27・忍び寄る影

俊作「あの、黒野って今までどんな女性と付き合ってきたんですか？」

鴨川「どんな女性と付き合ってきたかつて？」

鴨川はこの質問をまったく想定していなかったのか、思わず声が出たり返ってしまったりした。

俊作「はい。すごく気になりますよ」

鴨川「そうですね……自分も噂でしか聞かないから詳しくは知りませんがね、不良っぽい女性がほとんどだったらしいですよ。少なくともOLさんとはなかったんじゃないですかね」

俊作「不良っぽい女性ねえ……」

確かにそういうタイプのほうが納得できる。

鴨川「自分もたまに街で黒野が女性を連れて歩いてるのを見かけましたけど、見るたびに違う人なんですよね」

俊作「へえ、飽きっぽいんですかね？」

鴨川「いやあ、どうでしょうねえ。ヤツは相当な遊び好きらしいですから。実際、彼女かどうかも怪しいと思いますよ」

俊作「遊び好き……」

鴨川「ええ。夜な夜な街へくり出しているみたいです……」

鴨川は、黒野の夜遊びについて、自分が知っている限りの情報を俊作に伝えた。

それによれば、クラブやバー、キャバクラなど、繁華街にある店はだいたい網羅しており、毎晩子分を引き連れて現れるそうだ。また、それらのほとんどの店とは「顔見知り」であり、来店のたびにV I

P並みの待遇を受けるのだとか。これは先程鴨川が話した「傍若無人な振る舞い」によつて店側が黒野を恐がってしまったためだ。ちなみに、よく現れる街は新宿と原宿、それと渋谷らしい。

俊作「……なるほど。ということは、その出没スポットの中に秋池さんのクラブも含まれていたってことになりますね」

鴨川「そうですね」

俊作「しかしそこで気になるのは、金の出どころですよ。よく毎晩遊び歩く金があるな」って思いますよ。普段どんな仕事してるんですか？」

鴨川「さあ……わかりません。定職に就いていないのは確かですがね」

ヒナコ「…あ、あたし黒野が普段何をやってるか聞いたことありませんよ」

様子をうかがうように、ヒナコが話を切り出してきた。

俊作「ホントですか？」

ヒナコ「はい。確か」

俊作「しっ！」

ヒナコが話し始めようとした瞬間、突然俊作がそれを遮った。

俊作の顔つきが、一変して鋭くなっている。

わけがわからずおろおろするヒナコに俊作が言う。

俊作「外に誰がいる！」

ヒナコ「えっ……？」

鴨川「誰だろう……？」

鴨川は外の様子を見るために店の出入口へ行こうとした。

俊作「動かないで！ おそらく来客なんて穏やかなもんじゃない」
ヒナコ「それって、まさか……」

俊作「ロック・ボトムの連中でしょう。ちょっと確認してみます」

俊作は忍び足で窓辺に駆け寄り、物陰から外を覗き込んだ。

まず、視界に入ってきたのはジャッカル男だ。その隣には、長身で黒野同様ホストのような格好をした男が、逆立てた頭髪をいじりながらこちらの様子をつかがっていた。

更に俊作は、視線を左右にスライドさせてみた。

ジャッカル男と長身男とのちょうど両脇で、ヒップホップ男ともう1人、見慣れない男がその場をうろろろしていた。

見る限り、向こうは4人か。

おそらく目的は自分。

先程の仕返しだろう。それも人数を倍増させている。

俊作「やっぱりか……！」

ヒナコ「た…探偵さん？」

ヒナコ「見るからに不安そうな視線が俊作の背中に突き刺さる。」

俊作「…思った通り、店の外にさっきの連中がいます。それも更に仲間を連れてね」

ヒナコ「え……？」

俊作「まあ、おおかたオレにさっきの仕返しをしようってハラなんでしょう。やれやれ、しょうがねえな」

鴨川「探偵さん、どうするつもりですか？」

俊作「ヤツらを別の場所に誘導します」

鴨川「まさか、1人で連中全員を相手するつもりで……？」

俊作「まあ、そういうことになりますね」

鴨川「無茶な…！ 多勢に無勢ですよ!?」

俊作「大丈夫。なんとかありますよ」

鴨川「……」

俊作「そんなわけで、今日のところはこれで失礼します。何かあったら連絡ください」

鴨川「…わかりました」

ヒナコ「気をつけてくださいね!」

俊作「はい！ ありがとうございます。あ、それからコーヒーごちそうさまでした」

俊作はカウンターに向かって立っている鴨川の前に500円玉を差し出すと、軽く頭を下げて店を出ようとした。

退店の際に、鴨川が何か言いたげな顔をしているのを認識した。

鴨川「あの、お釣り……」

俊作は、優しく微笑んだ。

それだけで、鴨川の言葉がふっと途切れた。

俊作「余りの額はチップですよ、マスター。少ないですけどね」

言い残して、俊作は今度こそ店を出た。

俊作が手をかけたドアの向こうには、明らかに殺気を漂わせたゴロツキが4人、一斉にこちらを注視していた。

俊作は、表情ひとつ変えることなくそのゴロツキどもを一瞥する。

俊作「……何だ」

ジャッカル男「“何だ”じゃねえ！ 今度こそ覚悟しろよコラアッ

！」

俊作「何の覚悟だよ？」

ジャツカル男「とぼけんなあ！ マジ殺すぞてめえ！」

復讐心に燃えるジャツカル男を、「まあまあ」とあの長身男がなだめた。

ジャツカル男「瀬高さん」

どうやら、この長身男は瀬高という名前のようだ。

見たところ、この瀬高という男はグループの中でも上の立場にあるようだ。

瀬高「よお、あんたウチのモンをやってくれたんだって？」

俊作「え……？」

俊作はわざと、何のことかわからないといった顔をしてみせた。

しかし、瀬高は怒っていない。

瀬高「…悪い。質問が悪かったな。あんたさあ、こいつらの顔は覚えてるよな？ さっき会ったばつかだもんなあ？」

ジャツカル男とヒップホップ男を交互に指差しながら、瀬高が尋ねる。

俊作「……ああ」

さすがにここまでシラを切るわけにはいかない。

瀬高はまた髪の毛をいじり始めた。クセなのだろうか。

瀬高「こいつらがよお、さっきあんたにやられたっつってんだよ。それホントなの？」

俊作「……いや、そんなことはしてないぞ。現に2人ともピンピンしてんじゃねーか」

ジャツカル男「ふざけんなよ！ 呼吸が止まったんだぞ！」

瀬高「おいおい、話が食い違ってるんじゃない。ホントにやってねーのかよ？」

俊作「ホントだ」

ジャツカル男「オレにヒザ蹴りしたじゃねーかよ！」

俊作「ヒザ蹴り？ …… ああ、あれ？」

瀬高「“あれ？”じゃねーよ。やってんじゃないか！」

俊作「ちよつと待て。オレは別にぶちのめしちやいなえんだ。そいつが掴みかかってきたから、条件反射でヒザが出ちまったんだよ」

瀬高「あ、そう。こいつらが悪いってんだな？」

俊作「そうだな。そういうことになる」

瀬高「お前ら、こいつの言ってることはホントか？」

瀬高がジャツカル男とヒップホップ男を振り返った。

ジャツカル男「ちつ、違いますよ！」

ヒップホップ男「あいつ、見た目ではねないようにわざとボディを狙ったんすよ！」

俊作「は！？」

突然何を言い出すのだろうか。理解に苦しむ。

しかし、こいつらは人の言いぶんを聞こうとしない。もう何を言っても信じないだろう。ほぼ間違いなく瀬高たちは襲い掛かって来るだろう。

いや、それは事前にわかっていた。だから戦闘の心構えをしてあえて店から出てきたのだ。

瀬高がニヤニヤしながら近づいて来る。ジリジリと、一歩ずつ。

瀬高「そういうことだったかあ〜！ てめー何者だあ？ ボディを狙うとはずいぶん手慣れたるな」

俊作「名乗る必要はねえ」

瀬高「カツコつけんな。どうせ鴨川のヤツが“この街のために”雇

った用心棒ってとこだろう」
俊作「……！」

俊作は心の中で舌打ちをした。

この男、鴨川を知っている。しかし、瀬高が原宿界限でやりたい放題の連中である以上、それも有り得る。俊作は即座に納得した。

瀬高「だけど、用心棒とかいって生意気な真似しやがるよな。ウチのカシラが聞いたら何て言うかな」

ヒップホップ男「そーっすね！ ロック・ボトムに逆らうのがどういふことかわかってないみたいですからね！」

用心棒じゃないのに……。

俊作は心の中でツツコミを入れた。しかし、瀬高らに正体がばれていないだけマシである。

まあ、いいか。

俊作はそう思った。

俊作「ところでその2人（ヒップホップ男とジャッカル男）、お前らどうしてさつきこの店に来た？」

ヒップホップ男「ああ！？ 何でもいいじゃねーかよ！ コーヒー飲んじゃ悪いつてのわ！」

俊作「いや、悪くはない。ただ似つかわしくないと思っただけだ」
ヒップホップ男「ああー！？」

ジャッカル男「聞き捨てならねーなあ！」

俊作「あんなマナーの悪いヤツが似つかわしいはずねーだろ」

ジャッカル男「ありゃ、あの女の接客がよくなかったんだよ！」

俊作「オレにはそう悪くは見えなかったがな」

ジャツカル男「うるせえ！ 悪かったんだよ！」

ヒップホップ男「そうだ。あれはないわ。鴨川の妹め、ウチのカシラに捨てられたのを根に持ってやがるんだ」

俊作「捨てられた……？」

ジャツカル男「あり得るな。オレたちや女の恨みを買っちゃまったってところか？」

俊作「おい、今のどういことだよ？」

ヒップホップ男「てめーには関係ねえッ！」

瀬高「おい、お前らちよつとしゃべりすぎだ」

瀬高が注意する。

ヒップホップ男「あつ、すみません……」

ヒップホップ男とジャツカル男が、一瞬だけ気まずそうな顔をした。

瀬高は視線を俊作に移す。

瀬高「それからお前、どうして今、鴨川の妹の話に食い付いた？」

ホントに用心棒なんか？」

俊作「……」

瀬高「…ふん、まあいい。しめあげりゃわかることだ」

俊作「やってみるよ」

瀬高「ほお、強気だな。オレらとやろつてののか」

俊作「どうせ何にもしねーで帰る気もねーだろ。ただし、場所は変えさせてもらうぞ。ここだと店に迷惑がかかる」

瀬高「はあ？ 迷惑だあ？ 言ってる意味がわかんねーぜ！」

続けて瀬高が何かを言おうとしたところへ、俊作が突然それを遮るかのようにして人差し指を瀬高の目の前に突き付けた。

瀬高「……？」

不意に、俊作がニヤリと笑う。

俊作「次の台詞を当ててやるよ。“イカしてるのか？ この状況で” だろ」

瀬高「うぐ……」

思わず口をつぐむ瀬高。どうやら的中したようだ。

俊作「どうした？ 急に口数が減ったな」

瀬高「てめえ……なめんじゃねえぞ……！」

上の歯と下の歯がぶつかり、激しく軋む音が聞こえてくる。

ジャッカル男「瀬高さん、もうこいつやっちまってもいいすよね！？」

瀬高「おう！ 二度と逆らえねーようにしてやれ！」

ジリジリと間合いをつめながら、ジャッカル男が不気味にニヤける。ジャッカル男「へっへっへっ……この人数なら負けることあねーだろ」

俊作「ちっ……」

連中は本当にここで乱闘を始める気だ。何とか別の場所に誘導させる方法はないか。

考えている間に、ジャッカル男がファイティングポーズをとる。脇が甘く、顔面が隙だらけな素人丸出しの構えだが。

俊作「……そっだ」

何か思いついたようだ。

ジャッカル男が右の拳でパンチをしかけてきた。

これをダッキング（上体を屈ませて攻撃をかわすこと）しながら横に移動する俊作。

ジャッカル男「ちいっ……」

構わずジャッカル男が再び右のパンチを放つ。

今度はスウエー（上体を反らせて攻撃をかわすこと）で回避する俊作。

ジャツカル男が3発目を打とうとした時、それより先に俊作が裏拳でしなやかなジャブを相手の鼻先に打ち込んだ（空手では裏拳打ちという）。

ジャツカル男「ぐ……」

ジャツカル男の鼻先が少し赤くなる。

続けざまに2、3発、裏拳打ちを鞭のようにならせながらジャツカル男の鼻先に見舞う俊作。

逆にエキサイトしたジャツカル男は、右に左に腕を大きく振り回しながら俊作に突撃していく。

しかし、これらを俊作はスウエーとバックステップを駆使してかわしていく。

よけながら、俊作は今の状況を落ち着いて確認する。

俊作（……よし、残りの3人もちゃんとしてきてるな。確かこの先には更地があったはずだ）

俊作は、ジャツカル男の攻撃をよけながらカフェ「鴨川家」まで来た道のりをそのまま逆に戻っていた。

店まで来る途中、正確には店にかなり近い位置だが、適度な広さの更地があったのを俊作は記憶していた。

牽制程度に攻撃を加えることによってジャツカル男を怒らせ、反撃に出たところをバックステップやスウエーでよける。それを繰り返して、ジャツカル男を更地までおびき寄せる。瀬高たちはほぼ間違はなく後を追ってくるだろう。したがって、瀬高たち4人を「鴨川家」から誘導したことになる。それが俊作の作戦だった。

28・「自信」と「作戦」(前書き)

俊作の誘導作戦、果たしてうまくいくのか？

28・「自信」と「作戦」

小手先の技で相手を挑発しつつ、この先にある更地へと誘い込むという作戦を立てた俊作。

現時点ではうまくいっている。
あともう少しだ。

そう思った次の瞬間、俊作は瀬高の行動を不審に感じた。

携帯電話で誰かと話をしている。

こんな時に電話する用事などあるのだろうか。
仲間に連絡して助太刀に来てもらう気か。いや、それにしては落ち着きすぎている。
いったい何をする気なのか。

と、突然ジャツカル男の右パンチが俊作の視界に飛び込んできた。

瀬高の行動に気をとられて反応が遅れたか。

やむなくこれを左手で受ける。
そして素早く、自身の前側である左足で前蹴りを返し、すぐさまバックステップ。

俊作「惜しかったなあ。もう少しでパンチが当たるところだったけどなあ」

わざと挑発的な言い方をする俊作。

ジャツカル男「ふざけやがって……!!」

俊作「ま、頑張つて当ててみなよ」

ジャツカル男「うがああああッ!!」

やけくそになつたのか、ジャツカル男は低空飛行で右足の飛び蹴りを打ってきた。

ここは冷静にバックステップをしつつ体を右回りに捻り、相手の蹴りの軌道から外れる俊作。同時に、左手でジャツカル男の空振りした右足を、下からすくい上げるように受け（これを空手では“すくい受け”という）、間髪入れず素早く真上に持ち上げた。

ジャツカル男「ぐあッ……!!」

たまらずよろけるジャツカル男。

そこへ再び俊作の左前蹴り。

当然のように転倒するジャツカル男。

それと入れ替わるように、ヒップホップ男も加勢してきた。

挨拶代わりの右パンチを、俊作はやはりバックステップで回避した。

俊作は、目だけ動かして自分の右方向を一瞬だけ、チラリと見た。

すでに、目的の更地が真横にあつた。

それを確認し目線を戻したのと同じタイミングで、ヒップホップ男とジャツカル男が2人一緒に攻撃をしかけてきた。

俊作は、ニヤリと一瞬だけ笑うと素早く真横に飛びのき、でんぐり返しをしながら更地の中へ逃げ込んだ。

作戦成功。

これで思い切り戦える。

ヒップホップ男「この野郎……逃げてばっかいいーでかかってきやがれ！」

俊作「てめーのトロさを人のせいにしてんじゃねえ。悔しかったら1発ぐれえ当ててみるつつてんだろが」

ヒップホップ男「クソがあああー!!」

右手の拳を後ろいっぱい引き、怒号と共にヒップホップ男が突進してきた。

右のオーバーハンドフック（横からではなく、上から叩きつけるように振り下ろすフック。野球のオーバーハンドスローに似ている）をしかけてくるのが見え見えだ。

俊作はオーソドックス（右利きの構え）に構えた。

俊作の左前蹴り。

ヒップホップ男のみぞおちに見事ヒット。

息をつまらせ、苦痛を露にするヒップホップ男。ちょうどパンチを打とうとしたところを狙われたのだから、当然ダメージが大きくなる。

悶絶するヒップホップ男の眉間に、俊作が右ストレートを叩き込む。まるでゴム人形のようにグニヤリと全体をくねらせながら倒れこむヒップホップ男。完全にのびている。

ジャツカル男「なっ……！」

俊作「一丁あがり」

驚愕するジャツカル男を押し退けるように、後からついてきた瀬高がようやく俊作の目の前に立つ。

俊作「一人減ったな」

瀬高「やりやがったな……！」

俊作「どうする？ 撤退するなら今のうちだと思っけど？」

瀬高「いい気になるなよ。オレらにそんな選択肢はねーんだ。むしろそっくりそのまま台詞をためーに返してやんよ」

俊作「ここで全滅してもか？」

瀬高「いや、全滅はしない」

瀬高の顔が自信に溢れている。

俊作「ほう、自信満々だな。さっきケータイで誰かと話してたみてーだけど、援軍でも呼んだか？」

瀬高「さあな」

どうも腑に落ちない。

この自信は何だ。腕に覚えでもあるのだろうか。

俊作「……まあいい。援軍を呼んだとしても、そいつらが来る前に全員片付ければいいことだ」

瀬高「できるのか？ オレらはここで全滅しない自信があるぜ」

俊作「あ？」

何を言っているのか。

この瀬高という男は、たった今ヒップホップ男が俊作にあっけなく

やられたのを目の当たりにしているはずだ。それにもかかわらずこの自信に溢れた態度。

俊作「“全滅しない自信”？ ずいぶんと奇妙なことを言いやがるな。どういうことだ、そりゃ？」

瀬高「質問を質問で返すんじゃないやねえ！ オレが先に質問してんだろ、このアホが！」

俊作「わりーな。学生時代、疑問文には疑問文で返せって教わったもんでよ」

瀬高「……」

遠くから、車の走る音が聞こえてくる。こちらに向かっていているようだ。しかし、今の俊作にはそんなのどうだっていい。

頭にあるのは、「どうやって瀬高たちを全滅させようか」だ。もしくはこのまま逃げ帰ってくれても構わない。

俊作「おい、ごちゃごちゃくっちゃべってねーでやんのかやんねーのかハッキリしろよ！」

ジャツカル男「瀬高さん、早いところやっちまいましょうよ！」

瀬高「まあ待てよ」

瀬高がジャツカル男に耳打ちをした。

すると、ジャツカル男まで自信満々に笑うではないか。いったい何なのだ。

俊作「何をそんなにヘラヘラしてやがる。気色悪い」

ジャツカル男「別にイ〜」

車の音が大きくなる。

俊作（どうせ正当防衛は成立してんだ。さっさとやっちまうか）
俊作は身構えた。

俊作「かかってこい」

しかし、瀬高たちはヘラヘラしたまま何もしようとしなない。

こちらに近づいていた車の音が、ピタリと止んだ。

すぐ近くで停車したようだ。

その時、瀬高が音のする方向をチラリと見た。

俊作の方に向き直った瞬間、瀬高は突然倒れたヒップホップ男に駆け寄った。

瀬高「おい！ しつかりしろ！ 大丈夫か！」

ヒップホップ男の上半身だけを揺り起こし、必死そうに声をかける。

しかし、この時の俊作に「いきなり何やってんだ？」などと怪しむ余裕はなかった。

人影が二つ、俊作と瀬高たちが睨みあっているところへ猛然と迫って来るのが見えた。

一目でそれが何なのか、俊作はすぐにわかった。

あの帽子。

あの服の色。

腰には棒のようなものとわっかのようなものを携えている。

警察官。

制服警官が2人、こちらに走って来る。

瀬高「おっ、来てくれたか！」

警官A「“仲間が暴漢に襲われている”と通報したのは、あなたです
すね!？」

警官Aは瀬高に向かって尋ねた。

俊作「何だと……?」

暴漢?

どういうことだ?

瀬高「ああ。あいつがオレの仲間を……! 早く捕まえてくれ!

こいつはたぶん“シマ荒らし”だ!”

俊作「ちよつと待て! オレはそんなんじゃあ……!”

警官B「そこを動くなよ!”

俊作の言い分も聞かず、2人の制服警官はジリジリと間合いをつめる。

俊作（クソツタレめ! あの瀬高とかいうヤツがさっきケータイで話してたのは仲間じゃなくて警察だったのか……!）

瀬高が呼び寄せたのは仲間の援軍ではなく、警察だった。

俊作「待て! オレの話の聞け! オレは暴漢じゃねえ! こいつ

らが先にケンカをしかけてきたんだ！」

警官A「黙れ！　じゃあ何でここに倒れてる人間がいるんだ！　お前がやったんだろっが！」

俊作「それは正当防衛だ！」

警官A「信用できるか。お前、見た目無傷じゃねーか」

俊作「状況的にどっちが不利かわかるだろ！」

警官B「彼らがよってたかってお前を襲ったてののか？」

俊作「そうだよ！　見りゃわかるだろ」

警官B「そうは見えんがな」

俊作「何だと！？」

警官A「とにかく、署まで来いッ！」

とにかく雰囲気的にまずい。

ここは逃げなければ。

昔からの癖なのか、俊作は真っ先にそう思った。

捕まれば調査に支障が出る。それは避けないと。

この更地は、道路に面した所以外は民家もしくは小さな店に囲まれている。

普通に道路から逃げることはできない。その方向には警官がいる。

それならばと、俊作はくるりと回れ右をして民家の方向に走り始めた。

道路から逃げられないのであれば、民家の塀をつたって逃げるしかない。

幸い、俊作が逃げようとしている方向には木箱や廃材が階段状に積みまれている。わざわざ塀によじ登る必要がなくなる。

しかし、胸クソ悪い思いだ。

またしても一方的に悪者扱いされた。

それよりも、会社にしる警察にしる、どうして自分の言い分を聞いてくれないのだろう。

怠慢だ。徹底した事実確認を怠っているとしか思えない。その怠慢のせいで人生を狂わされる危険性もあるというのに。やはり、社会というのは非情かつ理不尽なものなのだろう。

警官B「止まれえー！」

2人の警官が必死に俊作の後を追う。

しかし、俊作のほうが俊足だった。

ほとんど一瞬で木箱と廃材の山がある所まで到達できた。

よし、これならとりあえずはこの場所から脱出することができそう
だ。あとは、この木箱と廃材の山を階段状に駆け上がればよい。そ
れから先は、塀の上を歩きながら考えよう。

このままスピードを失わずに塀を駆け上がるには、まずいちばん目
の前にある木箱に飛び乗るのが最善だろう。この木箱はさほど大き
くないため、飛び乗るのにちょうど良い。

よし、一気に警官どもを振り切るぞ。

俊作は、思い切り左足で地面を蹴った。

イメージ通り、勢いを殺さずに飛び上がることができた。例えるな

ら、「スーパーマリオブラザーズ」の「Bダッシュ ジャンプ」と
いったところか。

ここまでは思い通りにことが運ぶ。

しかし。

“バキッ!”

俊作「うっ!?!」

木箱に着地した途端、俊作の右足がその木箱を突き抜けてしまった。

何だ!?!

状況を理解する間もなく、ついに左足も音をたてて木箱にめり込
んだ。

俊作「うわっ!」

足場が崩れ、俊作は木箱の中に落ちる形となった。その際にバラ
ンを崩して転倒し、左ヒザを地面に打ち付けてしまった。

俊作（ちくしょう、この木箱……腐ってやがった!）

おそらく長いことこの更地に放置されていたのだろう。大人一人の
体重に耐えられないほどに木材が腐っていたのだ。

不覚だ。

俊作はそこまで計算には入れていなかった。

急いで立ち上がるものの、既に二人の警官が俊作の周囲を取り囲んでいた。

警官A「もう逃げられんぞ！」

俊作「……………」

まいったな、こりゃ。

俊作は心底そう思った。しかし、もう逃げ道がないのは事実だ。

俊作「…わかったよ。一緒に行きゃいいんだろ？ 早く連れてけよ」
不貞腐れたように言い放つ俊作に腹を立てたのか、二人の警官は彼を強引にパトカーへ引き摺っていった。

俊作「いててててて！ 自分で歩けるから！」

警官A「黙れ！ おとなしくついて来い！」

そんな俊作と警官のやりとりを、瀬高が遠くから目だけでほくそ笑んでいた。

28・「自信」と「作戦」(後書き)

俊作確保さる!

このまま前科者となってしまうのか…? ?

29・警視庁神宮前警察署

警視庁神宮前警察署　。

警官に連行された俊作は、こここの2階にある刑事課の入り口前でしばらく待つように言われた。取り調べのために刑事を呼びに行くのだろう。

俊作の脇では警官Bがピッタリと見張っている。

俊作（逃げないって。余計にめんどくさくなるだけだし）

しばらくして、警官Aが戻ってきた。

警官A「今、刑事さんたちはみんな手が放せないそうさ。この男には留置所に入ってもらおう」

そんなわけで、俊作は留置所にぶち込まれてしまった。

俊作「……まいったな、ホントに」

柴田俊作、一生の不覚。

一方ここは、株式会社マグナムコンピュータ人事部。清掃員に扮した純がやって来る。

先程伸子や藤堂を誘ったのと同じように、米本にも声をかけるためだ。

遠くから様子をつかがう。

デスクは空席だ。

おそらくトイレにでも行ったのだろう。

よたよたと歩きながらトイレへと入っていく純。

すると、真つ先に純の視界に飛び込んできたのは洗面器に向かう米本の姿だった。

米本「おっ、鳴海さん」

純の気配に気づいた米本が先に話し掛けてきた。

純「よっ」

米本「どうかしたのか？」

純「いいか、用件だけ伝える。今日仕事が終わったら裏の来訪者専用駐車場まで来てほしい。オレの事務所へ案内する」

米本「えっ？ どうして急に？」

純「営業部の藤堂部長が高根さんを連れて来るんだ。笹倉ってヤツについて何か知ってることがあるらしい」

米本「なるほど」

純「羽村やその彼氏を調べてる俊作も呼び戻す。おそらく有意義な情報交換ができるだろう」

米本「そういうことか。だったらオレもそれまでに何か情報収集しとかないといけないな」

純「そうだな。それだと助かる。でも、目立つた行動はするなよ」

米本「笹倉さんに感づかれるからだろ？」

純「それだけじゃない。ここは一流企業だ。あなたにも何らかの影響が及ぶかもしれない。例えば不当な人事異動とかね」

米本「う、うむ……。いくらオレが人事部の人間だとはいえ、ドジを踏めばそうなる可能性は十分にあり得る」

純「ああ。十分に注意してくれよ」

米本「わかった。何かあったらまた連絡する」
言うと、米本は素早くトイレを出た。

純「……よし」

純は、一通りトイレを掃除してから営業部のある5階を目指して、再びよたよたと歩き出した。

その営業部では、今日も羽村佐知絵が何食わぬ顔をして業務にとりかかっていた。

遠目から、伸子が猜疑心に満ちた表情で佐知絵の様子を見ていた。

伸子（昨夜のあの態度、なんか気に入らない。ホントに落ち込んでたの？ 仮にそうだったとしても、もうちょっと愛想よく接してもいいんじゃない？ あたしのこと露骨に避けようとして。あたしが柴田さんと仲良くしてるから？ でも　　）

その時、背筋がゾクツとするのを感じた。

そっと、伸子は後ろを振り向いた。

そこには、いつの間にか笹倉が立っていた。

軽い緊張が走る。

笹倉はほぼ無表情で伸子を見下ろしている。

笹倉「工作中だぞ。何ボーツとしてんだ」

伸子「……いえ、別に。何でもないです」

笹倉「あ、そう。何でもないので。ふーん」

笹倉はとぼけたような顔をして、壁にかけられた大型の時計に目をやった。

伸子「……」

伸子は視線をパソコンの画面に戻そうとした。

笹倉「おい、話はまだ終わってねーんだよ」

伸子「はい？」

「早くこの場から立ち去ってくれ」という気持ちだが、この返事からにじみ出していた。当然ながら、伸子は笹倉を敵意むき出しの目で睨み付けた。

笹倉「そんな返事の仕方あるかよ。バカじゃねーかお前」

伸子「…何ですか、話って」

笹倉「かぁーッ！ あのなら、だいたいおめーは態度からなっちゃいねーんだよ。今オレはおめーの返事を注意したんだぞ？ まず謝るのが筋じゃねーのかよ！」

伸子「……すみません」

笹倉は、わざとらしく呆れた表情を作った。

笹倉「情けねえ……言われなきゃわかんねーのかよ。小学生じゃねーんだぞ」

伸子「……」

小学生はどつちだ。

伸子は答えなかった。いちいち受け答えするのが面倒になったのだ。しかし、笹倉は表情ひとつ変えない。

笹倉「そーいや、もうすぐ中間評価面談だな」

伸子「……」

「中間評価面談」とは何か？

株式会社マグナムコンピュータでは、年度の頭である4月に業務上の目標を個別に設定する「年初目標面談」を全社員が直属の上司と行う。

それは年度末の3月になれば「年度末評価面談」を各自行い、年初に掲げた目標に対する達成度を話し合うとともに、その年の良かった点や反省点を踏まえた上で上司は部下に次年度のアドバイスをする。

そして「中間評価面談」は、年初から半年経った10月頃に、現在の時点でどのくらい目標を達成できているかを話し合うものである。「面談の結果」その社員の人事評価」であり、人事部に面談の結果を報告するのは上司である。評価如何によっては人事異動の対象にもなりうる。

これは、この場合の伸子にとっては脅威である。

不当にどこかへ飛ばされる可能性が極めて高いからだ。

笹倉「お前の目標がどれだけ達成できてるか、聞くのが楽しみだな」
笹倉はわざと伸子の耳元で、まるで念仏を唱えるかのようにささやいた。

息が臭い。

伸子が反射的に顔を遠ざける。

笹倉「…そんな態度じゃあ、目標達成はまだまだだな」

勝ち誇ったような笑みを残し、笹倉は喫煙室へと歩いて行った。

伸子「……………」

伸子と笹倉のやりとりをそばで見っていた会田が、すっと伸子に近寄る。

会田「高根さん、大丈夫？」

伸子「はい。大丈夫です」

会田「気にすることないぞ。高根さんはいつもよく働いてる。それは周りのオレらがよくわかってる。普通にしていりゃいいんだよ」

伸子「…はい。お気遣いありがとうございます」

伸子は申し訳なさそうに軽く頭を下げた。

会田「よし。じゃあ仕事に戻ろう」

伸子「はい！」

伸子は、視線をパソコンの画面に戻した。

ワードで文書を作成しながら、パソコン越しに佐知絵を見る。見ながら、考え事の続きをしていた。

伸子（でも、ホントに柴田くんがセクハラしてたんだったら、あたしまで避けたりするかなあ…？）

ちょうど営業部のフロアに着いた純は、一連のやりとりを見届けた後、喫煙室へと入っていった。

大胆にも、笹倉と接触するつもりだ。

純（まだヤツにオレの正体はばれてねえ。ここで敵から直接情報を仕入れとくつてもアリだな）

純は録音機能付きマルチカメラの録音モードをオンにした。

喫煙室のドアに手を伸ばす純。

しかし、ハツとして一旦手を引つ込めた。

再び、今度はそつとドアノブに手を伸ばした。

ほんの１ミリだけ開けて、中を覗く。

中では笹倉が誰かと携帯電話で話をしていた。

笹倉「……ああ、明後日の夜８時だな」

純「？」

純がはつきり聞き取れたのはこの言葉だけだった。

まあ、いいだろう。

何かの手がかりになることは間違いない。

純は、笹倉の電話が終わる頃を見計らって喫煙室に入った。

入るなり、早速タバコをくわえながら１００円ライターをポケットから取り出す。

しかし、火がつかない。

純「あれ？ もうガスなくなっちゃったんか」

ふと喫煙室を見渡すと、片隅で笹倉がタバコに火をつけている。

純「すいませーん……」

おそろのおそろ近づきながら、純が話しかける。

返ってきたのは、笹倉の無愛想な視線だった。しかしそれでも純はうろたえない。

純「火イ貸してもらっていいっすか？」

笹倉も変わらず無愛想な態度で自分のライターを差し出す。

純「すいませんねえ」

人懐こい笑顔で礼を言つと、純は手早くタバコに火をつけてライターを笹倉に返した。

実はこれ、わざとである。

わざと使用済みのライターを持ち歩き、火がなくなったフリをしてターゲットに近づく作戦だったのだ。

きっかけさえ作ることができれば、あとは適当に話題をふればよい。

「ふうーっ」と、真上に煙を大きく吐き出してから、純が笹倉に話しかける。

純「あの、営業の方ですよね？」

笹倉「……そうだけど？」

純「仕事って忙しいっすか？」

笹倉「……まあな」
いきなり質問されて戸惑いながらも、笹倉はとりあえずの回答はした。

純「いやね、自分サラリーマンなんてやったことないもんで、どんなもんかちよつと興味あるんですよ」

笹倉「だったらサラリーマンに転職すりゃいいだろ」

純「あ…確かに」

正論である。

純はポリポリと頭をかいた。

純「しかしアレですね。さすが大企業つすよ。いい女がたくさんいる」

笹倉「そうか？」

純「そうですよ。こっちは野郎だらけですからね。みなさんがうらやましい」

笹倉「そうか…うらやましいか…」

純「だけど、オレみたいなさえない清掃員じゃあ、近づくことすら不可能だろうなあ」

純は齒痒そうに言ってみせた。

笹倉「フン、あんまり変な気を起こさないほうが身のためだぞ。こないだも女のケツ追っかけた挙げ句セクハラで訴えられたヤツがいたばかりだからな」

俊作のことだろう。

知らんぷりをしてもう少しこの話を広げてみよう。

純「セクハラ…ですか」

笹倉「ああ。バカなヤツだった。ろくに仕事もしねーでそんなことばっかやりやがって」

純「…その人、今どうなったんすか？」

笹倉「クビになった」

純「クビ!? なんか恐いっすね」

笹倉「それが会社つてもんだ。わかったら気をつけるよ」
言つと、笹倉は乱暴にタバコをもみ消して喫煙室を出ていった。

純「それが会社つてもんだ」…か。しかし、俊作のヤツもひでえ言われようだな」

つぶやいてから、純は小さく煙を吐いた。

純（しかし気になるのは、“明後日の夜8時”だ。どこで何があるんだ？）

純は、念のため創にこのことを知らせておいた。

あとは、さりげなく羽村佐知絵に関する情報を集めておこうと決め、喫煙室を出た。

夕方。

俊作は、あまりに長い拘束時間のため留置所の中で居眠りをしていった。

白鷺堂の担当営業を再び任せられ、希望に燃える夢を見ていたところで看守に起こされる。

俊作「うう……せつかくい夢見てたのに……」

看守「うるさい！ 取り調べだ！ 出る！」

ようやく取り調べだ。

しかし、なんだかスッキリしない寝覚めだ。夢の中では白鷺堂の真ん前まで来ていたというのに。

看守「早くしろ！」

看守が急かす。

俊作「そんなに急かすなって。逃げたりしねーよ」

あくびをしながら、まだ動きたがらない身体を無理矢理起こす俊作。

それだけで疲れてしまいそうだ。

看守「ダラダラするな！ 刑事さんは忙しいんだ」

俊作「ふああ…ただ人がいねーだけだろ」

看守「ごちゃごちゃしゃべらないで歩け！」

俊作「はいはい」

歩き出そうとした俊作の前に、一人の男性刑事が現れた。

年齢は40歳ぐらいだろうか。上下黒のスーツを着ているが、ネクタイをしていない。

筋肉質でがっしりした体格で、身の丈は180センチほど。おまけに、顔が某刑事ドラマの主演に似ている。

看守「あ、昼前に捕まえたのはこの男です」

看守は一步横に退いた。

だが、俊作は一步も動かない。

決して眠気のせいではない。

その男を知っていたのだ。

俊作「み…湊さん…？」

29・警視庁神宮前警察署（後書き）

俊作の前に現れた一人の刑事。

どうやら俊作は彼を知っているようだが…？

30・刑事・湊参二郎

みなぎんじろう
湊参二郎。

かつて、当時十代だった俊作や純がヤンチャをしていた頃、地元の管轄である板橋中央警察署で少年課の刑事として勤務していた男である。

しよっちゅうケンカをしていた俊作や純は、当然、そのたびに湊の世話になっていた。

自分たちと同じ目線で接してくれ、「ダメなものはダメ」としつかり叱ってくれる湊刑事は、学校の先生よりも先生らしかった。

その湊刑事が、今、自分の目の前にいる。

ただ驚くばかりである。

湊「ビックリしたよ。まさかお前とこんな形で再会するとは」

取調室に入るなり、湊はくわえタバコでそう言った。

その横では、俊作よりも年下と思われる男性刑事が腕組みをしながら仁王立ちしている。

確か、湊刑事は彼を「佐藤」と呼んでいた。

俊作「オレですよ、湊さん。いつ板橋から異動になったんすか？」
湊「今月からだ。厳密にいうと、オレはこの人間じゃねえ」

俊作「え？」

湊「今月の一日付けで本庁捜査一課勤務になったんだよ。別の事件でたまたまここにいたわけ。そしたらお前が連行されてきやがった。でも人手不足だったもんだからオレが取り調べを仕方なくやるわけなんだけどな」

俊作「マジすか！ 警視庁の捜査一課とは」

湊「すげーだろ」

俊作「驚いた」

湊「しかし、板橋とは色が違うな、原宿ってのは」

俊作「色？」

湊は、一旦タバコの先端にかろうじてくつついている灰を灰皿に叩き落とした。

湊「ああ。“原色使いの街”って感じだな」

俊作「何なんすか、それ」

湊「オシャレなのはいいけど、若々しさだけが先行しちまってどうも落ち着かねえ」

俊作「なるほど。でも、ちょっと裏道入れれば少しは落ち着いた色になりますよ。それに原宿は明治神宮や代々木公園も近いし。渋谷のほうがり落ち着かないかもしれないっすよ？」

湊「渋谷は、言うなれば“蛍光色”だ。刺激までついてくるからな」

俊作「ああ…：そうですね」

湊は得意気に笑うと、再びタバコの灰を灰皿に落とした。

湊「ところで、鳴海たちは元気か？」

俊作「はい。相変わらずつるんですよ」

湊「そうか。仲いいんだな、お前ら」

俊作「ははは…そうみたいですな」

俊作は少し照れ臭くなった。湊は三度タバコの灰を灰皿に落とす。

湊「しかし柴田よお、お前いい歳こいてケンカするたあ何考えてんだ？」

俊作「いや、あれはケンカじゃないっすよ！ 身に降る火の粉を払っただけです」

佐藤「ウソをつくな！」

湊「聞いた話と違うな。どういうことだ？」

部分的に話すとかえって伝わりづらいだろう。

俊作は、会社を解雇されたところから今までのいきさつを話した。

先程、夢にも出てきた白鷺堂の一件もその中には含まれている。

話し終わると、湊は静かにタバコの火を消した。

湊「なるほどな。じゃあ、あの被害者たちは敵の仲間だったのか」

俊作「はい。むしろ被害者はこっちですよ。有無を言わず取っ捕まえやがって。ありや警察の怠慢だ」

少し興奮気味に、俊作の語調が荒くなる。

佐藤「この野郎、警察を侮辱する気か！」

佐藤刑事もカチンときたらしい。

俊作「だって事実だろ？」

目だけで殺気を放つ俊作。それに気圧されたのか、佐藤は次の言葉を失ってしまった。

湊「まあまあ、やめとけ。佐藤、マジでこいつ（俊作）を怒らせたからお前、殺されちまうぞ？」

佐藤「……すいません。取り乱しました」

若干納得のいかない佐藤だったが、ここはおとなしく引き下がる。

湊「しかし柴田よ、中にはいい警官だっているんだぜ？ オレみてーによ」

俊作「……そうでしたね」

冷たく言い放つ俊作。

湊「な、なんだよ、そんなに冷たくしなくてもいいだろうよ。お前らがガキだった頃はさんざん面倒見たじゃねーか。ホントだったら今頃前科者かもしんねーんだぞ？ ごまかすの苦労したんだからな」

俊作「マ…マジすか？」

湊「今だから言える話だぞ。ちったあ感謝しろ」

俊作「そうだったのか…：すいませんでした、湊さん」

湊「いやあ、わかりやいいんだ。ところでよ、さっき客を上司に取り上げられたつつつてたな？」

俊作「はい」

湊「原因は発注書の作成ミスだと」

俊作「ええ。それがどうかしたんすか？」

湊「ホントにお前のミスか？」

俊作「……たぶん」

湊「たぶん？」

俊作「わかんないんですよ。確かにちゃんと作ったはずなんですけど、いつの間にか納品するはずの品が違ってたて……」

湊「その発注書つてのはどうやって作るんだ？ エクセルか？」

俊作「いえ、社内の専用アプリケーションからです。納品する商品をプルダウンメニューから選べるようになってまして。今回の場合、本来納めるべき商品と間違えた商品はプルダウンメニューで隣同士になってたんで、オレのミスと言われてもしようがないっちゃあしようないんすけどね」

湊「そうか、そういうことか」

俊作「湊さん、そんなこと聞いてどうするんすか？」

湊「それ、「誰かに書き替えられた」って可能性は考えられないか？」

俊作「え……？」

あまりに突飛な推論に、俊作は思わず次に言おうとしていたことを一気に頭の中から削除していた。

湊「いや、最近ここの管内で一人暮らしの女性が暴行を受ける事件が起きたんだ。まあオレはその事件で来てるんだけど」

俊作「はあ」

湊「その翌日に、別の女子大生から“SNSで知らない人といつの間にか友達になっている”との相談を受けた」

俊作「……」

湊「更にその翌日、某有名ブランドショップの女性店員が非番の日に客の男からつきまとい行為を受けた」

俊作「何なんすか、それ？ まったく別の事件が同時期に3件も起きてますけど」

湊「初めはオレもそう思った。だけどこれら全ての事件には一つ共通点があつたんだ」

俊作「それぞれの被害者が友達同士だった？」

湊「違う。そんな単純なことじゃない。パソコンだよ」

俊作「パソコン？」

湊「それぞれの被害者は、みんな犯人にパソコンを覗かれてたんだ」

俊作「えっ？　　ってことは……」

湊「個人情報はもちろん、その他のプライベートな情報もまるごと盗まれた。だから一人暮らしの女性とショップの女性店員は行動パターンを犯人に知られていた。それだけじゃねえ。パソコンを遠隔操作された子もいる」

俊作「2番目に言ってた女子大生……ですか？」

湊「ああ。だからSNSでいつの間にか知らない人と友達になって

た。まあ、早い話がハッキングだな」

俊作「湊さん、それ、厳密にいうと“クラッキング”ってヤツっすよ」

湊「クラッキング？ 今はそういうのか？」

俊作「いや、前からいわれてますよ。他のコンピュータに不正にアクセスして悪いことをする行為はクラッキングと呼ぶほうが正しいらしいです」

湊「そうなのか。一つ勉強になったな。でもな、それぞれの犯人はみんなパソコンにたいして強くないんだよ。専門的な知識までは持ちあわせてなかったってことだ」

俊作「え…？ じゃあ、どうやって……………はっ！」

俊作はそこから推論を導き出した。

俊作「ソフトウェアだ…！ ソフトを使えば誰でも簡単にネットワークを経由して他人のパソコンを覗くことができる！」

湊「そうだ。まだ詳しく調べねーとハッキリしたことは言えねーが、犯人たちは簡単に他人のパソコンを覗き見できるようなソフトウェアを使っただらろう」

俊作「そんなものどこで手に入るんだ」

湊「わからん。これもちゃんと調べなきゃな。それよりも、オレが言いたかったのは、“もしかしたらお前の発注書も誰かに遠隔操作されたんじゃないか”ってことだ」

俊作「そんな……………」

佐藤「ちよつと湊さん！ 部外者に軽々しく捜査情報教えちゃまずいですよ！」

湊「佐藤はちよつと黙っててくれるか？」

佐藤「……………」

湊「まあ、これはあくまで可能性の話だ。今オレがそういうヤマを追ってるから、ふとそう思ったただけだし。ホントにお前の責任

かもしれねえ。まあ、参考までに頭の片隅にでも置いとけ」

俊作「はい……」

湊「そんな難しそうな顔すんなよ。誰かが遠隔操作したかもしれねえんだぜ？」

俊作「はあ……」

湊は、急にニカツと明るく笑った。

湊「よし！ 今日はおもう帰れ！」

俊作「へ？」

湊「ケンカの話は不問にしてやる。釈放だ」

佐藤「ちよっ……湊さん！ いいんですか？」

湊「いいんだよ。こいつはウソをつかない性格だ」

佐藤「しかし……」

湊「大丈夫だよ！」

佐藤「……」

それつきり、佐藤刑事は黙り込んでしまった。

湊「おい柴田、早いとこ真相をつきとめるんだ」

俊作「湊さん……」

湊「その代わり、パソコン覗き見してるヤツやソフトウェアについて何かわかったらすぐに知らせろ」

俊作「……なるほど、“ギブアンドテイク” つすね」

湊「そういうことだ。不満か？」

俊作「いや、そんなことはないですよ。人間社会じゃ当たり前前の話ですからね」

湊「よーし！ それじゃ決まりだな！ こっちも何かわかったら連絡する」

俊作「わかりました！」

佐藤「あり得ない！ こんな取り調べ初めてだッ！ 湊さん、この男は暴行もしくは傷害の疑いがあるんですよ！？ そんな輩と手を

結ぶなんて……」

湊「だから、こいつはウソをつかないって言ったじゃねーか。オレは柴田を昔から知ってるんだ」

佐藤「それに、あのロック・ボトムの間中とは面倒を起こすなって課長から言われてるじゃないですか！」

俊作「えっ？ 面倒を起こすな……だと？ どういうことだよ！」

俊作が佐藤刑事に詰め寄った。

佐藤も「しまった」と思ったが、もう遅い。

湊「佐藤くん、簡単に内部事情を漏らしちゃまずいんじゃないの？」

佐藤「……すいません」

湊「まったく、案外間抜けなヤツだな」

思わず苦笑する湊刑事。

俊作「で、何でヤツらと面倒を起こしちゃいけないんだ？ あんなメチャクチャやる連中ほっといていいのかよ！」

佐藤「知らん！ 上からの通達なんだ」

俊作「通達なあ！？ そんなの関係ねーだろ！ 現に街の人たちが困ってるんだぞ！ 警察がそんな態度でどうする！」

佐藤「しょうがないだろ。上がそう言ってるんだから」

俊作「“上が……” じゃねーだろ！ これだから警察は……」

湊「まあまあまあ、そう熱くなるなよ柴田」

もう少して佐藤に掴みかからりそうな勢いの俊作を湊がなだめる。

湊「詳細を知ることができないのは事実だ。だがな、その点に関しちゃオレも変だと思ってる」

俊作「……」

すると、湊は俊作に向かって手招きをした。「耳を貸せ」というジエスチャーである。言われるがまま、湊に顔を近づける俊作。

湊「あんまり大きな声で言えねーけどよ、何で上が教えてくんねーのかも調べとくよ」

俊作「えっ？ そんなことして大丈夫なんすか？ 上層部の事情に

首を突っ込んで湊さんの立場が危なくなったら……」

湊「バカ！ オレのことは心配すんな！ 警視庁捜査一課の刑事だぜ、オレは。お前は自分のやるべきことをやれ！ それに、このヤマ調ベリや何かわかるかもしんねーぞ。既に柴田は連中と関わってるわけだしな」

俊作「そうですね……わかりました！ すぐ調査に戻ります！」

湊「おう！ 早く動かねーと解決できるモンもできなくなっちまうぞ！」

俊作「はい！」

湊「そうだ、ケータイの番号教えてくれないか？ 連絡先を知らね

ーんじゃどうにもならん」

俊作「あ、そうですね」

俊作と湊は、赤外線通信による番号とメールアドレスの交換を行った。

湊「…よし。玄関まで送るよ」

俊作「いやあ、いいっすよ。女の子じゃあるまいし」

湊「かたいこと言うなよ。別にいいじゃねーか」

まあ、いいか。

俊作は、かすかに微笑んだ。

俊作「……じゃ、行きましようか」

俊作と湊が刑事課を出た瞬間だった。

見覚えのある男が向こうから歩いてくる。

オールバックにメガネ。そのメガネからは冷たい眼光がほとばしる。

戸川だ。

笹倉と一緒に退職を強要してきた、あの弁護士がこの神宮前署にいる。

何故、あの男がここに……？

30・刑事・湊参二朗（後書き）

「クッキング」のところは、ウィキペディアを参考にしました。
筆者も勉強になりました！

31・事務所へ戻れ（前書き）

俊作と戸川、再び対峙！

31 事務所へ戻れ

何故、戸川がここにいるのだ。

自然と、戸川を凝視する形になる俊作。

戸川「おや」

戸川も俊作に気づいた。だが、そのリアクションが少し大袈裟だ。そして、冷たい薄ら笑いを浮かべながらゆっくりと俊作に近づき、目の前で立ち止まった。

戸川「これはこれは、妙な所でお会いしましたね。会社を解雇されたもんだからヤケになってケンカでもしましたか」
俊作「は？ わけのわからんことを言うな。そっちこそどうしてここにいるんだ？」

戸川「あなたにお話するの必要はありません。私が如何なる理由でここへ来ようと、あなたとは何の関係もないはずですよ」
発する言葉に、感情がかけらもこもっていない。しかも、明らかにこちらを見下している態度だ。

対峙しているだけでイライラする。

戸川「とにかく、自宅でおとなしくしていることをお勧めしますよ。これ以上汚名を着せられたくないでしょう」

俊作「…その汚名が、捏造されたものだとしたら？」

戸川「は？」

俊作「前にも言ったはずだ。セクハラなんてオレには身に覚えのないこと。それだったら、ウソの汚名は晴らすべきだろう」

戸川「あなた、まだそんなことを言ってるんですか。しかも潔白を証明しようだなんて。このままいけば慰謝料請求、ヘタしたら裁判沙汰になりますよ?」

俊作「やってみる。オレが無実なら法で裁かれることはない」

戸川「……まあいいでしょう。せいぜい社会的に殺されないよう、十分気をつけることですね」

言い終わると同時に、戸川は足早に歩き出した。

戸川が数メートルほど離れたところで、湊が尋ねる。

湊「……知り合いか?」

俊作「知り合いつていうか、オレに退職を強要してきた弁護士ですよ」

湊「何? あいつが?」

俊作「あの冷たい目、一度見たら忘れられねえ」

湊「そうだったのか。あの弁護士、署内でちよくちよく見かけてはいたんだが、まさかお前と関わりがあったとはな」

俊作「湊さん、ヤツについて何か知ってるんですか?」

湊「いや、オレも詳しくは知らねーんだけど、なんか胡散臭いんだよなあ」

俊作「胡散臭い?」

湊「この辺の悪ガキやゴロツキ共が署に連行されてくると、ほとんどの確率で現れる。たぶん、そいつらの弁護をしてるんだ」

俊作「弁護……ですか」

湊「妙なのは、明らかにそいつらが悪い事件でもお咎めなしになっちまうことだ」

俊作「どういうことですか?」

湊「被害者側が、何故かどうしても被害届を取り下げちまうんだと俊作「えっ? わけわかんないっすよ」

湊「だろ? だから胡散臭いんだよ。周りに聞いても教えてくれね

「し」

俊作「教えられないわけでもあるんですかね」

湊「だろっつな」

俊作「あつ、でも、今日はどんな用事で来たんだろっ？ オレの弁護つてことは絶対じゃないし……」

湊「確かに気になるな。お前のケンカ相手以外、悪そうなヤツは今のところ署内にいないはず」

俊作「一体誰の弁護を……？」

湊「……よし、それならオレがちよつと様子を探ってきてやるよ」

俊作「大丈夫ですか？」

湊「心配すんな。ヤツの近くで仕事をするフリして盗み聞きするだけだからさ。だがお前はここで帰れ。2人揃って盗み聞きしてたら怪しまれる」

俊作「わかりました。ホントにすいません」

湊「気にすんなって。ギブアンドテイクなんだからよ」

俊作は思わず吹き出した。

湊も無邪気に笑った。

湊「じゃな！ 何かあつたら連絡しろよ！」

戸川の足取りをさりげなく追っていく湊の後ろ姿を見届けた俊作は、頭をボリボリかきながら玄関に向かって歩き出した。

俊作「……まったく、あの人も変わってねえな」

所変わって、こちらは株式会社マグナムコンピュータ内偵中の鳴海純。

時間帯は少しさかのぼって、ちょうど俊作が神宮前警察署の留置所で居眠りしている頃。

純は、営業部内のゴミを収集していた。

今度の目的は、羽村佐知絵の観察である。

依然として、仕事ぶりは普通で特に不審な様子もない。

純の潜入前にこのフロアを担当した仲間の清掃スタッフによれば、佐知絵はわりと気さくに誰とでも話していたという。

確かにその通りなのだが、純が見る限りでは若干男性と会話する比率が高いように感じる。

やはり「男に媚びるような笑顔」が、一部の女性社員を敬遠させているのだろうか。

そう思いながらフロアのゴミを大きなゴミ袋にかき入れていると、女性の脚が軽快なリズムを刻みながらこちらに近づいてきた。

純が顔を上げた。

目の前に、羽村佐知絵が立っている。

純「！」

一瞬、純の身体が硬直した。だが、探偵たるもの対象者に動揺を悟られてはいけない。

佐知絵は、なんだか申し訳なさげな顔をしてこちらを見ている。ど

うやわらずかながら動揺したことはばれていないようだ。

佐知絵は、A4サイズの紙の束をすーっと差し出した。

佐知絵「すいません、これも捨ててもらっていいですかあ？」
それから、アイドル歌手のようにかわいく笑ってみせる佐知絵。

……かわいい……。

一瞬、ほんの一瞬だったが、純は不覚にも心を奪われそうになってしまった。

純（はっ！ いつ、いかん！ 何を見惚れてんだオレは。この女は俊作を解雇まで追い込んだ女だぞ。いわば敵だ。そんなヤツに心奪われちまったら、オレは裏切り者だぜ）

一人葛藤する純を、佐知絵が不思議そうに見ている。

佐知絵「あの……」

純「あつ！ いいですよ！」

慌てて爽やかに微笑み、佐知絵の目の前に勢いよくゴミ袋を広げる純。

佐知絵「ありがとございませす」

佐知絵は不要な書類をゴミ袋の中に放り込むと、相変わらずアイドルのような笑顔で礼を言っつて自分の席へ戻っていった。

純（あれが普段の羽村佐知絵か。何なんだ、あの猫かぶり具合は）

佐知絵と初めて接触した純が率直に抱いた印象である。初めから悪いイメージしか持っていないせいも、普段の勤務態度が余計に純を

不快にさせた。それでも一瞬魅せられかけたのは、彼女特有の色気か。

もう少し佐知絵の情報を集めたいところだが、あまり動き回ると怪しまれる。ここはおとなしく清掃業務に徹しよう。

純は、よたよたと歩きながらゴミ収集を続けた。

午後5時。

シフト交替の時間だ。

仲間の清掃スタッフに、何か有力な情報を仕入れたかどうかを確認する。

やはり、俊作の人柄を知る一部の社員は今回のセクハラ沙汰を疑問視しているらしい。

本当に柴田俊作は羽村佐知絵にセクハラをしたのか？

このような声が多く聞かれたという。

これ以外に、これといった情報はないようだ。

だが、まったく無意味な情報ではない。純はその旨を手帳に書き込んだ。

そして、伸子たちが来るのを駐車場に止めてある車の中で静かに待つ。

一番乗りは米本だった。

10分ほど過ぎてから、伸子と藤堂が続けてやってきた。

純「これで揃いましたね」

純はキーを回そうとした。

藤堂「待ってくれ。車を出す前にキミが何者なのか教えてくれないか？」

しまった、というような顔をして、純はキーから手を離れた。

純「そうですね。失礼しました。私は鳴海純。柴田俊作とは昔からの馴染みです」

そう言いながら、純は名刺を藤堂と伸子に手渡した。

藤堂「ほう…探偵なのか」

純「はい。柴田がマグナムコンピュータを解雇された事件を、ヤツと協力して追ってます」

伸子「やっぱりそうだったんだ。柴田くんとこないだ会った時、彼そんなこと言ってたわ。あなたが柴田さんと友達の探偵さんね」

純「そうです。お二方ともよろしくお願いしますね、高根さんに藤堂さん」

伸子「え…？」

藤堂「何で名前を…？」

伸子と藤堂は驚きのあまり次の言葉が出てこなかった。

純「私は探偵ですよ？ お二人の名前は既にリサーチ済みです」

純は人懐こそうに笑ってみせた。

伸子「ああ、なるほどね」

藤堂「ははは…そうだったな。これは失礼した」

純「いえいえ。それでは行きましょうか」

純は、事務所に向けて車を発進させた。

神宮前警察署を出た俊作は、再び秋池の所へ行こうと考えた。さつきは不在だったが、今、直接店へ行けば会えるだろう。

ここから道玄坂まで、どうやって行くか。

徒歩でも行けないことはないが、なんだか面倒だ。かといってタクシーを拾うのも出費が大きすぎる。

ここは電車を使おう。

JR山手線ではなく、東京メトロ副都心線だ。

実を言うと、俊作は副都心線に乗ったことがなかった。

いい機会だ。一駅だけが乗ってみよう。

俊作は明治神宮前駅の階段をおりていった。

切符売り場の前まで来た時、純から電話があった。

俊作「どうした？」

純「今どこ？」

俊作「明治神宮前駅だ。秋池に会おうと思って渋谷へ向かうところだけど？」

純「悪い、それさあ、後回しにして今すぐ事務所に戻ってくんねえ？」

俊作「あ？ 何で？ 何かあったのか？」

純「お前んとこの上司の藤堂さんがよ、笹倉について心当たりがあるみたいなんだ。会社じゃでかい声で話せないから、今事務所に連れてきた。高根さんと米本さんも一緒だ。ちょうどいい機会だから、ロッキーも呼んで情報交換しようと思う」

俊作「なるほど。そういうことならすぐに戻るよ。これまでの状況も整理できる」

純「そうだな。できるだけ早く戻って来てくれ」

俊作「ああ。わかった」

俊作は電話を切り、自動改札をサッと通り抜けた。

俊作「！」

俊作の歩行速度が少し緩くなった。

後方から、殺気を帯びた人間が何人かついてくるのを感じる。

掲示物を見るふりをしながら、さりげなく殺気の漂う方向に視線を移す。

3人。

ホスト崩れのような男が3人、チラチラとこちらの様子をつかがっている。

ロック・ボトムの連中だ。

雰囲気でわかる。

どうする？

ここで戦闘に持ち込まれるわけにはいかない。再び神宮前警察署に逆戻りする可能性が大きくなる。

そうになると、この場は連中をまいてしまったほうがよさそうだ。

どのルートでまくか？

素直に池袋方面の電車に乗れば、へたすると自宅をつきとめられて

しまつかもしれない。わざとメチャクチャに動くのが妥当だろう。

よし、ここは一旦渋谷に出よう。

俊作は、タイミングよく到着した渋谷行きの電車に飛び乗った。

連中も、二つ向こうの扉から乗り込んできた。

俊作（渋谷から半蔵門線で永田町へ出て……その後有楽町線に乗り換えて池袋に行くか。いや待てよ。それでもばれやすいかもしれん。南北線のほうがベターかな……）

一駅だけだったが、座席に腰かけながらいろいろと策を練る俊作。

ほんの数秒、眠気に襲われ俊作の頭がこっくりと船を漕いだ。

意外にも肉体的疲労がたまっていたらしい。

調査の途中で立ち回りをやらかした挙句、警察に身柄を拘束されたのだから仕方がない。

まあ、万一深く眠ってしまっても副都心線は現在のところ渋谷で折り返しているので「乗り過ぎす」ということはないだろう。

折り返す？

そうだ。これでいいよう。

俊作はいい手を思いついた。

32・「笹倉派」

電車が渋谷に到着した。

この電車は、折り返し東武東上線直通・急行川越市行きになるそう
だ。

俊作は、横目でロック・ボトムの連中をチラリと見た。

何食わぬ顔をして電車から降りると、自動販売機でジュースかタバ
コを買うふりをしながらホームでたむろっていた。

明らかに俊作を待ち伏せる気だ。

一方の俊作はというと、ずっと座席に座ったまま寝たふりをしてい
た。

他の乗客が降りても、目覚めることなく腕を組んで寝たふりをして
いる。

そんな俊作の様子をロック・ボトムの連中が監視する中、「間もな
く電車が発車します」という構内アナウンスが流れた。

続いて、発車ベルが鳴る。

ロック・ボトムの連中もさすがに焦り出したのか、ジュースを手
にしたまま電車に乗り込もうとしてきた。

その瞬間、ぱちっと俊作の目が開いた。

ドアの寸前で思わず立ち止まるロック・ボトム連中。

慌てて周りを見回し、発車ベルが鳴り終わる頃にようやく状況を飲み込む俊作（実は演技）。

「ようやく電車を降りるか」といった期待が見え見えのロック・ボトムサイド。

素早く地面を蹴り、電車を降りようとする俊作だが間に合わず。これも寸前でドアが閉まり、電車は川越市に向けて出発してしまった。露骨に悔しがるロック・ボトムの連中を尻目に、電車はぐんぐん加速していく。

うまくいった。

心の中でほくそ笑む俊作。

マンガ「ルパン三世」の主人公であるルパン三世が、かつて劇中で宿敵の銭形警部に追われた際、マンホールの中へ逃げ込んだことがあった。

銭形警部は直ちに周囲のマンホールを封鎖した。しかし彼は、ルパンが逃げ込んだマンホールだけは封鎖していなかった。ルパンがそのままマンホールの中を突き進んで行くと思っていたからだ。常に冷静なルパンは、当然それを読んでいたのでマンホールの奥へは進まず、穴のそばでじつと身を潜めていた。

あとは銭形警部がいなくなるのを待つのみ。ルパンは難なく逃げ切ることに成功する。

その際、ルパンはこう言った。

「入口は出口にもなる」

長い前置きだったが、言いたいことは、俊作はこの理論を応用したということである。

例え「袋のネズミ」であっても、状況次第では袋の口が脱出経路になりうるのだ。

しかもこれは急行電車。渋谷を出ると新宿三丁目まで停まらない。

連中が後続の電車に乗って追いかけてきたとしても、新宿三丁目丸ノ内線か都営新宿線に乗り換えることもできる。

更にいえば、新宿三丁目駅から徒歩で新宿駅へ行くことも可能である。

これだと簡単に追い付くのは不可能だ。

俊作は心の中で「やれやれ」と呟いた。

それからは敵に尾行されることなく、俊作は板橋の探偵事務所に辿り着いた。

純や伸子たちは既に到着していた。

俊作「待たせてすまん」

純「いやいや、こつちも今さっき着いたばかりだよ」

俊作は藤堂に気づくと、慌てて会釈をした。

俊作「藤堂さん、わざわざすみません」

藤堂「いやいや、気にすんなって」

俊作「のぶちゃんと米本も来てくれてありがとな」

米本「これぐらいお安い御用だよ」

伸子「何よ、改まつちゃって。お礼は全て解決してから言ってよ」

俊作「ははは、そうだな」

藤堂「それにしても酷い目に遭ったな。最初聞いた時は信じられなかったよ」

俊作「はい……まさか自分がハメられるとは思いませんでした」

藤堂「オレたちだってそうだ。お前がセクハラなんてやらかすはずないからな」

伸子「あの子、何考えてんのかな。柴ちゃんを悪者にするなんて。」

何か恨まれるようなことした？」

俊作「まさか。何でそんなことしなきゃいけないのさ」

伸子「そうだよねえ……」

俊作「逆に聞くけど、周りから見てオレと羽村はどんな風に見えた？」

伸子「少なくともセクハラをしてる感じじゃなかったよ。羽村さんだって親しそうにしてたし」

藤堂「そうだな。嫌がってるようにはみえなかったもんな」

俊作「やっぱり周りから見てもそうだったのか……」

純「まあ、彼女の真意は彼女にしかわからないってことだ。オレらが調べを進めた上で問い詰めりゃしゃべってくれるんじゃないの？」

俊作「そうだな。早いとこ本題に移ろうか」

純「待った。もうすぐロッキーが来る。話はそれからしよう」

それから程なくして創が事務所に到着した。仕事終わりに直行したようだ。

創「わりい、遅くなった」

純「おう、お疲れ」

俊作「これで全員揃ったな」

創「あ、俊作、こちらがお前の会社の方々で……？」

創は、様子をうかがうようにしながら俊作に尋ねた。

俊作「あつ、そうそう。先に紹介しとかなきゃな。えーと…オレと同期の高根さんと米本、それから上司の藤堂さんだ」

伸子「高根です。よろしくね」

米本「どうも。っーか何でオレだけ呼び捨てなんだよ」

藤堂「よろしく！」

創「あ、あの、黒木です。大山駅の近くでリサイクルショップやっています。俊作とは長い付き合いで。どうぞよろしくお願いします」
創は、仕事が終わったばかりだからか、無意識に営業スマイルになっていた。

純「うわっ、すげー営業スマイル。こんなロッキー初めて見た」
わざと純が冷やかす。

創「ウソつけ！ お前はウチの店エ手伝ってるからしょっちゅう見てんだろ！」

純「いや、今のは初めてだね」

創「うるせえ！ それよりか話って何だ！」

純「わりいわりい。じゃあ、そろそろ本題に入るか」

俊作「藤堂さん、笹倉について心当たりがあるっていう話でしたよね？」

藤堂「ああ」

米本「何ですか？ その心当たり…って」

藤堂は、自分の中でタイミングをはかっていた。

「心当たり」の内容は重要な話だ。軽々しく話すわけにはいかない。

少し間をおいた後、藤堂は、俊作と伸子、そして米本の顔をさらり

と見回した。

藤堂「なあ、「笹倉派」って聞いたことあるか？」

俊作「笹倉派……？」

伸子「な、何ですかそれは？」

俊作「“派”っていうことは、何かグループみたいなモノなんですか？」

藤堂「そうだ。いわゆる派閥ってヤツだ」

俊作「派閥……」

米本「その噂なら聞いたことがあります。ここ最近で急に大きくなった一派ですよ」

藤堂「うむ。しかも、そのほとんどは顔が割れていない」

俊作「顔が割れていない……ってことは、誰が笹倉派の構成員だからかないってことですか？」

藤堂「そういうことだ。だが、社内の情報や社員のプライベートな部分にやたら詳しいらしい」

俊作「厄介だな、そりゃ。見えない所で監視されてるかもしれないわけじゃないですか」

藤堂「そうなんだよ。聞くとところによれば、笹倉は笹倉派を使って自分の気に入らない社員のプライベート情報をつかむことで、いざ排除する時のネタにするらしい」

米本「やましいことがあるば、尚更だ」

俊作「なんと卑怯な……あ、待てよ。オレの場合はどうなるんだ？ やましいことなんて一つもないぞ」

藤堂「だから、笹倉は事実を“捏造”したんじゃないか？ ヤツに味方は大勢いる。どうとでもなるさ」

伸子「でも疑問ですよ。社内の評判があまりよくない人に、どうして派閥なんか作れるんですか？」

藤堂は、一つ咳払いをするとソファアに座ったまま姿勢を直した。

藤堂「……これも噂なんだが、笹倉はコネ入社らしいんだ」

伸子「えっ!?!」

俊作「藤堂さん、それホントですか?」

藤堂「あくまでも噂だよ。だけど、社内で結構メチャクチャなことやってもクビにならないところを見ると、その可能性は高い」

創「いや、その噂はどうやらホントみたいですよ」

手帳を片手に、創が話の輪に入ってきた。

俊作「そうなのか?」

創「ああ。昨日マグナムコンピュータの元人事担当がウチの店に来てな。その人はもう定年退職してんだけどさ、笹倉の採用に関わってたんだって。そしたらよ、“大事な取引先のご息様なので、十分注意した上で採用にあたるように”って通達が会社の上層部からあったそうだ」

純「なるほど、そんなこと言われちゃ採用せざるを得ないよな」

俊作「だけだよ、どうしてマグナムコンピュータを選んだんだ?

他にも選択肢はあるだろうに」

伸子「他に雇ってくれる会社がなかったとか?」

創「そういう理由もあったんだろうけど、実際その取引先つてのは当時の社長の幼なじみが経営する会社だったらしいんだ」

俊作「なるほど、友達の息子じゃあ就職の世話をしないわけにはいかないからな」

藤堂「しかもヤツの家は大事な取引先だ。へ々に人事的な処罰を加えて後で文句を言われたら、会社の損失に繋がる」

伸子「だから好き勝手できるのね……」

少しばかり話がそれようとしたところで、俊作が何かに気づく。

俊作「でも藤堂さん、どうしてそんな話をするんです? 今日何か

あつたんですか？」

藤堂「あ…そういえば柴田にはまだ今日あつたことを話してなかったな。すまんすまん」

藤堂は、人事部長宛てに送ったメールの件について話した。

俊作「なるほど、そういうことでしたか。メールを送る時に笹倉派の誰かに盗み見られたかもしれないっていうんですね？」

藤堂「ああ。そうでなければ合点がいかない」

純「うーん…可能性がないわけじゃないけど、難しいんじゃないですかね」

藤堂「難しい？」

純「だって、メールを盗み見るってことは、パソコンの画面を見なきゃいけないじゃないですか。画面を見るといっても、一瞬だけパツと見たんじゃあメールの内容はわかりませんよね？」

藤堂「それはわかる。じつと凝視しないといけないよな」

純「はい。でも考えてみてください。藤堂さんの席はどこにありますか？」

藤堂「！」

純「部長なので、営業部全体が見渡せる窓側に位置してますよね？」

わかりやすく言うと、営業部のフロアが仮にバスケットボールのコートだとしたら、藤堂の席は、ちょうどセンターラインとサイドラインが交わった所にある。

純は続けた。

純「あの位置でパソコンを盗み見るには、かなりリスクが高いんですよ。非常にばれやすい」

藤堂「言われてみれば……。だが、それならどうやってメールのことを知ったんだ」

純「……わかりません。見当がつかないです」
米本「ハッキングでもしない限り不可能だと思いますよ」

ハッキング？

俊作は、ついさっき聞いてきた話を思い出した。

そう、湊刑事の話だ。

あの時はとにかく信じがたいところはあったが、藤堂の話を聞くと、その可能性も捨てきれなくなってきた。

状況が自分と似ている。

もしかしたら、もしかすると……？

俊作「クラッキングだな。可能性がないわけじゃないぞ」

米本「え……？」

伸子「社内でパソコンの覗き見してる人がいるってこと？」

俊作「まあ可能性の話だけだな」

藤堂「そいつは無理なんじゃないか？ 社内ネットワークはシステム部が監視してるはずだ。クラッキングなんかしたらすぐに足がつくぞ」

俊作「クラッキングをするためのソフトウェアを使った…としたら？」

藤堂「な…何だって？」

米本「そんなモノあるのか？」

俊作「まだ未確認だけど、存在はしてるらしい。それを使えば、もしかしたらネットワーク上に足跡を残すことなくクラッキングできるかもしれない」

米本「むう……それはちょっと突飛な推論だな」

米本は低く唸った。

純「その情報、どこで仕入れた？」

俊作「湊さんだ」

純「えっ？ 湊さんって…あの湊さんか？」

俊作「ああ。あの湊さんだ」

創「えっ、マジ？」

純「マジかよ！」

俊作「オレもビックリしたよ。あの人、警視庁捜査一課に今月から移ったんだって」

創「へえ ……」

純「だけど、そんな偶然もあるんだな」

俊作「いや…それがな…偶然っちゃあ偶然なんだけどよ……」

純「何だ？」

俊作は、昼間の出来事を話した。

純「そうか…敵に遭遇しちまったか」

俊作「すまん」

純「いや、しょうがねーよ。目の前で困ってる人たちを見過ごすわけにはいかないからな。むしろ、それで湊さんに再会できたんだ。味方してくれるんだろ？ 少しは前向きに考えなきゃな」

俊作「…そうだな」

純「それに、そのカフェの兄妹は黒野を知ってそうだしな」

俊作「ああ。特に妹さんがな。ヤツの仕事先とか知ってそうだったし。それに敵の一人が、“妹のほうは昔黒野に捨てられた”って言うってた。なんだか濃い関係がありそうだしな」

純「うむ…それは本人に聞いてみる必要があるな。彼女自身は辛いだろっけど」

俊作「そうだな。事件に早くケリをつけるためだ。彼女にはちょっと我慢してもらおう」

純が、タバコに火をつける。

そして、ゆっくりと煙を吐いた。

ミーティングはまだ続く。

32・「笹倉派」(後書き)

俊作も知らなかった恐るべき派閥の存在。
一体、誰が構成員なのか…？

33 来訪者

こちらはミーティング中のホット・スパイス・エージェンシー。

会話に少し間ができたところで、伸子が俊作に尋ねた。

伸子「ところで、黒野って誰なの？」

俊作「あれ？ 言わなかったっけ？ 羽村の彼氏だよ。もっとも、ホントに彼氏なのかも怪しいけどな」

伸子「何よそれ？ どんな人？ 黒野って」

俊作「今日会ったカフェのマスターが言うには、毎晩新宿や渋谷界隈で遊び歩いてて、いつも女をとつかえひつかえしてたらしい。だが、羽村みたいなのOLは今まで連れて歩いたことがなかったそうだ」

伸子「好みが変わったのかな？」

俊作「いや、そうじゃねえ」

純「オレもそう思う。羽村行きつけのクラブのスタッフや、末広と秋葉が黒野に会った時の態度から考えて、好みの変化はないんじゃないか？」

伸子「あの子たちも会ってるの？」

俊作「うん。渋谷スペイン坂のクラブでな。なんだか怯えてるように見える」

純「それに、そのクラブのスタッフも、“羽村があんなガラの悪い男を連れてきたのは初めて見た”って言ってた」

米本「それって……」

俊作「お互いに前例のない、初めてのタイプだってことだ。なんか話ができすぎてる気がするんだよなあ」

伸子「そうなんだ……」

藤堂「何とも言えないが……気にもなるところだな」

純「ロッキー、羽村の異性関係で何か情報は入ってないか？」

創「そうだな……黒野絡みの情報はまだ掴んでないけど、他にお前らが知らないような情報だと………あ、羽村って昔からかなりモテたらしいぞ。常に男が彼女の周りにいたって話だ」

俊作「だろうな。普段の態度を見てたらわかる」

創「高校・大学時代の同級生だった女の子に話を聞いたんだけど、羽村はどうもそれを計算でやってる節があつたらしい」

純「それって、男心をくすぐるポイントを心得てたつてこと？」

創「まあ……よくいえばそうかな。結構勘違いした男がいたつて話だし」

純「勘違い……ねえ」

創「しばしば“その気がない人に言い寄られて困ってる”って言うてたそうだ」

米本「ずいぶんとモテるんだな」

創「だけど、当の本人はそんなに悩んでる感じじゃなかったんだつて。むしろ“まんざらでもない”みたいな？　さんざん気持ち弄んで、しまいにや笑顔で肘鉄砲くらわす始末だ。“勘違いしないでね”ってな」

伸子「えーっ、何それ？　計算じゃん。ひどい」

創「だろ？　軽く被害者の会が作れそうだよ」

純「間違はなく会長は俊作だろうな」

俊作「何でだよ！　やんねーよそんな会長なんか」

伸子「あはは。あたしも柴ちゃんが適任だと思つたよ」

伸子が一緒になつて茶化す。

俊作「……まあとにかくだ。どうやら男にちやほやされたいタイプみたいだな、羽村は」

創「いや、そんなかわいいモンじゃねえよ。鬼だ」

藤堂「そんな風には見えなかつたけどな……」

創「それだけじゃない。羽村はブランド指向で、金に対する執着が強いらしい。経済力を男選びの判断基準にしてるんだと」

俊作「金持ちじゃないと彼氏にはなれないのか」

創「ああ」

純「オレには無理だな。そんな女付き合えん」

俊作「お前もともと付き合う気ねーだろ」

純「……うん」

伸子「あははは！ 適当に言ったの？」

純「……うん」

伸子「ははは…柴ちゃんたちって面白いね」

一同に小さな笑いが起こる。

俊作「ちなみに、それ言ったのは江坂千里じゃないよな？」

創「違う。江坂って女じゃない」

俊作「そうか。じゃあ江坂にも話を聞いてみよう。何か新しいことがわかるかもしれねえ」

創「そうだな」

伸子「柴ちゃん、江坂って誰？」

俊作「羽村の大学時代の友達だよ。新宿のキャミジミで働いてるんだ」

伸子「へえ〜。米本くんはその人を知ってるの？ 同じ大学だったんでしょ？」

米本「いや、知らないな。そもそも、オレは大学の時は羽村とも面識がなかったんだ」

伸子「そうだったの」

米本「会社に入ってから、社内で神田中央大学出身者だけを集めた飲み会で顔を会わせた程度だ。その時はすごく親しみやすい印象だったかな」

俊作「人は見かけによらねえモンだな」

米本「まったくだ。今回のことで実感したよ」

純が、タバコをアンティークなデザインの灰皿に押しつけた。

藤堂「ところで、羽村さんの彼氏って金持ちなのかな？」

俊作「それは調べないとわかりません。ひとまず原宿のカフェにもう一度行って、妹さんに話を聞こうと思います」

藤堂「そんなに動いて大丈夫かな？」

俊作「はい。一刻でも早く解決したいんで」

伸子「柴ちゃん、無理しないでね」

俊作「わかってる。一応これでも営業マンだったからな。相手の気持ちを考えてから接するつもりだよ」

伸子「もし不安だったら、あたしもついて行くよ？」

俊作「大丈夫だよ。オレも大人だしね」

純「なーに一人前なこと言ってたんだあ？」

本当は伸子がつっこみを入れるところだが、純のほうが一瞬早かったようだ。

俊作「うるせえ。それよりそっちはどうだったんだよ？ 何かわかったのかな？」

純「ああ、オレは笹倉と接触してみたよ」

俊作「おつ、そりやまた大胆な行動に出たな」

米本「鳴海さん、何か掴めたのかな？」

純「うん……なんかよ、喫煙室で誰かと電話してたんだけど、
日後の午後8時”がどうとか言ってたぜ」

俊作「何…？」

米本「どういう意味だ、そりや？」

藤堂「おそらく誰かと待ち合わせでもするんだろうな」

伸子「だけど…事件と直接関係があるかどうか……」

俊作「一応確かめる必要がある。まったく無関係とも言い切れない」
創「あつ、そうだ。笹倉の動向を探らせた情報屋から、“笹倉が会社から帰宅途中、頻繁に誰かと連絡をとっていた”って報告があったぜ」

俊作「ホントか？ どんな話してた？」

創「よく聞き取れはしなかったみたいだけど、金の話をしてたような感じだったって」

俊作「金の話……か」

純「なんか、オレが聞いた話と繋がりそうだな」

伸子「お金と……2日後の午後8時……が？」

俊作「……おそらく、受け渡しの話だったんじゃないか？ 笹倉が、協力者に報酬を払うのが2日後の午後8時……ってことかもしれないぞ」

伸子「受け渡し？ 話が飛ぶね」

俊作「だって、オレがセクハラをしたって事実をでっちあげるんだつたら協力者が必要にならないか？ 一人じゃかなり難しいんじゃないかな。で、うまいことオレが会社からいなくなっただんでそいつに謝礼を払うって考えたら納得がいくと思うんだけど」

伸子「ああ、なるほど。柴ちゃん読みが鋭いね」

米本「だけど、仮にそうだとしても受け渡しの場所や相手がわからんことにはどうにもならないぜ」

俊作「羽村か、笹倉派の誰かか、それ以外だと黒野たちか だな。

徹底マークする必要がある」

純「そうだな。でも決まればちやいけねえ」

俊作「よし。じゃあまずはソフトの存在と笹倉の動き、そして笹倉派のメンバーを早急に割り出そう。それから不審な行動をしてるヤツがいたら即徹底マークだ」

純「俊作、カフェや江坂のほうは任せたぞ」

俊作「ああ。そっちもな。ソフトを突き止めたら、藤堂さんのメールやオレの発注書との関係も探ってくれ」

純「OK！ 米本さんも笹倉派の割り出しに協力してくれ」

米本「うむ。人事部の従業員データベースから笹倉課長と繋がってる人間を抽出してみよう」

藤堂「気をつけるよ。あれは確か人事部でも一部の人間しか使えないモノなんだろう？」

米本「はい。マグナムコンピュータ全従業員の個人情報が入っています。生年月日や所属先はもちろん、普段の勤務態度や社内における交友関係まで事細かに。当然リスクは負いますが、笹倉派の割り出しにはこれが最も効率的で最適な手段でしょう」

藤堂「うむ……確かにそうだが……」

米本「大丈夫ですよ。データベースは私の席のパソコンからもアクセスできますから、怪しまれることはありません」

藤堂「十分に注意してくれ。キミまで処分の対象になることは避けたい」

米本「わかりました」

純「よし。じゃあ、リストアップした人物はプリントアウトしてオレに渡してくれるか？」

米本「上の目を盗みながらやるから少しづつしか渡せないけど、それでもいいか？」

純「それで構わない。いつぺんにやると他にはれる恐れがあるからな」

米本「わかった。リストと一緒に、笹倉課長が柴田の行いを報告した時の資料も渡せたら渡すよ。柴田が笹倉課長の項目を見れば記録があるだろうから」

純「頼んだ。それから俊作、時間があえばでいいんだけど、帰宅時の笹倉を尾行するのを手伝ってくれない？」

俊作「いいよ。つーかお前もヤツをつけるつもりか？」

純「ああ。いつ、誰と連絡とるかわかんねーんだ。電話の内容をガツチリ集音マイクに録りこんでやる」

俊作「わかった。こっちの用事が片付いたらメールするよ。ところで、笹倉の自宅がどこかわかってんのか？」

純「確か江戸川区だったよな、ロッキー？」

創「東西線の葛西が最寄りだ」

俊作「よし。頼んだぜ、純。他に何か情報はないか？ ……のぶち

やん、法人営業一課で何か変わったことは？」

伸子「えっ？ 変わったこと？ ……そうねえ、あつ、そうだ」

俊作「何だ？」

伸子「今ねえ、会田さんが柴ちゃんの分の予算まで受け持ってるの」

俊作「何だつて？」

藤堂「ああ、そうなんだよ。大丈夫なのか、あれ？」

伸子「本人は大丈夫だと言っているんですけど……」

藤堂「心配だな。いくら会田でも二人分の予算をこなすのは容易じゃない」

俊作「ちよつと待ってくれ。何で会田さんが二人分の予算を？」

伸子「会田さん本人が言い出したの」

俊作「何だつて？」

伸子「最初、あたしが“柴ちゃんの予算を課の人数で割ってそれぞれの予算に上乘せする”って予算の編成案を作ったの。でも課長がそれに反対して……“上乘せする額が高すぎる。これは柴田自身が望んだことだからこんなに上乘せする必要はない”って言われちゃったのね。それで会田さんが……」

俊作「はあ？ 意味がわかんねえ。それに、オレは“予算を増やしてくれ”なんて言ってるぞ。知らぬ間に設定されてたんだ」

伸子「やっぱりね。柴ちゃんがそんなこと言うはずないもんね」

藤堂「柴田の年齢や経験、能力を考慮するとあれはでかすぎる。オレも笹倉に見直すよう言ったんだが、あいつ強引に押し切りやがった」

俊作「押し切られた？ 藤堂さんが？」

藤堂「あいつ、お前が笹倉宛てに送信したメールをプリントアウトして持ってきたよ。“この通り柴田は大丈夫だと言っている”ってな」

俊作「メールだつて？ そんなモン送った覚えはないですよ！」

藤堂「しかし、確かに送信者は柴田だったぞ」

俊作「……まさか、それも例のソフトで……？」

藤堂「え……？」

俊作「だって、ホントにオレはそんなメール送ってないですから」
藤堂「……そうか。そのソフト、にわかには信じられんが、そう言われてみれば……」

純「うん、あり得ない話じゃない」

俊作「オレもそんなソフトは聞いたことなかったけどな、なんか、だんだん確信に変わってきてるぜ」

米本「しかも、それを使ってる人間が社内にいる……」

俊作「ああ。早急に割り出さなきゃなんねえ」

『ピンポーン……』

俊作が続きを言おうとしたところで、インターホンが鳴った。

純「誰だ？　こんな時間に……」

純が、対応のために玄関へと歩いていく。

ドアを開ける音が聞こえる。

宅急便の類いではないようだ。威勢のよい声がしない。

純「俊作、お前にお客さんだぞ」

玄関先から俊作を呼び寄せる純。

俊作「オレに？　誰だろう……？」

俊作はゆっくりとソファから立ち上がり、玄関へと歩いていった。

俊作「あっ……！」

ドアの向こうには、なんと鴨川ヒナコが立っていた。

33・来訪者（後書き）

いったいどうしたのだろうか？

34・鴨川ヒナコの証言(前書き)

突然現れたヒナコ。

彼女の目的は何なのか？

34・鴨川ヒナコの証言

ヒナコ「こんな時間にすいません……」

そう詫びるヒナコの表情は重く、苦しそうだ。こんな時間に突然事務所を訪れるのには、何かあったのだろうか。

俊作「あ……いえ、それはいいんですけど……どうかしましたか？」

ヒナコ「実は」

純「ちよつとごめんなさいね」

ヒナコの話を通り、純が俊作に向き直り耳打ちする。

純「おい、誰だ？」

小声で話しかける。

俊作「さつき話したカフェの人だよ」

純「じゃあ、妹さんの方？」

俊作「ああ」

それを聞き、目だけスッキリしたような顔で小さく数回頷いた。

純が、今度はヒナコに向き直る。

純「ついさっきまであなたの話をしていたところです。ここじゃないんですから、どうぞ中へお入りください」

純はヒナコを中へ招き入れた。

事務所の中へ入るなり、伸子や米本、そして藤堂の姿を見てヒナコは一瞬それ以上進むのをためらった。

ヒナコ「あ……お取り込み中でした？」

俊作「大丈夫ですよ。それに、何かあったからここへ来たんでしよう?」

ヒナコ「はい」

純「今コーヒーいれるんで、適当に座つといてください!」

ヒナコ「あ、はい。失礼します」

キッチンに立つ純。

ヒナコは米本たちに軽く会釈をすると、適当に空席を見つけ、そこに座った。

創「あの…失礼ですけど、俊作とはどういうお知り合いで……?」
探り探り創が尋ねる。

ヒナコ「あたし鴨川ヒナコつていいいます。原宿で兄とカフェをやってます。柴田さんには今日の昼間、ゴロツキの嫌がらせから店を助けていただいたんです」

米本「へえ、そうだったんですか。じゃあ、さっき話してたカフェの人かな?」

俊作「そうだよ」

ヒナコ「あの、柴田さん、あの後大丈夫でした?」

ヒナコが心配そうな目で俊作の顔を覗き込む。

不意にそんな顔をされたので、俊作は思わずドキツとしてしまった。

俊作「…まあ、なんとか。警察呼ばれちゃいましたけど」

ヒナコ「警察?」

俊作「はい。連中が呼んだんです。しかも、警察はヤツらの言うことを鵜呑みにしやがった。原宿の警察は不逞な輩よりも力が弱いんですかね」

ヒナコ「そんな……」

俊作「それよりも、こんな時間に直接来るなんて、何かあったんですか？」

ヒナコの表情が重苦しくなる。

ヒナコ「……はい。実は……兄が……ロック・ボトムの連中に襲われたんです」

俊作「えっ!？」

あのマスターが襲われた？

起こってほしくないことが起こった。自分が昼間にあのカフェを訪れたことが原因だと俊作は直感した。

ヒナコ「夕方になって、兄が一人で買い物に出かけたところを狙われました」

俊作「それで、マスターは今どうしてるんです？」

ヒナコ「病院です。ひどい怪我をしていますけど命に別状はありません」

俊作「そうか……」

くそっ、オレのせいだ!

俊作は心の中で唸った。

純「すみませーん、コーヒーが入りましたよ」

コーヒーをいれた純が香ばしい匂いを運んできた。

ヒナコ「あ、どうもすみません……」

純「申し遅れました。自分、このホットスパイス・エージェンシー代表の鳴海純と申します。この度はウチの俊作がお世話になってます」

ヒナコ「いえ、お世話だなんて……」

純「それで、いくつか質問いたしますが　お兄さんが襲われたということをどうやって知りましたか？」

ヒナコ「近所の人知らせてくれたんです。病院に運んでくれたのもその人でした」

純「その人は直接お兄さんが襲われたところを見たんですか？」

ヒナコ「いえ、見ていません。見つけた時は既に怪我をした状態で路上に倒れていたそうです」

純「じゃあ、何でお兄さんがロック・ボトムの中に襲われたってわかったんですか？　顔を見たとか？」

ヒナコ「いえ、連中は顔を覆面やサングラスなんかで隠していたのでわからなかったらしいです」

純「それじゃ、どうやって……？」

ヒナコ「病室で、兄自身が言ってたんです。襲われた際、連中の一人が“用心棒を雇うなんてふざけた真似をするな”って言ったらしく……」

純「用心棒……？」

俊作「たぶんそれはオレのことだろう。あいつら、オレを用心棒だと思ってたからな」

純「そうか。なるほどな。あの鴨川さん、気を悪くしないでくださいね。一応、形式的な質問をしただけです。別にあなたの言うことを疑ってるわけじゃないんですよ」

ヒナコ「はい。大丈夫です」

純「ちなみに、警察にはもう知らせましたか？」

ヒナコ「ええ。捜査はしてくれるみたいですけど、正直あまり期待はしていません」

純「何ですか？」

ヒナコ「先程柴田さんも仰ってましたけど、原宿の警察はロック・ボトムが絡む事件だと逃げ腰になるんです」

純「逃げ腰に？」

ヒナコ「ええ。できるだけ関わらないようにする感があるんですね」

俊作「そっぴんや湊さんの後輩みたいなヤツも似たようなこと言ってたな。なんでも上からの通達らしいぜ」

純「上からの通達？」

創「警察がそんなことするなんてあり得ないな」

俊作「普通はやんねーよ。だけど、そんなことしなきゃいけない理由があるんだろ。上層部が何らかの“弱味を握られた”とかな」

純「湊さんはこのことを知ってんのか？」

俊作「ああ。何があつたか調べてくれるってさ」

ヒナコ「それと、兄から柴田さんに協力するよう言われてきました」
俊作「協力？」

ヒナコ「兄は“柴田さんなら何とかしてくれる”と信じてます。あたしもそうです。それに、あなたはご自分の事件で黒野を追っていらっしゃる」

俊作「……」

ヒナコ「ちよつと図々しいかもしれませんが、でも、あの街のみんなが苦しんでるんです。秋池さんのこともありますし……。お願いします、黒野たちをやっつけてください。協力できることがあれば何でもしますから」

ヒナコは力のコもった目で俊作をじつと見据えた。

ほぼすつぴんに近いメイクだが、改めて見るとそれでも美人である。

俊作はニヤリと笑った。

俊作「安心してください。こっちは最初からそのつもりです」

ヒナコ「あ……ありがとうございます！」

ヒナコの心に一筋の光が差し込んだようだ。

俊作「それじゃあ……オレからも質問させてもらいますね」

ヒナコ「はい。何でしょう？」

俊作「黒野との間に何があったか教えてくれませんか？」

ヒナコ「え……？」

俊作「ロック・ボトムの一人が気になることを言ってたモンでね。

“黒野に捨てられた”と」

ヒナコ「捨てられた……って、そんなの彼らが勝手に言ってることですよ」

俊作「じゃあ、どんな関係で……？」

ヒナコ「関係っていうほどのモノじゃないんですけど………お客さんだったんです、あの人は」

俊作「カフェの？」

黒野にカフェなんて、正直、イメージと合わない。

俊作はそう思った。

ヒナコ「いいえ、キャバクラです」

俊作「……え？」

ヒナコ「……あたし、今年の春頃まで歌舞伎町のキャバクラで働いてました。黒野はその時のお客さんだったんです」

俊作「そっ、そうだったんですか？」

驚いた。

この爽やかで元気なイメージの鴨川ヒナコが元キャバ嬢だったとは。

俊作には、ヒナコとキャバクラがどうしてもリンクしなかった。

人は見かけによらないものである。

純「ちなみに、何でキャバクラで働いてたんですか？ カフェがあるのに……」

ヒナコ「もともとは、兄がカフェを始めるために借りたお金を返すためでした。でも、人手不足とか諸々の事情で辞められなくなっちゃいました。結局、借金を返し終わった後も続けてたんです」

俊作「なるほど。そこへ黒野が客として来たんですね？」

ヒナコ「はい。彼はあたしを指名してきました。だけど既にご存知のように、黒野は普段から乱暴者だったので、相手をするのが大変でした」

その先は聞かなくても想像がつく。しかし俊作は話を遮ろうとしなかった。

ヒナコが続ける。

ヒナコ「あの人、お店に来てはしつこくあたしに関係を迫ってきました。あたしが休みだと呼び出せて騒いだりしたんですよ」
俊作「個人的には相手をしたくないだろうけど、キャバ嬢って立場上そうはいかなかったんじゃない？……？」

ヒナコ「そうなんです。何度かお店の外で会いましたが、男女の仲になるのだけはなんとか回避できました」

伸子「でも、常識のない人ね。休みの人を呼び出させようとするなんて」

ヒナコ「あの人には“常識”なんてモノがないんでしょうね。他にも、ちよつと気に入らないことがあるばすぐに暴れたりしてましたから」

米本「出禁にはしなかつたんですか？」

ヒナコ「無理です。一度店長が注意したんですけど、後で闇討ちに遭いました」

藤堂「……ムチャクチャだな」

伸子「ひどい……」

ヒナコ「だけど、黒野の相手をするのも今年の頭ぐらいまででした」

俊作「……と言いますと？」

ヒナコ「黒野が指名する子を変えたんです」

俊作「え？ 何で……？」

ヒナコ「あたしにもわかりません。いきなりだったものですから。

だけど、正直少しは安心しましたね。黒野自身は相変わらず横暴でしたが」

俊作「そうか……それでヤツら“捨てられた”なんて言っただけでやがったんだな」

伸子「だけど、すっかり彼氏気取りだね。つきあってるわけじゃないじゃん」

ヒナコ「困りますよね。こっちは仕事のもりなんですから」

創「それに、いつの間にか話もすり替わってるしな」

俊作「どんだけ自分中心なんだよ」

ヒナコ「……たとえ自分中心だろうと、黒野があたしから離れてくれば安心だと思っていました。でも、まだそれで終わりじゃなかつたんです」

俊作「えっ？ 何があつたんです？」

ヒナコ「3月のある日、新しく黒野が指名した子の腕時計が誰かに盗まれました。彼女の話だと、お店に来る時はちゃんと身につけていて、仕事中は外してバッグの中に入れておいたそうです。だから犯人はお店の誰かってことになりますよね」

俊作「はい……そうですね」

ヒナコ「……あたしが、その犯人に仕立てあげられてしまったんです」

俊作「…えっ？」

ヒナコ「もちろん、あたしはやってません。でも、その子の腕時計があたしのバッグから見つかって……」

だんだんとヒナコの声が感情的になってきた。

ヒナコ「当然ですけど、こうなったら何を言っても聞いてもらえません。彼女は“お客さんがあたしを指名したから憎たらしくなったんでしょ！”ってあたしを非難してきました」

俊作は黙って聞いている。

ヒナコ「そしたらその子、弁護士を連れてきて“示談金を払うかお店を辞める”と言ってきたんです」

俊作「弁護士…？」

ヒナコ「はい。最初あたしは“どちらの要求ものめない”と突っぱねたんですけど……」

伸子は、見守るようにヒナコを見つめる。

ヒナコ「…そしたら…今度は、黒野たちがカフェに対して嫌がらせをするようになって……」

純「…どんなことをされたんですか？」

ヒナコ「直接暴力をふるわれることはありませんでした。でも、根も葉もないデマを流されたり、長時間カフェに居座られたり、精神的な攻撃が毎日続きました。お客さんも減りました」

ヒナコの感情が昂ぶっていることは、俊作や純たちから見ても明らかだった。

ヒナコ「あたしも、たまりかねて黒野に嫌がらせ行為をやめてって言いましたけど、まったく効果がありませんでした。それどころか、更に嫌がらせがひどくなって……」

俊作「それでキャバクラを……？」

ヒナコは黙って頷いた。

ヒナコ「…ええ。兄にも迷惑がかかりますし」

伸子「そんな……卑怯だよ。無理矢理に要求をのますなんて。怖い人なんか連れて来られたら従わざるを得ないもん」

従わざるを得ない……？

俊作は何かに気づいた。

俊作（濡れ衣、弁護士、黒野……まさか　！）

ヒナコの顔をうかがうように俊作が尋ねる。

俊作「……あの、その弁護士、もしかしたら戸川って名前じゃないですか……？」

途端に、ヒナコに驚きの表情が浮かぶ。

ヒナコ「はい。そうですけど……？」

純と創も「まさか」と言いたげな顔つきになる。

俊作「……じゃあ、黒野が新たに指名したのは、もしかして……羽村佐知絵……じゃないですか……？」

ヒナコ「……はい」

34・鴨川ヒナコの証言（後書き）

意外な事実が判明したッ…！
それは羽村佐知絵の過去！

35・鴨川ヒナコの証言その2

羽村佐知絵はキャバ嬢だった。

しかも、鴨川ヒナコと同じ店で働いていたのだ。

もちろん、俊作たちは驚きを隠せなかった。

ヒナコ「……どうしてわかったんですか？」

俊作「いやあ、オレの時と似てたモンですから。もしかしたら……と
思ってた」

ヒナコ「それに、佐知絵のことも知ってるみたいですけど……」

俊作「オレら といっても純とロッキーは違うけど、羽村佐知絵
と同じ会社なんですよ」

ヒナコ「そうだったんですか？ それで、ご自分と状況が似ている
と……？」

俊作「はい。一方的に自分だけ責められて解雇されました。戸川つ
て弁護士もその場において、オレの上司と2対1でまくし立てられま
したよ。更には黒野まで会社に現れて、受付の女性と警備員に暴行
を加えたんです」

伸子「そうだったの！？ そこまでは聞いてないよ」

藤堂「オレの留守中にそんなことが……」

俊作「はい。特に黒野が暴れたところは見てた人が結構いたはずで
すよ。それにもかかわらず、オレが“羽村がセクハラ被害を受けた
ことに激怒し、抗議に来た黒野に暴力をふるった”ことになってし
まって……」

藤堂「実際のところはどうかなんだ？」

俊作「自分から手を出してはいません。向こうから掴みかかってき
たのを捌いただけです」

厳密にいうと裏拳打ちを一発見舞っているのだが、これは相手の注

意をそらすためなのでたいした問題ではないだろう。

藤堂「その後は？」

俊作「ヤツの腕を捻りあげたところで、たまたま居合わせた会田さんが仲裁に入ってくれました」

藤堂「そうか。会田のヤツ、いいタイミングで居合わせたな」

米本「むう…… 人事部のオレも初めて聞け。しかし変だな。何で柴田だけが……」

俊作「変だろ？ しかも事情を聞こうともしなかったんだぜ？」

米本「そんなバカな！ いきなり解雇を言い渡したつてののか！」

俊作「ああ、そうだ。こんなの納得できるはずがない」

藤堂「前に雑誌で読んだんだけど、セクハラつてのは“言ったモン勝ち”みたいなところがあるんだつて。傍から見てセクハラじゃなくても、やられた本人がセクハラだと言えばそれまでらしい。これを悪用すれば、誰でも簡単に加害者もしくは被害者になれる」

米本「気に入らない人間もそのやり方で簡単に会社から追い出せますね」

藤堂「うむ…… だが、仮に柴田がホントにやったとしても解雇はないな。実際向こうは具体的に何をされたつて言ってきた？」

俊作「“しつこく食事に誘われた”、“仕事中にジロジロ見られた”、“肉体関係を強要されそうになった” この三つですね」

藤堂「肉体関係……？」

俊作「オレがラブホテルに連れ込もうとしたらしいです。身に覚えのない“証拠写真”まで隠し撮りされました」

藤堂「ああ、そーいや笹倉がチラツとそんなこと言つてたな」

伸子「柴ちゃん、“証拠写真”つて何？」

俊作「オレと羽村が並んで道玄坂のラブホの前を歩いてる写真だ。ホントは酔つた羽村を家の近くまで送つて行つただけなのによ」

伸子「えーっ？ どうしてそんな所歩いたの？」

俊作「そこを通つたほうが家までの近道になるんだつて。でも、今考えたら軽率だったぜ。迂回をしてもホテル街は避けるべきだつ

た」

米本「確かに疑われるよな」

純「まあ、しょうがねーよ。羽村はかなり酔ってたんだろ？」

俊作「そうなんだけどさ」

ヒナコ「……あの、すいません、かなり酔ってた”って言ってましたけど、佐知絵はその時相当飲んでましたか？」

きつとヒナコは、俊作がまだ何かを言おうとしていたのがわからなかっただろう。

ヒナコは、今思い出したことを少しでも早く俊作に伝えたかったのだ。

俊作「えーと……カクテルを何杯か……って感じだったような気がします。オレと同じぐらいの飲酒量で、なおかつオレが送っていきるぐらいだから、そんなに飲んではいなかったと思います」

純「俊作は酒に強いほうじゃないからな」

ヒナコ「それでも酔ってたんですか？」

俊作「はい。わりと早い段階で酔いが回ってたみたいでしたね」

ヒナコ「うーん……それ、あり得ないと思いますよ」

俊作「どういうことですか？」

ヒナコ「佐知絵は元キャバ嬢ですよ？ 簡単に酔っ払っていてもなお客さんとお話できません」

俊作「確かに……」

ヒナコ「それにあの子はもともとお酒の強い子です。早々に酔いが回るなんて、あたしからしたら考えられないんですよ」

米本「そうだよ。神田中央大の飲み会でも彼女だけが終始平気な顔をしてた……！」

俊作「じゃあ、あの時泥酔してたのは……演技？」

ヒナコ「その可能性は、高いと思います」

ウソだろ？

瞬間、俊作はそう思った。

しかし、驚くのはまだ早かった。

ヒナコ「それと、もう一つ気になることがあります」

俊作「何ですか？」

ヒナコ「佐知絵の家です。“道玄坂のホテル街を通るのが近道”だつて言つてたんですよ？」

俊作「はい。渋谷の松濤方面に住んでるみたいなんで………まさか、もしかして、それも……？」

ヒナコ「……ええ……。だいぶ前に聞いた話ですけど、佐知絵は松濤方面ではなく代官山方面に住んでるそうです」

俊作「全然方向が違う……！」

純「代官山方面なら、わざわざホテル街を通る必要がなくなるな。むしろ遠回りだ」

ヒナコ「そうですね。ただ、これは聞いた話なんでホントかどうかはわかりませんよ。もしかしたら今は松濤方面に引っ越しているかもしれません」

俊作「……よし、そこは江坂に聞いてみよう」

米本「オレも人事データベースで調べてみよう」

純「それで双方の結果を付け合わせればいい」

俊作「あとは……あの時羽村が“泥酔してなかった”って証拠だ。何とかして掴めないかな」

創「羽村が俊作と別れた松濤辺りから自宅に戻るまでの目撃証言を集めるのかなさそうだな」

藤堂「いずれにしても、早急に羽村さんの自宅を確認したほうがよさそうだ」

俊作「そうですね」

純「ところでロッキー、前に頼んだ“証拠写真”の所在と道玄坂での目撃証言はどうなってる？」

創「いや……どっちも進展はない。だけど、戸川って弁護士について一つわかったことがある」

純「何だ？」

創「弁護士の世界じゃあ、かなり恐い存在らしい。裁判で負けたことがないんだって」

純「へえ……それだけ頭が切れるってことか」

俊作「さあな。ただ、ヤツを敵に回したら最後だってことだな」

純「 だったら、既にオレら終わってねえ？」

俊作「 かもな。はっはっはっ」

純「くつくつくっ」

創「ふっふっふっ」

俊作、純、創の3人は小さく笑った。

伸子「ちよつと、笑ってる場合じゃないでしょ！ 相手は法律家なんだよ？」

俊作「大丈夫だよ。まだ負けると決まったわけじゃねえ」

純「そうそう。逆にオレらを敵に回したことを後悔させてやらなきゃな」

創「自分がしたことは巡り巡って自分に返ってくるってことを教えてやるうぜ」

俊作「ああ。因果応報ってヤツをな。たぶんオレが思うに、戸川は相手側に圧力をかけるから負けられないんだと思うぜ。今の鴨川さんの話から推測してな」

米本「なるほど、“こちらの要求をのまなければひどい目に遭わせる”と脅すわけか」

俊作「たぶんな。もしヤツがそんなやり方でオレらを潰そうとしてくるんだったら、かえってそっちのほうが都合だぜ」

創「慣れてるしな、そういうの」

純「若干ブランクはあるけどな」

俊作「まあ大丈夫だろ。はっはっはっ」

純「くつくつくつ」

創「ふっふっふっ」

俊作、純、創の3人は再び小さく笑った。

俊作たちの言葉は、何故か妙に説得力があった。伸子や米本、藤堂は必然的に異を唱えることはなかった。ヒナコも不思議と安心していた。

ヒナコ「皆さん、よろしく申し上げます」

俊作「かしこまらなくてもいいですよ。オレの事件でもあるんだから」

純「そうだ。鴨川さん、キャバクラでの羽村佐知絵はどんな感じでした？」

ヒナコ「えーと……そうですね、ずる賢いというか……意地汚いというか……あまり印象はよくなかったです」

純「具体的に言うത്？」

ヒナコ「あの子はブランド指向が強くて、会社の社長みたいに財力のある人間にはすぐ色目を使っていました。反対に、一般の人たちには期待だけさせておいて気持ちを弄んでいましたね」

俊作「彼女は男をその気にさせるのが上手いらしいですね」

ヒナコ「ええ。もともとルックスもいいですし。佐知絵は一般の人たちからデートに誘われてもなかなか応じなかったので、“難攻不落の美女”なんて呼ばれていましたよ」

俊作「へっ！ 難攻不落ねえ」

俊作は思わず鼻で笑ってしまった。

ヒナコ「逆にセレブの誘いには簡単にはのるんですよ。そこから交際に発展したこともあったって話です。でも、ここまででは傍から見てはまだ我慢できる範囲なんです」

純「 と言いますと？」

ヒナコ「セレブなお客さんが必ずしも佐知絵を指名するとは限らないでしょ？ 他の子がつく場合だって当然あります。でも、佐知絵はそれを横取りするんです」

純「横取り？」

ヒナコ「そうです。彼女はセレブなお客さんはなにがなんでも自分のモノにしたいみたいで……。しかも、自分が悪者にならないよう考えてやるんですよ」

俊作「ばれないように画策するってことですか？」

ヒナコ「はい。指名された子のヘルプについた時に色仕掛けと気配りでさりげなくお客さんの気を引き、裏ではその人のデマを、ホントは自分ででっちあげたのに、いかにも他人から聞いたような感じで流して他の子が接客したくなくなるよう仕向けるんです。だから、佐知絵の仕業だとは気づきにくくて」

俊作「イヤな女だ」

伸子「そこまでしてセレブと付き合いたいのかな……」

ヒナコ「……それに気づいたのは、あたしを含めわずか数人でした。でも他の子たちは佐知絵よりも年下だったから抗議することができなくて……。それで、あたしがみんなを代表して佐知絵に抗議したんです。当然本人はシラを切りましたけど」

純「それから羽村佐知絵とはどうなりました？」

ヒナコ「最悪でした。もともとあまり仲はよくなかったんですけど、露骨に嫌い合うようになりました。あの子、お店の中であたしを孤立させようと、何も知らない子たちを次々と味方につけていったんです」

創「うわあ、ガキみてーな嫌がらせ」

伸子「辛くなかったですか？」

ヒナコ「辛い……というよりイライラがつのる感じでしたね。今、思い返しても腹が立ちます。さっきお話しした腕時計の件も、もしかしたらこのことが引き金になったのかもしれない」

藤堂「可能性は高いな……」

米本「あらかじめ味方を多くつけとけば、事件をでっち上げても自分が疑われる危険性は低い」

俊作「策士だな、何気に」

伸子「なに感心してんのよ。今回と似てるじゃん！」

俊作「わかつてるよ。オレとソリのあわなかつた笹倉が羽村に味方してる点が似てるんだろ？」

伸子「う、うん……」

俊作「やっぱりな。黒野が絡んでる時点で怪しいけど。まあ、あの女は前にも似たようなトラブルを起こしてるってことだ」

純「断定するのは早いぞ。念のため裏を取らないと。鴨川さんが勤めてたキャバクラへ行って確認をとるんだ」

創「それはオレがやるう」

純「ロツキー、いいのかよ？」

創「キャバクラはたいがいに夜にやってるけど、その時間俊作は純の手伝いで笹倉を尾行しなきゃいけないだろ？ なぁに、乗りかかった船だ。最後まで付き合うよ」

純「すまないな」

俊作「それと鴨川さん、昼間にお邪魔した時、“黒野が普段何をしてるか聞いたことがある”って言ってましたよね？」

ヒナコ「ええ。あくまで聞いた話なんで、事実かどうかはわかりませんよ？」

俊作「構いません」

ヒナコ「……黒野は昔、歌舞伎町でホストをしていました。1年ほど前に辞めて、なんでもIT関係の仕事に就いたらしいです」

純「そういや、あいつバイトがどうか言ってたが、もしかしたらそのことかな。けどあれでITかあ？ 似合わねえー……」

俊作「そもそもヤツは真面目に働こうってガラじゃない。鴨川さん、黒野は何でホストを辞めたのかわかりますか？」

ヒナコ「さあ……そこまではわかりません」

そこからは自分の目で確かめる必要があると思うだ。

36・渋谷へ

兄が黒野の回し者によって襲撃されたことを伝えに事務所を訪れた鴨川ヒナコ。しかし、同時に新たな情報を得ることができた。

羽村佐知絵はキャバクラで働いていた（現在も続けているかはまだ不明）。

セレブな客はなにがなんでも我が物としていた。またその際、手段を選ばない。

ヒナコもかつて佐知絵と同じキャバクラで働いており、俊作と同様、畏にはめられ店を辞めている。しかも、その際黒野と戸川弁護士が絡んでいる。

また、黒野は1年ほど前にホストからIT業界へ転身しているが、その辺りの詳細は不明である。

そして佐知絵のセレブ志向は行き過ぎているところがあり、他のキャバクラ嬢が接客していようとお構いなしに奪い取る。反面、セレブではない客に対しては適当に気を持たせて弄んでいるため、「難攻不落」とまで形容されている。

これにより、俊作が再びカフェ「鴨川家」を訪れる必要がなくなつた。やるべきことが一つ減つたのだ。

俊作「鴨川さん、よく話してくれました。ありがとうございます。
ホントは、もう一度カフェへ行って話をお聞きしようと思ってたんですよ」

ヒナコ「そうだったんですか？」

俊作「話を全部聞かないうちに店を出ちゃいましたからね。でも、今聞きたいことが聞けてよかったです」

ヒナコ「それは何よりです」

純「あ、じゃあ、俊作はやることが減ったから手があくわけだな」

俊作「ああ、そうだな。江坂の店と笹倉の尾行か。結構時間があくぞ……そうだ、その間はクラッキングのソフトウェアを調べるか」
純「うん。そうしてくれ。あとは黒野の“勤務先”だ」

俊作「そうか。結構やることあるな」

創「そうだ。俊作、ソフトのことを調べるんだっいたらいい人がいるぞ。オレの知り合いでコンピュータ系に強い人がアキバにいるんだけど、その人に聞けば何かわかるんじゃないか？」

俊作「マジ？ アキバのどこに行けば会えるんだ？」

創「アキバの駅からそう遠くない。ちよっとわかりにくいから地図書くよ」

白紙のコピー用紙に水性ペンで簡単な地図を書くと、創はそれを俊作に手渡した。

店の場所は黒い丸印で表記され、矢印が力強く引っ張られている。

その矢印を辿っていくと、店の名前が書かれていた。

『ジプシー』とある。

俊作「ジプシー？」

創「ああ。店長の三田村さんって人に聞いてみる。コンピュータやソフト関係なら、メジャーどころからアンダーグラウンドなモノまで知り尽くしてる」

俊作「なるほど、三田村さんだな」

創「それと、これを持っていけ」

創は、ポケットの中から折り畳んだ携帯電話ぐらいある木札を取り出した。

俊作「何だそれ？」

創「これがないと話に応じてくれないぞ。三田村さんはコンピュータ系に精通しているだけに、自分の話したことを悪用されないよう警戒してるんだ。この札は、いわば信頼の証だ」

俊作「そういうことか。それじゃ借りるぜ」

俊作は、創から三田村と話すための木札を受け取った。

俊作「ところで鴨川さん、この後はご自宅に戻られますか？」

ヒナコ「いえ：戻りたいんですけど、いつまた黒野たちが嫌がらせに来るかわからないし、怖くて戻れません。家を出る時、数日分の荷物をまとめてきました。ビジネスホテルにでも泊まるうと思っ
ます」

そう言つて、ヒナコは足元のポストンバックを指差した。

俊作「そうでしたか。いや実はオレも同じこと考えてました。ただし、一人で宿をとるのは避けるべきだと思いますよ」

ヒナコ「え……？」

俊作「今みたいな切迫した状況下では、心の緊張が続いて冷静な判断ができなくなりがちです。ましてや、今あなたはお兄さんを襲われてシヨックを受けている。誰か味方がそばにいと、気が紛れて落ち着いた精神状態になるもんなんですよ」

ヒナコ「そうなんですか」

俊作「そうですね。それに、もし万が一、黒野たちに見つかった時のことを想定してますか？ もし一人でいるところを襲われたら、誰が鴨川さんを守るんです？」

ヒナコ「う……」

さすがに言い返せない。

純「もつといえ、この中の誰かに泊めてもらえばより安全だな。事情を知ってるし、第一にオレらは味方だ」

創「そうだな。じゃあウチで預かるうか。実家だし、“二次災害”が起きることはない」

“二次災害”と聞き、俊作は苦笑をした。

俊作「“二次災害”ね……まあ、いいんじゃない？ お前んちの両親は客をもてなすの好きだし、妹は誰とでもすぐ仲良くなるしな」

純「それに昼間はロッキーの店に身を隠すこともできる」

ヒナコ「え……でも、迷惑じゃないですか……？」

俊作「そんなこと言ってる場合じゃないですよ。何かあつてからじゃ遅いんです」

創「心配いらんですよ。ウチの親はこういった状況に慣れてますから」

ヒナコ「そうなんですか……？」

純「ははは、そうだったな」

創「お前らの親もそうだろうが」

俊作&純「ははは、そうだったな！」

創「ハモるな！」

伸子「息ピツタリ……」

米本「伊達に付き合い長くないな」

俊作「まあ、そういうことで、ロッキーの所に一時身を寄せるといいですよ、鴨川さん」

ヒナコ「あ……じゃあ、お言葉に甘えて……」

純「よし！ それじゃあ一刻でも早く解決しよう！」

俊作「ああ。ハナっからそのつもりだぜ、オレは」

伸子「あたしにできることがあつたら何でも言つてね！ 力になるから」

俊作「おう。わかった」

藤堂「オレも、何か柴田の無実を証明できるような証拠を集めておくよ」

俊作「すいません藤堂さん。でも、動ける範囲内でお願ひします」
藤堂「わかつてるよ。心配すんなって」

創「ところで鴨川さん、働いてた店の名前は？」

ヒナコ「あ、そういえばまだ教えてなかったですね。“フェアリー・ナイト”です」

創「場所は確か歌舞伎町でしたよね」

ヒナコ「そうです。コマ劇場の近くにありますが」

創「なるほど、それならすぐわかりますね」

これで皆が次にすべきことが決まったかのようにみえた。

しかし、俊作が一つ、着眼していない箇所があるのに気づいた。

俊作「そうだ、スペイン坂のクラブは？」

純「クラブ？ RYU・JINがどうかしたか？」

俊作「あのクラブは羽村が昔から通いつめてただろ？ しかもここ半年は黒野も来てる。もしかしたら、今回の計画を話し合ってたかもしれないぞ」

純「ああ…それはあり得るな」

俊作「だから、クラブの常連か、もしくは黒野に便乗してクラブへ来るようになったロック・ボトムのヤツに話を聞いてみれば何かわかるかもしれない」

純「そうだな。よし、ここはオレが行こう。この後チラツと行ってみて、不発だったらまた明日行くかな」

藤堂「また明日って…鳴海くん、笹倉の尾行は？」

純「大丈夫です。クラブは朝方までやってますから、笹倉の尾行をある程度やった後からでも間に合いますよ」

藤堂「朝方まで…って、寝ないで平気か？」

純「平気ですよ、それくらい」

俊作「藤堂さん、これはオレも純が適任だと思います。RYU・J

INは外国の人もたくさん来るクラブです。純は英語が話せます。だからより多くの情報を仕入れることができるでしょう。まあ、確かに25歳を過ぎてのオールナイトは少々しんどいですけど」

藤堂「そうか、なるほどな」

米本「鳴海さんって英語ができるのか」

純「まあね。昔ちよつとアメリカに留学してたからさ」

伸子「すごいねー」

純「ふふふ。タイ料理ゴチで教えてやってもいいぞ」

伸子「あはは。何よそれ」

俊作「調子にのらない！」

創「話がズレる！」

純「わ、わかつてるよ。冗談だ、冗談」

俊作「……」

皆の、次にすべきことが今度こそはつきりした。

俊作は江坂千里から佐知絵の住所を割り出すのと、秋葉原へ行き三田村という人物にクラッキングソフトについての聞き込みをする。

純はこの後渋谷のクラブRYU・JINへ行き、聞き込み調査。翌日の夕方から俊作と合流し、笹倉を尾行。もしこの後行うクラブでの聞き込みで何も収穫がなければ、笹倉の尾行後に持ち越し。

創はキャバクラ「フェアリー・ナイト」へ行き、佐知絵のトラブルについて聞き込みを行い、ヒナコの証言と付け合わせる。

米本は人事部のデータベースを使い、笹倉派の割り出し。

伸子と藤堂は、現時点では特に何も行動する必要はないが、笹倉や佐知絵の様子をそれとなく監視するよう伝えておいた。

俊作「……よし。お互い報告だけは忘れずにな」

場の空気が、なんとなく解散に向かい始めていた。

藤堂が腕時計に目をやる。

藤堂「さて…オレはそろそろ帰ろうかな」

俊作「藤堂さん、わざわざありがとうございます」

藤堂「例を言うのはまだ早いぞ。事件が解決してからにしろよ」

そう言つて、藤堂が人差し指で俊作の鼻を軽く突く。

俊作「あ、すみません」

俊作も思わず苦笑い。

米本「柴田、オレも帰るわ」

俊作「そうか、気をつけてな。笹倉派の割り出し、頼んだぞ」

米本「わかった」

純「…じゃあ、解散しますか」

創「そうだな」

俊作「ロッキー、鴨川さんのこと頼むわ」

創「おう」

その時、突然、ヒナコがソファから立ち上がった。

ヒナコ「あの……！」

ヒナコは勢いよく、改めて勇気を振り絞るように、帰りの支度をしようとしていた俊作を呼び止めた。

俊作「…はい？」

ヒナコ「秋池さんの所に行きたいんですけど、連れていってもらっていいですか？」

俊作「秋池さん…？」

車の鍵を取りに行こうとした純も、立ち止まり、ヒナコの言葉に耳を傾ける。

ヒナコ「はい。知ってるんですよ？ あの人は今働いてる店を」

俊作「え…ええ」

ヒナコ「あたし、心配なんです。急に連絡がとれなくなったと思ったら、黒野たちとトラブルになってるじゃないですか。だから、一目見て無事かどうか確認したくて……」

俊作「……」

鴨川兄妹は、秋池との親交が深い。秋池もまた、多くの人間にその人柄を惚れ込まれている。ヒナコもその一人だ。

俊作の胸には、彼女が秋池を心配する気持ちがまるで波動砲のように打ち寄せていた。

俊作「……わかりました。行きましょう。ロッキー、秋池の動きはマークできてるか？」

創「シフトぐらいは把握できてるぜ」

俊作「今日は店にいるか？」

創「ああ。いるはずだ」

俊作「よし。鴨川さん、行きますか」

ヒナコ「はい！」

藤堂と米本はここで帰宅し、俊作・純・創・伸子・ヒナコの5人で渋谷のダイニングバー“源”へ向かうことになった。

現地へは純の日産ウイングロードと、創が所有するトヨタのイプサム2台に分乗して向かう。ウイングロードには俊作・純・伸子、イプサムには創・米本・ヒナコがそれぞれ乗り込んだ。ヒナコをイプサムに乗せれば、初めの自宅まで連れていくのに都合がよい。

時刻は夜8時を回っていたが、やはり都心は交通量が多い。更には、駐車場が見当たらない。

とりあえず、ヒナコを先に降ろすことにした。だが、単独行動をさせるわけにはいかないので俊作が彼女に同行した。

東急本店前に降り立つ俊作とヒナコ。

風に乗って流れてくるドン・キホーテのテーマソングを後方で聞きながら、「源」を目指して二人は歩き出した。

37 秋池の目は語る（前書き）

秋池に会うため「源」を訪れた俊作とヒナコだが…

37 秋池の目は語る

「源」に入店する俊作とヒナコ。

店内をさらりと見渡す。

秋池の姿は見えない。

キッチンにでもいるのだろうか。

俊作とヒナコは、テーブル席に案内された。

幸運なことに、店内のほぼ全体が見渡せる角の席だ。

なお、任務中につきアルコールの類は注文しない。

そわそわしているヒナコに、俊作が小声で注意を促す。

俊作「くれぐれもあからさまに秋池さんを探すような仕草はやめてくださいね。しばらく様子を見て、それでも見当たらないようなら店員に頼んで呼んでもらいますから」

ヒナコ「はい」

俊作「まあ、この席はちょうど店のほぼ全体を見渡せる位置にあることだし、普通に食事するふりでもしてれば視界に入るかもしれないませんね」

ヒナコ「そうだといいですね……」

そう答えるヒナコの声は、やはり落ち着いていない。とりあえずこのまま何もしないよう、俊作はヒナコに指示を出した。

しかし、いくら待てども秋池がホールに出てくる気配はない。

そんなに忙しいのだろうか？

ヒナコに比べて余裕の表情を見せていた俊作も、さすがに落ち着かなくなってきた。

俊作は、たまたま近くにいた男性店員をつかまえた。

俊作「あの……この店に秋池さんって方が働いてますよね？」

男性店員「え……はい」

男性店員は少し戸惑っているようだ。

俊作「自分ら秋池さんの知り合いなんですよ。彼がここで働いてるって聞いてきたもんで。ちょっと呼んできてもらえますか？」

男性店員「あ……はい。少々お待ちください」

一旦キッチンへ引つ込んでいく店員を見て、俊作は「秋池について尋ねてほしくなかったのだろうか？」と直感的に思った。

男性店員の態度が、少し面倒くさそうに見受けられたからだ。

しかしながら、そんな俊作の直感とは裏腹に、秋池がキッチンから周囲をキョロキョロと見回しながら姿を現した。

ヒナコ「秋池さん！」

不可抗力だった。

俊作が止めるより前に、ヒナコが秋池の方向に体を向けて、嬉しそうに手を振っていた。

俊作は、神宮前警察署を出て板橋の事務所へ戻った時のことを思い出していた。

どこからともなくロック・ボトムの構成員と思しき連中が現れ、俊作の後をつけてきた。

ここは渋谷の道玄坂。

連中のテリトリー内だ。どこで見ているかわからない。

目立つ行動をとれば、一緒にいるヒナコにも危険が及ぶ。

俊作は周囲の人間に対し、神経をアンテナのように張り巡らせた。

ヒナコ「秋池さん！」

秋池は、驚きを露にしながら俊作とヒナコのいるテーブルまで歩いてきた。

秋池「ヒナコちゃん……？ どうしてここへ……？」

ヒナコ「こちらの方に聞いたんですよ。秋池さんがここで働いてるって」

俊作と秋池の目がピタリと合った。

秋池「……」

俊作「…秋池さんだな」

秋池「そうですね」

俊作「時間がないからあいさつは省略させてもらう。オレは柴田。あんたに話がある」

秋池「何ですか？」

俊作「10日ぐらい前に、オレは同じ会社の同僚とこの店で食事してたんだけど、どんな様子だったかを聞きたいんだ」

秋池「…いやあ………どんな様子だったかと聞かれても………そんな前のこと覚えていませんよ」

俊作「覚えてない？」

秋池「ええ。毎日たくさんのお客さんがいらっしやるんです。そんな一人一人顔なんか覚えられません」

俊作「そんなはずはない。秋池さんは抜群の記憶力を持ってるって聞いたんだけどな」

秋池「えっ？ 誰です、そんなこと言ったの？」

俊作「彼女だよ」

俊作はヒナコを指差した。

秋池「……」

今度はヒナコと秋池の目が合う。

心配そうな目で、ヒナコが秋池の顔を覗き込む。

俊作「秋池さん、つきあいの長い彼女の前でもウソをつく気か？」

秋池「何なんですか？ ボクはホントに知らないんです」

俊作「クラブのオーナーやってた時は、常連客の誕生日まで覚えてたらしいな。そこまで記憶力のいい人間がまったくオレの顔すら覚えてないってのはちょっと変だな」

秋池「そりゃ、クラブとダイニングバーじゃ店の広さが違いますから」

ヒナコ「秋池さん、“人の顔を記憶できるのが特技”じゃなかったんですか？」

秋池「だけど、そうは言ってもこうたくさんお客さんがいたらさすがに無理だよ」

ヒナコ「そんな……」

俊作「話に聞いてた人物像とは違うな。かなりマメで、鴨川さんの誕生日を毎年祝ってくれてたらしいじゃないか。彼女のお兄さんだつて、あんたが客の顔を忘れるはずなんてまずないだろうって言うてたぞ」

秋池「マスターが……」

秋池の目が、少しだけ遠くへ行っているように見えた。

ヒナコ「……兄は、今ケガをして入院しています」

秋池「えっ？ どうしたの？」

ヒナコ「ついさっき襲われたんです…黒野に」

秋池「黒野……」

俊作「知ってるよな？ あんたのクラブを営業停止に追い込んだ男だ。マスターはヤツの仲間に襲われたんだ」

秋池「何でマスターがそんな目に……？」

ヒナコ「柴田さんが、今日の昼間、黒野の仲間がウチのカフェへ嫌がらせしに来たのを助けてくれたから…その仕返しにやられたんです」

秋池「ちよつと待って。話が繋がらないよ。マスターがやられたことと、今ヒナコちゃんたちがここへ来たのとどう関係があるんだ？」
俊作「オレが今調べてる事件に関係している」

秋池「事件？」

俊作「ああ。だからオレが10日前のことを聞きに来たんだ」

ヒナコ「秋池さん、ホントに覚えてないんですか？」

5秒ぐらいだったか、秋池が沈黙した。

もしかしたら、少し動揺しているのではないか？

俊作はその表情を見逃さなかった。

秋池「…ごめん。せつかく来てもらって申し訳ないけど、何度聞かれても答えは同じだよ。この柴田さんという人が同僚の女性とどんな様子で食事してたかなんてわかんないよ」

ヒナコ「そうですか……」

言っただまま、ヒナコはうなだれてしまった。

秋池「その時の様子なら他のスタッフに聞いてみたらどうかかな？」

10日前店に出てたスタッフなんてオレ以外にも何人かいたわけだし」

ヒナコ「……」

明らかに、ヒナコの表情は腑に落ちない感じだ。

秋池「じゃあ、まだ洗い物残ってるから……」

秋池が後ろを振り向かないうちに、俊作が素早く立ち上がった。

俊作「秋池さん、やっぱウソはいけねーな」

秋池「…え？」

俊作「あの日のこと、ホントは覚えてたな？」

秋池「いや、ですから覚えてないって言ってるじゃないですか」

俊作「…じゃあ、どうしてオレと食事した相手が女だってわかったんだ？」

秋池「…？」

俊作「オレは“同じ会社の同僚とこの店で食事してた”って言っただけで、相手が女性だなんて一言も言わなかったぜ？」

秋池「はっ！」

フリーズする秋池。

俊作「覚えてないとわかんないよな？」

秋池「う……」

ヒナコ「秋池さん……」

俊作「話してもらおうか。その様子だと、一連の事情も知ってそうだ」

秋池「……今は話せない」

俊作「いつなら話せるんだ？」

秋池「今日は12時にあがる予定です。その頃もう一度店の前まで来てくれませんか？」

俊作「それは危ないな。黒野やその仲間に監視でもされてたら……」

秋池「柴田さん、あなたはボクの事情に詳しいですね」

俊作「まあ、いろいろ調べたからな。じゃあ、この番号に連絡をくれ」

俊作は、テーブルに設置されていたアンケート用紙に自分の携帯電話の番号を走り書きして秋池に手渡した。

秋池「わかりました。では」

秋池は小走りでキッチンへと戻っていった。

ゆっくりと着席した俊作は、ノンアルコールカクテルをぐいっと飲み干した。

俊作「…ウソはつけないタイプなんですね、秋池さんは」

ヒナコ「そうですね。あの人は正直なところがあります。でも、そこがいいんですよ」

そう語るヒナコの目はイキイキしている。

これは、もしかや……？

不意に、俊作は微笑ましそうな目をした。

ヒナコにも、その表情の変化ははっきりわかった。

ヒナコ「柴田さん？　どうかしましたか？」

俊作「……いえ、何でもありません」

俊作はややうつむき加減で微笑んだ。

ヒナコ「そ、そうですか……」

俊作「さて、そろそろ行きますか。純たちが待ってる」

ヒナコ「あ、はい。行きましょう！」

店を出た俊作とヒナコ。

俊作が純に電話をする。

そう遠くない場所にいたようですぐ迎えに来れるとのことだったが、1ヶ所に止まっていてはロック・ボトム^{ボトム}の連中に見つけられやすいだろうとのことと、どこか別に場所でおち会うことにした。

俊作「…じゃ、109の前で」

俊作とヒナコは109へ向かった。

到着すると、既に純たちは到着していた。

純「お疲れ。どうだった？」

俊作「やっぱり秋池はオレのことを覚えてた。忘れたなんてウソだった」

純「そうか。ウソをついた理由までは聞けたか？」

俊作「いや、あの場じゃ聞けなかったけど、今日は12時に仕事が終わるらしいから、その後で連絡くれるって」

純「OK、いいぞ。でかい収穫になりそうだ」

俊作「そうだな」

純「じゃあ、さっさとスペイン坂へ行くとするか。俊作はどうする？ 一緒に来るか？」

俊作「おう、行こう」

創「しつかり頼むぜ」

俊作「お前もな。鴨川さんをちゃんとガードするんだぞ」

ヒナコ「よ、よろしくお願いします…」

創「はいよお！ 任せときな！」

創の声が高音域に達している。

純「ロッキー、お前テンション高くなってねーか？」

創「あ？ 気にしない気にしない！」

純「……」

実家暮らしとはいえ、やはり美女がやってくるのは嬉しいのだろう。

そんな気持ちだが、創の顔からにじみ出ていた。

俊作「そうだ、のぶちゃんはどうする？　このままロッキーに送ってもらおう？　それとも電車で帰る？」

伸子「そうねえ……じゃあ、送ってもらおうかな」

俊作「そうか。ロッキー、のぶちゃんも送ってってくれ」

創「どこまで送ればいい？」

伸子「中野駅まででいいよ。うち、駅から近いの」

創「了解！」

純「おい、失礼のないようにするんだぞ。こんなおいしい機会はそうそうねーんだからな」

創「うるせえ！　おめーらもしっかり調べてこいよ！」

純「はいはい、わかってますよ。んじゃ、行こうぜ俊作」

俊作「おう。みんな気をつけてな」

純のウイングロードは、俊作を乗せるとスペイン坂を目指して走り出した。

二人の後ろ姿を見て、創がつぶやく。

創「まったく純のヤツは……」

伸子「みんな、仲がいいんだね」

伸子も、ニコニコ微笑みながら俊作と純の後ろ姿を見ていた。

創は、急にはにかみ、八チ公前のスクランブル交差点方面に目をやる。

相変わらず、人と人が、互いに、編み目を抜けるように行き交っている。

創「　まあ、昔から一緒につるんでるからね。腐れ縁なのかな」
伸子「ふふふっ」
創「……さあ、オレらも行くと思いますか」

創は、まずJR中野駅に向けてイプサムを走らせた。

38. She lives in Daikanyama (前書き)

三度「RYU・JIN」を訪れた俊作と純。羽村佐知絵の自宅住所
をつきとめることができるのか？

スペイン坂のクラブ「RYU-JIN」。

到着するや否や、俊作と純は、事件前の佐知絵と黒野の様子について聞き込みを始めた。

パツと見たところ、この日の日本人客と外国人客の割合はちょうど半々ぐらいだ。

日本人客は俊作、外国人客には純がそれぞれ聞き込みにあたった。

また、当初は江坂千里に佐知絵の現住所を確認する予定だったが、ここで佐知絵をよく知る人物に出会うことができたら一緒に聞いてみることにした。

聞き込みを開始してみると、「佐知絵と黒野が一緒にいる光景はよく見かけるが、具体的に何を話しているかまではわからない」という返答が多いのに気づく。

「そりゃそうかもしれない」と思いつつも、俊作と純は粘り強く聞き込みを続けた。

やがて、このクラブで佐知絵と知り合ったというアメリカ人男性と日本人女性のカップルを、純が探し当てた。

純「いつ頃から彼女と顔見知りになったの？」

英語で話しかける純。

(「」〓大カツコは、英語で会話していることを表す)

アメリカ人男性「んー…ここ一年ぐらいかな。オレの連れが先に知り合っただ」

日本人女性「そうそう。前から見かける顔だったから話しかけたの。そしたら意気投合してね。あの子、外国人の顔見知りが多くてビツクリしちゃった」

アメリカ人男性「ああ。オレの友達でも、前からサチエを知ってるってヤツが結構いるからな」

日本人女性「フレンドリーだね、サチエって」

アメリカ人男性「そうだね」

純「二人は彼女とどれくらい親しいの？」

日本人女性「どれくらいかな？ 何回かあの子の家で飲んだりしたよね」

アメリカ人男性「ああ。飲んだ飲んだ。サチエは酒が強くて、最後まで潰れなかったよな」

ここでも佐知絵が酒に強いという証言が出た。やはり俊作と飲んだ時に泥酔したのは芝居だったのか。

純「そんなに飲むの？」

アメリカ人男性「Oh, yes! そりゃすげーよ。いくら飲んで変わらないんだ。サチエはサイボーグじゃないかと思ったよ」

純「へえ……てつきりほんの数杯で酔いそうな感じだけだね、見た目」

アメリカ人「No! それはまずあり得ないよ! このクラブでサチエを知る人間なら、誰もがそう答えるはずさ」

間違いない。

泥酔したのは芝居だ。

純「なるほどな…。ところで、最近彼女の家に行ったのはいつ？」
アメリカ人男性「えーと……いつだっけ？」

日本人女性「お盆の前ぐらいだったから、2ヶ月ぐらい前じゃない？」

アメリカ人男性「おお、そうだった！」
わりと最近だ。

純「彼女、どの辺に住んでるの？」

アメリカ人男性「代官山の方だよ。近くに中学校があるんだ」

純「中学校ねえ……。彼女は一人暮らし？」

アメリカ人男性「そうだよ。いいマンションに住んでるんだ」

純「マンションの名前はわかる？」

アメリカ人男性「ごめん、そこまではわかんないな。だけど、マンションの真正面にピザ屋があるからわかりやすいと思うよ。入口もオートロックになってるし」

純「中学校の近くで、なおかつピザ屋の正面にある、玄関がオートロックのマンション…ね。あと、何階の何号室に住んでるのかはわかる？」

アメリカ人男性「204号室だよ」

純「204…と。ありがとう。すまないね」

純はさらさらと手帳にペンを走らせた。

日本人女性「でも、そんなこと聞いてどうするの？ あの子、何かしたの？」

日本人女性が日本語で尋ねる。

純「いやあ、オレの友達が学生時代あの子に惚れてて、今でも忘れられないんだって言うから…」

慌ててごまかす純。

日本人女性「あら、そうなの。でも今は諦めたほうがよさそうね」

純「何で？」

日本人女性「あの子、怖そうな人ときあってるから。ヘタに追い回すと痛い目に遭うかも」

純「痛い目って…どんな彼氏だよ、それ」

日本人女性「うーん…よくわかんない。IT系の仕事してるらしいけど、見た感じチンピラみたいだよ」

日本人女性は不快そうに言った。友達の彼氏とはいえ、やはり黒野の立ち振舞いは見ていて気持ちのよいものではないのだろう。

日本人女性「せいぜい殺されないようにね」

純「…わかった（苦笑）。伝えとくよ。ところで、サチエちゃんの彼氏には会ったことあるの？」

日本人女性「うん。よく二人で来るから」

純「どんな様子なの？ 結構ラブラブ？」

日本人女性「もうずっとベタベタくっついてるよ。どっちかっついてたら、サチエのほうからくっついてる感じだね」

純「へえ…。そんなにくっついて、いったいどんな話をしてんだらうね」

日本人女性「わかんない。いっつも内緒話みたいにヒソヒソと話してるんだもん」

純「そうか…わかった。ありがとう！」

純は日米のカップルに何度も頭を下げ、俊作のもとへ素早く駆け寄った。

純「おい、羽村佐知絵の住処がわかったぞ」

俊作「マジ？ どこだ？」

純「代官山方面だ。マンションに一人暮らしをしてるらしい」

俊作「え？ じゃあ…」

純「そうだ。鴨川さんの証言と一致するかもしれない」

俊作「いよいよヤツのウソがちょっとずつ明るみに出そうだな」

純「そうだな。まさかこうも早くヒットするとはな」

俊作「ああ。あとは羽村と黒野の具体的な会話内容さえわかればいんだけど…」

純「なんか、みんな“具体的な会話内容まではわからない”って言うんだよな」

俊作「どうする？ もうちょっと粘ってみるか？」

純「うむ……もうちょっとだけな。それ以上は時間の無駄だ」

俊作「せめて、また二人揃ってここに現われてくれたらなあ……」

純「まあ、わざわざ二人がここに来るのを待つ必要もないだろ。つき合ってたったらどっちかの家でそういう会話をする可能性だってあるんじゃない？」

俊作「確かに。じゃあ、羽村のマンションで張り込んでみるか」

純「よし、とりあえず行ってみよう」

俊作と純は佐知絵の自宅マンションがあるという代官山方面へと急いだ。

羽村佐知絵のマンション「サンライトイエロー代官山」は、東急東横線代官山駅から北に徒歩5分ほどの位置に、魅力的なルックスを兼ね備えながら佇んでいた。

建物のほぼ全体が見える位置に車を止め、ざっと外観をなめまわすように見てみる。

マンションは地上7階建て。

谷状のため勾配が厳しい渋谷特有の地形も手伝ってうまいこと周りの風景に溶け込んではいるが、やはりこの洒落た外観だとどうしても目立ってしまいがちだ。

クラブで得た情報通り、真向かいにはピザ屋があり、2〜3軒西に行くと中学校もある。地形的に、中学校のほうがやや高い位置にある。

俊作「羽村はこの204号室にいるんだったな。部屋の位置を確認しようぜ」

純「ああ」

まず、西側にある入口のインターホンで部屋数を確認する。

このマンションは1フロアあたり8部屋ある。

つまり、1階なら101号室から108号室までであるということになる。

純「ちくしょう、まだ若いのにこーんない所に住みやがって。よっぽど金回りがいいんだな」

俊作「妬くな妬くな。どんな寢床だろうと“住めば都”だよ」

純「そうだよなあ……って、それ慰めてんの？」

俊作「そうだよ？」

純「そう……」

純は少しばかり次元の違いを思い知らされた気になった。

そう思うと、「早くこの女の化けの皮を剥いでやろう」という気持ちがいっそう強まっていく。

俊作と純はマンションの2階部分をサッと見回した。

このマンションは、上から見るとL字の形をしている。

入口から4部屋目で曲がり角に直面しており、その先は道に沿って北側に折れている。

なお、ベランダは道路側にある。

8部屋中、明かりがついているのは6部屋だ。
普通、部屋番号はマンションの入口に近いほうからつけられるもの
だろう。

したがって、入口側から数えて4つ目が佐知絵の部屋と考えて間違
いない。

その部屋の明かりは………ついている。

おそらく、佐知絵は在宅中だ。

俊作「今日は家でまったりとしてんのかな」

純「一応、張り込んでみよう」

俊作「おう」

ここで創にもらった携帯電話型万能カメラ（高性能集音マイク機能
付き）を使えば証拠集めが楽になるであろうが、後で「盗聴（もし
くは盗撮）された」などと騒がれては困るのでうかつに使うことは
できない。

車に戻り、俊作と純はシートを少し倒して視線をマンションに集中
させた。

俊作「なんか、刑事みてーだな。張り込みなんかしちまつてよ」

純「そうだな。だけど、人を調べると張り込みはつきものだけ」

俊作「あんパンでも買ってこようか？ 腹減ってねえ？」

純「………そうだなあ。何か食うか」

俊作「じゃあオレが買いに行ってくるよ」

純「ホント？ じゃ頼むわ」

俊作「何食うんだ？」

純「あんパンとコーヒー牛乳」

俊作「それだけでいいのか？」

純「ああ」

俊作「そう。じゃ、行ってくる」

純「待て」

俊作「何だ？」

純「簡単な変装をしていけよ。関係者に出くわしたり近隣の住民に怪しまれたら調査に支障をきたす」

俊作「あ、そうか」

俊作は、長髪男性のカツラと野球帽をかぶってコンビニへ出かけた。

純は、タバコに火をつけようとした。

しかし、窓が閉まっている。

キーを回し、ほんの数センチだけ窓を開けてから、純はタバコに火をつけた。

立ち上る煙が、我先にと、わずかな窓の隙間から懸命に外の世界へ這い出ようとしている。

今日は、特にこれといった行動はとらないようだ。俊作が戻ってしばらく張り込んだら引き上げるとしよう。

そう思いながら、純がタバコの火を消そうとした時だった。

2階の、入口から4つ目の部屋　つまり2階の角部屋の明かりが消えた。

「おっ」と、純が思わず声をあげる。

佐知絵が外出するのだろうか？

すーっと息を呑み、窓の下に隠れるか隠れないかといったギリギリの高さまで頭を下げ、マンションの入口を瞬きすることなく注視する。

程なくして、全面ガラス張りのドアに人影が浮かびあがる。

純「……」

白のスニーカー（メーカーまでは確認できず）。

カーキ色のスキニーパンツに、ライトグレーのジップアップパーカー！。

そして小さなバックを左腕に引っかけている。

佐知絵だ。

39・鉢合わせ(前書き)

羽村佐知絵が向かう先は…？

マンションから佐知絵が出てきた。

ラフな格好ではあるが、「ちょっとそのコンビニまで」といった様子ではない。純の直感がそう判断した。

何だろう？

佐知絵はマンションを出ると、先程俊作が歩いていったのと同じ方向に歩き出した。

急いで俊作に電話。

俊作「えっ？ マジ？」

電話の向こうから、抜けるようなトーンの高い声が返ってくる。

純「ああ。お前、今コンビニか？」

俊作「ああ。今パンを選んてる」

純「それじゃあ、そのまま羽村の様子を探ってくれないか？ “ち

よっとそこまで”って感じがしねーんだ」

俊作「誰かと会つのかな？」

純「たぶんな」

俊作「それなら、純も車でこっちまで来てくれると助かる。こっちに向かいながら羽村の後を追えるだろ」

純「そうだな。だけどそれは限界があるぞ。途中で追い抜かなきゃ怪しまれる」

ちなみに、佐知絵のマンションから俊作が向かおうとしているコンビニの距離はおよそ200メートルほど。途中で十字路や丁字路は

なく、一本道となっている。

俊作「いや、コンビニまでたいした距離じゃねえ。おまけにずっと一本道だから、追い抜いたとしてもバックミラーで羽村の姿を確認できるはずだ」

純「そうか。それだったら大丈夫そうだ。じゃ、そっちに行くよ」

電話を切ると、俊作は雑誌コーナーに立ち、週刊誌を手を取った。

雑誌を低めに構え、外から口元が見えないようにする。立ち読みするふりをしながら佐知絵が来るのを待つ。

5分も経たないうちに、佐知絵が携帯電話の画面を覗きながらコンビニの前を素通りしていった。

それを確認すると、俊作は何食わぬ顔で店を出た。

十分な距離をとりつつ、佐知絵の後を追う。

すると、佐知絵が通話をし始めた。

前方に向かって聴覚を研ぎ澄ませる俊作。

しかし、話し声が小さいのでよく聞き取れない。

すかさず、携帯電話型万能力メラを懐から取り出す俊作。カメラに付いている集音マイク機能を利用して佐知絵が話している内容を聞き取るのだ。

本体にイヤホンを接続し、マイクのスイッチをオンにする。

わずかなノイズと共に、佐知絵の声や足音がイヤホンから流れてくる。

彼女はどんな話をしているのだろうか。

佐知絵『……はい。この先の公園ですね』

この先の公園？

やはり誰かと会うつもりなのだろうか。

佐知絵の10メートルほど先、俊作から見ても左側には、確かに小さな公園がある。佐知絵が向かうとすればここだろう。

注意深く佐知絵の行動を見張る俊作。

公園に差し掛かった。

佐知絵の姿が道路の左側に消えた。公園の中に入ったのだ。

俊作は小走りで公園のゲートまで近づくと、物陰から中を覗き込んだ。

いちばん奥にジャングルジムがある。

その更に奥、道路側とは反対側の壁に沿って佐知絵は立っていた。

その佐知絵と向かい合うように、一人の男が立っている。

黒のジーンズに黒のジャケット、黒のブーツ。

身なりからして若い男であることはすぐわかるが、着ているモノが

黒ばかりで夜道では目につきにくい。更にその男は、黒のベースボールキャップを深く被りサングラスをしているので、口元以外はどんな顔つきなのかがよくわからない。

しかし、この男の正体を突き止める判断材料を何も顔だけに限定する必要はない。体格や仕草、声なども十分参考になる。

俊作は、万能カメラをオンにしたまま、公園内で身を隠せそうな場所を探した。

もう少し近寄ってあの男の特徴を捉えておきたい。それに、佐知絵はこの男にいったい何の用があるのだろうか。

しばらく見渡してみるも、適当な場所は見当たらない。

仕方ない。

目一杯、望遠機能を駆使して撮影しよう。

本体のズームボタンを押す。

わかりきっていたが、画像がかなり粗くなった。

それにあの男が全身を黒一色で固めていたら、余計に特徴がわかりにくくなるではないか。

……失敗したかな。

いや、辛うじて二人の話し声は録音できている。全く無駄というわけではない。

会話の内容に耳を傾ける俊作。

これまでは挨拶程度の会話しかしていない様子だったが……。

男「ところで、約束の“アレ”は持って来てくれた？」

「アレ」？

何のことだ？

佐知絵「はい」

言うと、佐知絵はバッグから茶封筒を取り出した。中身が入っており、少し膨らんでいるのがわかる。

何だあれは？

大きさから推測すると、もしかしたら……。

茶封筒を受け取った男は、期待に満ちた目でその中に指を突っ込んだ。

次に指を引き上げた時、その指先は何やら長方形のモノを釣り上げていた。

それを見て、男が満面の笑みを浮かべる。帽子とサングラスで目元がわからないだけに、その口の大きさがかえって際立っている。

茶封筒の中身は現金だった。しかも、福沢諭吉がカメラで確認できるだけでも20人はいるだろう。

男「おおー…ちょっと色つけてんじゃん」

佐知絵「ちよつと、独り占めしないでくださいよ。あなただけの報

酬じゃないんですからね』

男『わかつてるよ。ちゃんと渡しとくからさ。しかし、オレ一人分だけでも多くねえ？』

佐知絵『ふふふ。ちよつとサービスしてくれたんですよ、あの人』

男『そうか。よっぽどの男を会社から追い出せて嬉しかったんだな』

「あの男」 俊作のことか。

佐知絵『 でしょうね。いろいろ嫌がらせしてましたから』

男『無理矢理顧客を取り上げたうえに新規開拓を強制したり、合間を縫ってはイヤミや罵詈雑言で精神的に追い込むたあご苦労なこつた。それで拳げ句の果てには 』

佐知絵『ちよつと。あんまりベラベラ喋らないでくださいよ。本人に聞かれたらどうするんですか』

もう既に一部聞かれていますか……。

男『おつと。ごめんごめん』

男が後頭部をボリボリと搔く。

袖口から、シルバーの腕時計が顔を除かせた。文字盤が武骨な感じで、バンド部分に炎のような彫り物が施されている。確かあれは一昨年発売された限定モデルだったはず。実は俊作も買おうとしていた品だ。

男『 しかし、権力つてのは恐ろしいもんだねえ。それでも会社から何の処分もされないのは、やっぱコネ入社のおかげなのかね』

佐知絵『それだけじゃないと思いますよ。あの人、何やら秘密道具みたいなモノを持ってますからね』

男『秘密道具？ もしかして……』

佐知絵『そう。こないだも話したでしょう？』

男『あれか……あれを出されちゃかなわんよ』

話の流れから察するに、「あの人」とは笹倉のことだろう。そうなる
ると、「秘密道具」は例のソフトウェアを指すということになって
くる。
やはり、推測していた通り、俊作の発注書作成ミスや藤堂が見たメ
ールは笹倉が仕組んだ罠だったのだろうか。いよいよその可能性が
高くなってきた。

！

人の気配を感じる。

後を追ってきた純が、車を降りてこちらに歩いてきたのか？
いや、違う。

近づいてくる足音が複数である。二人以上はいるだろう。

何者だ……？

「何やってんだ、そんなところで」

この品のない声には聞き覚えがある。

黒野だ。

瀬高とジャッカル男もいる。

俊作「黒野……！」

「ちっ」と、俊作は舌打ちをした。
まさか見つかるとは。

黒野「おい、よく見りゃあの柴田じゃねーかよ！ 変態の柴田だ
ア！」

夜にもかかわらず、大声でバカ笑いする黒野。

ジャツカル男「この野郎、あん時の用心棒じゃねーか！」

黒野「用心棒？」

ジャツカル男「はい。鴨川の所にいたんすよ」

黒野「ほう……」

黒野はニヤリと薄ら笑いを浮かべた。

瀬高「フツ、まさか噂のセクハラリーマンがカフェの用心棒とはな」

黒野「笑っちまうよなア！」

再びバカ笑い。今度は瀬高も一緒だ。

俊作「……うるせーなあ、バカ笑いしやがって。少なくとも、てめーらのやってることよりはマシだと思うがな」

黒野「あ？」

俊作「暴力を以て周りの人間を抑えつける。いかなる意見や申し出も許可しねえ。非人道的なやり方だぜ？」

黒野「“治安維持”って言ってもらいてーな」

俊作「フン、さしずめ“現代版芹沢鴨”ってとこだな、てめーは」

黒野「誰だよセリザワって！」

俊作「わかんなかったら中学生に戻って日本史を勉強し直してこいよ」

瀬高「何が言いてーんだ！」

俊作「人の痛みがわかんねえ、きわめて頭の痛い野郎ってことだ。

何の罪もねえカフェのマスターをよくもやってくれたな」

瀬高「あれは向こうが悪いんだ。おとなしくしてりゃいいものを」

俊作「あの人が何をしたってんだ。てめーらがあの街でだけーツラしなけりゃいい話だろうが」

瀬高「この変態め、オレらにエラそうな口ききやがってー！」

瀬高がずいっと一歩前へ出ようとするのを、黒野が制する。

黒野「まあ待てよ。こいつには何を言っても通じねーぜ」

「それはこっちのセリフだ」と言いたい俊作。しかし黒野は間髪入れずに話し続ける。

黒野「おい柴田、何でオレらがお前を見つつけられたと思う？」

俊作「…は？」

いきなり何を言い出すのだろう。

黒野「“は？”じゃねーよ。質問に答えろって」

俊作「…知るかよ、そんなの」

黒野「そうだよなあ！ わかるはずねーよなあ！ そもそも答える気はねーけどよ！ ギャーッハッハッハッハ！！」

俊作は確信した。

こいつは相当な低能だ。

あのように質問することで「自分がいかにすごいか」をアピールしているのがバレバレなのだ。

何故、自分が黒野たちに見つかったかぐらいはだいたい察しがつく。迂闊にも、どこかでロック・ボトムの誰かに見張られており、その見張り役が黒野に連絡をしたのだろう。

…やれやれ。

「はあ」とため息を吐き、俊作はふと公園内へ視線を移した。

俊作「…！？」

公園内には佐知絵の姿しかない。

もう一人の男はどこへ消えた？

黒野とのやり取りに気をとられているうちに逃げられたか。くそっ、なんてこった。

佐知絵「黒野くん、どうしたの……？」

佐知絵が何事かといった顔をしながらこちらへ歩いてくる。

想定外だ。

まさかこんな形で佐知絵と再会することになるとは……。

39・鉢合わせ(後書き)

BADな再会…!

40・先読み

佐知絵「黒野くん…！」

佐知絵は俊作を見つけるなり、あからさまに恐がっているような顔をして、素早く黒野の背後に隠れた。

それを見据える俊作の目つきは、ただ、ひたすら鋭さを増すだけであつた。

呆れてものが言えない　そんな気持ちに近いのかもしれない。

俊作は、「会社での佐知絵」と「会社外（主にクラブ）での佐知絵」を両方見ている。今、黒野の後ろから恐る恐る自分の様子をつかがう佐知絵は、ある意味滑稽に映つた。

佐知絵「な…何ですか…？」

俊作「……家は松濤方面じゃなかったのか？」

佐知絵「…は？ 何の話ですか？」

俊作「前にそう言つてただろうが」

佐知絵「言つてないですよ！　どうして自分のプライベートを教えなきゃならないんですか！」

俊作「おかしいな。前にメシ食つた時、お前は確かに言つたんだぜ？」

佐知絵「心当たりがありませんね」

俊作「…ちつ、忘れたのかよ。じゃあ、メシ食いに行ったことは覚えてるよな？　会社に“オレがしつこくメシに誘つた”って吹き込んだみてーだからな」

佐知絵「人聞き悪い言い方はやめてください。あたしは事実を報告

しただけです」

俊作「事実……ね。会社もアホだよな。ちゃんと調べもしねーでオレばかり悪者にしゃがって。それだったら、言い方一つで事実なんていくらでも捏造できらあ」

佐知絵「いい加減にしてください！ あたしは被害者ですよ！？」

あたしがデタラメを言ってるでも言うんですか？」

俊作「だからおかしいんだって。メシ食いに行ったのは覚えてて、その後記憶がないなんて変だろ？」

佐知絵「酔ってたんじゃないですか？ 酔っ払って記憶がなくなっただか」

俊作「酔ってた……？ ああ、確かに酔ってたかもな」

佐知絵「もうこれ以上詮索するのやめてくださいよ！ トラウマでまた会社に行けなくなったらどうするんですか！」

未だかつて聞いたことがないような大声を張り上げる佐知絵。言いたいことを言い切らないうちに俊作の発言は遮られてしまった。余程この話題に触れられるのが嫌なのか。

俊作は、先程佐知絵が現金を渡した男について尋ねようと思った。だが、この調子だと答えてくれそうにない。

しかし、佐知絵が俊作に対して自宅の場所を偽っていたことはハッキリした。黒野に行動を読まれていたのは計算外だったが。

行動を読まれていた？

俊作は何か気づいた。

行動を読まれていたということは、誰かに見張られていたということになる。

見張られていたということは、ヒナコと「源」で秋池に会ったとこ

るも見られたかもしれない。しかも、秋池には俊作と佐知絵が食事をした夜の様子について話を聞くことになっている。

そうになると、秋池にもロック・ボトムの魔の手が迫っている可能性が出てくる。ましてや秋池は、もともと黒野とは敵対関係にある立場だ。

俊作（オレが黒野の立場なら、秋池の口を封じるために何らかの手回しをするはずだ）

佐知絵「黒野くん、早くやつつけちゃって！」

黒野「そうだな。二度と反抗できねーように体で覚えさせとくか」

俊作「おい、そんなことしたら傷害罪で警察に捕まるぞ？ やめとけって」

黒野「関係ねえ。オレらは“天下ホウメン”で悪者退治に出動できるんだよ」

天下ホウメン？

俊作は思わず一瞬考えてしまった。

俊作「…それ“天下御免”じゃね？」

黒野「ぐっ……！ どっ……どっちでもいいだろうが！」

顔を赤くしながら怒鳴る黒野。

俊作「やれやれ。そんな学識のねえヤツに警察が個人的に治安維持を任せるとは到底思えねーな」

黒野「コラア！ 口の聞き方に気をつけろや！ オレの言うことが怪しいってのか！」

俊作「ああ。街の人たちに恐怖感を植え付ける連中が信用できると思つか？ 普通はできねーよ？」

黒野「黙れ。オレらは“自決団”として警察と協力関係にあるんだよ」

俊作「…“自警団”だろ？ 死んでどうすんだ。よくそんな間違え方ができるな」

黒野「う……」

俊作「あーあ、なんかアホらしくなってきた。帰るぜオレは」
もちろん、まっすぐ帰るつもりはないのだが（秋池が心配だ）。

黒野「待てコラ！」

俊作「やだよ。何でそんな低俗な野郎の相手しなきゃなんねーんだ。隣にいる羽村の気持ちかわからんぜ。見る目を疑うよ、まったく」

佐知絵「なっ…失礼じゃないですか！」

黒野「てめえ！ “凌辱罪”で訴えるぞ！」

俊作「“侮辱罪”だろうが、バカ野郎。つくづく恥ずかしいヤツだな。それに、てめーらのほうがよっぽど失礼だぞ。人をこんな目に遭わせやがって」

黒野「うるせえ！ 殺してやらあ！」

俊作「日本語を勉強し直してきたら相手してやるよ。じゃあな」

その場を立ち去ろうとするが、瀬高とジャッカル男が既に俊作の周りを取り囲んでいる。

瀬高「逃がさねーぞ！」

瀬高が俊作の肩を掴む。

俊作「しょうがねーなあ……」

俊作は素早く瀬高に組みつき、首相撲の状態を作った。そのまま間髪入れずに瀬高を引き摺り回し、バランスを崩したところで黒野とジャッカル男が立っている方向へ乱暴に投げ捨てる。

瀬高は、黒野とジャッカル男のちよつと真ん中辺りへ勢いよく転がっていく。

黒野「ぬっ…！」

ジャツカル男「わっ！」

俊作が瀬高を引き摺り回したおかげで、黒野とジャツカル男の立ち位置が都合よく隣り合わせのような形になっていた。そんな好条件が重なり、転がってくる瀬高をよけきれなかった黒野とジャツカル男は、ぶつかると同時に尻餅をついてしまった。

黒野「てめえッ！」

黒野が野犬の如く吠えた時には、俊作は既に先程来た道を、佐知絵のマンションに向かって猛然と駆け出していた。

黒野「ぐっ……おめーら早く起きろ！」

3人とも絡まりながら転倒したため、なかなか起き上がることができない。

空手とストリートファイトで鍛えられた俊作の脚力は、プロのアスリートを除けば、同年代の男性より高い。更に、持ち前の瞬発力を活かした「マリオカート」のロケットスタートを思わせる素晴らしいスタートダッシュに成功したため、黒野たちがやっと起き上がった時点で両者の距離は10メートルを超えていた。

よし。

これだけ距離が開けば追いつかれないだろう。

あとは純のウイングロードに乗ってこの場を走り去るだけだ。

そう思っていると、5メートルほど先で純のウイングロードが俊作を急かすかのようにして待ち構えていた。

純も、俊作と黒野たちのやり取りを遠くから見ていたので、次に俊作がとる行動を予測していたのだ。

予測といっても、俊作が戦うにしろ退くにしろ、純はいつでも車を発進できるようにしておくだけなのだ。

俊作の接近にあわせて、純が助手席のドアを力強く押し開けた。

純「早く乗れッ！」

俊作が助手席へ滑り込むのと同時に、ウイングロードは急発進する。悔しがる黒野たちを尻目に、ウイングロードはどんどん加速していく。

俊作「純、もう一度“源”へ向かってくれ」

純「何で？」

俊作「オレは黒野たちに行動を読まれてた。…ってことは、秋池が危ねえ」

純「……そうか、そういうことか。じゃあ急がなきゃいけねーな」
先に述べたことを、純は一瞬で理解した。
ウイングロードは、影を縫うように道玄坂へと引き返していく。

俊作が「源」へ駆け込むと、これまで何度か見かけた男性店員が応対してきた。

男性店員「秋池なら今日は早退しましたよ」

俊作「えっ？」

早退しただと……？

俊作「早退……って、何かあったんですか？」

男性店員「さあ……詳しいことはわかりませんが、急に体調でも悪くなったんじゃないですかね」

俊作「そんなはずは……。だって、さっき会った時は元気そうでしたよ？」

男性店員「じゃあ急用でもできたんでしょう」

俊作「じゃあ……って、本人から何も聞いてないんですか？」

男性店員「はい。いつ帰ったのかもわかりませんでした」

俊作「それじゃ、どうして早退したってわかるんです?」

男性店員「聞いたんですよ、他のスタッフから」

俊作「そのスタッフって誰ですか?」

男性店員「彼も、もう帰りました」

俊作「そうですか……」

男性店員「あの、もう仕事に戻っていいですか?」

俊作「あつ、あと一つだけ!」

男性店員「……何ですか?」

男性店員は嫌そうな顔をした。

俊作「秋池さんをこの店に紹介したのはどなたですか?」

男性店員「は?」

俊作「彼はもともとクラブのオーナーだったと聞いてます。クラブが無期限の営業停止になってしまい、再開までの間にここを手伝っているとか……」

男性店員「知りません」

男性店員はきつぱりと言い切った。

俊作「いや、だけど……」

男性店員「申し訳ありませんがお引き取りください。まだ仕事ですので」

言うと、男性店員は店の奥へ引っ込んでしまった。

仕方なく退店し、再びウイングロードに乗り込む俊作。

俊作「次は秋池のマンションだ。急げ!」

純「OK! ヤツは既に店を出てたんだな?」

アクセルを踏みながら純が言う。

俊作「ああ、そうだ。急がんと大事な証人を失うことになる」

純「そうだな。めんどくさくならんうちに秋池の安全を確保しなきゃな!」

純のウイングロードは、八チ公前のスクランブル交差点から一気に加速し、ガード下を通過して宮益坂交差点を減速することなく左折すると、明治通りを颯爽と走り去っていった。

原宿に差しかかり、車は裏路地へと入っていく。

間もなく、秋池のマンションが見えてきた。彼は無事だろうか。

俊作「ん？」

俊作が、マンションの前に灯る赤い光に気づいた。

純「どうした？」

俊作「車だ。マンションの前に車が停まってる」

純「車…？」

前方に視神経を集中させる純。

確かに、黒いワゴン車がマンションの前に停車している。テイルランプが点灯していることから、エンジンはかかったままだ。俊作が見た赤い光はこれのことだろう。

純「何だ、あの車」

俊作「一応調べてみるか。お前は先に秋池の部屋へ行ってくれ」

純「よし。そうしよう」

純が車を、ワゴン車の7〜8メートルほど後ろに停めると、先に純が車を降りた。

俊作は、助手席からじっとワゴン車の様子をつかがう。

エンジンがかかっている、ということは車内に誰かがいる。そう考えるほうが自然だ（中にはエンジンをかけっぱなしで車を離れる人もいるが）。

しかし、ワゴン車の窓ガラスにはスモークがびっしりと貼られているため、車内を肉眼で確認するのは難しそうだ。

原宿の一角で、黒いフルスモークのワゴン車がアイドリリングストップ。誰が見ても怪訝に思うのではないだろうか。そもそも、アイドリリングの時点でマナー違反である。

念のため、ナンバーを控えておこう。メモをとるより、この万能力メラで撮影したほうが早い。

俊作はカメラをセットした。

俊作「！」

なんと、ナンバープレートの半分から先が、直角に折り曲げられている。

気がつかなかった。

これでは、近づかない限りナンバーがわからないではないか。エンジンが稼働中である以上、車に接近するのは確実に怪しまれる。

誰の車なのだろう。

ナンバーをわかりづらく細工してあるということは、走り屋か、暴走族か、それともあるいは……。

こうなれば、このワゴン車を見張るしかないだろう。

俊作は、携帯電話で純に連絡をとろうとした。

ところが、一向に出る気配がない。何度かけ直しても虚しく呼び出し音が鳴り響くだけだ。

おかしい。

秋池の部屋を見に行くだけなら電話に出られるはず。

純の身に何か起きたのだろうか。

俊作は、小走り気味にマンションの中へと入っていった。

40・先読み（後書き）

純に何があつたのか？

41・タツチの差

秋池の部屋は2階の角だ。走って行けば1分もかからないだろう。

俊作は、入り口からいちばん近くにある階段を駆け上がった。

踊り場に差し掛かった時、一人の男がせわしない様子で駆け下りてきた。

思わず横に飛び退く俊作。

しかし、その男の特徴はしっかりと脳内にインプットしていた。いや、せずにはいられなかった。

体格はだいたい俊作と同じくらいか。雨が降っているわけでもないのに、全身をレインスーツでかためている。

バンダナで口元を隠し、目にはサングラス、更には野球帽をかぶっている。顔がわからない。それよりか、どう見ても怪しい。

こんな怪しい風体の男を、俊作が見過ごすなんてことは有り得ない。

しかし、純の様子も気になる。

俊作は、その男をやりすごすと、階段を2階まで駆け上がった。

秋池の部屋目がけて突撃するかのよう通路を駆け抜けていく俊作。

いた。

純が、苦しそうな顔で床に横たわっていた。

俊作「純……！」

どうやら純は気絶しているようだ。

俊作「おい、純ッ！ 起きろ！」

軽く肩を叩いたり揺らしたりして、純を起こそうとする俊作。こんな時、あまり激しく動かしてはいけないだろう。しかし、それはわかっているけれども、今現在の状況を把握するために、そして純の無事を確認するために、俊作は次第に純を強く揺り動かしていくのだった。

純「……う……う……」

気がついたようだ。

俊作「純！」

純「ん…俊作か……」

俊作「大丈夫か？」

純「う…頭が痛え」

左手で後頭部を押さえながら、純が唸るように低い声を絞り出す。

俊作「何があつた!？」

純「…確か……後ろから殴られて………はっ！」

純の身体が、急に跳ね上がる。俊作もビククリして後ろに飛び退いた。

純「急いで車に戻るぞ！」

俊作「え？」

純「秋池が拉致された！ ロック・ボトムのヤツらがいやがったんだ！ オレが来た時には、秋池はちょうど連れ出されるところだった。それを止めようとしたら、後ろから殴られて……」

俊作「何だっ！？」

俊作と純は、弾かれたパチンコ玉のようにマンションの階段を駆け

下りた。

俊作（まさか、さっきのヤツが純を……？）
エントランスホールに差し掛かった時、車のエンジン音が二人の耳に飛び込んできた。

純（この音……ウイングロードのエンジン音じゃねえ！）

身体一つ分、俊作が先に外へ出た。

その瞬間、黒く大きな物体が彼の目の前を横切った。

俊作「！！」

ワゴン車だ。

あの、黒く、いかにも怪しかったワゴン車だ。

走り去っていくワゴン車を見て、俊作はただ唇を噛み締めていることしかできなかった。

純「Shit……！遅かったか！」

俊作「あのワゴン車、どうも怪しいと思ったら、ヤツらの車だったのか……！クソがッ！やられたぜ！」

感情が昂ぶるあまり、俊作はマンションの壁に思い切り前蹴りをぶちかました。

？「何を八つ当たりしてるんだ、柴田よ？」

俊作「！？」

聞き覚えのある声が、まるで弾んだゴムボールのように飛び込んでくる。

俊作が振り返った先から、会田が夜の闇から姿を現した。

俊作「あ、会田さん!？」

会田「よう」

仕事が終わった、その足なのだろう。スーツ姿だが、シャツの襟元が緩んでおり、心なしかくたびれているように見える。それにネクタイもしめていない。

俊作「こんな所で何やってんすか？」

会田「ちよつと友達と会ってたんだよ」

俊作「そうですか……あ、すみません、ホントならゆっくり話したいんですけど、今ちよつと急いでるんです」

会田「…そうなんだ。もしかしたら、アレか？ 自分の無実を晴らすための証拠集めでもやってんのか？」

純「!」

俊作「どうしてそれを……？」

俊作と純は思わず足を止めてしまった。

会田「やっぱりそうか。そんな噂を耳にしたんだよ。それに、お前の性格ならやりそうだしな」

俊作「噂……ですか？」

会田「ああ。だけど、今それが事実だってわかった」

俊作「……そうですか」

俊作が少し複雑げな表情になったのを、会田は見逃さなかった。

会田「何だ？ あんまり嬉しくなさそうだな。もしかして、笹倉課長に知られるのが怖いのか？」

俊作「…そんなんじゃないんですけど……」

困った。

急がねばならないのに……。

会田「確かにあの人には“笹倉派”って取り巻きがいるらしいから厄介かもしれないな。だけど、お前がシロだっことはみんながわかってる。力をあわせれば大丈夫だ」

俊作「……はい」

純「……」

純は会話に混じろうとはせず、何気なく会田の様子を見ていた。

服装がくだけていること以外に、髪型が昼間に会社で見た時とはどこか違う印象を受ける。何というか、何となくスッキリした感じというか。スポーツでもしてきたのだろうか。

ふと、俊作が視線を会田の右手付近に落とすと、ジャケットの袖口に縫い付けられているはずのボタンが一つ欠けていることに気づいた。

しかし、今はそれを指摘してあげる猶予はない。こうしている間にも、秋池との距離は開く一方なのだ。

俊作「じゃあ会田さん、オレらそろそろ行きますね」

会田「おう、そうか。引き止めて悪かったな。…あ、そうだ」

俊作「何ですか？」

会田「…もしかしたらさあ、羽村さんって“笹倉派”なんじゃないか？」

俊作「え…？」

会田「あくまで推測だけどよ、会社サイドは羽村さんの証言と笹倉課長の報告だけを聞き入れて、柴田の主張は聞く耳持ってくれなかったんだろ？ そうなると、羽村さんと笹倉課長がグルになって根回したんじゃないかって疑いたくなるんだよ。課長はもとからお前を嫌ってたし」

俊作「それで、彼女が“笹倉派”だと…？」

会田「ああ。だが、さっきも言ったようにこれはあくまで推測だ。よく調べてみる」

俊作「…わかりました」

会田「じゃあな。頑張れよ」

会田は明治通りの方へ歩いて行った。

俊作「…羽村が……“笹倉派”……」

純「有り得ない話じゃないな。それは米本さんに人事部のデータベースで調べてもらおう。オレらは秋池の行方を追わなきゃなんねえ」

俊作「そうだな。純、一応聞くけど、お前が秋池の部屋の前まで行った時、敵は何人いた？」

純「……5人だ。オレを後ろから殴ったヤツも含めてな。5人のうち2人はR Y U - J I Nに行った時カメラで撮影したヤツだった」

俊作「なるほど、ロック・ボトムが秋池を拉致したってことか。人数は5人。まだそんなに遠くまでは行ってないはずだ。ロッキーに連絡して、情報屋を総動員して捜索にあたるう」

純「オレの情報屋にも頼もう。より多い人数で秋池を捜すんだ」

言い切らないうちに、純は携帯電話を取り出して自分が抱える情報屋に片っ端から連絡を入れた。

俊作も創と連絡をとり、情報屋に秋池の捜索を依頼した。

車で連れ去られたとしてもさほど遠くには行っていないだろうということを考慮して、捜索範囲を渋谷区と、それに隣接する新宿区・港区・目黒区・世田谷区・杉並区・品川区に絞った。加えて、渋谷区以外に関しては、渋谷区に近い場所を重点的に捜すよう指示した。更には、以前スペイン坂のクラブで撮影したロック・ボトムのメンバーと黒いワゴン車の画像をメールで送信しておいた。

純「…よし、急ぐぞ」

俊作「おう！」

俊作と純は、急いでウィングロードに乗り込んだ。

しかし、交通量の多い都心で特定の車両を見つけるのは非常に困難な話である。

搜索開始から3時間以上経過しても、それらしい目撃情報は入ってこない。また俊作と純も未だ発見には至っていない。

更に2時間が経過すると、俊作と純を眠気が襲うようになった。疲労のためだろう。

人通りの少ない裏路地に車を止め、仮眠をとる俊作と純。

3時間ほど寝ただろうか。

先に目を覚ましたのは純だった。

あくびをしながら、純はタバコに火をつけると窓を少しだけ開けた。

携帯電話をチェックする。

電話やメールは何一つ来ていない。

外はぼんやりと、暗闇が朝光に消され始めてきている。雀の鳴き声も聞こえてくる。

俊作「む……もうこんな時間か……」

助手席で寝ていた俊作も目を覚ましたようだ。

純「起きたか、俊作」

俊作「何か連絡あったか？」

純「Nothing! まるで連絡なしだ」

俊作「そうか……なかなか見つかんねーなあ」

純「そうだな。それよりもよ、あの会田って人なんだけど……」
俊作「ん？ 会田さんがどうかしたか？」

純「あの人、何で“笹倉派”を知ってたんだろう？」

俊作「…さあな。会田さんも社内の事情に詳しいからな」

純「そうなのか……」

俊作「ああ……」

俊作と純は秋池の搜索を再開した。

しかし、やはり秋池は見つからなかった。

朝日が昇り、会社や学校へ行く人たちが街を往来し始めた。

仕方なく二人は搜索を中断し、情報屋たちに後を任せると渋谷駅へ向かった。

純は新南口付近に車を停めた。

純「よし、ここで一旦別行動だ。悪いけど俊作は電車でアキバへ向かってくれ。オレはお前の会社で掃除の仕事があるからな」

俊作「わかった。頼んだぜ」

純「それから、疲れてきたら無理しないで休めよ。いざって時に体力がなければ何もできねーからな」

俊作「大丈夫だ。その辺はちゃんと考えて動くよ」

純「よし。じゃ、何考えてあったら連絡しろよ」

そう言い残し、純はマグナムコンピュータへ向けてウイングロードを発車させた。

独りになった俊作は、通勤ラッシュでこった返す山手線に乗り込み、秋葉原へと向かった。

高根伸子は、営業部に姿を見せるなり、ハキハキとした態度で周りの社員たちと挨拶を交わすとパソコンの電源をオンにした。

それとほぼ同じタイミングで、羽村佐知絵が出社してきた。

いつもの通り周囲への挨拶を済ませると、いつもの通り着席しパソコンの電源を入れ、いつもの通り末広真智子と軽い雑談を始めた。

何から何までいつも通りの出勤風景だ。

伸子「……」

やはり疑わしいと思いつつ、メールをチェックする。社会人としての基本だ。

受信トレイを開くと、米本から新着メールが届いていた。

伸子「　　!？」

メールを開いて伸子は動揺した。

驚くべき内容が本文に書かれていたからだ。

その内容を、原文のまま紹介しよう。

『社員各位

おはようございます。

この度は、元営業部法人営業一課・柴田俊作解雇の件で皆様をお騒がせいたしました。誠に申し訳ありません。

中には「不当解雇ではないか」と疑問を抱く方もいらしたようで、人事部としても配慮が足りなかったと深く反省しております。

しかし、当事件につきましては、被害に遭われた法人営業二課の羽村佐知絵さんや柴田の上司である笹倉課長の証言をもとに裏付け調査を行ったところ、紛れもない事実であることを確認致しました。

したがって、皆様にはこれ以上騒ぎを大きくして被害者をいたずらに傷つけるようなことはお止めただけのよう、ご理解ご協力のほどよろしくお願い致します。

人事部人事課

米本幹夫

42・疑われた米本（前書き）

突如届いた奇妙なメール。
差出人は米本？

42・疑われた米本

そんなバカな。

何だ、このメールは。

協力者である米本がこんなメールを送るはずがない。何かの間違いだ。

まさか、昨夜俊作が言っていた、例のソフトウェアでパソコンをい
たずらされたのでは……？

伸子は、ほぼ無意識的に受話器へ手を伸ばしていた。内線で米本と
コンタクトをとるためだ。

しかし。

「どういづつもりだよ、米本のヤツ！」

システム営業課の方から怒鳴り声が響き渡ってきた。

受話器まで間近に迫った伸子の手も、反射的にピタリと止まる。

ハッと顔を上げ、声が出た方向を探る。

声の主は、システム営業課にいる坊主頭の社員だった。

彼の名は牛島藤夫。

俊作や伸子、米本と同期入社である。

伸子「牛島くん……！」

牛島は両手をデスクに思い切り叩きつけると、その勢いで小回りのききそうな小さい身体を真上へ跳ねあげた。そして踵を返したかと思えば、佐知絵を目がけて肩をいからせながら詰め寄っていく。

牛島「おい羽村！」

佐知絵の全身がビクリと強張る。

牛島「お前よオ、人事にどんなデタラメ吹き込みやがったんだよ！」

佐知絵「な……何の話ですか……？」

牛島「柴田のことだ！ 人事の米本が変なメール送ってきたの見ただろう！」

佐知絵「あれは……ねつきとした事実なんです」

牛島「どこがだよ！ 証拠はあんのか！」

佐知絵「……」

牛島「何とか言えよ！」

佐知絵「……」

牛島「おい……！」

真智子「やめてください牛島さん！ これ以上この子を傷つけないで！」

慌てて真智子が間に入る。

牛島「何言ってやがる……！」

牛島は続けて何か言おうとしたが、思わず口をつぐんだ。

佐知絵が、泣きそうな顔をしてうつむいているのだ。

真智子「佐知絵……？」

佐知絵「……………」

真智子「もう、どうして佐知絵の気持ちを考えてくれないんですか！？」

牛島「考えるも何も、事実だとは思えねーんだよ」

真智子「何を根拠にそんなことを！ 事実、柴田さんは……………」

牛島「柴田の性格をよく知らねーくせに好き勝手言っくんじゃねえ！」

真智子「……………」

牛島「ああ、ダメだ！ こいつら当事者のくせに話になんねえ！
そつ言い残し、牛島は営業部を飛び出していった。

不意に、伸子と藤堂の目があった。

あたし、様子を見てきます。

伸子はそんな気持ちを込めたアイコンタクトを藤堂に送った。

藤堂は、黙って、小さく頷いた。

それを確認すると、伸子は牛島の後を追った。

エレベーターの前で牛島に追いつく伸子。

伸子「牛島くん、待って」

牛島「高根さん」

やや驚いたような表情で振り返る牛島。

伸子「どこへ行くの？」

牛島「……………米本の所だ」

伸子「ちようどよかった。あたしも一緒に行くよ。米本くんに聞きたいことがあるの」

牛島「あのメールのことか？」

伸子「うん。米本くんがあんなメールを送るなんて有り得ないし。だから確かめようと思って」

牛島「オレも有り得ないと思う。だけど、現にあのメールは米本から来たモンだったし……」

伸子「うん…おかしいよね」

エレベーターが到着した。

足早に乗り込む伸子と牛島。

人事部の前まで来ると、既に押し問答が展開されていた。

俊作や伸子たちと同期の男性社員が3人、米本に詰め寄っているのだ。

牛島「愛宕に梅郷、それに川間じゃねーか。あいつらも同じ目的みたいだ」

そう言い切らないうちに、伸子が押し問答を止めんと米本と愛宕たちの間に割って入る。

伸子「ちよっと、みんなどうしたの？」

愛宕「今朝のメールのことで抗議に来たんだ。同期としてあり得ないからな」

米本「オレはそんなメール知らないって！」

川間「じゃあ、ありや何なんだよ!? 差出人はお前だったぜ」

梅郷「誰かがお前のパソコンをいじったってのか!？」

米本「たぶんな……」

梅郷「そんなバカなことあるわけねーだろ! すぐにバレちまうじやねーか!」

愛宕「ああ。それにわざわざ他人のパソコンを使う意味がわからない

い

牛島「そうだよ。わけのわかんねーこと言うな！」

確かに、信じられないのも無理はない。だが、米本があのメールを送信していない以上、やってもいないことを認めるわけにはいかないのだ。

米本「 そんなこと言ったって、身に覚えがないんだよ！」

牛島「証拠がねえ！」

川間「へたな言い逃れはよせ！」

梅郷「なんかイライラしてきた」

愛宕「見損なつたよ、同期として。何で認めようとしねえ？」

米本「……」

困った。

米本はこれ以上言い返せなくなってしまった。

伸子「みんな、ちょっと待って！」

たまらず、伸子が再び米本と愛宕たちの間に割って入る。

伸子「そんなに米本くんを責めないで。本人もやってないって言ってるじゃん」

愛宕「だけだよ、米本以外には考えらんねーぜ」

伸子「……あのね、みんなは信じられないかもしれないけど、あたしも米本くんの言うことはホントだと思うの」

牛島「は！？ おめーも何言ってるんだよ！ 他人が米本のパソコン使ったら即バレるって言ったばっかだろっが！」

伸子「ううん、違うの。あるソフトを使って遠隔操作するの」

こうなったら本当のことを言うしかない。

牛島「ソフト…？」

伸子「うん。まだ推測の段階なんだけど……」

川間「へッ！　なんだよ、事実じゃねーのかよー！」

伸子「ちよつと聞いて。実は、柴ちゃんも米本くんと同じような目に遭ってたの」

川間「何だつて？」

梅郷「柴田もパソコンを他人にいじられたつてののか？」

伸子「そうよ。今、彼はそのソフトについて調べてるわ。…ねえ、ここは柴ちゃんを信じてみない？」

牛島や愛宕たちは返す言葉を必死に探していたが、結局何も出てこなかった。

そこへ、更に伸子が続ける。

伸子「考えてみてよ。今回の事件でいちばん頭にきてるのは誰？」

柴ちゃんだよ？　その柴ちゃんが、わずかな可能性からソフトの存在を調べてるのに、ウチらが朝からこんな言い合いしちゃダメじゃない？」

愛宕「まあ……そうだけど」

米本「オレからも頼む。ウソは認めたくない」

牛島「……わかったよ。にわかには信じらんねーけど、どうやらウソじゃねえつてのは伝わってきたし」

愛宕「だ…だけどよ……」

牛島「柴田も似たようなことをされてるんだ。少し様子を見てもいいだろう。それに、オレらだってあいつがクビになって納得いかない気持ちは同じはずだ」

愛宕「う…うん、確かに……」

伸子「牛島くんの言う通りよ。あたしや米本くんも柴ちゃんがクビになって納得いかないもん。だから、こんな時こそ協力して彼の無実を晴らすべきだと思うの」

米本「あいつの無実を晴らすには証拠がある。何かわかったら、すぐオレらに教えてほしい」

牛島「……うん、わかった。だけど、一つ気になることがある」
米本「何だ？」

牛島「メールにあった“証拠”ってのはどういうことだ？ あれじや、まるでホントに柴田がクロみたいない言い回しだぞ」

米本「柴田は無実だ。そもそも“証拠”なんか存在するわけがない」
牛島「じゃあ、何であんな書き方したんだよ？」

米本「“証拠”を捏造したんだろう。羽村と笹倉課長がグルになつて、柴田を会社から追い出すためにな」

牛島「……その裏付けはとれてるのか？」

伸子「それはまだなの。“今回の事件が柴ちゃんを陥れる罫ではないか？”っていう証拠は掴みかけてんだけど、二人の接点が見えてこなくて」

米本「だから、何かわかったら、どんな小さなことでもいいからオレらに教えてくれ。直接柴田に連絡しても構わん」

牛島「よ、よし、わかった」

川間「その代わり、そのソフトが実在しなかったら一生お前らと口聞かねーからな」

伸子「大丈夫。彼ならやってくれるよ」

米本「すまんが、よろしく頼む。じゃあ、そろそろ朝礼あるから戻らせてもらおうよ」

伸子「牛島くん、ウチらも戻ろう」

牛島「うん」

伸子たちは解散し、それぞれのフロアへ戻っていった。

ひとまず、このことは朝礼が終わったら藤堂部長に報告しよう。

そんなことを考えながら、伸子は営業部へと足を進めていた。

だが、それは不可能になってしまふ。

エレベーターを降りた伸子と牛島を待ち構えていたのは、日に日に不気味な殺気を強めている笹倉課長だった。

伸子「お…おはようございます」

伸子は形だけの挨拶を交わしてさっさと自分のデスクへ行こうとした。

笹倉「待て、高根」

伸子は足を止めた。一応、上司の命令だからだ。しかし、牛島もつられて立ち止まってしまっていた。

笹倉は、不快そうに牛島を一瞥してから伸子を睨みつけた。

笹倉「牛島は席に戻っていい。高根だけ残れ」

牛島「……」

戸惑う牛島に、伸子は2、3回ほど軽く頷き、「大丈夫だから」と目で訴えた。

牛島もそれを理解し、深く頷き返すと、やはり心配そうに自分のデスクへと戻っていった。

エレベーターホールに残された、伸子と笹倉。

1秒1秒が、いつも以上に長く感じられる。

できるだけ目をあわせないようにしよう。

伸子は、笹倉の足元を見ていた。

笹倉「どこ見てんだよ」

ハッとして、伸子は顔を上げた。

笹倉「気に入らねえ…何で目エそらすんだ」

伸子「……いえ、別に」

笹倉「ケツ、ふざけてんじやねーぞ。やっぱり柴田と同類なだけあって、クソだな」

伸子はその言葉に対しては反論しなかった。

他に言いたいことがあるのだ。わざわざ「柴田と同様にクソだ」と侮辱するためだけに待ち伏せしていたわけではあるまい。

そう感じたからこそ、いきなりここで反論してしまっただけは精神力の無駄遣いになってしまう。伸子は次の言葉を待った。

笹倉「人事部へ行ってたのか？」

伸子「……何故、わかつたんですか？」

笹倉「あのメールを見たんだよ。米本ってのはお前の同期だろ？」

伸子「……はい」

笹倉「……まあ、おおかた“同期を売るようなマネしやがって”なんつって抗議でもしたんだろ？」

伸子「……」

伸子は、一瞬答えるのをためらった。

正直に答えると、例のソフトウェアに気づいたと思われるかもしれない。そうなったら面倒だ。証拠隠滅のために、また何か手を打ってくるかもしれない。

ここは適当にごまかそう。

伸子「まあ、そんな」

笹倉「あのよお、別にお前が人事に抗議しようがしまいが、んなことどうだっていいんだよ。いいか、今回の件は事実なんだ。ヘタに蒸し返して羽村を追いつめるな」

伸子「あたしには事実だとは思えません」

笹倉「バカかお前？ どう見ても事実だろう！」

伸子「本人が否定しています」

笹倉「さっさと認めねーからクビになったんだ。そんな往生際が悪いヤツの言い分など通ると思うか？」

伸子「そうやって、初めから彼を悪者だと決めつけてかかるのはど

うかと思えますけど」

笹倉「何度言ったらわかるんだ！ ヤツはクロなんだよ！」

伸子「違うと思います」

笹倉「……そんなに物分かりが悪いとは思わなかったぜ。教育し直さなきゃな、こりゃ」

伸子「それはすいませんでした」

笹倉「よし、じゃあ朝礼が終わったら2階の会議室まで来い」

伸子「何故ですか？」

笹倉「面談だよ。お前だけ特別に早くやってやるよ。教育も兼ねてな。早く済んだほうがいいだろ？」

伸子「課長、わざわざ早める必要はないんじゃない」

笹倉「朝礼終了後に会議室だ！ わかつたな」

伸子の言葉を強引に遮り、自分の言いたいことだけを押しつけた笹倉は、さっさと自分の席へ戻っていった。

恐怖感と不安感が、一瞬にして伸子を襲った。

43・伸子危機一髪

エレベーターの前に、ひとり取り残された伸子。

笹倉課長から個別に呼び出された。

二人きりで会議室。

安全であるはずがない。

どうしよう。

行かないほうがいいのはわかりきったことだが、一応上司である笹倉の命令を無視するのもまた危険だ。

会田「高根さん、どうしたの？」

伸子は、ハッとして背後を振り返った。

伸子「あっ、会田さん」

どうやら少しボーツとしていたようだ。会田が不思議そうな顔でこちらを見ている。

会田「もうすぐ朝礼始まるよ」

伸子「あっ、は、はい、すみません」

伸子は、恥ずかしそうに席へと戻っていった。

こんな日に限って、朝礼は早く終わる。
この日の所要時間はおよそ5分だった。

有無を言わずに訪れる恐怖の一時。

笹倉「来い」

いつの間にか伸子の背後にいた笹倉が、地底から唸るような声で囁く。

行かなくては。

意を決して、伸子は席を立った。

この日、朝礼直後の2階には人の気配がほとんどない。

笹倉「入れ」

2階でいちばん小さな会議室へ、伸子は先に通された。

続いて笹倉が入室する。同時に、ドアの閉まる音が、静かに響く。

笹倉「そこへ座れ」

笹倉は、部屋の中央辺りにある椅子へ座るよう命じた。伸子は黙って着席した。

そこより入り口側の席を選び、どかっと腰をおろす笹倉。

“ Bannon!”

掌底で、手に持っていた資料ごと机を打ちつける音が部屋中に弾け飛ぶ。

ビクリと身体全体を強張らせる伸子。

笹倉は資料をめくる素振りも見せず、伸子を睨み付ける。

笹倉「さあて……どう教育してやろうかな」

伸子「あの……教育って何をするんですか？」

笹倉「……お前、今年でいくつになる？」

伸子「…はい？」

笹倉「歳だよ、歳。何歳になったんだ？」

伸子「何で突然そんなこと」

笹倉「いいから答えろよ」

伸子「……27ですけど」

笹倉「27？ 柴田とタメか！ どうりで頭悪いわけだ」

またこれか。

ここまできるとイライラを通り越して呆れてくる。

伸子「あの、言いたいことがよくわかりません。そんなお話をするのでしたら通常業務に戻らせていただきます」

伸子は椅子から立ち上がるうとした。

笹倉「待てよ！ 勝手な行動をとるんじゃないねえ」

ガシツと伸子の腕を掴む笹倉。

伸子「放してください」

笹倉「上司の指示が聞けねーのか？ 座れよ」

伸子「じゃあ、ちゃんと面談やってくれるんですね」

笹倉「いいから座れ！」

伸子「きゃっ！」

掴んだ伸子の腕を、笹倉は強引に引っ張った。伸子の身体が、転がるようにして椅子へと引き戻される。

伸子「な…何するんですか！」

笹倉「最後まで話を聞いていけ」

その頃純は、仲間の清掃スタッフから伸子が笹倉に呼び出されたことを聞き、会議室へ向かおうとしていた。

笹倉が伸子を個別に呼び出すなんて何かある。早く行かなくては。

そんなことを考えながら、早足かつ怪しまれないように会議室を目指す純。

従業員の移動と来客の際に使われるメインエレベーターは怪しまれるかもしれない。階段で行こう。階段は、確か喫煙室の先にあったはずだ。

階段へと急ぐ純。

その途中、喫煙室の前で、部屋から出てきた会田とぶつかりそうになった。

会田「おっと」

純「わっ」

タバコを吸ったばかりなのだろう。身体中にヤニ臭さが漂っている。そして会田は、手に携帯電話を持っていた。電話でもしていたのか。

会田「これは失礼」

純「こちらこそすいませんでした」

お互い、小刻みに何度も頭をさげながらすれ違っていく。

そのまま後ろを振り返ることもなく、純は階段を駆けおりていった。

2階は、一室を除いて静まり返っていた。

いちばん小さな部屋から、聞き覚えのある中年男性と若い女性の声が聞こえてくる。

伸子と笹倉だろう。

しかし、どこか様子がおかしい。純は注意深く耳をすました。

すると、間もなくガタガタと物音が聞こえてくるのではないか。

純「！？」

何やら争っているような物音だ。止めに行かねば。

勢いをつけようと、後ろ足に力をこめる。

その時だった。

純「ッ！」

突然、純は前足で踏みとどまり、強引に勢いを押し殺した。それから慌てて目の前にあった柱の陰に隠れ、じつと会議室を観察する態勢をとった。

これまた見覚えのある男が、純よりはるかに素早く会議室のドアを

開ける。

会田だ。

会田がタイミングよく会議室の前に居合わせたのだ。

会田「高根さん！ 大丈夫かッ！」

伸子「あっ、会田さん！？ 助けて！ 課長が…課長が…！！」

必死で会田にしがみつく伸子。
会田「課長、彼女に何をしたんですか！」

やや気まずそうに会田を見据える笹倉。
笹倉「……面談と教育だ」

会田「そうは思えません。どうして彼女が恐がってるんですか？」
笹倉「……」

会田「まさか、セクハラしたんじゃないでしょうね？」

笹倉「…違う、それはない」
伸子「ウソつかないで！ あたしに無理矢理関係を迫ってきたじゃない！」

会田「……彼女がこう言ってますが？」

笹倉「ウソをついているのはそいつだ。オレはセクハラなんか」

会田「訴えますよ」

途端に、笹倉は黙り込んでしまった。

会田「……課長、情けないですよ。人のこと言えないじゃないですか。しっかり反省してもらいますからね」

会田が、伸子を連れて会議室から出てきた。

会田「大丈夫だったか？」

伸子「え…ええ。でも会田さん、どうしてここが……？」

会田「外回りへ出かけようとしたら物音が聞こえてきたから、何事かと思つてな。それより、何で高根さんが課長にセクハラされたり

するんだ？」

伸子「わかりません。今まであたしに意地悪してきたのに、いきなりあんなことをされて、正直混乱してます」

会田「そうだよな……まあでも、人事に訴えれば少しはおとなしくなるだろう」

伸子「はい……」

会田「また何かあったらオレに言ってくれよ。いつでも力になるからな」

伸子「ありがとうございます」

会田「さあ、仕事に戻ろう」

伸子「……はい」

こうして伸子は、会田に付き添われて営業部のフロアへと戻っていくのであった。

純「おいおい……どうなってんだよ」

伸子が業務に戻り、必死で気持ちを切り替えて臨む一方で、俊作は創に教えてもらった秋葉原のパソコンショップ「ジプシー」に到着していた。

店は、小さな雑居ビルの2階にあった。ドアは閉まっている。飾り気がなく、一見するとパソコンショップだとわからないぐらいに淋しそうな外観だ。

しかし、中に人の気配がする。既に営業は開始しているようだ。

俊作は思い切ってドアノブを回した。

まず俊作の視界に飛び込んできたのは、何段にも積み重ねられたプラスチック製のケースだ。中にはパソコンの部品類がぎっしり詰まっている。これで自作のパソコンを作ったりするのだろうか。

一歩、店内へと足を踏み入れる。

正面に、あの積み重ねられたケースが壁となって立ちはだかっている。左右のどちらかに進めしかない。

俊作は、左に進んでみた。

内部も同様に、あのケースの壁が3〜4列ほど立ち並んでいた。

奥のほうから話し声が聞こえる。買い物客がいるようだ。

その声に引き寄せられるかのように、俊作は奥へと進んでいく。

レジは店の奥、入り口側から見て右側の角を陣取って設けられていた。

30代後半と思しき男性がカウンターの向こうにいる人間と会話している。この男性の背中越しに、俊作は少し背伸びをしてカウンターの向こうを覗き込んだ。

年の頃は、おそらく30代半ば。一流大学を卒業していそうな、知的な雰囲気のある男性だ。この男性が三田村だろう。

それから間もなく、男性客は店を出ていった。

すかさずカウンターへ歩み寄る俊作。こちらが声をかける前に、向こうから「いらっしやいませ」と挨拶してきた。

俊作「…失礼ですが、三田村さんですか？」

三田村「はい、いかにもそうですが……どちらさんですか？」
思い切り警戒した目で俊作を見据える三田村。無理もない。しかし俊作は、表情ひとつ変えることなく創から預かった木札を懐から取り出し、三田村の目の前に提示した。

三田村「それは……」

三田村の表情が一変した。

俊作「黒木創の紹介で来た、柴田という者です。怪しい人間じゃないんで安心してください」

三田村「黒木くんの……？ 彼とはどんな関係で？」

俊作「昔からの友達です」

三田村「……あ、もしかして、板橋から来た柴田さん？」

俊作「……え？ は、はい、そうですね……」

三田村「黒木くんから聞いたことがあるよ。板橋じゃケン力最強だったんだって？」

俊作「あ、い、いや……まあ……昔の話ですよ。あいつめ、大袈裟に言いやがって」

恥ずかしそうにうつむく俊作。

三田村「でも、話を聞く限りだとみんなから慕われてたみたいじゃないですか」

俊作「そうなんですかねえ……」

恥ずかしい。早いところ本題を切り出そう。

俊作は無理矢理に昔の話を打ち切ろうとした。

三田村「そういえば、昨夜その黒木くんから連絡がありましたね。“柴田さんがこの数日中にウチを訪ねてくるからよろしくやってくれ”って言われて、それで思い出したんですよ、前に黒木くんが話していたことを」

俊作「あ…そうだったんですか」

三田村「で…どんな用件なんですか？ 黒木くんからその札を借りてくるってことは、ただの買物じゃないみたいだけど」

よかった。

本題を切り出せる。

俊作「…三田村さんは、コンピューター関係に精通してるそうですね」

三田村「まあ…そんなに詳しいわけじゃないですけど」

俊作「今日ここへ来たのは、あるソフトが実在するか否かをお聞きするためです」

三田村「ソフト？」

俊作「 他人のパソコンを、覗き見したりネットワークを通じて遠隔操作したりできるソフトってありますか？」

三田村「む…それはちょっとアンダーグラウンドな話ですね。差し支えなければ、何があったか聞かせてもらえませんか？ 何故そんな質問をするのか知りたい」

俊作「わかりました。お話ししましょう」

俊作は、マグナムコンピュータで受けた仕打ちを話した。

自身の入力ミスだとされる発注書のこと、何故か笹倉に知られていた藤堂部長の社内メール、そしてソフトが存在する可能性を示唆してくれた湊刑事。

三田村は、ただそれを興味津々に、カウンターから身を乗り出して聞いていた。

三田村「なるほど、あなた自身や周りの人が被害にあわれたかもしれないということですね？」

俊作「はい。どう考えても自然のなりゆきとはいえないんじゃないかと思うんです。他にも被害が出ているようですし…」

三田村「そうですね……」

そう言って、三田村はゆっくりと店の出入口へと歩いていった。
何をするのだろう。

ドアを閉める音が聞こえる。施錠までしているようだ。

そしてカウンターまで戻ってきた三田村はこう言った。

三田村「ありますよ、そんな手合いのソフトが」

44・エクストラ・マジシャン(前書き)

ソフトが実在する!?

44・エクストラ・マジシャン

ソフトが実在する？

今、確かに三田村はそんなことを口にした。

まさか、こつもあつさり結論を得ることができるとは。

俊作「それ、ホントですか？」

三田村「はい。もう何年も前から、バージョンアップを繰り返しながらしぶとく根付いてますよ。これ、違法なモノなんであり大声じゃ言えないんですがね」

なるほど、店のドアを閉めたのはそのためか。

俊作「もつと詳しく教えていただけませんか？」

三田村「…お話を伺う限りだと、そのソフトウェアは“エクストラ・マジシャン”でしょうな」

俊作「“エクストラ・マジシャン”？」

三田村「はい。その存在が初めに確認されたのが、だいたい6〜7年ぐらい前だったと思います。当時は、ただ個人情報をネットワーク上から盗むことができるだけのソフトでした。それでも裏の世界じゃ結構取り引きされたみたいですよ」

俊作「それは、ソフトウェアだから誰にでも扱えるという利点があるからですかね？」

三田村「そうだと思います。複雑なプログラミングの知識がいらないわけですから。簡単に他人の個人情報を盗むにはもってこいというわけです」

俊作「厄介な代物作りやがって」

三田村「ただ、当時のモノは不具合も多くてね。サーバーにアクセスできなかつたり、市販のウィルスソフトで簡単にブロックされたりして、使い勝手は悪かつたらしいですよ」

俊作「素人が作ったんですか？」

三田村「うーん……どうなんでしょう。作成者についてはわかってないもんですから」

俊作「わかってない……？」

三田村「もしかしたら、ボクが知らないだけかもしれませんが。でも気をつけてくださいね。今の“エクストラ・マジシャン”は、当時のモノより遥かにグレードアップしてますから。繰り返しになりませんが、ネットワーク上から他人のパソコンを覗き見できるうえに、個人情報を盗むだけでなくそのパソコンを遠隔操作することも可能です。それに市販のウィルスソフトでもブロックしきれないでしょう」

俊作「じゃあ、“エクストラ・マジシャン”を防ぐ方法はないんですか？」

三田村「…あるといえば、ありますよ」

俊作「あるんですか？」

三田村「“エクストラ・マジシャン”を駆除するソフトが開発されてはいるんですが、“エクストラ・マジシャン”がバージョンアップしてしまうので、結局はいたちごっこになってしまっんですよね……」

俊作「なるほど。ちなみに最新バージョンの駆除ソフトは作られてるんですか？」

三田村「いや、まだ作られてはいないはずですよ。なんせ、“エクストラ・マジシャン”がこまめにバージョンアップしてるもんですからねえ」

俊作「開発者の名前はわかります？」

三田村「開発者……ですか？」

俊作「はい。最新バージョンの駆除ソフトがまだ作られてないんだつたら、開発者に頼んで作ってもらえばいいじゃないですか。それに、最新の“エクストラ・マジシャン”が出回ってるんだし、全く開発してないってことはないと思いますよ」

三田村「なるほど…そうかもしれないですね。それなら、池袋にある“バイティング・ダイバー”という会社へ行ってみるといいですよ」
俊作「バイティング・ダイバー？　どんな会社なんですか？」

三田村「まだ立ち上げてから2、3年ぐらいしか経ってない、小さな会社なんですけどね、ネットワークの安全を守る仕事をしてるんですよ。その会社が、以前から“エクストラ・マジシャン”と闘い続けていました」

俊作「それは頼もしい」

三田村「社長の石原さんに会えば、何かわかるかもしれない」

俊作「石原さん……ですね」

俊作は、会社名と社長の名前を、手帳にサラサラと走り書きで記した。

俊作「ちなみに、その石原さんって方はいつも会社にいらっしやるんですか？」

三田村「大概はいるはずですよ。なんせ会社の規模が小さく人数も少ないですから、社長だけふんぞり返ってるわけにはいかんですよ」

俊作「忙しそうだな……行く前にアポイントをとったほうがよさそうですね」

三田村「そうですね。たぶんアポとらなくても大丈夫でしょうけど、いきなり仕事を中断されるのはなんとなくイヤですからね」

俊作「電話番号わかりますか？」

三田村「ああ、ちよつと待ってくださいね」

一旦、三田村が奥へ引っ込んだ。

奥から、ガーガーと機械の動く音が聞こえてくる。

音が止むと、右手にB5版の紙を持って三田村が戻ってきた。

三田村「お待たせしました。名刺を拡大コピーしてきましたよ」

三田村が差し出してきたその紙には、会社名と石原の名前、そして会社の電話番号が記されていた。まさしく、石原の名刺である。

俊作「おっ、ありがとうございます」

俊作は名刺のコピーを受け取った。

三田村「頑張ってください。1日でも早く悪いソフトウェアがなくなることを願ってますよ」

俊作「情報提供に感謝します」

三田村「黒木くんにもよろしくお伝えください」

店を出た俊作は、まず純にメールで三田村から聞いたことを報告すると、次は湊刑事に電話をかけた。

湊「どうした？」

俊作「湊さん、例のソフトですけど、どうやら実在してるみたいですね」

湊「ほう、そうか！」

俊作「名前は“エクストラ・マジシャン”。6〜7年ぐらい前から裏の市場で出回ってるようです」

湊「そんなに前からあったのかよ。ウチの本庁は何やってんだ。6〜7年もありや作成者ごとパクれるだろうに」

俊作「たぶん、昔のヤツは不具合が多くて使い勝手もよくなかったらしいから、そんなに被害者が出なかつたんだと思いますよ」

湊「なるほど、バージョンアップして性能が上がったから被害件数が増えた。そのためオレらは最近までソフトの存在に気づかなかつた。つてわけだな？」

俊作「おそらくそうでしょう」

湊「そうか…。ところで、誰がソフトを作ったかはわかつたか？」

俊作「いや、そこまではまだわかりません。裏の市場でもあまり知られてないみたいです。そうだ、湊さん、そつちでもどうにか調べられないっすか？」

湊「まあ、できないことはないが…お前は作成者を調べないのか？」

俊作「もちろん調べますよ。でも、警察には今現在“エクストラ・マジシャン”絡みで捕まってる人間がいるじゃないですか。そいつらを叩けば、少なくとも販売元ぐらいはわかるでしょ？ こつちは

使用ソフトの存在をつきとめたんです。名前をチラつかせりゃ、誰か一人ぐらいは動揺するかもしれないですよ?」

湊「そうだな。実は今オレも同じことを考えついたところだ」

俊作「なんだ、気が合いますね」

湊「バカ。男に言われても嬉しかねーよ」

俊作「じゃ、そういうことで入手経路を調べといてくださいね!」

湊「お前はこれからどうするんだ?」

俊作「“エクストラ・マジシャン”の対策ソフトを作ってる会社に行こうと思います」

湊「対策ソフトがあるのか?」

俊作「はい。池袋にあるバイティング・ダイバーって会社がつてるそうです。ただ、最新バージョンはまだ作られてないみたいなんです、これから行ってお願いしようかと思っています」

湊「わかった。おい柴田、もしかしたら、その会社の人間からでもソフトの作成者を聞き出せるかもしれないぞ」

俊作「 かもしれませぬ。個人情報盗めるような薄気味悪いソフトに抵抗してるわけだし」

湊「よし、よろしく頼んだぜ。何かあったら連絡よこせよな!」

俊作「 あっ、それともう一つ」

湊「何だ?」

俊作「昨日オレが取り調べを受けた時、秋池って男の話をしたの覚えてます?」

湊「ん? ああ、クラブのオーナーだっけ?」

俊作「昨夜、自宅マンションの玄関前で拉致されたんですよ」

湊「何だっけ?」

俊作「犯人はロック・ボトムの連中である可能性が高いです。事件の重要な証言を得られるかと思っただんですけど……」

湊「どこへ連れ去られたのか、見当はついてるのか?」

俊作「いえ、まったく。情報屋を動員させて探させてるんですけど、これといった目撃情報は入ってきてないです」

湊『なるほどな…。で、オレはどうすればいい？』

俊作「え？ 湊さん、協力してくれるんすか？」

湊『おう。お前の調べてる事件も、どうやらオレらと無関係じゃなさそうだしな！ で、どうすればいいんだ？』

俊作「…秋池のマンションへ行つて、下足痕を調べてもらえませんか？」

湊『下足痕？』

俊作「はい。足跡を証拠としてヤツらを取り調べ、その線から秋池の居場所を吐かせてほしいんです」

湊『そういうことが。そいつはいい考えだ。さっそく佐藤をそのマンションへ向かわせるよ』

俊作「すみません湊さん、お願いします」

湊『いいってことよ！ じゃあな！』

俊作が電話を切ると、ディスプレイに「新着メールあり」のアイコンがついていた。

純からだ。

「Good！」

至急その会社へ行ってくれ！

ただし、自分が探偵だつてことを隠して調査にあたれよ！」

……とある。

「了解」と返信するや否や、すぐさま俊作は先程手に入れた石原社長の名刺のコピーとにらめっこでもするかのようにバイティング・ダイバーの電話番号をダイヤルした。

3コールほどで、若い女性が電話に出た。

女性『お電話ありがとうございます。バイティング・ダイバーでございます』

俊作「あの、私、マグナムコンピュータの柴田と申します」

女性『お世話になっております』

俊作「お世話になっております。本日は技術提供のお話をしたく思いましてお電話差し上げました。失礼ですが、社長の石原様はいらっしゃいますか？」

女性『申し訳ありません。社長の石原は只今出張に出ておりました。本日中には東京に戻りますが直帰してしまうので、明日でしたら通常通り出社いたしますが』

俊作「そうですね。では、明日の朝にまた改めてお電話差し上げます」

女性『かしこまりました。では、こちらもお電話があったことだけ申し伝えておきますね』

俊作「あ、すみません。よろしく願います。それでは失礼いたします」

女性『失礼いたします』

電話を切る俊作。

同時に、夕方までやることがなくなってしまった。

どうしようかと考えていたところへ、純から電話がかかってきた。

俊作「どうした？」

純『お前、もう池袋へ向かったのか？』

俊作「いや、目的の社長が出張に出て、明日じゃないと会社に行かないみたいだから今日は行くのをやめることにした」

純『そうか。いやさあ、さっきメールでお前にひとつ報告し忘れたことがあってよ』

俊作「何だよ？」

純『さっき、笹倉がのぶちゃんを会議室へ呼び出して乱暴しようとして』

してた」

俊作「何だつて？」

純「幸い、あの会田さんって人が手際よく助けに来たから未遂で済んだけどな」

俊作「会田さんが？ そりやグッドタイミングだな」

純「ああ。ありやあ見事だったよ。ホントはオレも他の清掃スタッフからそのことを聞いて助けに行こうと思ったんだけど、あの人のほうがコンマ1秒早く気づいたみたいだったな」

俊作「どうやって気づいたんだ？ お前みたいに誰かが会田さんに教えたのか？」

純「いや、外回りへ行こうとした時に会議室から騒音が聞こえて、それで気づいたらしいぜ」

俊作「そうなのか……」

純「まあ、とりあえずのぶちゃんは無事だ。しかし、解せないのはあの笹倉のおっさんだ。今まで彼女をお前と仲良くしてたって理由で嫌がらせてたのに、ここへきて急に無理矢理関係を持つてくるなんて……」

俊作「そうだな。確かにそれは変だ。あのハゲがのぶちゃんに気があるって話は聞いたことがない」

純「ただ、いい女とやりたかっただけなのかな」

俊作「それだったらとっくに彼女はやられてるさ。嫌がらせをする必要はない」

純「だよなあ……。じゃあ、“よく見たらのぶちゃんがいい女だった”ってパターンか？」

俊作「……説得力に欠けるな」

純「そうか……」

俊作「まあ、今はあれこれ考えても先には進めねーよ。これはヤツを追い詰めた時に吐かせてやりゃいい」

純「そうだな。それがいい。ところで、お前はこれからどうするんだ？」

俊作「それが、池袋行きがなくなっちまったから夕方まで特にやる
ことがねーんだよ」

純「そうか…。じゃ、いったん家に帰って休んでたら?」

俊作「いや、そういうわけにはいかねーだろ」

純「いいんだよ、気にすんなって。昨夜あんま寝てなかっただろ?」

俊作「そりやお前だって……」

純「休める時に休んどけて。これから忙しくなって休めなくなっ
たらどうする?」

俊作「…わ、わかったよ。夕方まで家で休んでる」

純「よし。じゃ、定時近くなったら先に葛西へ行つててくれ」

俊作「おう。じゃ、また夕方にな」

俊作は、いったん板橋の自宅へ戻ることにした。

45・懸念

板橋へ戻ってきた俊作。

そのまま自宅へ戻る前に、創の店へと足を運ぶ。

何か有力な情報が入ってきていないかを確認するためだ。

創「おお、俊作か。どうした？」

商品を陳列していた創が手を止め、軒先まで出てきた。

俊作「いや、何か有力な情報が入ってないかと思っただけ」

創「まあ、あるにはあるな。今んトコこっちに入ってる情報っていうと……黒野の素性ぐらいかな」

俊作「それはちよつと興味あるな。聞かせてくれよ」

創「わかった。じゃあ、ここじゃアレだから奥の事務所で話そう」

俊作「そうしよう。ところで、鴨川さんはどうしてる？」

創「ああ、今は店の奥で売上げの管理とかを手伝ってもらってるよ。昼間はウチ、誰もいなくなるからな」

俊作「そうか。だけど、あまり売り場に出させるわけにはいかなーな」

創「そうだな。どこで黒野の一派が監視してるかわかんねーしな。出させても入口から遠い位置に限定させてるよ」

俊作「よし。そーいや、歌舞伎町のキャバクラへはまだ行ってないんだっけ？」

創「うん。今夜行こうと思ってる。鴨川さんの話だと、いちばん仲のよかった子が出勤するのが今日らしいんだ。だから、あらかじめ鴨川さんからその子にオレが来店する時間を伝えてもらって、店でゆっくり話ができるよう段取りを組んでもらったところだよ」

俊作「なるほどな。だけど、調子にのって飲み過ぎんなよ」

創「わかってるよ」

俊作と創は奥の事務所へ移動した。

ヒナコ「あっ、柴田さん！」

パソコンに向かっていたヒナコが俊作に気づいて立ち上がる。

俊作「どうも。昨日はゆっくり寝れましたか？」

ヒナコ「ええ。黒木さんのご家族は皆さん気さくだったんで、おかげさまでゆっくり休めました」

俊作「そうですか。それはよかったです」

ヒナコ「柴田さん、コーヒーでも飲みますか？」

俊作「ん？ ああ、そうですね、いただきこうかな」

ヒナコは、インスタントコーヒーを作るために事務所の隅へ移動した。

創「それで俊作、黒野の素性だけだよ……」

俊作「おう」

ヒナコ「！」

創「あの男、根っからのワルみてーだぜ」

俊作「だろうな。そんでもって相当学識に欠けてるだろ」

創「ああ。学校じゃ成績はいつも最下位だったらしい。だが、悪名は相当に高かったってよ。地元の下北沢^{シモギタ}じゃ、ヤツの名前を知らない人間はいなかったって。事実、聞き込みの時に情報屋が黒野の名前を出したら相手の顔が強張ったみたいだぜ」

俊作「ふーん……ケンカが強いのか？ そんな感じには見えねーけど」

創「ケンカが強いつていうより、“ちょっかいを出せば何をされるかわからないから怖い”っていった感じだな。地元の人たちはみんな手を焼いてたらしい」

俊作「危険なヤツだ。目をつけたヤツはどんな手を使ってでも追い詰めるってことか」

創「まあ、そんなところだな。だからお前も会社を追い出されるハ

メになつたんじゃねえ？」

ヒナコ「あたしだって、キャバクラ辞めさせられた時も似たようなことされましたよ」

俊作「……そうか、そうだな」

俊作は、皮肉そうに顔をしかめた。

俊作「…そうだ、鴨川さんの話だと、ヤツは1年前まで歌舞伎町でホストをやってたんだよな？ どうしてホストなんか始めたんだ？」

ヒナコ「それ、あたしも気になります。あんな乱暴者がホストになった理由がわからないんで…」

創「どうやら、たくさん金を稼いで女はべらせたかったのが理由らしい。高校時代から仲間に言ってたみたい。で、高校卒業と同時に夜の世界へ飛び込んで行つたって話だよ」

俊作「いたってシンプルだな」

創「だけど、あの性格だろ？ 常に同僚とのトラブルが絶えなかつたつてよ。都内にあるいくつもの店を転々としたらしい。それで、歌舞伎町のホストクラブを辞めたのを最後に、IT系の会社に転職したとか」

俊作「……ますます理解できんな。今の会社に入ってから転職してないんか？」

創「ああ。特に同僚とのトラブルもないみたいだぜ」

ヒナコ「ホストを辞めた理由はわかつたんですか？」

創「いや、そこはまだ調査中です。まあ、おおかた同僚とのトラブルでしょうけど」

俊作「だけど、なんか事情がありそうだな。いきなり夜の世界から一般企業に転職するんだ。ただの気まぐれとは思えねえ。その辺も調べてみよう」

創「ああ。歌舞伎町へ行ったらそのホストクラブへも行ってみようか」

俊作「頼んだぞ」

ヒナコ「じゃあ、あたし、客としてそのお店で聞き込んできます！」

創「え？ 大丈夫ですか？ あんまり目立った行動は控えたほうが……」
ヒナコ「大丈夫ですよ！ 黒木さんお手製の変装グッズがあれば素性を隠せます！」

ヒナコは事務所の片隅にある段ボール箱を指差した。

創「あ……なるほどね。あれがあつたか」

俊作「……よし、ここはのぶちゃんにも協力してもらうか。2人でホストクラブへ行って、より多くのホストから黒野のことを聞き出すんだ。入店する時は別行動でな」

創「うん、なるほど、それもアリだな」

ヒナコ「何で別行動なんですか？」

俊作「1人は取材役で、もう1人はその内容を記録する役に分かれるんです。あくまで普通の客を装ってください。露骨に黒野についての聞き込みって感じを出すすと有力な情報が聞き出せないかもしれない。もしかしたら黒野と仲の良かった同僚がいるかもしれないし」
ヒナコ「なるほど……」

その時だ。

俊作と創の携帯電話が、ほぼ同じタイミングでメールを受信した。

純からだ。

二人同時にメールを送るところを見ると、何か有力な情報を掴んだのだろう。

“例の写真の持ち主がわかった！羽村が持つてる！”

俊作「！」

創「おお！これはナイスだ！」

ヒナコ「どうかしたんですか？」

俊作「羽村佐知絵が、例の“証拠写真”を持つてることがわかりました」

ヒナコ「写真つて、柴田さんが佐知絵をホテルに連れ込もうとしたつていうモノですか…？」

俊作「そうです」

創「これで、あとは入手方法を考えるだけだな」

俊作「いや、その後で写真の撮られた場所へ行つてオレと羽村の目撃情報を集めたり、実際に撮影した人間を突き止めなけりゃいけねえ」

創「わかつてるよ。とりあえず純に“早く写真をゲットしろ”つて返信しとないと」

創は、カチカチと、携帯電話のボタンを押し始めた。

俊作「そうだ、例の車の行方はわかったか？」

創「いや、まだわからん」

プッシュボタンを連打しつつ、創は手短かに答える。

俊作「そうか……」

創「あれもどこへ行っちゃったのやら」

俊作「うん………どんだけ遠くまで行ったんだつて感じだよな」

創「ああ。でも、実際そんな遠くへは行けないはずだぜ」

俊作「かもな。オレと純が寸前のところで取り逃がしてから、すぐに搜索を始めた。それもかなりの人数で探してるだろうから、遠くへ行こうとすればどっかで見つかるだろう」

創「………もしかしたら、秋池のマンションがある原宿辺りで隠れてたりするかもしんないな」

ヒナコ「でも、あの辺りに車が隠られるような場所はないと思いますよ？」

俊作「普通の、よく見かける屋外の駐車場とは限りませんよ。立体駐車場だったり、ビルの屋上に作られた駐車場に停めてあるかもしれない。それ以前に、駐車場に停めてない可能性だってあります」
ヒナコ「うーん………そうかあ………」

創「情報屋たちに、駐車場以外の場所も調べるよう伝えとくか」

俊作「そうだな。オレはのぶちゃんにホストクラブ潜入を打診しないと」

俊作と創は目一杯親指をプッシュボタンの上で乱舞させた。

俊作「そうだロッキー、のぶちゃんと鴨川さんをホストクラブへ行かせるのはいいけど、護衛をつけなくてもいいのか？」

創「ああ、だったら何人か情報屋を店の周りに配置させとくよ。店内にも女性の情報屋もつけておこう」

ヒナコ「それは頼もしいですね」

俊作「…ってか、お前の周りにはどんだけ情報屋がいるんだよ」

創「さあね。この店開くためにいるーんなバイトしたからなあ」

俊作「それにしても人脈広すぎだろ」

創「ふふふ、うらやましいだろ？ 人脈は広いに越したことねーぜ？」

俊作「ま、まあ、そうだけど」

創「お前だって営業の仕事やってたんだ。味方になってくれる人がそのうち現れるさ」

俊作「そ、そういうもんかな？」

創「そうだよ。お天道様はちゃんど見てるんだ。はっはっは」

創は声高らかに笑ってみせた。

俊作「なんか、どっかの隠居の爺さんみてーなモノの言い方だな」

創「バカにすんじゃねえ！ バチが当たるぞ！ “因果応報” って知ってるか！？」

俊作「わかったわかった。そんな怒るな」

そんな2人のやりとりを見て、ヒナコがクスクス笑う。

と、俊作の携帯電話がメールを受信した。

伸子からだ。

「今朝、米本くんの名前で変なメールが会社中に送信されたの！
“今回のセクハラ騒動は紛れもない事実だ”みたいな内容だったよ！
米本くんに事情を聞きに行ったんだけど、本人はまったく身に覚え
がないんだって。
あたしね、それでピンときたの。
誰かが、昨夜話してたソフトを使って米本くんのパソコンを遠隔操
作したんじゃないかって。
なんか、敵側が強引にこの事件を正当化しようとしてると思わない
？」

メールにはこう記されていた。

この後には、米本の名を騙って送られたとされるメールが原文のま
ま転載されていた。

俊作「何だと!？」

創「どうした？」

俊作「米本のパソコンにも“エクストラ・マジシャン”が……」

創「“エクストラ・マジシャン”？」

俊作「昨夜話した、パソコンを覗き見できるソフトだ。さつきアキ
バで、三田村さんからその情報を掴んできた」

創「お、そうか、三田村さんに会えたんだな。それで、そのソフト
がどうかしたのか？」

俊作「会社で、米本のパソコンもその“エクストラ・マジシャン”
で覗き見されたうえに遠隔操作されたらしい」

創「マ、マジ!？」

ヒナコ「それ、やばくないですか？ 確か米本さんって人事の方で
したよね？」

創「そうだよ！ 米本さん、人事のデータベースを使って笹倉派を
割り出すって言ってたよな？ もし、ホントにパソコンを覗かれて
たとしたら……」

俊作「ああ。処分の対象になるおそれがある。それだけじゃねえ。身の危険に晒されるかもしれんぞ。今すぐやめさせねーと！」
俊作は携帯メールで米本に注意を呼びかけた。

返信が来るまでに、そう時間はかからなかった。

「大丈夫だ。心配いらない」

それが米本の返事だった。

俊作「心配いらないって……」

創「まさか…あの人……」

俊作「……もう、データベースを見ちまつてるのかもしれない」

創「遅かったか……」

俊作「身の危険に晒されるってことは、逆にいえば見えない敵をあぶり出すチャンスも生まれる」

ヒナコ「それって、やっぱり証拠を消すためだったり、口封じのために米本さんを襲おうとするからですよね？」

俊作「そうです。やましいことをしていなければ米本を襲う必要はありませんからね」

創「だけど危険すぎるぞ！」

俊作「あいつはそれを覚悟で笹倉派を洗い出そうとしてるんだろう」
創「要するに困役を買って出たってことか。とはいえ…いくら米本さんが危険を覚悟してるっていつても、ホントに何か危険な目に遭っちまつたら笹倉派の洗い出しもできねーよ？」

俊作「そうだな。よし、今夜は予定を変更して米本の警護につくか。敵が動くとしたらあいつが1人で家に帰る時だろうからな。笹倉の尾行はロッキーの情報屋に頼もう」

創は、少し嫌そうな顔をした。

俊作「どうした？」

創「…またオレの情報屋？」

俊作「だってお前、いっぱい情報屋いるんだろ？」

創「……」

46・刺客

午後8時。

俊作と純は世田谷区内にいた。

笹倉派に襲われる危険性が高い米本の警護をするためである。

米本は世田谷区在住。

会社から30分もあれば帰宅することができる。

30分という時間が長いか短いかは、各々の捉え方次第だ。

おそらく、笹倉派の人間にとっては十分すぎる時間だろう。

俊作と純は、周囲360度に神経を張り巡らせた。

しかし、米本の周辺をガツチリ守ることはしていない。

純が米本の約10メートル前を歩き、俊作は米本の約10メートル後ろを歩いている。

べったりとくつつついていては、誘い込める敵も誘い込めない。

更にいえば、俊作と純はホームレス風の男に変装をしている。いうまでもなく、カムフラージュのためだ。

今のところ、怪しそうな人物は見当たらない。だが、まったく人通りがないわけではない。笹倉派の人間に尾行されている可能性も決して低くはない。いつ襲撃されても迅速に対処できるよう、俊作と純は細心の注意を払っていた。

その頃、株式会社マグナムコンピュータ営業部のオフィスでは、高根伸子がようやく帰りの支度をしていた。

午前中の騒ぎで、さすがにこの日の笹倉は大人しくなっていた。前日まで日に日に増えてきていた業務量も、事件前と同じぐらいに減った。

やはり、会田の「訴えますよ」という一言が効いたのだろうか。

しかし、その会田も事件のせいで業務量が激増してしまった。

俊作の顧客を一度に引き受けてしまっているからだ。

あの量では終電間際まで残業していてもおかしくない。体は大丈夫なのだろうか。

「ふう…。」と一息つき、伸子は席を立とうとした。

と、そこへ伸子呼び止める者がいた。

会田だ。

伸子「会田さん」

会田「高根さん、今帰り？」

伸子「はい」

会田「そうか、お疲れ。今日は大変だったね」

伸子「ええ…。」

会田「少しは落ち着いた？」

伸子「ええ、まあ…。危ないところをありがとうございました」

本当は完全にシヨックは消え去っていないのだが、伸子はあまり心配させるのも悪いと思った。

会田「いや、気にすんなって。高根さんが大丈夫ならそれでいいんだよ」

伸子は「ふふっ」と微笑んだ。

伸子「…じゃ、お先に失礼しますね」

会田「あ、ちよっと待って」

伸子「…?」

会田「あと30分ぐらい待てる? この後メシでも行こうよ!」

伸子「え…この後ですか?」

会田「うん。この際思い切りストレスふっ飛ばさないかと思ってさ」

伸子「あの…ごめんなさい、今日はこれから用事があるんです」

会田「ああ…そう。もしかして、デートか何か?」

伸子「いえ、そういうのじゃないんですけど…」

伸子はこの後、俊作の頼みでヒナコと合流し、黒野が以前勤めていた歌舞伎町のホストクラブへ潜入しなければならないのだ。

会田「そっか。わかった。じゃ、またの機会にしよう」

伸子「すいません。じゃあ失礼します」

伸子は、少しだけ気まずそうにオフィスを後にした。

無意識に、エレベーターへ向かう足取りが少しだけ速くなる。

ただ、会田から軽く食事に誘われた。だが、都合が悪いので断った。ただそれだけのことである。

それだけなのに、この、変に血圧が急上昇してくる感じは何だろう。反射的に…警戒してしまったようである。

伸子「……」

伸子は、胸の内に湧き上がる妙な感情を振り払うかのようにエレベーターのボタンを押した。

ギュッと、いつもより深く基盤にめり込んだ。

俊作と純による、米本の警護はまだ続いていた。

米本の自宅まで、あと10分もかからない。

俊作も純も、「今日は不発だったかもしれない」と思い始めた時だった。

ちょうど、米本が十字路に差し掛かった。

突如、1台のスクーターが出会い頭に猛スピードで飛び出してきた。米本「うわっ！」

驚きのあまり、米本はその場に尻餅をついた。

俊作「!?」

俊作は米本に駆け寄ろうとしたが、一瞬目に飛び込んできた光に気をとられた。

曲がり角のそばに立っていた街灯の光が、何かに反射したのだろう。

スクーターのミラーか？

いや、違う。

腕だ。

スクーターを運転している人物の腕が光っているのだ。

運転しているのは、体格からして男性だ。

黒のヘルメットを深く被り、上下共に黒い服を着ているので光る腕がよく目立つ。

俊作「!」

その「光るモノ」は、俊作にとって見覚えのあるモノだった。

しかし、いくら見覚えのあるモノを見つけたからといって時速60キロ近く出ているスクーター相手にはどうすることもできない。特徴を捉えるだけで精一杯だ。そのまま、スクーターは減速することなく走り去って行った。

米本「うがあっ！」

俊作「!?」

米本の悲鳴に驚き、俊作は素早く振り返った。

米本が、某ホラー映画に出てくる仮面を被った男に角材で殴られている！

純「米本さん……！」

純が勢いよく体を後方へ反転させて駆け出した。

俊作「オラアッ……！」

ホームレス姿の俊作が吠える。

ビクツと、仮面の男の体が一瞬にして強張った。

仮面の男「ひっ……！？ しっ、柴……！」

純「“しば”……？」

純は、しっかりとその耳で聞きとった。

この、仮面を被った小太りの男は俊作を知っているのか？

俊作「いきなり現れやがって……何モンだてめえ！」肩をいからせながら、俊作がズンズンと仮面の男に近づいていく。

仮面の男「う……うわあっ！ 来るなっ！」

後退りしながら、男が闇雲に角材を振り回す。一方の俊作は、一定の間合いを保ちつつ、飛び込むスキをうかがっている。

仮面の男「あああああっ！」

絶叫しながら、男が、角材を、剣道でいうところの上段に構え、一気に振り下ろしてきた。

……ここだ。

“ガシッ！”

仮面の男「!!」

振り下ろされた角材は俊作にがつしりと掴み取られ、仮面の男が引き抜こうとしてもビクリとも動かない。

その引き抜こうとする力を利用して、俊作はいったん体重を仮面の男に預けてから、素早く上体を捻り、一気に角材を男から奪い取った。

間髪入れず、奪い取った角材で男の腹部を突く。

仮面の男「がふっ…!!」

男の体が「く」の字に折れ曲がる。

俊作は更に、右足での前蹴りを男の鳩尾辺りに見舞う。

男が勢いよく吹き飛び、ゴロゴロと地面を転がる。

純「そいつの仮面を剥ぎ取れ! どうやらお前を知ってるみたいだ!!」

俊作「OK!!」

俊作は、のたうち回る男の胸ぐらを掴み、無理矢理に引き起こした。

俊作「ツラア拝ませてもらうぞ」

俊作は、一思いに仮面を剥ぎ取った。

街灯の光に照らされた男の顔に、俊作たち3人は驚きのあまり言葉を失っていた。

無意識に投げ捨てられた仮面が、地面に落ちてバウンドする音だけが突き抜けていった。

仮面の男は、人事部の大成部長だった。

米本「ぶ…部長……!!」

俊作たちの中で最も動揺を露にしていたのは、人事部のメンバーである米本だ。無理もない話だろう。

純「やれやれ、どうりで俊作の顔を知ってるわけだぜ」

俊作「大成さんよオ、これは一体どういうことだ？ まさか、あんなに笹倉派の1人だったんか？」

大成「……」

俊作「観念しろ。オレらは警察じゃねーから黙秘権は通じねーぞ」
その言葉を聞いた途端、大成は大きく息を吐いた。彼の全身から力が抜けていく。

大成「……そうだ。オレは笹倉派だ。だが……」

俊作「だが……何だ？」

大成「だが……オレは……自分の意思で笹倉派にいるわけじゃない」

俊作「あ？ 何だそれは？ 笹倉があんたを無理矢理引き入れたってのか？」

大成「……オレも、罨にはめられたんだ。柴田くん、ちょうどキミのようにな」

俊作「罨？」

大成「……笹倉課長とは10年ぐらい前に営業部で一緒だったことがあったんだが、特にこれといって親しくしていたってわけじゃあなかった。それが、1年前ぐらいから、急に酒の席で顔を合わす機会が増え始めたんだ」

米本「そ……そういえば、一度人事部の飲み会に来てたのを見たことがあるぞ」

俊作「営業部の飲み会に大成さんが来たこともあったな」

大成「そう、人事部の飲み会に来る時もあるれば、オレが営業部の飲み会に誘われることもあった。初めは昔の懐かしさから誘いに乗ってたが、それがまさかこんなことに巻き込まれるとは……」

純「つまり、笹倉はあんたを仲間に引き入れるための下地作りをしてたってわけか？」

大成は、ゆっくりと頷いた。

大成「4月のある夜、仕事帰りに笹倉さんと2人で飲みに行ったんだ。しばらくすると、笹倉さんが“キャバクラへ行こう”って言う

てきた。オレも妻子ある身だから最初は断ったんだが、どうしても
つて言うから仕方なくついて行って……」

俊作「そのキャバクラで何かあったんだな？」

大成「ああ、そうだ。驚いたよ。そのキャバクラに、営業部の羽村
佐知絵がいたんだからな」

俊作「何？」

純「歌舞伎町のフェアリー・ナイトか」

大成「知っているのか？」

俊作「羽村がキャバ嬢だったことは調査済みだ」

大成「そうだったのか……」

米本「…それで、羽村は実際に部長に接客したんですか？」

大成「ああ。羽村がオレについた。1時間ほど過ぎた頃、羽村が“
場所を変えて飲み直そう”と言ってきた。オレは帰るつもりだった
が、笹倉さんに“昔のよしみじゃないか”って押し切られて……」

「大成は結構お人好しなのかもしれない」と、俊作は思った。

大成「……それで、道玄坂にあるっていう羽村佐知絵の知ってる店
に移動して、オレと、笹倉さんと、羽村と、羽村と同じ店のキャバ
嬢と飲み直したんだ」

俊作「道玄坂…？ それ、もしかして“源”って店じゃないか？」

大成「え…？ いや、店の名前まではわからない。なんせ、途中か
ら記憶がなくなってたから……」

純「記憶がなくなるほど飲んじまったのか？」

大成「…いや、そんな浴びるほど飲んだわけじゃないんだが、ある
瞬間から急激に眠くなってきたんだ」

俊作「眠くなって……？」

大成「次に気づいた時、オレはどこかのホテルの一室にいて、見知
らぬ2人組の男に取り囲まれていた」

純「酒の中に睡眠薬か何かを混入されたか」

俊作「どんなヤツらだった？」

大成「羽村の彼氏と名乗るホストみたいな男と、弁護士だった」

俊作「黒野と戸川だな」

大成「…確かそんな名前だった。とにかく、その2人が、いきなり“慰謝料を払え”と言ってきたんだ」

俊作「慰謝料…：さしずめ、羽村に“無理矢理犯された”とでも言われたんだろう？」

大成「…まあ、そんなところだ。現に羽村は部屋の隅ですすり泣いてたからな」

米本「で…：払ったんですか？」

大成「もちろん拒否したさ。でも、向こうに弁護士がついてたんじや従わざるを得なかった…：」

純「結局は払ったのか」

大成「…いや、それが、その翌日になって笹倉さんが羽村に掛け合ってくれたらしく、慰謝料はナシになったんだ。条件付きでな」

俊作「条件？ まさか今回の事件に関する事か？」

大成「そうだ。“柴田を会社から追い出すのを手伝え”と言われた」
純「具体的に、どんなことを手伝うよう言われた？」

大成「…間もなく柴田がセクハラ騒動を起こすから、解雇にしろ」
…：と」

一瞬だけ、俊作の眉間にシワがにじり寄った。

大成「ヤバいことだっというのはわかってた。本来なら、この手のトラブルは双方から事情を聞くべきなのに、柴田くんだけを一方的に処罰するんだからな。でも断れなかった。断れば“羽村をホテルに連れ込んだと家族にバラす”っていうし、笹倉さんも“昔のよしみで助けてやってんだ”って繰り返し言ってくるし…：」

俊作「なるほどな。笹倉たちのやることに目をつぶれてことだったのか」

大成「ああ。笹倉さんと羽村たちがグルなのはすぐに察しがついた」
俊作「しかし、解雇の理由はセクハラだけじゃなかったぞ。普段の勤務態度とかも含まれてたぜ？」

大成「それは、おそらく笹倉さんが後から解雇理由に付け足したん

だろう。マネージャークラスの人間が、自分の気に入らない部下を不当に悪く評価するって話は少なくない」

いわゆる「パワーハラコメント」の一例である。

俊作「それともう一つ。あんたが笹倉たちに協力したのは、はめられて脅された以外にも理由があるんじゃないのか？」

大成「……！」

この問いに対し、大成が動揺したのは誰の目から見ても明らかだったが、これについては純と米本も予測していなかった。

俊作「そのツラ見ると、他に理由がありそうだな。どうなんだ？え？」

大成「……金だ。謝礼を払うと言われたんだよ」

米本「金……？」

大成「実質的には口止め料なんだろう。“他言しようものならただでは済まさん”という意味合いのな。だがオレは怖かった。従わざるを得ないと思ったんだ、あの時は」

俊作「金の受け渡し役は、さっき原チャリで走り去った野郎だな？」

大成「……！」

純「What!？」

大成「……そこまでお見通しだったとは……」

純「Oh, no……なんてこったい。でも俊作、よくわかったな」

俊作「大成さんが無理矢理協力させられてんだったらなんとなく想像がつく。それに、あの原チャリ野郎が見覚えのある腕時計をしたのが見えてな。あいつもグルじゃねーかって思ったんだ」

純「腕時計……だつて？」

俊作「昨夜、羽村から金を受け取った男と同じ腕時計をしてたんだ。あれは限定モデルだから、全くの偶然だとは考えにくい。羽村が渡してた金は、少なくとも2人分以上はあつた。1人はあの腕時計野郎の取り分だとすると、残りのうちの1人が恐らく大成さんに払う口止め料だろう」

恐るべき動体視力である。

米本「部長…金は受け取ったんですか？」

大成「いや、まだだ。これが成功してからもらう約束だった」

俊作「金はいつ受け取る手筈になってる？」

大成「30分後、小田急線の世田谷代田駅近くだ。だが、現にこうやって失敗しているから金はもらえんだろ？」

俊作「かもな……」

純「あのさ、一つ聞いていいか？ 大成さん、あんたが笹倉たちに加担した経緯はわかった。それと、今米本さんを襲ったのと、一体どう関係があるんだ？」

大成「それは……」

大成は言葉をつまらせた。

俊作「言ったはずだ。オレらに黙秘権は通じない。…まあ、おおかた察しはついてる。エクストラ・マジシャンを使って米本のパソコンを覗いたら笹倉派の洗い出しをやったのに気づいたからだろ？」

大成は、思わず苦笑した。

大成「…フツ、かなわんな、キミたちには。だが、米本のパソコンを覗いたのは笹倉さんだと思う」

俊作「何だって？」

47・湊刑事の報告

パソコンを覗いていたのは笹倉だった？

今、大成人事部長の口から重要な証言が飛び出ようとしている。

俊作「大成さん、あんたは米本のパソコンを覗いちゃいねーってのか？」

大成が小さく頷く。

大成「オレは、笹倉さんから“柴田たちが笹倉派の存在に気づいた。その証拠に人事部の米本が人事部のデータベースに入り込んでいる。まずは米本を何とかしろ”と指示を受けたただけだ」

俊作「それで、米本を襲ったってわけか」

大成「そうだよ。キミたちには先読みされていたようだがね」

俊作「米本の名を騙ったメールが会社中にはらまかれたって聞いて、笹倉派もオレらに気づいたと直感したんだよ。ホントの送り主は誰なんだ？ あんたか？」

大成「いや、オレはそんなメール送っちゃいない。そもそも、オレのパソコンにはそのエクストラなんとかってソフトは入っていない」
俊作「何っ？ 心当たりはないのか？」

大成「ああ。ただ、前に笹倉さんがエクストラなんとかってソフトについて誰かと話してたのをチラッと聞いたことがある。だからなんとなくそういうソフトの存在は知っていた」

米本「えっ？ その相手は誰ですか？」

大成「さあ……電話だったからなあ……でも、話し方からいって目上の人間ではなさそうだった」

純「他の笹倉派の誰かだろうな、おそらく」

見たところ、大成はエクストラ・マジシャンの存在は詳しく知らないようだった。

俊作「ところで、あの原チャリ野郎の名前は何ていう？」

大成「い、いや、あの男は名前を名乗らなかつたからわからないんだ」

純「名乗らない……失敗時に正体がばれる可能性も想定してたつてことか。その辺は周到だな」

俊作「報酬だが、あんたと原チャリ野郎以外に誰が受け取る予定かはわかるか？」

大成「……すまん、わからん。なんせ、オレはただ柴田くんの処遇と米本を黙らせるのを手伝わされただけなんだ。詳細は一切聞かされてなくて……」

俊作「……そうか。わかつた」

大成「……柴田くん、オレはどうしたらいい？」

大成が、救いを求めるような目つきで俊作を見上げた。

それを横で見ていた米本は、何とも言えない、切なさと哀れさが入り混じつたような気持ちに苛まれた。

俊作「……あ？」

大成「オレは、自分の不注意から面倒なことに巻き込まれ、その拳句自分の部下まで手にかけてよ……」。もう、自分が惨めで惨めで……」

土下座のような体勢でうなだれる大成は、既に半べそだった。若干の悔しさも垣間見える。

俊作は、しばらく黙って、そんな大成を上から見下ろしていた。歳のせいかな、少しだけ頭頂部から後頭部にかけて髪が薄くなっていた。

俊作「……それは、あんた自身がよく考えて決めるんだな。冷たい言い方かもしれないがな」

大成「……」

俊作「でもよ、あんまり自分自身を追い込む必要はねえと思うぜ。

あんたが根っからのワルじゃねーってのは話しててわかつた」

大成「……」

俊作「ただな、どのみち警察には行ってもらつぞ」

大成「……わかつた。罪は償う」

俊作「それだけじゃねえ。あんたは今、自分の知ってることをオレらに話した。つまり、表面部分にすぎないかもしれないけど笹倉派の秘密を漏らしたことになる。そうになると、今度は大成さん自身も襲われる危険性が出てくることになる。警察に行くのはあんたの安全を確保する意味合いも含まれてるんだ」

大成の背筋が、一瞬にして凍りついた。

俊作「心配すんな。警視庁捜査一課に知り合いの刑事がいる」

俊作は湊刑事と連絡をとり合い、現在地から一番近い駒沢警察署で合流することにした。

それから約1時間後、警視庁駒沢警察署・正面玄関。

湊「まったくよお、お前らは人生の先輩を容赦なくコキ使いやがるな」

駒沢署に到着した湊刑事は、開口一番俊作たちに文句をぶちまけた。俊作「いつもすいませんね、湊さん」

湊「で、この人がお前の言ってた…？」

湊が、申し訳なさそうにうつむいている大成に目をやった。

俊作「はい。ウチの会社の大成人事部長です。笹倉や戸川って弁護士たちに脅されて悪事に加担させられてました」

湊「戸川……」

俊作「そうです、あの戸川ですよ」

湊「うーむ……まずは何があったのかを詳しく聞こう。応接室へ移動するか」

俊作たちは応接室へ移動した。

湊「なるほど……」

大成から事情を聞いた湊は、ただそれだけつぶやくと、大きく反り返って伸びをした。

俊作「オレの身の回りで起こってることと湊さんが追ってる事件と

の関連性がいよいよ強まってきましたね」

湊「ああ。今の話からすると、ソフトを使ったのは笹倉である可能性が高いな。だが、これはちゃんと裏付けをとらないといけないけどな」

俊作「わかってます」

湊「明日、ちゃんと池袋の会社へ行つて対策ソフトをもらつてこいよ」

俊作「はい。既に作ってあればの話ですけど」

湊「大成さん、あんたはしばらく留置場にいってもらつ。いいね？」

大成「はい。お世話になります」

既に、大成の声は力を失っているように聞こえた。

米本「部長……」

悲しく、かつ哀れな気持ちに苛まれた米本が、思わず大成の名を呼ぶ。それも、役職名で。

大成「米本……すまない。オレは人として失格だ」

米本「そんな……」

湊「人として失格だと思ふんなら、しっかり反省してもう二度と同じ過ちを犯さないことだ。たぶん、この米本くんだつてあんたの復帰を待ってくれてるはずだ。そうだろ？」

湊が米本に目配せをする。

米本「はい。ボクは待ってますよ」

大成「米本……」

大成の目頭が熱くなる。

湊「おそらく、復帰後初の仕事は笹倉の処罰になるだろうよ」

大成「……え？」

湊「まあ、あんたは不起訴になるだろうな。これまでの状況から判断して」

大成「そうですか……」

湊「おっと、泣いてるヒマはないぞ。笹倉が裁かれるのはおそらく時間の問題だろうからな。実はオレからも報告があるんだ」

俊作「報告？」

湊「エクストラ・マジシャンの販売元がわかったんだよ。被疑者の自供から購入ルートを探ってな」

俊作「マ、マジすか！？ ずいぶん早いっすね！」

湊「バカヤロ、オレを誰だと思ってるんだ？ 名刑事・湊参二朗さんだぜ？」

純「どんな手使ったんすか？」

純の目には、若干の疑念が込められている。

湊「ちゃんと正当な手段で調べたよ！ 疑ってるじゃねーよ！」

純「あーよかった。自分で名刑事とか言うもんだから、ちよつと心配しちゃいましたよ（笑）」

湊「コラ鳴海！ これ以上バカにすると逮捕するぞ！（笑）」

俊作「まあまあ湊さん（笑） それで、販売元はどこだったんです？」

湊「株式会社 エスイーティ S E T って会社だ。表向きはパソコン関連の卸売りをしている会社らしい。聞いたことあるか？」

俊作「いや……聞いたことないなあ」

湊「略さずというと、“ササクラ・エレクトロニクス・トレーディング” ってたんだ」

俊作「ササクラ……？ まさか……！」

湊「そう。笹倉の親が経営する会社なんだよ」

純「What!？」

俊作「マジかよ！ まさか親子で悪事を働いてやがったとは」

湊「民間調査会社に友達がいるんだけど、そいつの話だと、S E T はここ最近きわめて業績が悪く、社長自身も会社を畳むつもりでいたそう。それが、1年ぐらい前から急に業績がよくなったんだ。友達は裏に何かあったんじゃないかって言ってた」

俊作「不自然な業績の伸び方をしたってことですか？」

湊「そういうことだろうな」

純「……クサイな」

湊「オレは、明日朝イチでSETへ行く。黒い部分を根こそぎほじくり出してやる」

俊作「オレらも行きましようか？」

湊「お前は池袋へ行かなきゃいけねーだろ。ここは警察に任せろ」

俊作「お願いします」

湊「それから鳴海、お前、今は柴田の会社に清掃スタッフとして仕事してんだっただよな？」

純「あ、はい。そうですけど」

湊「ちよつと頼みがある」

純「頼み……？」

湊「今朝、柴田に頼まれて秋池のマンションを調べたんだ。マンションに残った下足痕から彼を連れ去った犯人の手掛かりを割り出すためにな」

俊作「ああ、あれもう何らかの痕跡が出てきたんですか？」

湊「ああ。特に秋池の部屋近くを徹底的に調べたところ、5人ほど、普段あのマンションに出入りしていない、真新しい人間の足跡が検出された。大きさからして全員男だろう」

俊作「5人……純が見た人数と同じだ」

湊「え？ 鳴海、お前犯行当時に現場にいたのか？」

純「はい。秋池がさらわれるのを食い止めようと思いました。でも、いきなり後ろから何者かに頭を殴られて気絶させられちゃったんですよ」

湊「どんなヤツだったか覚えてるか？」

純「いや……よく覚えてないっすね」

俊作「……それ、たぶんオレが階段ですれ違った男じゃないか？」

湊「どんなヤツだ？」

俊作「雨でもないのに上下レインスーツ着てて、野球帽を被ってて、サングラスかけてて、口元をバンダナか何かで隠してて……見るからに怪しいヤツでしたよ。体格はだいたいオレと同じ感じでした」

湊「それで、どんな靴を履いてた？」

俊作「靴…ですか？ さあ…そこまでは見てないっすけど…」

湊「そうか…。いや実はな、検出された5人の下足痕のうち4人はスニーカーやブーツといった、カジュアルな感じの靴だったんだけど、残りの1人はどうもビジネスシューズっぽいな」

俊作「ビジネスシューズ…」

湊「オレ思っただけど、秋池の拉致に笹倉派の誰かが関わってんじやねーか？」

これまでの流れからして、その可能性はある。

俊作「確かに」

湊「そこで鳴海にお願いだ。お前の会社にいる男性社員の下足痕を集めてほしいんだ。掃除をやるふりしてな」

純「いや…集めるって、男全員ですか？」

ちよつと待ってくれといった表情で純が尋ねる。

湊「当然だ。誰が笹倉派なのかわかんねーんだからよ」

純「Oh, no!!!」

湊「文句言っな。こういう地道な捜査が事件の解決に繋がっていくんだ」

俊作「せめてだいたいの目星でもついてりゃいいんだけどな。そうだな、大成さん、あんたの他に誰が笹倉派の一員なのかわかるか？」

大成「すまないが、さっきも言ったようにオレは詳細を聞かされていないからわからないんだよ」

俊作「そうか…：…やっぱ、地道にやっつくしかなさそうだな」

純「そうみたいだな」

湊「そういうことだ。2人とも頼んだぞ」

大成を署の留置場に残し、俊作たちは帰途につく。

もしかしたらまだ笹倉派が米本を襲う危険性があるかもしれないというところで、まずは米本を自宅まで送ることにした。

道中、俊作と純は「明日は朝が早いから少々面倒だ」などといった話をしていたが、米本は黙ったままだった。やはり大成が気がかり

なのだろうか。

俊作「米本、お前さつきから黙ったままだな。やっぱり、大成さんが気がかりなのか？」

純「それなら心配ないだろうよ。湊さんもそう言ってたし」

米本「…いや、それもそうなんだが……」

俊作「何だよ？ 他に心配ごとでもあるのかよ？」

米本「心配ごとってわけじゃなくてさ、今日、人事部のデータベースにアクセスした時、笹倉派の一員らしき人物を見つけたんだよ」
俊作「ホントか？」

米本「可能性の話だけだな。しかもその時は部長に見つかりそうだったからデータをよく確認してないんだ」

純「一応確かめてみよう。どこの誰だ？」

米本「広報部広報一課の新田課長代理。笹倉さんとのつき合いは長いらしい」

広報部広報一課は、外部に対し自社製品を宣伝していくのが主な業務である。

純「なるほど、広報部だな。よし、明日話を聞いてみるか」

俊作「純、大丈夫か？ 結構やることあるぞ。下足痕も採取しなきゃいけないし」

純「心配すんなって。こっちは人海戦術が使えるんだ。そもそも下足痕の採取なんてオレイ人じゃ無理だろうよ」

人海戦術　つまり清掃スタッフ兼情報屋のことである。

俊作「そうか、じゃあ頼んだ」

米本「しかし鳴海さん、どうやって新田さんに近づくんのだ？」

純「その新田さんは喫煙者か？」

米本「確か喫煙者だったと思う」

純「そうか。じゃあ近づくのは容易いな」

米本「ああ、そっぴや鳴海さんも喫煙者だったっけ」

純「そういうこと。任せといてよ」

俊作「しかし、広報部の人間となると、もしかしたら写真の扱いに

慣れた人間がいるかもしれないな」

純「そうだな。資料作りの時に写真を使うこともあるだろうしな」

米本「もしかしたら、捏造されたあの“証拠写真”を撮った犯人がわかるかもしれないってことか？」

俊作「ああ。だけど、まずは新田課長代理が今回の事件に関与しているかどうかを確かめてからだ」

純「わかってるさ。オレがうまいこと聞き出してやる」

48・伸子ホストクラブへ行く

俊作たちが大成を捕まえるより少し前、伸子とヒナコは歌舞伎町にある、黒野がかつて勤務していたというホストクラブの近くまで来ていた。

店の名前は「サンバ・テンペラード」。

派手すぎない外観だが、どこか上品で気品高さを感じさせる。

伸子とヒナコは、一旦店近くのカフェに入った。

伸子「あそこね…」

ヒナコ「…ええ」

伸子は少し緊張しているようだ。先程から軽く深呼吸を繰り返している。

ヒナコ「高根さん、もしかして緊張してます？」

伸子「はい。だってホストクラブって初めてなんですもの。鴨川さんは？」

ヒナコ「キャバクラにいた頃、仕事あがりにつき合いで何度か行ったことがあるだけですよ。でも、あたしにはそんなに楽しい所だとは思えませんでした」

伸子「そうなんだ……」

ヒナコ「いや、あくまで個人的な意見ですよ？ でも、これをきっかけにハマるのだけは気をつけたほうがいいと思います」

伸子「ああ、ホストにハマりすぎて借金作っちゃう子がいるみたいですからね。あたしは大丈夫だと思いますよ……たぶん（笑）」

ヒナコ「たぶん…って、自信ないんですかあ〜？（笑）」

互いに笑い合う伸子とヒナコ。出会って間もない両者だが、少し打ち解けたようだ。

伸子「じゃあ、そろそろ行きましようか」

ヒナコ「はい。店へ行く前に確認しましょう。この聞き込みはそれぞれ別行動で、取材役と記録役に分かれます。高根さんはどちらをやりたいですか？」

伸子「うーん……どっちでもいいんで、鴨川さんから好きなほうを選んでいいですよ」

ヒナコ「いいんですか？　じゃあ、あたしが記録役をやります。先に店へ入って待機してます。なるべくあたしに近い席へ通してもらってくださいね」

伸子「わかりました。少し間をおいてから行きます」

伸子とヒナコはカフェを出た。

ヒナコが先に店内へ入っていく。

席へ案内されると、バックに忍ばせてある、創から借りた高性能ICレコーダーのスイッチを周囲の目を盗みながらオンにした。

約5分後、伸子が入店。

ちょうどヒナコと斜向かいの席に通される。この位置ならICレコーダーで会話を録音することができる。

ヒナコは、横目で伸子の様子を確認しつつホストとの会話を楽しんだ。

一方、ホストクラブ初体験の伸子も、なんとかホストとの会話に順応していつているようだ。

伸子についたホストは「シュウ」と名乗った。年齢は伸子よりも1歳上らしいが、童顔でさほど上背もないせいか、逆に若く見える。シュウ「へえ、シンコちゃんはこういう所初めてなんだ？」

伸子は、念のため「シンコ」という偽名を使っていた。ただ単純に「伸子」の「伸」を音読みに読み換えただけなのだが。

伸子「そうなの。だから緊張しちゃって」

シュウ「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。楽しく飲もう」

伸子「ふふふ、そうだね」

シュウ「でもさあ、初めてなのに1人で来るなんて勇氣あるよね。何かあったの？」

伸子「……秘密！」

シュウ「ええ？ 何それ？」

伸子「うふふ。さ、飲もう！」

シュウ「そういう、ちよっとミスティアスな感じの子って、嫌いじゃないなあ」

シュウのリードで、伸子の緊張は次第に和らいでいった。

1時間ほど経過した頃、ヘルプのホストが伸子の席に着く。シュウと同じ年だという、リハクという名のホストだった。こちらは逆に実年齢より少し上に見えた。体格も良く、とてもホストに似つかわしくないくらい無骨な顔つきだったからだ。

シュウ「聞けよりハク、彼女、今までホストクラブに来たことなかったんだって」

リハク「マジ？ でも、何で初めてなのに1人なの？ 誰か付き添いは？」

伸子「いないよ。あたし1人」

シュウ「シンコちゃん、そういうえばさつきも1人で来た訳を言わなかったよね。やっぱり気になっちゃうなあ。よかったら話してくれないかな？」

伸子「……いいよ。シュウくん優しいから話してあげる」

シュウ「ホント？ でも、イヤだったら話さなくていいからね」

伸子「ううん、大丈夫。ちよっと真面目な話だけいい？」

真剣な面持ちで、伸子はシュウを見つめた。

シュウ「いいよ。何でも話して」

そんな伸子の気持ちが伝わったのか、シュウもこれまでとは表情を一変させ、伸子の話がよく聞こえるよう顔をより近づけた。

伸子「実はね、人を捜しに来たの」

シユウ「この店に？　どんな人だい？」

伸子「……友達の元彼」

リハク「友達の？　キミのじゃないんだ？」

伸子「うん。だってね、話を聞けばその元彼って酷いんだよ？　初めのうちは友達を束縛するぐらいの勢いだったのに、自分は陰でキヤバクラ通いして、拳句にはあっさりその店の女に乗り換えちゃうんだから」

シユウ「それは酷いなあ。それで、その元彼がこの店にいるんだね？」

伸子「そうなの。会って一発引っ叩いてやりたくて。あまりにも友達がかわいそうなんだもん……」

伸子はうつむき、思いつめているような様子を演出した。

シユウ「シンコちゃん、キミはすげー友達思いなんだね。でも、さすがに引っ叩くのはマズイから、代わりにオレが説教しとくよ。それでいいかな？」

伸子「……うん」

シユウ「そいつの名前とかわかる？」

伸子「確か、黒野って言った」

シユウとリハクの顔が、一瞬にして強張る。

リハク「……あ、あいつか……」

伸子「いるんでしょ？」

シユウ「……ごめんねシンコちゃん。その黒野ってヤツ、確かにこの店で働いてたけどだいぶ前に辞めちゃったんだよ」

伸子「えっ？　い、いつ？」

黒野が辞めた時期については既に知っているが、ここは知らないふりをする。

シユウ「もう1年ぐらい前だよ」

伸子「そうだったんだ……。じゃあ、あの子、半年ぐらいウソをつかれてたんだ……」

リハク「半年もウソを？」

伸子「うん。別れたのが半年ぐらい前だったから……」

シュウ「おいおい、あいつそんなに酷いことをしてたの？」

伸子「そうなの。もう、聞いてることちまで頭にきちゃったわよ」

シュウ「そりゃそうだよ。だけど、あいつにはあまり関わらないほうがいいよ」

伸子「どうして？」

シュウ「あいつ、とんでもない乱暴者で原宿辺りの不良グループの
アタマらしいんだ。そのせいかどうかわからないけど、ここで働い
てた時もトラブルが多くてね」

リハク「そうそう。黒野は金と女にだらしない男でさ。金や女絡み
のいざこざが多かったよ」

伸子「じゃあ、辞めたのも金銭トラブルか女性問題で……？」

リハク「いや、辞めたのは他店とのトラブルが理由だよ。まあ、女
絡みつてのは半分あたってるかな」

伸子「え？」

シュウ「ゴールデン街の方に“ファニー・ウオーク”ってホストク
ラブがあるんだけど、1年前に黒野がその常連客を無理矢理横取
りしようとしてトラブルになったんだ。その時黒野がお抱えの不良
グループを指揮して相手のホストを袋叩きにしちゃって。そのホス
トは全治3カ月の大ケガさ」

伸子「ウソオ……」

リハク「当然向こうのオーナーが怒鳴り込んできて、“警察へ届け
るぞ！”ってウチのオーナーに詰め寄ったよ」

シュウ「しかし、そこへ黒野の弁護を引き受けた弁護士が仲裁に入
って、なんと示談にしちまったのよ」

伸子「示談に？」

シュウ「ああ。黒野は逮捕されなかったけど、さすがにこれ以上こ
こで勤めるわけにはいかなかったんだろっな。それから程なくし
て辞めたよ」

伸子「そう……で、今は何をやってるの？」

シュウ「なんか、聞いたところによると、もめた時に弁護してくれた弁護士の勧めでパソコン関係の仕事をやってるらしいけど、詳しくはわからない」

リハク「しかし、あの弁護士もある意味すごかったよな。いったいどんな手エ使ったのかな」

シュウ「ああ。あの人が何て名前だったっけ。トダとかトガワとかいっただけ」

リハク「そうそう、確かそんな名前だった」

トガワ？

戸川のことか？

シュウ「シンコちゃん、黒野はとにかく危ないよ。それでも友達のために一言物申したい？ スッパリ割り切って新しい恋をするのも一つの道だよ？」

伸子「…そうね。とりあえず今シュウくんが話してくれたことは友達にも伝えとくね」

シュウ「うん。それがいいよ」

伸子「ごめんね、こんな重い話しちゃって」

シュウ「いいんだよ。気にしないで。さあ、飲み直そう！」

伸子とヒナコが店を出たのは、入店から約2時間後のことであった。ことのほか、ホストたちはすなりと黒野の情報を教えてくれた。やはり、仲間のホストからも忌み嫌われた存在だったのだろう。

伸子「上手く録音できましたか？」

ヒナコ「大丈夫だと思いますよ。後で黒木さんに頼んで音声データに変換してもらいましょう」

解散すべく新宿駅へ向かう途中、ドン・キ・ホーテの辺りでフェアリー・ナイトへ聞きこみ調査に行っていた創と偶然にも帰り道が一緒になった。

創「鴨川さん、ちゃんと裏付け取ってきましたよ。やっぱり羽村佐知絵って子は相当性格の悪い女だったみたいですね」

ヒナコ「でしょう？ しかも大半の人間がそれに気づかないんだから、たいした役者ですよ」

創「それと、羽村が店を辞めた理由まで聞くことができました」

ヒナコ「ああ、佐知絵は確かあたしが店を辞めてからすぐに辞めたって聞きましたけど……」

創「そう。彼女が店を辞めたのは今年のゴールデンウィーク前のこと。なんでも、鴨川さんとのトラブルの責任をとって辞めていったそうですよ」

ヒナコ「あたしとのトラブル？」

創「建前ですよ。アコちゃん（この日創が聞き込みを行ったキャバ嬢の名前）も言っていましたけど、鴨川さんが店を辞めて、陰で“せいせいした”って言ったのがいきなり“トラブルの責任をとる”って言い出したもんだからすごく不自然だった」

伸子「…わけわかんないね。何か裏でもあるのかな？」

創「もしかしたら、“鴨川さんの呪い”じゃないかって噂されてますよ」

ヒナコ「え？ あたしの？」

創「鴨川さんが辞めた直後から、妙な客が来店するようになったとか。身なりはそこら辺のサラリーマンと変わらないが、常に羽村を指名してきては2人で真剣そうな話をしてみたいです。チラホラ金の話も聞こえたとか。それから程なくして羽村は店を辞めた……。だから、店の子たちは鴨川さんが何者かに依頼して、トラブルのことをネタに羽村を強請ゆすりったんじゃないかって噂してるみたいなんです」

す」

ヒナコ「冗談じゃないですよ！ あたしがそんな犯罪行為するはずないじゃないですか！」

創「それはアコちゃんもわかってます。噂してるのは、もともと羽村と仲の良かったキャバ嬢たちです」

ヒナコ「……まあ、アコちゃんがわかってくれてるならとりあえずは安心だわ」

伸子「だけど、“妙な客”ってというのが気になるわね。誰なんだろう？」

創「アコちゃんはそいつに接客しなかったからよくわからないらしいけど、羽村が店を辞めたらぱったりと来なくなったらしい」

伸子「怪しいなあ……」

創「これはオレが何度か店に通って情報を聞き出しとくよ」

その時、創の携帯電話に、俊作から着信が入る。

大成逮捕までの経緯を報告するためのだ。

創は、俊作とこれまでの調査状況を互いに報告し合った。

創「なるほど、笹倉もあの店に行ったことがあったんだな」

俊作「ああ。大成さんをはめるためにな。しかも店に協力者っぽいのがいやがった」

創「その女に詳しく話を聞く必要があるそうだな」

俊作「ああ。じゃあ、今度はオレがキャバクラへ行って話を聞いてくるよ」

創「ホント？ そうしてくれると助かるよ。オレは今さつき行ってきたばかりだから、そう何度も行けねーしな」

俊作「OK。羽村を指名した“妙な客”ってのも気になるしな」

創「頼む」

それから約30分後、歌舞伎町のフェアリー・ナイトではアコを待

つ俊作と純の姿があった。

席に着いたアコに俊作が事情を話すと、彼女は近くにいたボーイに耳打ちをし始めた。

アコ「待っててね。今その子を呼んでもらったから」

しばらくすると、小柄で童顔だがバストの大きなキャバクラ嬢がやって来た。

いわゆる「ロリコン系」という手合いの女性だろう。

彼女は、ミイと名乗った。ミイは、その外見通りかわいらしいしゃべり方が特徴だ。

ミイ「今日はあ、お仕事帰りなんですかあ？」

正直、こういったタイプは俊作にとって最も苦手な部類だった。とつと必要な話だけ済ませて店を出よう。彼はそう思った。

俊作「あんたに聞きたいことがあって来た」

ミイ「ええ？」

俊作は、笹倉と大成の写真をミイの目の前に提示した。

ミイの表情が、ほんの一瞬だけ心当たりのありそうな感じに映った。

俊作は、それを見逃さなかった。

俊作「この2人に見覚えがあるな？」

ミイの目をじっと見据えながら俊作が言う。

言葉もなく、ミイは首を縦に2〜3回振った。

49・バイティング・ダイバー株式会社

ミイは、俊作の眼光に気圧されてしまっていた。

ウソは通用しない。

彼女は本能でそう感じ取っていた。

ミイ「4月頃だったと思います。2人で来店されました」

ミイは、笹倉の写真を指差して続けた。

ミイ「この笹倉さんという方はそれ以前にも何度か来たことがあったので覚えてるんですが、もう1人の……確か大成さんだったかな……この方は初めてでした」

俊作「笹倉は何度か来てたのか？ いつも誰を指名してた？」

ミイ「もう辞めちゃった子です」

俊作「何て名前だ？」

ミイ「……佐知絵」

俊作「！」

普段佐知絵が接客していたのは笹倉だった？

ミイ「でも、あの日だけはあたしが笹倉さんに指名されて、佐知絵が大成さんについてましたね」

俊作「どうしてだ？」

ミイ「わかりません……」

俊作「……ところで、大成さんはそれ以降何度か店には来たのか？」

ミイ「いいえ。あの日だけでした」

俊作「それにしては記憶力がいいな。名刺でももらったのか？」

ミイ「いえ、もらってませんけど……」

俊作「もらってませんけど……？」

ミイ「実は、佐知絵から笹倉さんと大成さんが来ることを聞かされてたんです。佐知絵からは“一緒に接客してほしい。大事な知り合

いだから2軒目までつき合って”って言われて……”

純「2軒目まで……」

俊作（なるほど、大成さんの言うとおり、ハナから罫にはめるつもりだったんだな）

純「2軒目はどこで飲んだ？」

ミイ「確か、渋谷道玄坂の“源”ってお店でした。なんでも、佐知絵の彼氏の後輩が働いてるお店だっていうんで割引がきくみたいで」
俊作「！」

佐知絵の彼氏の後輩だと？

黒野の後輩……たぶんロック・ボトムの誰かだろう。

そのような人物があのお店にいたというのか？

俊作には、なんとなくだがその人物に心当たりがあった。

ここを出たら次は「源」へ行こう。彼はそう思っていた。

純「ちなみに、その後輩ってヤツの名前はわかるか？」

ミイ「えつと……確か坂下って呼ばれてました」

純「坂下……ね」

俊作「それで、そこで飲んだ後はどうした？」

ミイ「あたしはそこで帰りました。ただ、大成さんは途中で酔い潰れて寝ちゃったんで笹倉さんに介抱されていたみたいでしたけど」

俊作「なるほどな……。ところで、佐知絵って子に、以前妙な客が来てたらしいな。それについては何か知ってるのか？」

ミイ「ああ、あの人ですか。“サム”というあだ名以外詳しいことはわかりません……」

俊作「“サム”……日本人じゃないみたいだな」

どうやらこの女はこれ以上のことは知らないようだ。

俊作と純は早々にフェアリー・ナイトを出て、渋谷の「源」へと向

かった。

坂下　おそらくあいつだ。

「源」に到着し、坂下を呼び出す俊作と純。

出てきたのは、前日に俊作とヒナコが訪れた際に秋池を呼んで来てくれた、あの愛想の悪い男性店員だった。

思った通りだ。俊作は心の中で小さくガッツポーズをした。

俊作がどうして彼を坂下だと踏んだのかというと、秋池のことを尋ねた際にわずかながら動揺の色を見せたからだだった。普通は変に動揺したりしないはずである。

俊作「お前か、坂下ってのは」

坂下「何ですか？」

先程、キャバクラでミイにしたように、俊作は笹倉と大成の写真を坂下に突きつけた。

俊作「この2人と、羽村佐知絵とミイってキャバ嬢が、4月頃にこの店へ来たな？」

坂下「知りません」

機械的に切り返す坂下。しかし俊作は、ミイの時以上に鋭い目つきで坂下を睨みつけた。

俊作「しらばつくれんなよ。ネタはあがってんだ」

じつと坂下の目を睨み続ける俊作。初めのうちは知らんぷりを決め込んでいた坂下も、次第に目が泳いでくるようになってきた。

すかさず、俊作が再度尋ねる。

俊作「もう一度聞けど。この写真の2人と、羽村佐知絵とミイってキャバ嬢が、4月頃にこの店へ来たな？」

坂下「……はい、来ましたよ」

俊作「ミイって子の話にあった、羽村の彼氏の後輩ってのはお前のことだな？」

坂下「そ、そうです」

俊作「羽村の彼氏は黒野で間違いないな？」

坂下「はい」

俊作「じゃあ、お前はロック・ボトムの一員だな？」

坂下「……そういうことになりますかね」

俊作は大成の写真を指差した。

俊作「この大成さんって人はな、この店で飲んでたら急に眠くなって眠っちまったんだってよ。ミイって子は酔い潰れて眠ったと思ったらしいがな。次に大成さんが目覚めたのはホテルの一室で、黒野や戸川って弁護士、もう片方の写真の笹倉って男に囲まれてたそう
だ」

坂下「それが何か？」

俊作「だからしらばつくれんなつったろ。知ってることを話せよ。オレにごまかしはきかねーぜ」

俊作は、静かに眼だけで殺気をぶつけにいった。思わず、ゴクリと唾を呑む坂下。

坂下「……く…黒野さんの指示で、大成って人の酒に睡眠薬を混ぜました」

俊作「何のために？」

坂下「……ある計画に協力させるため…です」

俊作「その計画ってのは何だ？」

坂下「笹倉さんの会社にいる、邪魔な部下を追い出す計画……」

俊作「邪魔な部下か…。そりゃ、誰のことだ？」

坂下はアゴを俊作の方へとしゃくった。

坂下「柴田さん、あんただ」

ロック・ボトムの一員なら自分の名前を知っていても不自然ではない。俊作は特別驚くことはなかった。

俊作「首謀者は誰だ？ 笹倉か？」

坂下「…たぶん」

純「たぶん？」

ここで、初めて純が口を開く。坂下は慌てるようにして純に向き直る。

坂下「そこまでは聞かされてないんです。ただ、笹倉さんや黒野さん、佐知絵さんが中心になって動いてるのは間違いないかと……」
純「なるほどな……」

俊作「よし、じゃあ質問を変える。オレが昨日秋池に会うためにここへ来たのは覚えてるな？」

坂下「はい」

俊作「その後、オレは羽村の家の近所へ行っただが黒野に後をつけられてた。これは、誰かがオレの行動を逐一監視しないと尾行は不可能だよな？」

坂下「……」

俊作「お前、オレが昨日ここへ来たことを黒野に連絡したな？」

坂下「……はい」

俊作「そして、秋池を早退させたのもお前だな？」

坂下「……オレが帰らせたわけじゃないんですけど」

純「じゃあ何だつてんだ？ 黒野の指示か？」

坂下「ええ……そうです」

俊作「その時ヤツは何て言ってた？」

坂下「“念のためしばらくどこかで謹慎してもらおう”って言ってました」

純「謹慎……」

俊作「……秋池をどこに連れて行っただ？」

坂下「わかりません。黒野さんは教えてくれませんでした」

俊作「そうか……。じゃあ、秋池がクラブを営業停止に追い込まれた経緯については知ってるか？」

坂下「よくは知らないけど……確かクラブで出された酒に異物が混入されてたとか何とかでもめてたような……」

俊作「この店で働き出した経緯については？」

坂下「黒野さんの依頼です。ちょうど、個人的にオレがこの店長と親しかったから……」

純「具体的には何て頼まれた？」

坂下「オレらに粗相をしたが、更生のためだ」って言っていましたね」

純「更生……」

俊作「……」

坂下「あの、このこと、オレが言ったって黒野さんには言わないでもらえますか？」

純「え？」

俊作も純も、一瞬目をぱちくりさせた。

だが、その言葉の裏側をすぐに悟ったようだった。

俊作「怖いんだろ？ ホントは黒野に嫌々従ってるんじゃないのか？ ロック・ボトムの一員だってわりには素直にしゃべってくれたもんな」

坂下「……」

坂下は答えなかった。

俊作「まあいいさ。でもよ、我慢は体に毒だぜ。会社じゃあねーんだ。一緒にいても楽しくねーヤツとはつるまねー方がいいと思うけどな」

坂下「…甘いよ。あんたは、あの人の怖さを知らないからそんなことが言えるんだ」

俊作「はっ、そうかい、上等だぜ。じゃあ、その怖さってのを見せてもらおうじゃねーかよ」

俊作は不敵な笑みを浮かべた。

この聞き込みで一つわかったことは、秋池がこの事件の鍵を握っている可能性が高いということ。しかし、その秋池は現在行方不明だ。いち早く彼を見つけ出す必要がある（…とはいえ、ここは情報屋に頼るしかなさそうなのだ）。

翌日の午前10時。

ビジネススーツに身を包んだ俊作は池袋のバイティング・ダイバーにやって来ていた。
社長の石原に会うためだ。

バイティング・ダイバー株式会社は、池袋駅東口を出て、明治通りと国道254号線が交わる交差点の近くに建つ小さなビルの2階にある。来る途中、ギターやベースを担いで歩く若者と何度もすれ違った。会社の近くに楽器屋か音楽スタジオでもあるのだろうか。

ビルは、少々古ぼけている感じがした。築20年は経過しているだろうか。ありきたりな、ごく普通な見た目のドアをノックした後で静かに開ける。すると、目の前にいきなり大きめなパーテーションが現れる。そのパーテーションの前に電話の置かれた小さな机が設けられている。

「御用の方は、内線524を押してください」
電話の脇に、そのような貼り紙があった。俊作はその通りプッシュホンを押し、内線電話で受付に繋ぐ。

30秒ほど待つと、奥からボブカットの女性が姿を現す。身の丈は160?ほどあるだろうか。太っているわけではないが、やや骨太な体系である。

女性「柴田さんですね? お待ちしておりました。応接室へどうぞ」
言われるがまま、俊作は奥の応接室へと案内された。入口とは違い、応接室はしっかりとした壁で区切られている。

上座のソファーに通された俊作。やがて、社長の石原が入室してくる。

石原「どうも、石原です」

俊作は、「石原」という名前から勝手に現在テレビで活躍中の、天気予報もできる某俳優をイメージしてしまっていた。だが、実際の石原社長はさほど大柄でもなく、むしろ大学助教役の似合う某俳優に近いルックスだった。ただし、見た目だけで年齢を判断すれば

まだ若い。30代前半といった感じか。

自己紹介もそこに、俊作は話を切り出した。

石原は、三田村の時と同様に身を乗り出して俊作の話に聞き入っている。

俊作が全て話し終わると、石原は小さく唸った。

石原「そうですか……あなたもエクストラ・マジシャンの被害者だったんですね」

俊作「私だけではありません。身の回りで同様の被害に遭った者が何人かいます。早急に策を打たねばなりません」

石原「……」

石原は、黙って俊作の目を見据えているようだった。

やがてスツと立ち上がり、クルリとドアの方向へ踵を返した。

石原「少々お待ち下さい。今対策用ソフトをお持ちしますので」

俊作「え？ 対策用ソフトですか？」

石原「まだ発売前なのですが、つい先日最新バージョンが完成したばかりなんですよ」

なんとというタイミングの良さだろう。俊作は心からそう思った。

数分後、石原社長がUSBメモリを3つほど持って戻って来た。

石原「このUSBメモリの中に対策用ソフト“ハイパー・バイティング”が入っています。このメモリ1個でパソコン5台までインストールすることが可能です」

俊作「5台まで……」

石原「これがあれば、エクストラ・マジシャンの駆除やアクセスブロックはもちろん、アクセスしてきた端末の割り出しやいじくられた内容まで解析することができるんです」

俊作「すごいですね！」

石原「ただし、駆除をしたりアクセスしてきた端末の割り出しやい

じくられた内容まで解析することができるのは、実際にエクストラ・マジシャンに感染したパソコンだけです。ハイパー・バイティングはエクストラ・マジシャンのデジタル信号を逆に利用して相手のパソコンに乗り込んでいきますからね。そうでないパソコンはアクセスブロックしかできません」

俊作「はあ……なるほど。まるでクロスカウンターというか、真剣白羽取りというか」

USBメモリを手に取りながら、俊作は多大な関心を寄せていた。

石原「……まあ、そんなところでしょようかね」

少し照れ臭そうに石原は言った。

俊作「これ、お値段はおいくらなんですか？」

石原「いや、お金はいりません。それはまだ発売前のモノだし、厳正な動作検証を済ませたとはいえ実際どのような効果があるのかもわかりません。それに、柴田さんの目を見れば、絶対に悪用しないことがすぐにわかりますよ」

俊作「あ、いや、そ、そうですか」

今度は俊作が照れ臭くなってしまった。

石原「一刻でも早くそれらを使って、会社に蔓延はびるエクストラ・マジシャンの殲滅せんめつにあたってください」

俊作「あつ、ありがとうございます!」

俊作は深々と頭を下げた。

石原「ただし!」

俊作「?」

石原「条件が一つあります」

俊作は思わず一度下げた頭を素早く元の高さまで引き上げた。

俊作「条件……と言いますと?」

石原「柴田さん、あなたはお辞めになったとはいえマグナム・コンピュータの方ですよね?」

俊作「あ、え、ええ、そうですね」

質問の意図が分からず、俊作はつかえながら答えた。

石原「マグナム・コンピュータにお勤めで、会わせてほしい方がいるんです」

俊作「はぁ……。それは誰です?」

一旦、石原は視線を伏せて、それからまた俊作に向けた。

石原「高根伸子さん……という方なのですが、ご存知ですか?」

俊作「……え?」

50・ガサ入れ

俊作は思考回路が一時停止した。

石原社長が伸子に会いたい？

何のために？

いつたい彼女との間にどのような関係が？

俊作「高根…伸子ですか？」

石原「ええ。ご存じですかね？」

俊作「はい。同期ですから。しかし、何故彼女と会いたいんですか？」

石原「ちよつと、話しておきたいことがあります……」

俊作「何を話すんです？　そもそも石原さんと高根にどんな関係が……？」

石原「実は私も、かつてはマグナム・コンピュータの社員だったんですよ」

俊作「えっ！？　そうだったんですか！？　部署はどちらで……？」

石原「総務部。彼女の教育係をやっていました」

俊作「えええーっ！！？」

人は、こういう時に世間の狭さを感じるのだろうか。この日初めて会った人物である石原社長が、かつては同じ会社で働いていて、しかも入社当初から仲の良かった伸子と同じ部署にいたなんて。

俊作は落ち着きを取り戻し、まじまじと石原の顔を見た。

そつえば、昔、まだ伸子が総務部にいた頃、用事があって彼女の所へ行くとこんな顔をした男が伸子の隣にいたかもしれない。そんな気がしてきた。

俊作「でも、ただかつての同僚という間柄であれば、わざわざ私が仲立ちするほどのことではないかと思いますが、何か事情でもある

のですか？」

石原「……実は、仕事を教えているうちに私が彼女に……その……いわゆる恋愛感情を抱いてしましまして……それがもとでちょっとしたトラブルになっちゃいまして。それで会社を追われてしまったんです。だから、私からはどうも連絡がしづらくて」

俊作「トラブル……」

石原「詳しいことは彼女と会わせてくれたらお話します。なんだったら柴田さんに立ち会っていただいても構いません。お願いです。高根さんと会わせてはいただけませんか？」

石原は、日本海溝を上回るぐらいの勢いで頭を下げた。

俊作「石原さん……頭を上げてください。あなたの想いは十分に伝わりましたよ。高根には私から伝えておきますから」

石原「ホントですか？　ありがとうございます！」

俊作「……」

俊作は、なんだか変な気分になった。

だが、これでエクストラ・マジシャンの対策用ソフトであるハイパー・バイティングは手に入った。あとはこれを使ってアクセス元の割り出しを急ぐだけだ。

その頃、マグナムコンピュータで清掃業に勤む純は、喫煙室で広報部の新田と接触していた。

タバコの火を借りに行き、それをきっかけに雑談に持ち込むといういつものやり方である。

純「　しかし、今会社は大変そうですね。なんでも営業部でセクハラ騒動があつたらしいじゃないですか」

新田「え？　ああ、そうですね」

新田は、40歳前後で中肉中背、年相応な顔つきの男性だ。

純「上司は大変ですよ。部下のケツ拭かなきゃいけないんだから」

新田「本来ならそうでしょうな」

純「本来なら？」

純「オウム返しに尋ねる。」

新田「あの笹倉さんという人は、平然と自分にかかる責任をどこかへ転嫁してしまっ……」

純「ええ？ それってまずくないですか？」

新田「でしょう？ 以前からその気はありましたが、ここ最近は特にひどい。コネ入社だから誰にも叱られなかったのが原因だと思います。今じゃやりたい放題やる始末だ」

純「なんか、結構その笹倉さんって人について詳しいじゃないですか」

新田「ちよつと前までは、あんな乱暴者でもわりと仲良くしてたんです。周りからは“笹倉派”なんて呼ばれてバカにされてましたけど」

純「笹倉派……」

新田「きつと、ああいった人種とつき合えるから変な目で見られて、それであんな呼ばれ方をしたんでしょう。それでもボクは構わなかった。少し前までは」

そう言つて、新田は灰皿にタバコの灰を落とした。

純「何があつたんです？」

新田「1年ぐらい前、笹倉さんは奥さんと離婚しました」

純「り、離婚！？」

意外や意外！ 笹倉に結婚歴が……！

新田「以前から夫婦仲はあまり良くはなかったらしいんですが、そこへ笹倉さんのキャバクラ通いが重なりましてね。奥さんから別れを切り出したそうなんです」

純「キャバクラに通いつめてたつてことは、誰か入れ込んでた子でもいたんですかね？」

新田「そうみたいです。周りのボクたちにも嬉しそうに話をしましたから」

純は、そのキャバクラ嬢はもしかや羽村佐知絵ではないかと直感した。昨晚、フェアリー・ナイトのミイから聞いた話から考えると合点がいく。

新田「それで奥さんは、弁護士を雇って笹倉さんに慰謝料を請求しようとしたんです。ところが笹倉さんも弁護士を雇って、奥さんと徹底抗戦の構えを示したんです」

純「それで、結局どうなったんですか？」

新田「……勝ったのは笹倉さんでした。奥さんや奥さん側の弁護士は、いつの間にか全ての個人情報被盗まれ、“これ以上法廷で争うつもりなら個人情報を売り捌く”と脅されたらしく、引き下がるしかなかったそうです」

純「それって脅迫じゃ……？」

新田「立派な脅迫です。でもね、知らない間に個人情報を盗まれてるんですよ。防ぎようがありません。いつの間にか弱みを握られては、ひとたまりもない」

純「いつたい、どうやって盗むってんだ……」

新田「離婚の少し前、笹倉さんが“面白いモノを手に入れた”って自慢してきたことがあったんです」

純「面白いモノ？」

新田「詳しくはわかりませんが、どうやら他人の個人情報を盗むことができるソフトウェアのようです。彼はボクにもそれを勧めてきました。なんだか気味が悪いので断りました。それからというもの、笹倉さんはまるで悪魔のようになってしまいました。気に入らない人間はそのソフトを利用して個人情報を盗み、それをネタに追いつめる……」

純「ひでえ……」

純は唸った。

おそらく、そのソフトはエクストラ・マジシャンのことだろう。エクストラ・マジシャンを使って他人のパソコンや人事のデータベース

スにアクセスすれば、簡単にあらゆる情報を盗み出すことができる。笹倉派が社内の事情や社員のプライベートに詳しい理由はここにあった。

新田「そして今回の騒動が起きた。ボクには、あの営業の柴田という社員がどうもクロだとは思えないんです。この半年間、笹倉さんは柴田くんの悪口ばかり言っていたそうで、その時、“まあ、そのうちオレの秘密兵器でこの会社から葬り去ってやるよ”なんて豪語していたと聞きました。おそらく笹倉さんが何か裏工作でもしたのでしょう」

純「やることが汚いですね」

新田「女性社員を味方につけていたのは意外でしたがね」

純「え？」

新田「いつもはただ精神的に追い込むだけなのに、今回は手の込んだことをしてるなって思ってた」

純「関わってもないのに、結構詳しいじゃないですか」

新田「本人からしゃべってしまうんですよ。親のコネだから誰にも咎められないのいいことにね」

純「社内にはヤツを戒める人間がいないのか……」

新田は、力なくタバコの日を揉み消した。

新田「…でもね、ボクは、今の笹倉さんにはついていけない。かといって下手にやめるよう説得したりしたら何をされるかわからない。誰かが、彼を正してくれることを祈るだけです……」

純は、大きく煙を吐き出した。

純「……大丈夫です。お天道様はちゃんとしてますから」

そう言ってニコリと爽やかに微笑んだ純は、力強くタバコの火を揉み消した。チラリと喫煙室の出入り口を見遣った純を見て、新田自身もハツと何かを思い出したような顔をした。

新田「そうだ、まだ仕事でした。なんかすいませんねえ、くだらない話をしちゃいまして」

純「いえ、気にしないでください」

新田は軽く頭を下げ、喫煙室を出て行った。

それを見届けると、純は軽く伸びをしてから持ち場へ戻って行った。

純（…しかし、新田さんは笹倉がソフトを“手に入れた”って言ったな。自分で作ったわけじゃないんだな。それに、今回だけ手口が違う点も気になる。どういうことだ？）

そこへ、俊作からハイパー・バイティング入手の一報が入る。直接渋谷のマグナム・コンピュータ付近まで現物を届けに行くと言っている。初めは純がいったん池袋に向かうと提案したが、俊作が伸子にも用事があると言ったため、変装するという条件付きで俊作の渋谷行きを許可した。

一方、湊刑事は佐藤刑事以下20人を従えて笹倉の親が経営する会社・株式会社 エスイーティ SETへガサ入れに来ていた。

SETはJR千駄ヶ谷駅と東京メトロ銀座線・外苑前駅のちょうど中間地点にある小さな雑居ビルの3階に拠点を構え、何やら怪しげな空気を漂わせている。

湊「警察だ！」

踏み込んだ瞬間、中にいた12〜3人ほどの従業員が一斉に湊を睨む。

否、従業員というよりは単なる不良やゴロツキの類だ。

「何の用だ！」

「勝手に入るな！」

次々に飛び交う怒号。

湊「違法ソフトの密売容疑で、今から家宅捜索を行う。みんな大人しくしてろよ！」

湊の合図で、刑事たちがどつとなだれ込む。

抵抗しようとする従業員たちを、佐藤刑事が制する。
佐藤「動くな！」

やがて、湊が事務所の隅に積まれた段ボール箱の中から、正体不明のCD-Rを発見した。

湊「おい、これは何だ？ これも売り物か？」

従業員の一人が仕方なさそうに答える。

従業員「…何でもねえよ」

湊「あ、そう。じゃ、念のため中身確認するからパソコン借りるぞ」
従業員「何でだよ！ 何でもねえつつただろ！」

唐突に大声を張り上げる従業員。

湊「だから何でもねーんだろ？ 中身見ても問題はないよな？ それとも、やばい内容だったりして……？」

従業員「……」

誰一人答えなかった。いや、答えられないのだ。湊がニヤリと笑う。
湊「…クロか。お前ら全員署まで来い。それから、社長はどこだ？」

そう言つて湊が事務所を見渡していると、奥の方にある個室から70歳ぐらいの男性が怯えた目でこちらを覗いている。ひよろひよろしていて、吹けば飛びそうなくらい細身の老人だ。

湊「あの爺さんが社長か？」

従業員たちは黙つて頷く。

社長 笹倉課長の父親だ。

湊「そうか」

湊は素早く佐藤刑事に向き直ると、従業員を連行するよう合図をした。次々に引きずられていくゴロツキたち。併せて、備品も全て押収するよう指示をした。

湊刑事は社長の目の前まで歩いて行くと、警察手帳と捜査令状を提示した。

湊「笹倉社長ですね。警視庁の湊です。こちらの会社で違法ソフトの密売容疑がかけられているために家宅捜索をやらせてもらいまし

た。備品類も押収させていただきます」

社長「……これは、息子が絡んでいるのでしょうか？」

社長は心配そうな目で湊を覗き込んでいた。この親は、我が子の行いを知っていたのだろうか。

湊「……おそらく、その可能性は高いかと」

その瞬間、社長の首がガクンと垂れ下がった。

形容できない痛みが、湊の胸を突き刺す。

湊「……ちよつとお話を伺いたいので、署までご同行願えますか？残酷なのはわかっていた。子供を持つ者であれば我が子の犯罪など、ある意味死よりも辛いことであろう。しかし、だからといって真相をつきとめなければ無実の若者が濡れ衣を着せられたまま人生に汚点を残してしまう。それに、真実を導き出すのが刑事の仕事でもあるのだ。

湊に促され、社長がふらりと歩き出した。

目は虚ろで焦点があわず、どこを見ているのか傍目からはわからない。

湊は、社長が何かうわ言のように独り言を言っているのに気づいた。

湊「……？」

社長「ああ……何てことだ……全てはオレのせいだ……」

51・限りなく線に近い点

社長「全ては、父親であるこの私の責任です……」

警視庁神宮前警察署の取調室で、笹倉課長の父親である株式会社S E Tの笹倉社長は目につつすらと涙を浮かべながら湊刑事の聴取に応じた。

湊「責任…とは？」

社長「昔から夫婦揃って仕事仕事で、あの子に構ってやれなかったんです。そのせいで息子は常識知らずの人間に育ってしまい……。つき合う人間も素性のよろしくない連中ばかりで、近所の評判も悪くなる一方でした。それでも、幼なじみだったマグナムコンピューターの社長のおかげで仕事がなくなることはなかったし、息子の就職まで面倒見てもらえました」

湊「…でも、最近は経営状態があまりよくなかったようですね」

社長「ええ。いくら友達が手助けしてくれたとしても、やはり不況には勝てなかったんです。私は看板を下ろそうと考えていました。

しかし、そこへ突然息子が現れたんです。弁護士と不良のような男を連れて」

湊「弁護士と不良…？」

社長「弁護士は戸川と名乗っていました。なんでも、息子が離婚する際お世話になった方だという話です。不良のような男は黒野という名前でした。彼は戸川弁護士に面倒を見てもらっているとのことでした」

黒野はS E Tの従業員だった。これで明らかになった。

湊「息子さんは、何故その2人を連れて来たんですか？」

社長「黒野をウチで働かせてやってほしいことと、面白い商品を手に入れたからウチで売り出したいという理由です」

湊「面白い商品？ 何ですそれは？」

社長「詳しくは教えてもらえなかったんですが、どうやらセキュリティ

ティーツフトの一種だそうです。珍しく息子に頼みこまれましたね。
“戸川さんの頼みを聞いてやってくれ”と

湊「戸川さんの頼み…ですか？」

社長「やはりお世話になった方だからなんでしょう。そのソフトも戸川さんから紹介されたようでしたし」

湊「紹介されたということは、息子さんが自ら作ったソフトではないんですね？」

社長「はい。息子はパソコン関係に興味はあってもプログラミングなどの知識はないですから」

湊「……」

SETは、どうやら販売ルートとして利用されただけのようだ。

社長「しかし、こうやって警察の方々が来られたということは、あのソフトが違法なものだったということですよね？」

社長が、恐る恐る尋ねる。

湊「……はい。あれはセキュリティソフトなんかじゃありません。実際はその逆で、他人のパソコンに侵入して個人情報を抜き出した。りその人のパソコンを遠隔操作することができるソフトです」

社長「…そ…そうだったんですか……」

言葉と共に、社長の体から気力が抜けていったようだった。

正午過ぎ、渋谷に到着した俊作は、まず伸子に会うため彼女を美竹公園に呼び出した。

美竹公園は、宮下公園の近くにある比較的小さな公園で、隣には児童会館が建てられている。アクセスとしては、東京メトロ（JRではないので注意！）渋谷駅13番出口から地上に出るとすぐ右手に見えてくるのでわかりやすいだろう。

二十歳前後の学生に扮した俊作は、やや速足で公園に到着した伸子はたむちに気づいてはいたが、あまり目立った行動をとるわけにはいかなかった。向こうが気づいてくれるまでじっとしているしかなかった。

30秒ほど経過した頃、ようやく俊作と伸子の目が合った。ホツとしたような顔で、伸子は俊作に歩み寄った。

俊作「すまねーな、わざわざ来てもらって」

伸子「ううん、いいよ。でもあんまり時間がないから手短にお願いね」

俊作「わかった」

そう言つて、俊作は伸子にもつと近寄るよう手招きをした。声を大にして話せないためである。伸子はその美形な顔を近づけると、俊作は口を開いた。

俊作「石原さんって覚えてるか？ 昔、ウチの総務部でのぶちゃんの教育係をしてた人だ」

伸子「石原さん!？」

今まで忘れていた名前だったのだろう。伸子の目が驚きで大きく見開いた。

伸子「も、もちろん覚えてるよ! どうしてあの人が出てくるの?」

俊作「石原さんは今、池袋で会社を興してエクストラ・マジシャンの対策用ソフトを開発してる。さっき本人に会って、最新バージョンをもらって来た」

伸子「へえ、そうだったの。でも、それとあたしがここに呼ばれたのどう関係があるわけ?」

俊作「一つ、条件を出されたんだ」

伸子「条件?」

俊作「のぶちゃんを石原さんに会わせること。話したいことがあるんだってさ。それが、対策用ソフトをもらう条件だったんだよ」

伸子「話したいこと? あたしに?」

俊作「うん。どうも、石原さんが会社を辞めた経緯と関係がありそうだったよ。総務にいた頃あの人と何かあったの?」

伸子「何かって……何度かお誘いのパソコンメールをもらったぐら

いだったよ。でも、その頃あたしは彼氏がいたから断った」

俊作「…それだけ？」

伸子「うん、それだけ。まあ、メールの内容がちょっとナルシストっぽかったのがイヤだったかな」

俊作「ナルシストっぽい……」

伸子「そうなの。こつちが恥ずかしくなるようなセリフがちょこちょこ織り交ぜられてたわ。それで、あたしが誘いを断ってすぐに石原さんは会社を辞めていったの」

俊作「ふーん…。石原さんはどうやってのぶちゃんのパソコンのメールアドレスを知ったの？」

伸子「総務部で行った旅行の画像を送ってもらう時に教えたの。石原さんは、メールの内容はさておき先輩としてはいい人よ。別にあのメールだって全然気にしてないし」

俊作「じゃあ…石原さんに会ってくれる？」

伸子「いいよ。てゆうか、石原さんもあたしに会いたいなら直接連絡くれたらいいのに」

俊作「自分からは連絡しづらいみたいだよ」

伸子「でも、今更あたしに何を話したいのかな？」

俊作「それはオレにもわからん。告白とか？」

伸子「ええ〜……そうなのかな？」

俊作「いや、オレはわかんねーよ？」

伸子「……柴ちゃん、念のためついてきてくれない？」

俊作「…わかったよ。オレが石原さんと連絡とるから、日時が決まったらすぐ連絡するよ」

伸子「ごめん、お願いね！」

伸子は申し訳なさそうに、顔の前で両方の掌を合わせながら言った。

伸子「じゃあ、そろそろ行くね。お昼も食べないといけないから」

俊作「おう。食い過ぎて午後居眠りするんなよ」

伸子「あはは。そんなことしないよお〜」

ニコリと微笑み、小さく手を振りながら伸子は会社へ戻って行った。

5分後、入れ違いに純が公園へやって来た。

俊作「手に入れたぜ、エクストラ・マジシャンの対策用ソフト」

そう言つて、俊作は石原社長から受け取ったUSBメモリを差し出した。

純「USBメモリか。CD-Rじゃないんだな」

俊作「ああ。だけどこれ一つで5台までソフトをインストールできるんだつてよ」

純「5台か…。今のところ乗っ取られたパソコンは、お前のと藤堂さん、そして米本さんのだったな。これ一つでどうにかできそうだ」

俊作「藤堂さんと米本のヤツは問題なくいけると思うけど、オレのは急がないと処分されちまうかもしんねえ。システム部か総務部の人間を口説くなりしてうまくやってくれ」

純「わかった。お前はこれからどうするんだ？」

俊作「湊さんの所へ行く。裏付け捜査で対策ソフトを使うだろうかな。その後は夜まで道玄坂と歌舞伎町を中心に聞き込みでもやるうと思つてる。羽村が酔っ払つてなかつたつて目撃証言と“サム”つてキャバクラの客についての情報が聞けるかもしれん」

純「そうか。気をつけるよ。それと、夜は笹倉の尾行だからな。忘れんなよ」

俊作「午後8時だろ？ 大丈夫だよ。お前の方こそ、新田さんとは接触できたのか？」

純「おう。ばつちりよ」

純は、新田へのヒアリング結果を報告した。

俊作「離婚だつて？ あのハゲ結婚してたことがあったのか？」

これには俊作も驚いた様子だった。

純「ビツクリだろ？ オレも信じられなかったよ」

俊作「結婚には向いてねーだろ、あれは」

純「現に離婚してるしな。しかも引き金になった原因はキャバクラだ」

俊作「結構前から通ってて、来店の度に羽村を指名してた……ってことは、笹倉は羽村に入れ込んでた可能性が高いな」

純「オレもそう思う」

俊作「ところで、例の“証拠写真”は手に入りそうか？」

純「難しいな。この後道玄坂へ聞き込みしに行くんだったら、あの辺のラブホを片っ端からあたったほうが早いかもしれないぞ。あの夜羽村を送って行ったルートは覚えてるんだろ？」

俊作「だけど、ラブホに聞き込んでどうするんだ？ たいがいラブ

ホのフロントなんて顔が見えねーぞ？」

純「……そうか。じゃあ意味がないな」

俊作「聞き込みをするなら、通行人にやったほうがいいだろう」

純「そうだよなあ……。結局はオレが写真を手に入れるしかないか」

俊作「そうだな」

純「よし。入手できたら連絡する」

俊作「頼んだぞ。じゃあ」

純「あ、待った」

俊作「？」

純「ついでにこれを湊さんの所へ持っていってくれるか？」

純は、唐突にA2サイズの茶封筒を俊作に手渡した。しかも一つだけではない。10束ほどの封筒が輪ゴムで一まとめになっている。

俊作「これは？」

純「今まで集めた下足痕だよ。ロッキーに急遽特殊カーボン紙を用意してもらって、会社にある全部の男子トイレで採取した」

俊作「おお！ やるな！」

純「結構大変だったんだぜ？ できれば変わってほしいよ」

俊作「そうだよなあ……。まあ、引き続き頼むぜ」

純「お前交替する気ねーな」

俊作「ははは。じゃ、これ湊さんに届けとくわ」

純と別れた俊作は、その足で湊刑事のいる神宮前警察署へ向かった。

道中、竹下通りの100円ショップで茶封筒を入れる紙袋を探しながら、メールで湊にこれから渡したいモノがあるので会いに行く旨を伝えておいた。

その後で石原社長に電話をし、2日後である土曜日の午後4時に伸子を連れて行くことを約束した。

神宮前署に到着するなり、俊作は会議室へと通された。湊の指示である。

数分後、湊がせわしなさそうに入って来た。おそらく走って来たのだろう。

湊「おう柴田、待たせたな」

俊作「刑事って仕事は忙しそうですね、湊さん」

湊「何を言うか。市民の安全を守るのが警察の仕事だ。泣き言は言ってるんねーの」

俊作「そうでした。あはは。すいません」

湊「…そんで、渡したいモノって何だ？」

俊作「エクストラ・マジシヤンの対策用ソフトです」

湊「おお、そうか！ もらってきたのか！」

俊作「はい。ちょうど最新バージョンを作ってたところでした」

湊「でかした！ これで裏付け捜査ができるぜ。よし、礼と言っちゃあアレだけど、こっちもこれまでにわかったことを教えてやるよ。メモの用意をしな」

俊作は、バッグから素早く手帳を取り出した。

湊「今朝、SETに踏み込んで、社長を参考人として引っ張って来た。今取調室にいる」

俊作「笹倉の親父さんですね？」

湊「ああ。彼の供述から、黒野がSETの従業員だったこと、SETはエクストラ・マジシヤンの販売ルートとして利用されただけだったことがわかった」

俊作「黒野がSETの…？」

湊「戸川って弁護士の紹介らしい。笹倉も戸川には世話になってるから断れなかつたんだろう」

俊作「離婚のことですか？」

湊「知ってたのか？」

俊作「さつき純に聞きましたよ」

湊「そうだったのか。さすが鳴海だな…。それと、エクストラ・マジシャンは戸川が笹倉に紹介したモノみたいだぞ」

俊作「戸川が……。しかし、これで笹倉と戸川と黒野が一応は繋がりましたね」

湊「あとは、ソフトの製作者と共犯をつきとめるだけだな」

俊作「はい。だんだんと敵の全貌が掴めてきましたね。今の話だと戸川が製作者について何か知っているかもしれない」

湊「おう。早えーとこヤツらを引っ張って来て詳しく聞き出さねーと。あ、それから、前にエクストラ・マジシャン絡みで逮捕したヤツらから最低限の聴取が済んだから、特別に参考情報として教えてやるよ。…といっても、まだ聴取は継続中だから絶対ばらすなよ」

俊作「大丈夫です。ばらしません」

湊はしばらく俊作の目をじっと見据えた。

湊「…よし。じゃあ言うぞ。まず、一人暮らしの女性を暴行した事件からいこう。被疑者の名前は石上三年。いしがみみつとし千葉県市川市在住。年齢は32歳。職業は大手商社勤務の会社員だ」

すらすらとペンを走らせる俊作。

湊「次はクラッキングした犯人な。名前は桶田吹男。おけたふきお東京都大田区在住。こちらも32歳。テレビ制作会社勤務。購入先を吐いたのはこいつだ」

俊作「…ったく、いい歳こいて何やってんだか」

湊「まったくだ。じゃ、最後に女につきまとったヤツな。名前は壁井昭二。べいしよじ埼玉県川口市在住。年齢は29歳。広告代理店勤務」

その瞬間、俊作の手がピタリと止まった。

俊作「壁井……昭二？」

湊「む…知ってるのか？」

俊作「壁井つて人、オレが担当してた会社の担当者ですよ」

湊「え？ ホントか？ 何て会社だ？」

俊作「白鷺堂つて広告会社です。オレが行った時は必ず壁井さんが応対してくれました。しかし、まさかあの人がエクストラ・マジシヤンを使つてたなんて……」

俊作は、湊の告げた真実を受け入れることができなかつた。今まで良好な関係を築いてきたのだから無理もない。

俊作「湊さん、壁井さんたちはどうやってエクストラ・マジシヤンのことを知つたんですか？」

俊作の語調も興奮気味になる。

湊「すまん。それはまだ聞き出せてないんだ。これから何とかして吐かせるから、それまで待つててくれ」

俊作「…そうですか、わかりました」

熱が、急激に冷めた。

湊「わかり次第すぐに連絡するから心配するな」

俊作「じゃあ、一応、他の2人の勤務先も教えてもらえますか？」

もしかしたら3人とオレの会社の客先に関係してるかもしれないし」

湊「そうか。それもそうだな。…えーと、まず石上が音無商事で、桶田はフェニックス・エンターテイメントだったな。心当たりあるか？」

俊作「いや…ないっすね。一応マグナム・コンピュータのほうでもあたつてみますよ。笹倉派の誰かが関わってるかもしれないから」

湊「そうだな。頼んだ」

俊作「あ、それと、湊さんに渡さなきゃいけないモノがあるんですよ」

俊作は、先程100円ショップで購入した紙袋を差し出した。

湊「何だこれ？ プレゼント？」

俊作「今日、純が採取した下足痕です。鑑定をお願いします」

湊「わかった。急ぎで取りかかるよ」

神宮前署を後にした俊作。

携帯電話で伸子にメール。「マグナム・コンピュータ内で音無商事とフェニックス・エンターテイメントに関わる社員がいないか確かめてほしい」と打診した。

そして今度は再び南下して渋谷の道玄坂へ。あの夜のことに関する聞き込み調査だ。

だが、これといった成果は得られなかった。

俊作はすぐさま歌舞伎町へと飛んだ。

向かった先は、フェアリー・ナイトである。

52・激走キャットストリート!

午後7時50分、渋谷・美竹公園。

昼間にこの場所で顔を合わせた俊作と純は、再び同じ場所に来ていた。

昼間と違う点は、2人ともヒップホップのダンサー風な格好に変装していることである。

この1時間半ほど前に、創お抱えの情報屋から連絡があり、笹倉の自宅アパート付近にあるゴミ捨て場から、「月?日 20時 美竹公園」と書かれたメモが発見されたとのことだった。このことから、笹倉は8時に何者かと会うためにこの美竹公園へやって来る可能性が極めて高くなる。俊作と純が美竹公園にいたのは、そういった理由からだった。

俊作「:しかし、笹倉の野郎も不用心だな。そんなメモを裁断もせずに捨てるとは」

純「まったくだ。ところで俊作、道玄坂と歌舞伎町の調査はどうだった?」

俊作「道玄坂のほうは成果なしだったが、“サム”ってヤツに関する情報なら手に入った。フェアリー・ナイトでな」

純「ホントか?」

俊作「本名はわからなかったんだけど、有名企業に勤めるサラリーマンらしい。それ以外にも副業をやってるおかげでかなり金は持っているって話だ」

純「よく聞き出せたな。“サム”は羽村と2人で話しこんでたんじやなかったんか?」

俊作「基本的にはそうだったらしいんだけど、ヘルプがつく分には

問題なかったみたいだな。羽村以外の子にも気さくに接してたって
純「へえ……」

俊作「なんでも、そいつは博学で話題が豊富だったんだと。パソコン関係と法律関係の話題が多かったらしい」

純「パソコン関係に詳しいと女から頼られやすくなるもんだよな。

だけど、法律の話題が多いってのはどういうことだ？」

俊作「親友に弁護士がいるとかなんとか言ってたな」

純「おいおい、まさか、あの戸川弁護士じゃねーだろうな」

俊作「オレもそれ聞いてヤツの顔がパツと浮かんだよ。ちよつと、

戸川の交友関係を調べてみる必要があるそうだな。その中に“サム”って付く人間がいたら」

言いかけて、俊作は口をつぐんだ。

美竹公園に、あの「腕時計の男」が現れたのだ。

前に見た時と違い、今回は目元も肉眼で確認することができる。
切れ長で、とつつきにくい感じの目だ。帽子を深く被れば簡単に隠れてしまうだろう。

純「ん……？」

その男の顔を見て、純がやや前方へ身を乗り出す。

俊作「どうした？」

純「あいつ……なんか見覚えがあるぞ」

俊作「え？」

純「だけど、どこで見たかが思い出せねーんだよなあ……」

純が腕時計の男をちゃんと見るのはこれが初めてのはずである。

そして、8時を30秒ほど過ぎた辺りで笹倉がやって来た。

腕時計の男と二言三言会話すると、2人はさつさと公園から出て行ってしまった。公園内には二十歳前後の若者が多数いる。おそらく、
人気のない場所へ移動するのだろう。俊作と純はすぐに笹倉たちの

後を追った。

笹倉と腕時計の男は、原宿の方向へ歩いて行つた。少し歩くと閑静な住宅街が広がり、一気に人の気配がしなくなる。

やがて笹倉たちは近くにあつた駐車場に入り、奥に停めてあつた自動車の陰に隠れるようにして向かい合つた。俊作と純は、道路側に停めてあつた自動車の陰に隠れた。そして、iPOD型の高性能カメラをセットする。

腕時計の男「ここなら大丈夫でしょう」

笹倉「約束通り持つて来たんだろうな」

腕時計の男「心配せんでくださいよ。ちゃんと持つて来ましたから」

笹倉「早くしてくれ。これから吉原で豪遊してくるんだからよ」

腕時計の男「へいへい。わかりましたよ」

腕時計の男は、懐から小さな茶封筒を取り出し、笹倉に手渡した。すかさず中を覗き込む笹倉。

笹倉「おおお、ずいぶんと色つけてくれたな」

腕時計の男「吉原で遊ぶには十分な金額だと思いますぜ」

笹倉「ふへへへ、悪いな！イヤなヤツを会社から追い出して金がもらえるなんて、こんなウマイ話があるなんて思わなかつたぜ！」

そこで、物陰から俊作と純が笹倉と腕時計の男に向かって、2人の退路を断つかのように走り寄る。

俊作「悪いが、てめーの行き先は刑務所だぜ」

笹倉は、まるで電気ショックを受けたかのように体をびくつかせ、同時に素早く背後を振り返る。

笹倉「し…柴田！」

これでもかというくらい目を見開き、ビジー状態に陥ったパソコンのようにフリーズしている笹倉。

俊作「どういうことだ？ オレを会社から追い出して金をもらうなんてよ。やっぱりセクハラ行為なんてのはデタラメだったってわけか」

純「だいたいよお、俊作がセクハラなんてするはずがねーんだよ。普通に考えて不自然だろ、今回の事件は」

笹倉「ぐう……」

俊作「きつちり事情は話してもらっぜ。オレたちに黙秘権は通じねーからな」

笹倉に目だけで殺気を放ちながら、俊作はじりじりと距離を詰める。その笹倉は、俊作の眼光にすっかり恐れをなしているようだった。思い切り顔が引きつっている。

俊作「……」

と、俊作が突然足を止めた。

背中に、無数の殺気が突き立てられている。

振り返ると、十数人の不良少年が駐車場を取り囲んでいた。

不良A「柴田…だな？」

俊作「……ロック・ボトムのヤツらか？」

不良B「困るんだよなあ、オレらの邪魔されちゃあ」

不良少年たちは、全員が拳にメリケンサックを装備している。殺る気だ。言葉に出さなくとも連中の態度がそう言っている。

一瞬にして緊張が高まる。

その緊張を破るように、腕時計の男が俊作に殴りかかった。

俊作「むっ！」

紙一重でそれをダッキングでかわす。

不良A「いくぞー！」

駐車場を取り囲んでいたロック・ボトムの連中が一斉に遅いかかってきた。

俊作は、そのどさくさに紛れて逃げ出そうとする笹倉と腕時計の男を見逃さなかった。

俊作「純ッ！ わかつてるな！」

純「おう！」

とりあえず今は追跡経路を確保するため、相手を倒さずに攻撃を回避するだけに留める作戦だ。今、俊作と純は一瞬でそれを確認し合った。

なんとかメリケンサックの雨あられをくぐり抜けて道路へ出ると、笹倉と腕時計の男がキャットストリートの方向へ走り去っていくのが見えた。

既に数十メートルは離れただろうか。

位置関係でいうと、笹倉のほうが先を走っている。意外と逃げ足の速い男である。

純「意外と速えーじゃねーか、あのハゲ！」

俊作「関係ねえ！ とっ捕まえて洗いざらい全部吐かせてやんよ！」

俊作と純は懸命に笹倉たちを追って、キャットストリートをものごい勢いで駆け抜けていった。

後ろからは先程の不良どもが追って来る。みんな、口々に「待ちやがれ！」と怒号を発している。

純「うるせーガキどもだ。近所迷惑って考えたことないのかね」

俊作「後で説教してやんねーとな。大人として」

すると、腕時計の男だけが突然目の前に差し掛かった丁字路を左折した。追手を攪乱するためか。

純「ここはオレが行く！」

俊作「任せた！」

純は腕時計の男を追って路地を左に折れて行つた。

引き続き笹倉を追う俊作。笹倉がちよくちよく後ろを振り返るようになった。それと同時に距離がこれまで以上に縮まり始めている。笹倉のスタミナが尽きてきたのだらう。

しめた。

俊作は思った。

しかし、その時だった。

笹倉が十字路に差し掛かる。

突然、俊作から見て左の方向から黒くて大きな影が大砲並みに勢いよく飛び出してきた。

次の瞬間、その影は笹倉を思い切りはね飛ばした。

空中でひっくり返つた笹倉の体は、そのまま地面に叩きつけられた。

自動車だ。

俊作が、笹倉をはね飛ばしたのが自動車だと識別したのは既にそれが走り去る時だった。

しかも、あの車には見覚えがある。

秋池を拉致した時に使われた車だ。

ちなみに俊作を追って来た不良どもは、笹倉がはねられたのを目の当たりにすると、急に怖くなったのか一目散にどこかへ逃げて行ってしまった。

俊作「ちっ、何てことだ！」
ようやく笹倉に追いついた俊作は、笹倉の状態を確認した。だが、救急車を呼ばなければならぬことは一目瞭然だった。

携帯電話で119番通報を終えた頃、車が走って来たのと同じ方向から純が走って来た。

純「俊作！」

俊作「純！ 笹倉が……！」

路上に転がりぐったりしている笹倉を見て、思わず純は足を止めた。

純「What happened? これはいつた……」

俊作「笹倉がはねられた。はねたのは、秋池を拉致したのと同じ車だ」

純「そうか、やっぱり！」

俊作「やっぱり？ どういうことだ？」

純「オレがあ腕時計の男を追って行った時、ヤツの先に見覚えのある黒い車が停まってたんだ。その車は腕時計の男を乗せると、オレが今来た道をすげースピードで走り去って行ったんだよ」

俊作「そうだったのか……」

そう言つて、俊作は何気なく純が走って来た道を見回していた。すると、彼はあることに気づく。

俊作「あれ、見てみるよ」

俊作は、背後に設置されている道路標識を指差した。

「一方通行」を示す標識だ。

矢印は、黒い自動車が走り去って行った方向とは逆を向いている。

純「……おい、これってまさか、一方通行を逆走してきたってことか!?!」

俊作「そういうことになるな」

純「……気づかなかった」

俊作「一方通行を逆走してまで笹倉をはねたってことは、故意的だったかもしれないねえ」

純「わざとだったのか？」

俊作「ああ。しかも浅はかな作戦だったのが見え見えだぜ。おそらく、オレらにある程度手の内を暴かれたのを知って慌てたんだろう。普通は交通違反なんて致命的なミスはしねーはずだ。それを踏まえて考えると、こいつは黒幕じゃねーってことになるよな」

純「ん？ そうだな。他に今回の事件を企んだ人間がいて、笹倉は口封じのためにこんな目に遭ったってわけか。でも、誰に計画を練る動機が存在するんだ？ 黒野や戸川弁護士はもともと関わりが薄いし、羽村にしたって前からお前を嫌ってたわけじゃなかったんだろ？」

俊作「ああ、たぶんな」

純の眉間に、だんだんとシワが集まっていく。

純「ううーん………わかんねーなあ……。心当たりのある人物には動機が見当たらねーし」

純は乱暴に髪の毛を掻きむしった。そして、その場をふらふらと行ったり来たりした後、タバコに火をつけて「ヤンキー座り」の姿勢でしゃがみ込んだ。

しばし沈黙した後、俊作が口を開く。

俊作「……皮肉なものだ。笹倉はもう救いようがねえ。散々部下をいじめるばかりか悪事にまで手を染めたからこうなるんだ。因果応報ってヤツだな、まさに」

純「……」

純は黙って俊作の話の話を聞いている。

俊作「だけだよ、笹倉がこんな状態になっちまった今、事件の鍵を握るキーワードは“秋池”と“サム”、そしてお前が調べてる“下足痕”だ。羽村が持つてる写真も重要な手掛かりになるだろうよ。

戸川の野郎もまだ調べる余地がありそうだしな」

純「……！」

俊作「まだまだ行き詰まっちゃいなーぜ。落ち着いて考えてみるよ、純！」

純は、無言のまま微笑んだ。

やはり、俊作は頼りになる男だ。こいつを探偵業に誘ってよかった。純は心からそう思った。十代の頃から、何らかのトラブルに巻き込まれた時も俊作がいれば解決できないモノはなかった。そして、標識一つでこれだけの推論を組み立ててしまうほどの鋭い勘。サラリーマンよりこっちの方が向いているのではないかとさえ感じた。

純「ひとまずこのことをロッキーとその情報屋たちに連絡しとこうか。まだあの車を探してくれてる情報屋もいるわけだし」

俊作「そうだな」

純が一通り連絡を済ました頃、遠くからサイレンの音が鳴り響いてきた。

どうやら救急車が近くまで来ているようだ。

俊作「…しかし、複雑な気分だぜ。何でこんなヤツのために救急車なんか呼ばなきゃなんねーんだよ」

純「しょうがねえ。見殺しにするわけにはいかねーだろう。意識が戻ったら事情聴取もできるしな」

俊作「それはわかってるけど…。でもよ、逆の立場だったらどうだ？ オレ、ぜってー^{このハゲ}笹倉に見殺しにされてるぜ？」

純「ふっ、そうかもな。だけど、これでこいつも今までのこと深く反省するだろう」

俊作「……だといいがな」

それから数分後、救急車が到着し、笹倉が車内に運び込まれていく。救急隊員から同行を求められ、しぶしぶそれに応じる俊作と純。

俊作「あくまでその時の状況を説明するだけですよ。それが終わったらさっさと帰りますから」

病院に到着するまでの間、俊作はしきりにそう繰り返した。よほど笹倉に付き添うのがイヤだったのだろう。

病院到着後、まずは緊急手術が行われた。手術終了後、担当の医者に事件発生当時の状況を簡潔に説明すると、本当にそれだけで帰ってしまった。

ちなみに笹倉は、とりあえず一命は取り留めたとのことだった。しかし、「あくまでも一命を取り留めただけにすぎないので、今後身体はどこかに障害が残るかもしれない」と担当医は話していた。

53・伸子vs佐知絵

笹倉を病院へ送り届けた俊作と純。

帰宅後、俊作はこのことを藤堂部長と米本、そして伸子にも伝えた。3人とも驚きの色を隠せないようだったが、特に伸子は俊作同様「バチが当たったのよ！」と一言付け加えていた。

翌朝、株式会社マグナム・コンピュータ営業部では急遽部全体での朝礼が開かれた。

何も事情を知らない社員たちは何事だろうと藤堂の周りに集まる。

藤堂が、重たそうに口を開く。

藤堂「おはようございます」

社員が一斉に「おはようございます」と挨拶を返す。

藤堂「えー、みなさんにお集まりいただいたのは、急遽お知らせしたいことがあるためです。…実は昨夜、法人営業一課の笹倉課長が、帰宅途中事故に遭われて入院しました」
営業部にざわめきが起こる。

実は、俊作は藤堂に事実をありのまま伝えてはいたが、会社で発表することがあれば事故ということにしておいてほしいと頼んであった。

藤堂「幸い、命に別条はないようですが、まだ意識も戻ってはいないようなので当分復帰は難しいかと思われます。つきましては、当分の間、法人営業一課の指揮は平尾課長代理にとつていただきたいと思います」

若干白髪交じりの、黒ぶち眼鏡をかけた中年男性が小さく頭を下げ

る。この男が平尾課長代理である。

藤堂「何かあれば私もサポートします。助けがほしい時は遠慮なく言ってください」

平尾「はい」

藤堂「えー、朝礼は以上です。今後の経過についてはわかり次第報告致します」

動揺を隠しきれない社員たちが各々の席へ散っていく中、伸子は羽村佐知絵の様子を何気なく横目で観察していた。

末広真智子と小声で何やら話している。おそらく笹倉のことを話しているのだろう。

各課ごとの朝礼も終わり、みんなが通常業務に入った。伸子もいつも通りパソコンに向かって入力作業を始めた。笹倉がいないので、不謹慎な話だろうが少しは気持ち的に仕事がやりやすい。

藤堂は、前日に伸子経由で受け取った「ハイパー・バイティング」を使って自分のパソコンへ侵入した者を洗い出していた。俊作からソフトを受け取った純がこっそり伸子に渡しておいたのだ。

USBメモリをコネクタにセットするだけで専用画面が立ち上がり、少しくリックするだけでインストールが始まる。極めて使いやすいソフトウェアである。

インストールが完了すると、いよいよ本格的にソフトを使うことができる。藤堂は、トップ画面に表示された「パソコン診断」をクリックした。

待つこと約1分。

「あなたのパソコンには悪意のあるユーザーが不正に侵入しています。このユーザーを特定し、二度とこのような不正アクセスができないようブロックをしますか？」（アクセスブロックを行うと、このユーザーに限らずいかなるユーザーもあなたのパソコンには侵入

できなくなります」というメッセージが記されたウィンドウが現れた。藤堂は、先のメッセージの後に「はい」と「いいえ」が表示されていたので、「はい」をクリックした。

すると、今度は「不正アクセスは犯罪です。このユーザーがあなたのパソコンでどのような違法行為を行ったか、そのレポートも作成しますか?」というメッセージウィンドウが表示された。当然、これも「はい」をクリック。

結果として、アクセス元は笹倉のパソコンで、メールボックスを覗き見されていたことがわかった。だが、大成へ送ったメールを消去したわけではなさそうだ。もしかしたら、メールの消去は笹倉が大成のパソコンへ侵入して行ったのかもしれない。もし仮に藤堂のパソコンでメールの消去を行ったのであれば、消去前に藤堂が気づくはずである。

藤堂はUSBメモリをパソコンから取り出すと、伸子を呼びつけて給湯室へ連れ出した。

藤堂「高根さん、このソフトを今すぐ米本くんの所へ持って行ってくれないか?」

伸子「は、はい。今ですか?」

藤堂「ああ。もしかしたら大成さんのパソコンも笹倉に覗き見される可能性がある」

伸子「え? …あ、もしかしてメールが消されたことですか?」

藤堂「そうだ。よく考えたらオレに気づかれないようにメールを消すなんてことは、大成さんのパソコンじゃないと無理なんだよ」

伸子「そうですね。わかりました。今すぐ人事部へ行ってきます!」

藤堂「すまん。頼んだよ」

藤堂の言った通りだった。

人事部でハイパー・バイティングを使用した結果、笹倉は米本だけ

ではなく大成のパソコンにまで侵入していたことがわかった。

米本「まさか、部長のパソコンにまで……」

伸子「藤堂さんの読み通りね」

米本「しかし、恐ろしいソフトだな。こうやって気づかれないうちに、しかも手軽に他人のパソコンに侵入できるなんて」

伸子「そうよね。早く柴ちゃんのパソコンも診断しないと」

米本「あいつのパソコンはまだ営業部に残ってるのか？」

伸子「ううん。総務部が持って行っちゃった」

米本「そうか。じゃあ、総務部にかき合わないといけないな。藤堂さんに相談してみたらどうだ？」

伸子「うーん、そうだね。そうしてみる」

伸子は、いったん営業部に戻ることにした。

エレベータを降りて自分の席に戻る途中、給湯室のほうから佐知絵の声が聞こえてきた。真智子や秋葉梨乃と会話をしているようだ。伸子の足は、自然とそちらへ向いていた。何故か、会話の内容を確かめないといけないような気がしたようだ。

真智子「笹倉課長が事故に遭ったって、何が遭ったんだろうねえ」

佐知絵「なんか、車にはねられたらしいよ」

真智子「えーっ！？ はねられた？」

梨乃「ひき逃げ……？」

佐知絵「たぶんね」

梨乃「ええ……」

佐知絵「もしかしたら、柴田さんがやったのかもね」

梨乃「柴田さん？」

佐知絵「クビにされた逆恨みってことよ。ありえない話じゃないでしょ？」

梨乃「まさかねえ……」

真智子「いくらなんでも……」

伸子「ちよつと、羽村さん！」

伸子はたまらず給湯室内へ怒鳴り込んだ。

佐知絵たちは目を丸くしている。

伸子「ひき逃げなんて、柴田くんがそんなことするはずない！」

佐知絵「やだなあ高根さん、冗談ですよ」

伸子「冗談にしたって、言っていていいことと悪いことがあるでしょ！

どうしてそこまで彼を悪者扱いするの！？」

佐知絵「実際、あたしは柴田さんからセクハラされてるんですよ？

セクハラが悪事じゃないっていうんですか？」

伸子「そういうことじゃない！ 何で柴田くんがセクハラをしたって言い切れるのよ？」

佐知絵「あたし被害者なんですけど。ちゃんとした証拠もありますし」

伸子「どうせ捏造したモノでしょ？ あたしには信じられないわ。

あたしだけじゃない。ウチら柴田くんと同期のみんなだって信じてないよ」

佐知絵「どういふことですか、捏造って？ どうしてそう言い切れるんですか？」

伸子「だって、本人が否定してるんだもん。聞くところによれば、

その証拠は柴田くんがあなたをホテルに連れ込もうとした場面を撮った写真だったそうね。だけど、彼は一切そんなことはしてないって言ってた」

佐知絵「ハッ、何を言ってるんですか。それは柴田さんの言い逃れにすぎませんよ。もっと客観的な視点で捉えたらどうなんですか？」

伸子「そんなこと言うんだったら、あなたこそ周りの意見に耳を傾けてみなさいよ！ 今回の事件で“彼がセクハラしそうな人物だった”なんて言う人は誰一人としていなかったはずよ！」

佐知絵「人は見かけによらない”って昔から言うでしょ？ あの

人にはそんな一面もあつたつてことですよ」

伸子「ウソよ！ 本人が否定してる以上、絶対ウソなのよ！ 第一、柴田くんに裏表なんかないもん」

佐知絵「困りましたね……いい歳して事実を受け入れられないなんて」

この言葉に、さすがの伸子も力チンときたようだった。

伸子「何よ！ 事実じゃないから言ってるんでしょ！ だいたい、あなただって素性のよろしくない人につき合ってるらしいじゃない！ そんな人が、よく“人は見かけによらない”なんて言えるわね！」

佐知絵「何ですって？」

伸子「聞いたわ。あなたの彼氏、不良グループのリーダーなんだつてね。それも、相当悪さして街の人たちを困らせてるって話じゃないの」

この言葉に、真智子と梨乃は再び驚いてしまう。

佐知絵「黒野くんを悪く言わないで！ 彼はいろんな人に慕われてるのよ！」

伸子「じゃあ、あなたもこれ以上柴田くんを悪者扱いしないでくれる？」

佐知絵「どうしてそこまで柴田さんを庇うんですか？ もしかして好きなんですか？」

伸子「なっ、何言ってるの！？ そんなんじゃないわよ！」

佐知絵「じゃあ何なんですか？」

伸子「それは」

会田「おい、やめろ！」

騒ぎを聞きつけた会田が止めに入る。

会田「2人とも、仕事だぞ！ 言い争うのはやめろよ！」

佐知絵「高根さんが変な言いがかり付けるから悪いんですよ」

伸子「羽村さんだって柴田くんを悪者扱いしたじゃない！」

会田「だからよせって！ 高根さん、柴田の人柄はオレたちがよくわかってる。あいつがどんな言われ方されようが、オレたちの見る目は変わらない。そうだろ？」

伸子「そうですね……ここまで悪く言われると、なんだか彼がかわいそうで……」

うつすらと、伸子の目に涙が浮かぶ。おそらく、悔しさも入り混じっているのだろう。

会田「……羽村さんも言い過ぎだ。あんまり被害者ヅラしないほうがいい。キミだって人に言いたくない秘密の一つや二つぐらいあるんじゃないのか？」

佐知絵「う……」

思わず、佐知絵が口をつぐんだ。

会田「よし！ わかったなら仕事に戻るんだ！」

昼休み、藤堂が伸子を昼食に誘い出した。先程の騒動で精神的ダメージを負った伸子を気遣ってこのことだった。

藤堂「さつきは大変だったな」

近所の定食屋へ向かう途中、藤堂が先程の騒動について話を切り出した。

伸子「……はい」

藤堂「あの子が柴田の悪口を言うなんてなあ。ついに本性を現してきたってところか」

伸子「部長、あたし悔しいです。どうして無実であるはずの柴田くんがあんなにまで悪者扱いされないといけないんですか？」

藤堂「そうだよなあ。それについてはオレも納得がいかん。あの子は前から柴田を嫌ってたのか？」

伸子「いえ、それはないと思います。ちょっと前までは仲良く話してましたし」

藤堂「うーん……不可解だなあ」

伸子「あ、ところでパソコンのことなんですけど……」

藤堂「パソコン？」

伸子「ほら、エクストラ・マジシヤンの対策ソフトですよ」

藤堂「あ、ああ、あれか。米本くんには渡してくれたんだよね？」

伸子「ええ。それで、残るは柴田くんが使ってた端末だけです。あれは総務部が持つて行っっちゃいましたよね？」

藤堂「そうだったな。じゃあ、総務部に使わせてもらえるよう頼まないといけないか」

伸子「そうですね」

藤堂「じゃあ、オレから総務部長に頼んどくから、パソコン診るのは高根さんをお願いしてもいいかな？」

伸子「いいですよ」

「あのおゝ……」

背後から、伸子と藤堂に声をかける者がいた。

秋葉梨乃だった。

佐知絵や真智子はいない。

伸子「あ、秋葉さん？ どうしたの？」

梨乃「あ、あの、あたしもランチにご一緒してもよろしいですか？」

梨乃は堅苦しそうに言った。

伸子「え？ あ、うん、いいけど、何でそんなに改まってるの？」

梨乃「いやあ、あたし、佐知絵と仲がいいじゃないですか。それに、さっきあんなことがあったから話しかけづらくて……」

伸子「そりゃそうだよねえ。でも、こんなこと聞くのもアレだけど、何であたしとお昼食べようと思ったの？」

梨乃「佐知絵のことで聞きたいことがあるんです。高根さん、頑なに柴田さんが無実だって主張してたから、なんか気になっちゃって……」

伸子「……」

藤堂「よし、わかった！　続きは店に着いてから聞こう！」

定食屋に到着した伸子たち。奥のお座敷に案内され、注文を済ます。お冷を一口飲んだ藤堂が、先程の話の続きを切り出した。

藤堂「秋葉さん、羽村さんのことで聞きたいことがあるってのは？」

梨乃も、お冷を少し口にした。

梨乃「…佐知絵は、ホントに被害者なんでしょうか？」

藤堂「…え？」

梨乃「セクハラ騒動があつたというのに、あの子全然精神的に落ち込んだ様子がないんです。初めは気丈に振舞ってるだけなのかなって思つたんですけど、だんだんそうは思えなくなってきて……。今日の午前中もあんな笑えない冗談を言うし、彼氏は怖そうな人だし、ここ何日かの佐知絵はどこか変なんです。なんか、入社頃から知つてる佐知絵じゃないみたいで……」

伸子「…それで、羽村さんがホントに被害者なのかどうかもわからなくなっちゃったのね？」

梨乃「……はい」

意外だった。

佐知絵の身近にこのような思いを抱く人間がいようとは。

54・伸子奔走

梨乃「…佐知絵は、ホントに被害者なんでしょうか？」

秋葉梨乃は、ここ何日で態度が急変した羽村佐知絵に戸惑っていた。佐知絵は、入社以来これまで一度も梨乃や真智子に対して立ち振る舞いを急に変えたりすることはなかったのだ。

伸子「さつきも言ったけど、あたしは彼女が被害者だとは思ってないの。あたしだけじゃなくて、同期のみんなや藤堂部長だって同じ思いだよ」

梨乃「それはつまり、佐知絵がウソをついてるってことですか？」

伸子「そうね。その可能性は高いわ」

梨乃「そうですか……。あの子、どうしてウソなんか……」

藤堂「それはオレたちにもわからない。オレたちもビックリしてるんだ。まさか羽村さんがウソついてまで柴田を悪者扱いするなんて」

伸子「ねえ、羽村さんは秋葉さんたちの前ではどんな感じだったの？ 今までみたいなら明るくて笑顔が似合う感じの子だったの？」

梨乃「ええ。基本的に営業部にいる時もウチらだけにいる時も態度は変わりませんでした。だから余計に気になっちゃうんです」

伸子「そう…。それじゃあ気になるのも無理ないよね」

梨乃「それと、さつき佐知絵が言ってた証拠って何ですか？」

伸子「あら、羽村さんから聞いてなかったの？」

梨乃「はい。さつき初めて聞きました」

伸子「さつきあたしが言った通りよ。柴田くんが羽村さんをホテルに連れ込もうとしてる場面を隠し撮りした写真のことなんだけど、柴田くんはまったく身に覚えがないのよ」

梨乃「身に覚えがないっていつても……写真に残ればれっきとした証拠になりますよね」

伸子「うん、そうなのよ。その写真がデタラメだって証明できればいいんだけど……」

そう言つて、伸子はお冷を一口だけ飲んだ。

伸子「…そうだ、秋葉さん、羽村さんからその写真を借りることってできる？」

梨乃「え？　写真を借りる？」

伸子「そう。その写真に写ってるホテルに行つて、柴田さんと羽村さんが来たかどうか確かめるの。もし2人が来てなければ、その写真が何の証拠能力もないことが証明されるでしょ？」

藤堂「なるほど。それはいい考えだ」

実は俊作も既に同じことを考えているのだが。

伸子「秋葉さん、やってくれるかな？　あなたなら羽村さんと仲がいいからやりやすいと思うんだけど」

梨乃「そうですね……でもどうやって借りたらいいんですか？」

伸子「そうだねえ」

「高根さんが証拠写真を見せるとするさいから見せてあげられないか？」って頼んでみたら？」

伸子「？」

聞き覚えのある声だ。

伸子たちは左隣のテーブルを見た。

作業着姿の清掃員がスポーツ新聞を読んでいる。

純だった。

伸子「鳴海くん！　いつからいたの？」

純「さつきからいたよ。高根さんと藤堂さん、それから秋葉さんが店に入つて行くのが見えたからな。珍しいスリーショットだなーって思つて」

梨乃「え？ 何であたしの名を…？ あなた確か、最近よく見る掃除の人ですよな？」

純「正体を知らない梨乃にとっては、驚くのも無理はない。

純「ええ、そうですよ。ただちよつと訳ありだけどね」

梨乃「どういうことですか？」

純「実は、柴田俊作とは昔からの友達でね。一緒にあいつの無実を証明しようといういろいろ調べてるんだ」

梨乃「…そうだったんですね」

純「おっと、今言ったことは他言無用だぜ。特に羽村佐知絵には絶対に言うなよ。恐い彼氏に知れたら何されるかわかったもんじゃない」

梨乃「佐知絵の彼氏について何か知ってるんですか？」

純「うん。まあね」

梨乃「どんな人なんですか？」

一瞬、純は梨乃がどうして黒野について聞いたがるのか疑問に思ったが、前にスペイン坂のクラブ「RYU-JIN」で一度会っていたことを思い出すと、その理由についてなんとなく見当がついた。おそらく、佐知絵が初めてつき合うタイプの人間だったからものすごく気になったのだろう。

純「とにかく危ないヤツだよ。地元でも悪名高いみたいだしね」

梨乃「ええー…そうなんですか？ 佐知絵、どうしてああいうタイプの人ときき合ってるんだろう。今までそんなことなかったのに…」

やはりだ。

純「それはわかんないな。急に好みが変わったってこともあるだろうし」

しかし、俊作もそうだが、純は佐知絵の好みが急に変わったとは思えなかった。この時点では「そんな気がする」といった具合に留まるものだが。

伸子「ところで鳴海くん、羽村さんに真っ向から頼んだところで写

真を貸してくれるかな？」

純はスポーツ新聞を二つに折りたたんだ。

純「大丈夫だと思うよ。だって、羽村は俊作がクロだと断言してるんだろ？ 仮にあいつがクロだったら、写真を貸したとしても事実には覆らない」

藤堂「そうかもしれんが、事実が覆らなかつたら、写真を貸さなくとも同じことじゃないのか？」

純「もしそうやって断ってきたら、しつこく食い下がればいいんですよ。“あなたの言うことが事実なら貸せるでしょ？”ってね。証拠を捏造してなければそのうち貸してくれます。逆にそこで貸さないと怪しまれるでしょう？ 頑なに拒否したり、写真を貸すと見せかけて何らかの仕事を仕掛けてくるようだったら、向こうのほうにクロってことになる」

藤堂「そうか…なるほどな」

伸子「うん、そうだよな」

純「うまく写真を受け取ることができたら、誰にもばれないようにオレに知らせてくれ。知り合いの刑事に頼んでそのホテルへ一緒についてきてもらう段取りをつけとく。そんで、夕方になったら一緒に行こう」

伸子「うん、わかった」

伸子は頷いた。

梨乃「あの、あたしも一緒にしたほうがいいでしょうか…？」

純「いや、キミは来ないほうがいいだろう。オレらに協力したのがばれたら危険だ」

梨乃「…そうですか。わかりました」

そして昼休みが終わった。

午後2時頃。

梨乃から「高根さんが証拠写真を見せるとするさいから見せてあげ

られないか？」と相談された佐知絵は、不満を露わにしながら伸子の席へと踏み込んだ。

佐知絵「高根さん！」

伸子「ん？ どうしたの？」

佐知絵「とぼけないでくださいよ。何で写真を見せないといけないんですか？」

伸子「あら、見ちゃいけない？」

佐知絵「いけませんよ！ しかも梨乃まで利用して！」

伸子「どうして？」

佐知絵「どうしてって……」

佐知絵は言葉を詰まらせた。理由を答えることができなかったのだ。伸子「何で見たらダメなの？ あたしね、あなたがあれだけ柴田くんを加害者だつて断言してたから気になっちゃったの。あそこまで言うならあたしの目で確かめてやるうってね」

佐知絵「必要ありません！」

伸子「そう？ でも、羽村さん一人の証言でここにいるみんなが納得するとは思えないのよ」

佐知絵「あたしがウソをついてるとでも言うんですか？」

伸子「信憑性の話よ。もしあなたの言うことがホントだっていうことを証明できたらみんな納得するじゃん？」

佐知絵「ひどい……あたしを悪者扱いするんですね」

佐知絵は目をうるませた。

伸子「何言ってるの？ 柴田くんを悪者扱いしたくせに」

オフィス内がざわつき始めた。

視線が伸子と佐知絵に集まり始めている。

その時、2人の間に割って入る者がいた。

会田だった。

伸子「会田さん！」

会田「おいおい、2人ともいい加減にしろよ。何度言い争いをしてら気が済むんだ」

伸子「いやいや、羽村さんからつかかってきたんですよ。あたしは別に……」

佐知絵「会田さん、高根さんがあたしを悪者扱いするんです！ 証拠を見せろってしつこくて……」

会田「うんうん。初めからやりとりは聞こえてたよ。ここは羽村さんが折れるべきだと思っ」

佐知絵「え！？ どうしてですか！」

会田「キミの気持ちもわかる。でも、高根さんも間違ったことは言っていないよ。ここは証拠を見せて、自分が正しいことを証明するんだ」

佐知絵「……」

佐知絵はふくれっ面になりながらも、しびしび首を縦に振った。

写真が、伸子に手渡される。

伸子「これね……」

伸子は写真をまじまじと見つめた。

……なんだか、無性に腹が立ってきた。

無意識的に、伸子は佐知絵をにらんでいた。

だが、佐知絵はちょうど休憩室の方へ歩いて行くところだったので視線が合うことはなかった。おそらく佐知絵は、気持ちを落ち着かせるために休憩室へ向かったのだろう。

と、そこへ、会田が佐知絵の背後から近づき、彼女にそっと耳

打ちをするかのような光景が映った。

ほんの一瞬だった。もしかしたらそう思ったのは伸子だけかもしれない。

伸子（何だろう…。会田さん、羽村さんまでフォローしたのかな…）

ひとまず伸子は自分のデスクへ戻り、携帯電話のメールで純に佐知絵から写真を受け取ることに成功したことを伝えた。

「メールを送信しました」というメッセージがディスプレイに現れたのと同時に、伸子は背後に人の気配を感じた。

ハツとして後ろを振り返る伸子。

背後に立っていたのは藤堂部長だった。

伸子「ぶ、部長！」

藤堂「仕事中に私用のメールか？ いかんなあ〜」

冗談めかした顔で伸子を見下ろす藤堂。

伸子「や、やだあ。脅かさないでくださいよお」

藤堂「ははは。すまんすまん。羽村さんから写真を受け取ったようだね」

急激に音量を落としながら、藤堂が伸子の耳元でささやくように言う。

伸子「はい。今、鳴海くんにも連絡しました」

藤堂「そうか、それはよかった。実はな、こっちも手筈が整ったところなんだ」

伸子「あ、もしかして柴田くんのパソコンですか？」

藤堂「そうだ。総務部の人と一緒に地下倉庫へ行ってくれ」

伸子「わかりました！」

伸子はハイパー・バイティングを握りしめ、まずは総務部へと向かった。

営業部へ移ってきてからというもの、伸子はほとんど古巣である総務部へ来ることはなくなっていた。懐かしい空気に包みこまれ、伸

子は一瞬任務を忘れるところだった。

「高根さん！」

奥の方から、若い男性の声が始子を呼び止めた。

伸子「前岡さん！」

前岡と呼ばれた短髪の男が、颯爽と伸子のもとへと駆け寄って来る。

前岡「お疲れ。仕事頑張ってる？」

伸子「ええ、なんとか」

前岡は、伸子より3歳年上の30歳。ちょうど会田と同じ年で同期入社だという話らしい。背丈はさほど高くなく、伸子より少し高い程度である。だが、特に太っているわけではない。そして、目が細く口が大きい。新選組局長・近藤勇のように、軽く握り拳を入れることができそうだった。

前岡「あ、部長から聞いたよ。地下倉庫に片づけた柴田って人のパソコンを使いたいんだって？」

伸子「ええ。ちょっと使いたいファイルがあったもんで……」

前岡「そうか。オレが立ち会うから、一緒に行こうか」

伸子「はい。お願いします」

前岡「まったく、撤去する前に言わなきゃダメだよ」

伸子「すいません」

伸子は気まずそうに頭を下げた。

地下倉庫へ行くには通常使用するエレベーターではなく、荷物運搬用のエレベーターが社屋裏口から繋がる非常階段を使う。

株式会社マグナム・コンピュータは、地下2階と3階が倉庫になっているのだ。

エレベーターに乗り込み、前岡が地下2階のボタンを押した。

スーツの袖から銀色の腕時計が覗く。

伸子「あら前岡さん、ずいぶん珍しい時計してますね」

前岡「あ、これ？ これね、一昨年に発売された限定モデルなんだ」

伸子「へえ〜。カッコイイですね」

前岡「そう？ ありがとう！」

前岡は嬉しそうに微笑んだ。

地下2階、パソコンが保管してあるスペースまでやって来た伸子と前岡。

実際、そこには何台ものパソコンが保管されていた。この中から俊作が使用していたパソコンを探し出し、LAN接続をしたうえでハイパー・バイティングを使わなければならない。

少々面倒だが、やるしかない。

伸子は早速俊作のパソコンを探し始めた。

実をいうと、伸子は俊作が使っていたパソコンの形状をしつかりと覚えていた。

モニターは薄型で、本体には誤ってボールペンでつけてしまった「十文字」が刻まれている。それはまるで、某マンガに登場する伝説の人斬りを思わせるようだった。

伸子は、モニターよりも「十文字」を手掛かりにパソコン本体を探すことにした。

しかし、いくら探しても俊作のパソコンは見当たらなかった。

伸子「ないなあ……。前岡さん、柴田くんのパソコンがありません」

前岡「えっ、ホント？ うーん…じゃあ、もう業者が持つて行っちゃったのかもしれないなあ」

伸子「まいったなあ……。あの、その業者に問い合わせてもらってもいいですか？」

前岡「いいけど、そんなにそのパソコンが必要？」

前岡は複雑そうな顔をした。

伸子「はい……。面倒だとは思ってますけど、お願いしてもいいですか？」

前岡「……しょうがないなあ。電話しとくよ」

伸子「すいません、お願いします」

伸子と前岡は、一旦引き揚げることにした。

それから約1時間後、内線で前岡から伸子へ連絡が入る。

それによれば、パソコンは既に処分されていたとのことだった……。

55・廃ビルの地下駐車場にて

その頃、俊作は朝から創お抱えの情報屋たちと共に秋池の搜索や、戸川弁護士と「サム」なる人物についての調査にあたっていた。

調査の効率化を図るため、俊作は各調査員を三つの部隊に分けた。

秋池の搜索を行う「一番隊」。

戸川の調査を行う「二番隊」。

「サム」の調査を行う「三番隊」。

部隊に名前をつけたのは俊作だ。まるで新選組である。

調査員は14人。俊作を含めると15人になるので、一つの部隊につき5人ずつ振り分けることにした。

俊作は一番隊に入った。

原宿を中心に、コインパーキングや月極駐車場をくまなく回る俊作。おそらく、連中は自動車をアジトのような場所に隠すだろう。秋池を監禁するなら、普通はアジトを利用する。したがって、あの黒い車が見つければ秋池も見つかる。俊作はそうにらんでいた。しかし、それらしい自動車はまだ見つからない。

俊作は思う。

この事件の首謀者は誰なのか？

これまでいちばん首謀者に近い存在とされていた笹倉は、今俊作が秋池とセットで捜している車にはねられて重体となっている。笹倉

がそのような目に遭ったということは、真の黒幕ではない可能性が高い。

では、羽村佐知絵はどうだろうか。

実際に俊作をセクハラで訴えた人物だ。その腹の内には何かよからぬ企みがあったのだろう。しかし、俊作と彼女は、プライベートではもちろん、会社でもちょこちょこ会話をする程度である。トラブルの火種になるような事例が思い浮かばない。

笹倉にせめて意識があれば黒幕の正体も簡単に聞き出せそうなものだが、いかんせん重体なのでそういうわけにもいかない。そうなる、自分たちで調べ上げるしかなくなってくる。

キーワードは五つ。

秋池、「サム」、戸川弁護士、下足痕、そして証拠写真。

このうち、下足痕と証拠写真は純が追っている。俊作が調べるのは残りの三つだ。

とにかく、これらをつきつめていけば真相に辿りつくことができる。俊作はそう信じていた。

既に、捜索開始から半日が過ぎようとしていた。しかしながら、いつころにあの黒い自動車は見つかる気配がない。

そこで俊作は考えた。

ロック・ボトムメンバーを片っ端から聞き込んでいけば、いずれはアジトの場所がわかるのではないか。だが、闇雲に街を動き回っ

たところで連中に遭遇できる確率は低い。

では、どうすればよいだろうか？

クラブ「R Y U - J I N」へ行くか？

その方法もありだが、だいたいクラブは夕方から営業する。現在の時刻は午前11時21分。夕方まで待つのはしんどいし、そんなのんびりしてられない。

そこで俊作は再び考えた。

カフェ「鴨川家」を利用しよう。

マスターである鴨川は、黒野たちに襲われて負傷し入院している。妹のヒナコは、黒野たちを恐れて板橋へ逃れてきた。その状況を逆に利用するのだ。

店の照明をつけて、あたかも営業を再開したかのように装う。そうすればロック・ボトムメンバーがまた嫌がらせをしに現れるだろう。そこをすかさず尋問し、アジトの場所を聞き出す算段である。

思い立ったら即行動だ。

俊作は一旦板橋へ戻り、ヒナコから店の鍵を借りると、再び原宿へ取って返した。

簡単に昼食を済ませた後で、カフェ「鴨川家」の正面玄関に「準備中」のプレート掲げる。「準備中」の状態にしておかないと、一般の人々まで客として来てしまう恐れがある。ロック・ボトムの連中なら準備中もお構いなしに乗り込んで来るだろう。更に、「しばらくの間休業します」という張り紙もはがしておく。

後は、敵が迷い込むのを待つだけだ。果たしてうまくトラップに引

っ掛かってくれるだろうか。

店の奥にドアがあり、その先に小さな物置部屋がある。そこには在庫のコーヒー豆や備品が置かれている。更に奥へ行くとまたドアがあり、住居と繋がっている。

俊作は物置部屋に隠れながら、ただ出入り口をじっと見つめた。

待つこと3時間。

「バン」と、ドアの開く音がした。乱暴な開け方だ。

ロック・ボトムの誰かがやって来たのだ。俊作は確信した。そつと物陰から入口の方を覗き見る。

やって来たのは、あのジャツカル男だ。しかも単独である。

狙い通りだ。俊作は独り、ニヤリと笑った。

ジャツカル男「おい鴨川ア！ 出てこい！ いつ店を再開しやがった！」

今、ジャツカル男の前に躍り出ると、向こうが恐れをなして逃げってしまうかもしれない。俊作は、ジャツカル男を店の奥までおびき寄せることにした。

何か物音を立てればよいのではないか。俊作は、わざと近くに立てかけてあったモップを倒した。

「ガタン」という音が、ジャツカル男以外に誰もいない店内に響く。ジャツカル男「ん！ そこか！」

ドカドカと騒々しい足音が物置部屋に近づいてくる。俊作はドア脇の壁に張り付いて息を潜めた。

ジャツカル男が、半開きになっている物置部屋のドアを勢いよく全開にした。

次の瞬間、ジャツカル男の視界がぐるりと回転した。俊作がジャツ

カル男の体を掴み、床に思い切り引き倒したのだ。

ジャツカル男「がふっ……！」

背中から叩きつけられ、悶絶するジャツカル男。

そこへすかさず、左ヒザをジャツカル男の腹へ乗せながらのしかかる。いわゆる「ニー・オン・ザ・ベリー」の体勢だ。

俊作「よう！ 会いたかつたぜ！」

ジャツカル男「て……てめえ！」

俊作「ああ？ 口の聞き方を知らねーみてーだな。また返り討ちに
あいてーか？」

ジャツカル男「くそお……はめやがったな！」

俊作「何言つてやがる。さんざん悪さしたのはてめーらだろうが！」

ジャツカル男「う……うるせえ！」

俊作「おい、てめーらのたまり場はどこだ？」

ジャツカル男「ああ！？」

俊作「たまり場だよ。アジトみてーな所の一つや二つあんだろ。場
所を教えるよ」

ジャツカル男「……」

俊作「どこだ」

ジャツカル男「……」

俊作「たまり場はどこだ」

ジャツカル男「知らねーよ」

すると俊作は、カツと目を見開き、まるで鬼神のような顔つきでジ
ヤツカル男を上から睨みつけた。

俊作「言え。オレに黙秘権は通じねーぜ」

ジャツカル男の背筋が一瞬にして凍りつく。ただならぬ殺気を感じ
取ったのだろう。

ジャツカル男「……道玄坂。地下駐車場のある廃ビルだ」

俊作「ホントだな？」

ジャツカル男「ホントだよ！」

俊作「よし。じゃあそこまで案内しろ。今警察呼ぶから」

ジャッカル男「ああ？」

俊作「だから、警察と一緒にそのビル調べるんだよ。お前はそのための道案内だ」

ジャッカル男の顔が引きつったまま硬直している。

俊作「おっと、逃げようなんて考えんなよ。五体満足じゃいられなくなるぞ」

ジャッカル男「くっ……」

俊作は湊刑事に連絡をした後、一番隊の各調査員に「アジトの場所は聞き出したので、各自二番隊と三番隊の応援に回ってほしい」という旨のメールを同時送信した。

30分後、店に湊刑事が佐藤刑事や鑑識係数名を伴って到着した。

俊作たちは一息つく間もなく道玄坂へ移動した。

ジャッカル男の言った廃ビルは、確かに道玄坂に存在するのだが、かなりわかりづらい所であった。

地上3階建ての、さほど大きくない雑居ビルだったようだ。使わなくなつてからそんなに時間が経過していないようにも感じられる。

湊の運転する覆面パトカーが、地下駐車場へと滑り込んできた。鑑識係の車もそれに続く。どうやら2台に分乗しているようだ。

俊作「黒い車はどこだ？」

ジャッカル男「車だあ？」

俊作「秋池を拉致し、笹倉をはねた車だ。ここに隠してあんだろ？」
ジャッカル男は無言のまま、地下駐車場の奥を指差した。

ガラクタ置き場と化した駐車場に、シートを被った車が埋もれている。間違いない。

湊「あれだな？ よし、ちゃっちゃと調べるぞ」

湊が先陣を切ってパトカーを降り、車に積もったガラクタをどかし始めた。俊作と佐藤刑事もそれに続く。

ホコリまみれになること約10分、捜しに捜したあの黒い自動車がついに姿を現した。

こんな所にあつたのか。廃ビルの地下駐車場に隠しておいたのであれば、そう簡単には見つからない。

感傷に浸る間もなく、俊作たちはその車を調べ始める。

佐藤「右のヘッドライト付近がへこんでる。笹倉はここにぶつかったのか」

鑑識係は丁寧に指紋を採取している。

やがて、一人の鑑識係が湊に耳打ちをする。

鑑識係「これは、こちらで押収して更に詳しく調べる必要があります。うですね」

湊「そうだな。よし、レッカー車を呼ぶか」

湊が携帯電話を手にする。同時に、鑑識係が車から引き揚げていく。

半ば野ざらし状態となった車を、俊作は何気なく眺めていた。

俊作「ん？」

後部座席の上で、何やら黒光りしている小さな物体があるのを発見した。

俊作「何だ、ありゃ？」

俊作は、黒い物体に顔を近づけていった。

俊作「湊さん！」

佐藤刑事に今後の行動について指示している湊刑事を呼びつける俊作。

慌てて話を切り上げ、俊作のもとへと駆け寄る湊刑事。

湊「どうした？」

俊作「こんなもんが落ちてましたよ」

俊作は、ハンカチに包んだ黒い物体を湊に見せた。

それは、ボタンだった。裁縫で使われる、あのボタンだ。

直径は13mm〜14mmほど。

湊「おおっと、見落としてたか」

湊は鑑識係を呼び寄せ、小さな黒いボタンを手渡した。

やがて、レッカー車が窮屈そうにボディを入り込ませながら道玄坂へやって来た。この狭い道路を、よくもここまで辿り着けたものだと俊作は思った。

湊は、隅っこでうなだれているジャッカル男の肩に手を置いた。

湊「さて、お前さんはこれから署で事情聴取に応じてもらうぞ」

ジャッカル男「好きにしる。どうせ、すぐに戸川さんが解放してくれる」

湊「何だと？」

ジャッカル男「あの人はオレたちの保護者だ。あの人のおかげでオレたちはこの街で快適に過ごせるんだ」

湊「何が快適にだよ。お前らの悪行三昧は有名だぜ？」

ジャッカル男「証拠がねえ。証拠があがらない限り、オレたちが悪人になることはない」

湊「……」

湊は、苦虫を噛み潰したような顔をした。その顔がおかしかったのか、ジャッカル男はべろりと舌を出し、挑発的な笑いを湊に突きつけた。それを横で見ていた俊作も、ジャッカル男の態度に不快感を露わにしていた。

すると、湊はジャツカル男の胸ぐらを左手で掴み、そのままその手を相手の喉元へ押しつけた。

ジャツカル男「ぐ……！」

不意に喉を圧迫され、息を詰まらせるジャツカル男。バランスを崩し、されるがままに背中から壁に叩きつけられる。俊作は止めに入らない。おそらく自分が湊の立場であつても同じことをしただろう。ジャツカル男「お……おい、こんなことしてタダで済むと思つてるのか……！」 戸川さんに暴力刑事だつて訴えられるぞ……！」

湊は、あえてその言葉に対する返答をしなかった。

湊「秋池はどこだ」

低く、冷たい声でジャツカル男を問い詰める。

更に、湊と俊作が発する恐ろしいまでの殺気がジャツカル男を容赦なく襲う。

ジャツカル男は、一瞬にして反抗する気を喪失してしまった。

ジャツカル男「……知らねえ」

絞り出すように答えるのがやつとだった。

俊作「ああ？ 知らねーだあ？」

これでもかというぐらいに睨みをきかせる俊作。

ジャツカル男「ホントなんだよ！ ホントに秋池の行方はわかんねーんだ！」

湊「何言つてんだ！ 秋池はおめーらの仲間があんたの車を使って拉致したんだろが！」

ジャツカル男「ああ、確かにそうだ。だけど、ヤツは逃げたんだよ！ 見張り役が目を離した隙にな！」

湊「何だつて？」

俊作「逃げた？ どこへ？」

ジャツカル男「それがわかれば今吐いてるよ！ 黒野さんや瀬高さんも捜してんだ」

湊「何てこつた！」

俊作「おい、“源”にいる坂下つてヤツから聞いたんだが、黒野は

秋池を“念のためにどこかで謹慎してもらおう”と考えてたらしいな。どうして秋池を謹慎させる必要があるんだ？ 秋池が何か知ってるのか？」

ジャツカル男「……それは言えねえ。言えばオレは黒野さんたちに殺される」

俊作「そうか。じゃあ、羽村佐知絵と黒野はどうだ？」

ジャツカル男「どういうことだ？」

俊作「あの2人はホントに仲のいいカップルかってことだ」

ジャツカル男「そ、そんなことオレが知るかよ。つき合いは順調だと思っけど」

俊作「羽村が前にキャバクラで働いてたことは知ってるな？」

ジャツカル男「あ、ああ」

俊作「あの女が店を辞める直前、“サム”って野郎が客として羽村とかなり親密に話し込んでたらしいんだけどよお、黒野はそのこと知ってるのか？」

ジャツカル男「……」

ジャツカル男は答えなかった。

俊作「これも返答なしか……怪しいな」

湊「よし、詳しくは署で聞こう」

ジャツカル男「無駄だと思っぜ。オレが任意同行されれば戸川さんがすぐに飛んで来る」

湊は、唐突に不敵な笑みを浮かべた。

そして、素早く懐から手錠を取り出し、ジャツカル男の両手にかけてしまった。

ジャツカル男「……？」

わけがわからず、自分の両手を見張るジャツカル男。

湊「住居不法侵入の現行犯でお前を逮捕する」

ジャツカル男「なっ、何だと！」

湊「任意で引つ張れば弁護士にくつついて来られる恐れがある。だが、お前を鴨川家へ不法侵入した罪で現行犯逮捕し、刑事事件として手続きすれば弁護士は簡単には手を出せねーだろ。お前の罪を軽くするために動かなきゃいけねーからな」

俊作「なるほど、考えましたね、湊さん」

湊「ふん、刑事の知恵だよ」

ジャツカル男「ふつ、ふざけんな！ これは不当逮捕だ！ 警察の横暴だ！」

湊「あ？ 聞こえねーな。渋谷区の愚連隊御一行様がよ」

湊はジャツカル男の腕を掴むと、強引に自分たちが乗って来たパトカーまで引きずって行き、そのまま後部座席に無理矢理押し込んだ。そして、近くにいた佐藤刑事を呼びつける。

湊「佐藤！ お前、こいつ連れて先に神宮前署へ戻ってる！」

佐藤「え？ 湊さんは一緒に戻らないんですか？」

湊「ああ。オレは柴田たちとここに残る。この近くにもう1件調べなきゃいけない場所があるんでな」

佐藤「そうですね、わかりました。でも、単独行動はなるべく控えたほうがいいですよ。警察は組織捜査が信条ですから」

湊「ドラマみてーなこと言ってるじゃねえ！ 早く行け！」

佐藤刑事は、湊から逃げるようにアクセルペダルを踏んだ。既に駐車場を出ようとしているレッカー車の後を追い、パトカーは神宮前警察署へと戻って行った。

地下駐車場には、俊作と湊だけが残った。

湊「さて、行くか」

俊作「行くか…って、どこへ？」

湊「あれ？ 鳴海から聞いてないのか？ 例の“証拠写真”が手に入ったから、疑惑のラブホを調べに行くんだよ」

俊作「え？ マジすか？ 純のヤツ、オレに報告するの忘れやがっ
たな」
湊「この後鳴海たちと合流する。それまでは待機だ」

56・ホテル潜入

午後7時20分頃。

渋谷の東急本店前で待っていた俊作と湊のもとに、純と伸子が到着した。

マグナムコンピュータの定時は午後6時。

すぐに業務を切り上げて退社するにすれば遅い。

俊作「遅かったな」

伸子「ごめんね。ちよっと仕事がたまっちゃって」

そう答える伸子の表情は、どこか含みのありそうな感じに見受けられた。

俊作「米本と藤堂さんは？」

伸子「米本くんはちよっとあがれそうにないって。部長も会議が長引いてる」

俊作「そうか。じゃあ、さっさと行くか」

純「あ、ちよっと待ってくれ」

俊作「どうした？」

湊「今日採取した下足痕を、忘れないうちに湊さんへ渡しとかないと」

純は、かばんからA2サイズの茶封筒を取り出すと、湊に手渡した。

湊「サンキュー。鳴海、お前いい仕事するよな」

純「え？ 何ですか？」

湊「昨日もらった下足痕、採取した場所と時間、誰の足跡かってトコまで明記してくれてるんだもんな。あの中から怪しい下足痕が出た場合、その人物を特定しやすい」

純「ああ、そうですねえ」

純は、少し照れ臭くなった。

湊「今日の分もその辺きつちりやってくれてんだろっな？」

純「もちろんっす」

湊「でかした。戻ったらちゃんと調べとくよ。あと、それからな、秋池を拉致した車が見つかったぞ。連中のたまり場もつきとめた」

純「マジすか？」

湊「ああ。だが、ヤツはいなかった。隙を見て逃げ出したらしい」

純「逃げた？」

俊作「心配するな。情報屋の一部を秋池の捜索にあたらせてる」

純「そ、そうか」

湊「よし、行かせ」

俊作たちは、「証拠写真」に写っている建物の外観と、俊作が羽村佐知絵を送って帰った時の記憶を頼りに道玄坂界隈を歩き回った。

その結果、「Call Me」という名前のホテルに辿り着いた。

しかしこのホテル、何というか、生気が感じられない。

電飾看板は点灯してはいるが薄暗い。そのうえ消えかかっており、ホコリまみれだ。

俊作「こんなホテルあったっけ…？」

純「おい、何だよここ。ちゃんと営業してるのか？」

湊「とにかく中へ入るぞ。調べてみないことには何もわからん」

湊刑事を先頭に、俊作たちはホテルの中へと入っていった。

内部も所々ホコリの塊が散見され、とても営業中のホテルとは思えない。不意に伸子が咳き込んだ。

真つ先にフロントへ向かう湊。カウンターの小窓から明かりが漏れている。どうやら人はいるようだ。

湊「すいません」

すると、中から無精髭を好き放題伸ばした年齢不詳の男が顔を覗かせた。この男が従業員だろうか。

男「何です？」

湊は警察手帳を提示した。

湊「警察の者ですが、ちょっとお伺いしたいことがあります」

男「何でしょう？」

湊は俊作に手招きをし、自分の横に立たせた。

湊「月 日の夜11時半過ぎ、この男がある女性を連れてこのホテルに入ったか、あるいはホテルの前を通ったりしたのを見ませんでしたか？」

男「女性？ どんな女性ですか？」

俊作「こんな女性です」

俊作は「証拠写真」を見せ、佐知絵の方を指差した。

男「……ああ、そういえばあの夜、入口の方で男女の押し問答がありましたね。まあ、よくある“1回だけ！”って感じのアレでしょう」

意外にも、その受け答えはあっさりしていた。この手の質問をされた場合、普通なら記憶を辿るため若干間が空いたりするものなのだが、この男にはそれがない。俊作も、純も、湊も、伸子も同じ印象を受けた。

男「もし疑わしいんだったら、防犯カメラでも見ていきますか？」

男も俊作たちが疑っているのを感じたのだろう。先手を打つかのようにつに言った。

湊「……是非」

男は俊作たちを事務室へ招き入れた。

やはり、ここも汚い。まったく掃除をした気配がない。

従業員らしきこの男も、よく見ると薄汚れた作業着を着ており、少なくとも清潔とはいえない。

男「ちょっと古い型なんで画像は粗いですが、そこは勘弁して下さい」

男は手慣れたように奥に置いてある段ボール箱から1本のビデオテープを取り出すと、手早くビデオデッキにセットし、再生ボタンを押した。

映し出された画面の右下には、ちょうどあの夜、俊作が佐知絵を送って帰った 月 日の夜11時半過ぎが示されていた。

確かに古い型だ。モノクロで、画像がぼやけている。しかしそれでも、画面の奥が入口側だということだけは識別できる。カメラはエントランスホールの奥に設置されているのだろう。

再生開始から約1分。

入口の方で出入りを不規則に繰り返す男女が現れた。

サラリーマン風の男性と、OLらしき女性がホテルを出たり入りたりしているのだ。

男「ああ、これです」

俊作たちは画面を凝視した。

よく見ると、確かに男性は俊作に、女性は佐知絵に見えなくもない。俊作は、下唇に力を込めながら、ただ黙ってビデオを見ている。

湊「あの、このビデオ、マスターテープは保管してありますか？」

男「え、ええ、ちゃんと保管してますよ」

湊「じゃあ、このテープをお借りしても差し支えありませんね？」

男「あ、はい、どうぞ」

湊「ありがとうございます。捜査が終わり次第返しますので」

湊は、自ら停止ボタンを押し、テープをデッキから取り出すと勢いよく事務室を飛び出た。

俊作「湊さん！」

慌てて俊作も後を追う。

事務室を出た湊は、何故か周囲をきよろきよろと見回していた。

俊作「湊さん？ どうしたんすか？」

湊「……いや、何でもねえ。帰るぞ」

ホテル「Call Me」を出て、合流地点だった東急本店まで戻って来た俊作たち。

俊作「思いつきり怪しかったな、あのホテル。だいたい、オレ自身あんな所にラブホがあったなんて気づかなかったし」

伸子「うん。あれじゃお客さん来ないよね……」

俊作「もう一度調べる必要があると思う。ちゃんと営業してるのかも怪しいし」

湊「同感だ。オレが思うに、あそこはたぶん営業してねーぜ」

純「え？ 何でそんなことが言えるんすか？」

湊「まずはありえねーぐれーにホコリだらけだったこと。これはみんなも気づいたよな？」

俊作たちは黙って頷いた。

湊「それと、出てくる時エントランスホールを見渡してみたけど防犯カメラが見当たらなかった。さっき見たビデオはエントランスホールを映したモノであるはずなのに、撮影する媒体のビデオカメラがないってのはおかしいだろ？」

伸子「確かに……！」

純「じゃあ」

続きを促すかのように、純は俊作を見遣る。

俊作「まさか、証拠を偽装した……？」

湊「たぶんな」

伸子「え？ どういうこと？」

湊「あの写真は、柴田が羽村つて女をあのホテルに連れ込もうとした写真だ。しかし柴田は羽村を連れ込もうとしちゃいねえ。事の真偽を確かめるためにはあのホテルに行くのが当然の流れだろ？ ところがそのホテルがやってなけりやウソが一発でばれる。そこで敵さんはいかにもホテルが営業してるかのように装ったのさ」

伸子「そんな……。何でわざわざ営業してないホテルを使う必要があるんですか？」

湊「そこはオレもわからん。もしかしたら営業してないのを知らなかつたのかもな」

純「そうだとしたら、ヤツらも相当な間抜けですよ」

湊「ああ。その通りだ。そもそも証拠を偽装すること自体浅知恵だかな」

純「そうですね」

純は苦笑いした。

湊「よし。ホテルの営業云々についてはオレが公安に問い合わせて確かめてみる。お前らはお前らのやるべきことをやるんだ」

俊作「はい。何かあったら連絡くださいね」

俊作、純、そして伸子の3人は湊と別れ、帰途につくため近くのコインパーキングへ向かった。

純と伸子は、終業後ハワイアン・クリーンの社用車で道玄坂まで来ていたのだ。

駐車料金を支払い、まずは伸子の自宅がある中野へ向かう。

走り出した車の中で、伸子が突然口を開く。

伸子「柴ちゃん、今日は遅くなってごめんね」

俊作「な、何だよ急に。別にオレは気にしてないぞ」

伸子「…実はね、会田さんに、食事に誘われてたの」

俊作「……え？」

伸子「柴ちゃんが会社からいなくなって、あたしが笹倉課長に嫌がらせを受けるようになったからって、あの人気にかけてくれてたみたいで。それで、あたしを元気づけようとして……」

俊作「そうだったのか…」

伸子「でも、あたしは平気だよ。柴ちゃんはしっかり前を向いて闘ってるし」

俊作「オレがこれくらいで潰れるわけねーじゃん。売られたケンカは買ってやるぜ」

伸子「ふふふ。柴ちゃん、男らしい〜!」

伸子が突然おどけたように俊作の背中をバシバシ叩く。

俊作「いつ、いてっ! 何すんだよ!」

純「ふっ、ずいぶん仲がいいんだな、お前ら」

純は、そのやりとりを聞きながら、くわえタバコのままハンドルを握っていた。

俊作「 そうだ、昨日頼んだ音無商事とフェニックス・エンターテイメントの件はどうなった?」

伸子「あ、ごめん、今日は見積と会議資料を作りまくってたからやる時間なくて。明日は土曜だけど、休日出勤してやるうかなって思ってる」

俊作「 いいのか?」

伸子「全然大丈夫よ、部長の許可ならとってあるから。土曜ならゆつくり作業できるじゃない? それに、夕方から石原さんとも会う用事があるし」

俊作「 すまん。頼む」

伸子「 いいのよ! ここまできたら犯人の正体を暴いてやるわ!」

やがて車は伸子の自宅前に到着した。

伸子「じゃあね、お疲れ！ 気をつけてね！」

伸子は、さっぱりとした、気持ちの良い笑顔を浮かべながら手を振った。

俊作「おう。お疲れ」

俊作たちは伸子の住む中野を後にした。

俊作と純だけになった車内。

純は、また新しいタバコに火をつけた。

純「あの会田つて人、のぶちゃんをメシに誘ったのは今日だけじゃねーんだ」

俊作「え？」

純「一昨日も誘われたらしい。清掃スタッフからの情報だ」

俊作「そうなの？」

純「あの人、のぶちゃんに気でもあるのかい？」

俊作「さあ」

純「“さあ”？ 何か心当たりとかは？」

俊作「心当たりって言われてもなあ……ちよくちよく朝礼直後に給湯室前で立ち話してるのを見るぐらいかな」

純「立ち話？」

俊作「ああ。のぶちゃんは朝礼が終わったらコーヒーを淹れに行くのが習慣だし、会田さんはまず喫煙室で一服してからトイレへ行くのが習慣みたいだからな。だけど、会田さんがのぶちゃんをメシに誘ったりすることはなかったぞ？」

純「そうか。でもお前よく見てるな」

俊作「伊達に5年間営業やってねーよ」

純「確かに会田さんは朝礼終了後、高確率でトイレに来る」

俊作「知ってたの？」

純「昨日今日と、男子トイレで下足痕とってたからな」

俊作「ああ、そうか」

純「あ！」

突然、純が大声を出す。

俊作「な、何だ!？」

純「じゃあ、こないだ会議室でのぶちゃんぶちゃんが笹倉ささくらに襲われた時、会田あいでって人はどうやってそれに気づいたんだ？」

俊作「どうやって…って、会田さんが外回りに行く途中で会議室からの物音を聞きつけたからじゃなかったのか？」

純「あれは朝礼が終わってすぐに起きた。のぶちゃんぶちゃんが笹倉ささくらに連れて行かれるところを会田さんが見てたら気づけそうだが、その時和田わださんは喫煙室でタバコを吸ってたはずだ。つまりタイミング的に無理なんだ！」

俊作「何だって？」

純「うーん…今回の事件と関係があるかどうかはわかんねーけど、なんか気になる」

俊作「オレも、なんとなく気にはなってた。外回りに行こうとしてる状態であつたのなら、あの人は1階にいるはず。会議室は2階だ。あの場所から1階まで会議室内の物音が聞こえてくるってのは考えにくい」

純「一応、検証してみるか。どうせオレも明日は会社へ行くつもりだったし」

その時だ。

俊作の携帯電話が鳴る。

戸川弁護士じんかわの調査にあたらせていた「二番隊」の陣川じんかわという男性の調査員から電話がかかってきたのだ。

俊作「もしもし柴田です」

陣川「あ、お疲れ様です、陣川です」

俊作「お疲れ様です。何かありましたか？」

陣川「あの、今、戸川弁護士と同じ大学の同級生だったという方と一緒にいます」

俊作「え？ ホントですか？」

陣川「ええ。しかも同じサークルに所属してたそうですよ。どうしますか？」

俊作「じゃあ、ちょっとお話を伺いたいので、明日の午前9時にホット・スパイス・エンジンシーまで連れて来てもらってもいいですか？」

陣川「わかりました。ちょっと聞いてみますのでしばらくお待ちください」

暫し間が空く。陣川が戸川の同級生にも同意を得ているのだ。

陣川「：お待たせしました。構わないそうなので、明日午前9時に同級生の方とそちらの事務所へ参ります」

俊作「ありがとうございます！ あ、その際ですね、同級生だってわかるモノを持参するよう伝えてもらえますか？」

陣川「わかりました。伝えておきます」

電話を切った後で、純が話しかける。

純「どうした？」

俊作「情報屋が、戸川の大学時代の同級生を連れて明日の9時に事務所まで来てくれるってさ」

純「マジか？」

俊作「ああ。これで、戸川の身元が少しはわかりそうだけ」

純「そうだな。でも、オレはその頃会社へ行ってるぜ。まあ、スペアキーを貸すよ。その代わりに、事務所は自宅と兼用だから、寝室だけは勝手に入るなよ！」

俊作「わかった。ありがとうな」

57・急浮上

翌朝、午前9時。

ホットスパイス・エージェンシーに陣川調査員と、戸川の大学時代の同級生がやって来た。

俊作「お待ちしております。柴田と申します」

同級生は、岩殿いわどのと名乗った。おとなしそうで、小柄な男性だ。黒のナイロンジャケットを羽織り、ベージュのチノパンツを履いている。そして肩からは黒のショルダーバッグをかけている。

俊作は陣川と岩殿を応接スペース（普段はリビングである）へ案内し、ソファに着席させた。そして自分はコーヒーを淹れるためキッチンに立った。

人数分のコーヒーを淹れ、俊作が応接スペースに戻る。

俊作「せっかくの休日なのにわざわざお越しいただいてありがとうございます」

淹れたてのコーヒーを岩殿と陣川の手前に置きながら、俊作が礼を言う。

陣川「いえ、どうせボクはヒマですから」

岩殿「私もヒマだったんで」

俊作「いやいや、休みなんだからゆっくりしたかったでしょうに」
これも職業病なのか。自然と営業トークを繰り広げようとしているのが、自分でもわかった。

ようやく俊作も着席したところで、話は本題に入る。

俊作「岩殿さん、戸川弁護士とは大学時代の同級生で、しかもサークルも同じだったということですが、何のサークルに入っているんですか？」

しゃったんですか？」

岩殿「“IT研究会”という、いわばパソコンオタクの集まりです。戸川も私も4年間そこに所属してました」

俊作「戸川弁護士はどんな人だったんですか？」

岩殿「とにかく頭がよかったですね。大学在学中に司法試験に合格してましたから。卒業と同時に法律の道へ進んでました」

俊作「　ということは、新卒でいきなり弁護士として活躍されていた、と？」

岩殿「ええ。都内でもそこそこの名のある法律事務所で働いていたようですよ」

俊作「働いていた？　自分で事務所を設立したわけではないんですか？」

岩殿「え？　自分で？　あいつ、独立してたんですか？」

俊作「…え？　もしかして、ご存じではない……？」

岩殿「すいません、ここ4～5年ぐらい戸川とは連絡をとってないもんで、近況はよくわかりません。それに、大学時代もそれほど仲がよかったわけじゃありませんでしたから。4～5年ぐらい前に弁護士事務所を辞めたって話は聞いてましたけど……」

俊作「辞めた？　何かあったんですか？」

岩殿「さあ…詳しくはわかりませんが、なんでもある案件を“金にならない”と言って適当に対応したために依頼人と揉めたのが原因だったらしいです」

俊作「そうだったんですか。それは酷いですね。あの、失礼なこと聞くようですが、戸川弁護士って性格悪いんですか？」

岩殿「うーん……少なくともいいとは言えなかったですね。戸川って、冷たくて陰湿なところがあるんですよ。だから、私以外のサークルの連中からもちよつと距離をおかれてましたね」

俊作「なるほど。ちなみに、戸川さんと仲の良かった人っていたんですかね？」

岩殿「どうでしょう……あ、ちよつと当時の仲間に聞いてみましょう

うか？ 今でも連絡取り合ってるヤツがいるんで」

俊作「え？ いいんですか？」

岩殿「大丈夫ですよ。どうせそいつもヒマでしょうから。では、少々お待ち下さいね」

岩殿は携帯電話をチノパンツのポケットから取り出すと、通話のため玄関の方へ移動した。

約5分後、応接スペースへ戻って来た岩殿は、ショルダーバッグの中から1枚の紙を取り出し、テーブルの上に置いた。岩殿が在学中に使われていたサークルの連絡網である。昨夜、俊作から戸川との関係がわかるモノを持参するよう言われていたのでバッグの中に入れておいたのであった。

岩殿「いました。戸川と親しくしていた人間が。いやあ、私としたことが情けない。みんな彼と距離をおいているものだとばかり……」

俊作「で、誰なんです？」

恥ずかしそうに頭をかく岩殿を制して、俊作が尋ねる。

岩殿「あ、この人です」

岩殿は、リストのいちばん上に記載されている人物を指差した。

俊作「……え？」

俊作が岩殿と面会している頃、株式会社マグナムコンピュータ営業部では、伸子がパソコンに向かっていた。

いつもと違って、オフィスは静まり返っている。

土曜ということで、伸子の服装もいつもよりは少しだけカジュアル寄りになっている。黒のテラードジャケットの中に白黒のボーダーカットソーを着込み、黒のプリーツスカートを合わせ、足回りを黒のパンツでコーディネートしている。

音無商事とフェニックス・エンターテイメントに関わる社員を抽出

するには、CRM（＝情報システムを利用した顧客管理）を利用するのが最良といえよう。独自の社内CRMシステムがあるので、そこへアクセスする。そこから「音無商事」ないしは「フェニックス・エンターテイメント」で検索をかける。ちなみに、第30話で俊作が湊刑事に「発注書は社内の専用アプリケーションから作っている」と説明しているが、実はこのCRMシステムのことを言っていたのである。

CRMシステムは、訪問履歴のある顧客に関しては、そのやり取りが全て記録されている。担当者や商談の内容も一発でわかるようになっていいる。誰かが訪問していれば、ヒットするのは当然のことなのだ。

伸子は左クリックを繰り返し、音無商事とフェニックス・エンターテイメントを検索した。

伸子「ええ……？」

調べていくうちに、伸子の顔が驚きと若干の動揺で支配されていく。

ほぼ同刻、地下3階。

この地下3階の倉庫は、地下2階よりも薄暗い。

そんな地下3階に、一人の男が、まるで周囲の目を気にするかのように地下倉庫へとやって来た。

その男は、周囲に誰もいないことを確認すると、いちばん奥にあるガラクタの山へ一直線に走っていった。

このガラクタの山は、その名の通り、もう会社内では使う用途のない備品を業者に引き取ってもらうまでの間だけ置いておくスペースだ。

その山の隅っこに、黒い布を被せられた物体がある。
男は、その布を剥いだ。

中から現れたのは、パソコン一式だった。
本体と薄型モニター、キーボードにマウス　通常使用するモノは
全て揃っている。

男はひと呼吸置くと、パソコンを持ち上げようと本体の下に手を入れた。

スーツの袖から腕時計が覗き、ライトの明かりに照らされて銀色に輝く。

と、何者かが背後からその腕時計を掴んだ。

一瞬、男が硬直する。

その後、おそろおそろ背後を振り返った。

純だった。

純「やっと見つけたぜ。あんた、総務部の前岡さんだろ？」

地下3階の照明は、はっきりとパソコンを抱えたままの前岡を照らしていた。

この男は前岡だったのだ。

純「とりあえずそいつを下ろしな」

純は、前岡に一度持ち上げたパソコンを床に下ろさせた。

純「あんただな、金の受け渡し役を任されていたのは」

前岡「か、金？ 何のことだ…？」

前岡は明らかに動揺している。

純「おい、ウソをつくためにならんど。羽村佐知絵から金を受け取り、大成さんと笹倉に渡そうとしてただろうが。しかも、大成さんがオレらを襲おうとした現場にもいた。ネタはあがってんだよ」
前岡「し、知らないッ！」

純は前岡の胸ぐらを掴み、思い切り睨みをきかせた。

純「だからウソつくくんじゃねーつつつてんだよ。そんな珍しい腕時計つけて歩いてりゃ目立つだろうが」

前岡「う……」

前岡はうなだれた。どうやら観念したようだ。

純「金の受け渡し役をやったのは、あんただな？」

前岡「……はい」

力なく、前岡が返答する。純は、掴んでいた手を離れた。

純「そうか。それと、今あんたが持ち運ぼうとしたパソコン、もしかしたらそれは柴田俊作のじゃねーのか？」

前岡「……！」

純「そうなのか？」

前岡「そうです……」

純は、パソコン本体に「十文字」の落書き跡を確認した。間違いない。俊作が使っていたパソコンだ。

純「あんた、俊作のパソコンを隠したのか？」

前岡「はい」

前岡が俊作のパソコンを隠した？

どつりで伸子が地下2階の倉庫に来た時は見当たらなかったはずだ。しかし、事前に純はそれに気づいていたようだ。何故なら……

前岡「でも、どうしてわかったんです？」

純「簡単だ。高根伸子から、既に俊作のパソコンが業者に持って行かれたって聞いたもんだから、その業者へ問い合わせたんだ。そしてパソコンなど引き取っちゃいないって言われて、それで怪しい

と思ったんだよ。昨日彼女と地下倉庫へ来たのは前岡さん、あんだったからな」

前岡「そうだったんですか……」

純「浅はかだったな。土曜日なら誰にもばれねーとでも思ったか」

前岡「……」

純「だがよお、一つわかんねーことがある。調べたところ、あんたは“笹倉派”じゃねえ。それなのに、どうして今回の一件に関わってんだ？」

純は、業者への問い合わせをすると同時に、米本に依頼し、人事データベースを使って前岡の基本情報を調べておいたのだ。

前岡「それは……」

純「話してくれ、前岡さん。これには俊作の人生がかかってんだ」

前岡「……わかりました。話します」

午後4時、池袋。

バイティング・ダイバー株式会社の応接室にて、伸子は俊作立ち会いのもと、元先輩で現在はここの社長である石原と久方ぶりの対面を果たした。

上座に座る石原。

下座に座る伸子、そして立会人の俊作。今回はラフな恰好で来てくれと言われたので、ライトグレーのロングTシャツの上に黒のシングルレザースライダーズジャケットを羽織り、ボトムスはビンテージジーンズ、足回りはレッドウィングのダークブラウンが渋いエンジニアブーツできめている。

伸子も石原も、やはりどこかぎこちない感じだ。

その緊張を破るかのように、伸子が口を開く。

伸子「石原さん、お久し振りです」

石原「……久し振り。来てくれてありがとう」

伸子「お元気そうで何よりです。それよりも、まさか会社を立ち上げてたなんて知りませんでしたよ」

石原「まあ、たいして儲かってないけどね」

石原は照れながら頭をかいた。

伸子「そういえば、昔からパソコンは詳しかったですもんね。あたしもパソコンで困った時はいつも助けてもらってましたからね」

石原「そうだったね。高根さんは初めの頃、Excelがうまく使えなくて困ってたっけ」

伸子「そうでした。あの頃はいっぱい迷惑かけちゃったなあ」

石原「いや、いいんだよ。あの頃はまだ新人だったんだから」

しばらく昔話で盛り上がる伸子と石原。少しずつ固さもとれ始めていた。

しかし、そろそろ本題を切り出さなければならぬ。

俊作「ところで石原さん、今日彼女に話したいことというのは？」

石原「ああ、そうでしたね。今日は高根さんにお話ししたいことがあるんです」

改めて、伸子は姿勢を正した。

石原も、改めて伸子に向き直る。

石原「話す前に、まず謝らせてくれ。オレはキミの教育係としてふさわしくなかったようだ。キミに好意を持ってしまっただけ……」

伸子「いえ、そんなことはないですよ。石原さんにはお世話になりましたし、恋愛対象として見られていたこともなんとなく気づいてはいましたけど、特に不快じゃありませんでしたし」

石原「でもオレは、デートに誘うようなメールを何通も送って、キミを追いつめてしまった」

伸子「追いつめた？ あたし、全然追いつめられてませんでしたよ」

？」

少し話が食い違っているようだ。

石原「え？　だけど、メールは来てたんだよね？」

伸子「ええ。自宅のパソコンから送ってきたのは不思議でしたけど」

石原「おかしい。あの時オレが伝え聞いた話と違うぞ……」

伸子「伝え聞いた話？」

石原「ああ。好意がばれて、なおかつ誘いのメールを送りまくったせいで高根さんが気持ち悪がっている。業務にも支障をきたすからこれ以上彼女に接近しないほうがいい。彼女も距離をおき始めている。そう聞いたんだ。自分の好意がそこまで彼女を追いつめたのかと、オレは自責の念に駆られた」

伸子「じゃ、じゃあ、会社を辞めたのもそれが理由だったとか……？」

石原「そうだよ。オレにはキミを教育する資格はないと思ったし、

“これ以上会社には辛いだろう” って言われたから……」

伸子「そんな……もつたいたいじゃないですか！　現にあたしは気持ち悪いなんて思ってなかったですし、距離をおいてたわけでもありません！　そんなの思い違いですよ！　せめてその時あたしに確認してくれば、こんなことには……」

思わず伸子の口調も熱くなる。

石原「ごめん…あの時はああするしかないと思ってた。それは反省してる。でも、これだけは知って欲しい。これを伝えるために、今日柴田さんに頼んでキミをここへ連れて来てもらったんだ」

伸子「え……？」

石原「オレは、誘いのメールなんか、一通も送っちゃいない！」

伸子「……えっ!？」

伸子が、一瞬だけフリーズした。

伸子「メールを送ってない？　ホントですか？」

石原「ああ、ホントだ。初めにメールを送りまくってたって話を聞いた時はわけがわからなかった。しかし、自分じゃ送った覚えがない

のに、キミのケータイにはオレのパソコン用メアドからメールが何通も届いてる。これじゃ認めざるを得ないだろう？ それに、自分はしつこくしたつもりがなくても相手にはしつこいと受け取られる場合だってある。いずれにしてもオレは会社を去るべきだったのかもしれない」

伸子「……」

伸子が悲しそうな顔をする。

俊作「そのメールはちよつと妙ですね、石原さん」

俊作が口を挟む。

石原「柴田さんもそう思われますか？」

俊作「ええ。好きな人を誘うのに、わざわざパソコンからケータイにメールするのは不自然でしょう。自分のケータイから送ればいいじゃないですか」

石原「そうなんです。私もそこは疑問だったんです」

俊作「もしかしたら、そこで気づかれたんじゃないですか？ “エクストラ・マジシャン”の存在に」

石原「はい。鋭いですね。送った覚えのないメールが相手に届いてるとというのが気味悪かったもんでね。それでこの会社を立ち上げ、あのソフトの撲滅に乗り出したんですよ」

俊作「なるほど。それで、ご自分のパソコンは“エクストラ・マジシャン”に侵入されてたんですか？」

石原「はい。やられてました。ですが、当時の“ハイパー・バイティング”は、侵入元までは特定できなかったため犯人の断定はできませんでした。断定はできなかったけど、なんとなくの心当たりはあります」

伸子「誰なんですか？ あたしも知ってる人ですか？」

石原「ああ。キミたちのよく知ってる人物さ」

俊作「“キミたち”？ ……というと、私もあてはまるんですかね？」

石原「はい。そうです」

伸子「え？ 誰ですか、それ？」

石原「営業部法人営業一課・会田修。彼がやったんじゃないかと思
ってる」

石原の口から、意外な人物の名前が飛び出た。

伸子「あ、会田さん!？」

石原「たぶん。あくまでオレ個人の推測だけどね」

伸子「どうしてそう思うんですか？」

石原「あいつが“メールのせいで高根さんが気持ち悪がってるから接近しないほうがいい”とか“これ以上はい辛いだろう”って言ったんだ」

俊作「それだけですか？」

石原「他にも思い当たるふしはあります。もともとあいつと私は同期だったんですが、以前同期同士で飲んだ時、恋愛の話題になったことがあったんですね。そこでポロッと私が高根さんに好意を持っていると話してしまいました。その時は“じゃあオレが相談にのつてやる!”なんて力強いことを言ってくれたんですが……」

伸子「会田さん、力になってくれなかつたんですか？」

石原「それが、会田は“自分が恋の手助けをしてやってるんだ”っていうような恩着せがましい態度を示すようになって……。 “もっと話しかけなきゃダメだ”とか“メシに誘え”などと、いちいち指図してきて。だけど、いざオレが仕事の合間にコミュニケーションをとろうとすると、“露骨に話しかけて仕事の邪魔をするな”って釘を刺すし、メシに誘おうとすると、“オレが彼女の都合を聞いてやるから勝手に動くな”って言うし。なんか面倒臭いでしょ？」

伸子「何なの、それ……」

俊作「のぶちゃん、会田さんから“石原さんがキミとメシに行きたがってるよ”って言われたことある？」

伸子「いやあ、あつたかな……」

俊作「つーか、のぶちゃんって前から会田さんと関わりがあつたん

だ？」

伸子「うん。会田さんと前岡さんって総務部の先輩とかと何度か飲みに行ったことあったから」

俊作「知らなかった……」

石原「え？ そうなの？ 会田や前岡とかと飲みに行ってたの？」

伸子「はい。誘われたので。そういえば石原さんは前岡さんとも同期なんですよね？」

石原「そうだけど……。会田のヤツ、オレには“露骨に好意を示すな”とか言ってたくせに。自分だけ仲良くなるなんて汚いぞ！」

俊作「……もしかしたら、会田さんってのぶちゃんに気があつたんじやないか？」

伸子「まさか！」

俊作「だってよ、グループとはいえ石原さんに黙って飲みに誘ったりしてるだろ？ 石原さんがのぶちゃんを好きなの知ってて、しかも手助けしてる立場の人間がそんなことすると思うか？ ホントに応援してるんだっいたらできねーぞ」

伸子「そうだけど、じゃあ何でそんなことを……？」

俊作「おそらく、石原さんが邪魔だったんだ。だから石原さんを悪者に仕立て上げて排除することで、表向きは“頼れる先輩”をアピールしたかったんだろ。のぶちゃん自身も何か思い当たることがあるはずだ」

伸子「……石原さんが会社を辞めたちよつと後に当時つき合ってた彼氏と別れたんだけど、その時はよくご飯に誘われてた。でも、うまく予定があわなくて実現しかなかったけど」

俊作「ほら、やっぱり！ あの人のぶちゃんにアプローチするチャンスをうかがってたんだよ！」

石原「会田のヤツ……！」

石原は唸った。

伸子「だけど、それと会田さんが“エクストラ・マジシャン”を使ったこととは関係ないんじゃない……」

俊作「いや、ないとも言い切れない」
伸子「え？」

俊作は、バッグから一枚の紙を取り出すと、テーブルの上に置いた。岩殿が持ってきたサークルの連絡網をコピーしたものだ。

俊作「このリストをよく見てみな」

伸子は、連絡網をまじまじと見つめた。

伸子「“IT研究会 連絡網”…？ …あつ、会田さん！ それに戸川って弁護士も…！」

そう、前回（第57話）で俊作が目にした人物とは、何を隠そう会田のことだった。会田と戸川は同じ大学の同級生だったのだ。

俊作「この“IT研究会”ってのは、いわばパソコンオタクの集まりらしい。そのサークルにいる人間なら、アンダーグラウンドなソフトの存在も知ってるだろう。会田さんも戸川って弁護士もそのメンバーだった。それだったら、“エクストラ・マジシャン”を知っててもおかしくない。もしかしたら、この2人のうちのどっちかがソフトを作ったのかもな」

伸子「…あつ！」

俊作「どうした？」

伸子「音無商事とフェニックス・エンターテイメントを調べたの！

ちよつとこれを見てくれる？」

伸子も、バッグの中からA4サイズ用の紙を2枚取り出し、俊作に渡した。

俊作「こ、これは…！」

伸子「音無商事、フェニックス・エンターテイメント、どっちも会田さんの担当顧客なの。それに、音無商事の面会者は石上三年さんで、フェニックス・エンターテイメントは桶田吹男さん。最近“エ

クストラ・マジシャン”絡みで警察に捕まった人たちよ。そして、柴ちゃんのテリトリーは丸ごと会田さんに引き継いだから、白鷺堂も会田さんの担当になるでしょ？ 思い切り怪しいよね……”

俊作「ああ……」

石原「高根さん、それ、何の話？」

伸子「最近、“エクストラ・マジシャン”絡みの事件が3件ほど起きて、犯人がみんなウチの顧客だったんです。しかも担当は会田さんで……”

石原「そんな……何てことだ！ またあのソフトの被害者が出てしまったのか！」

伸子「はい……」

石原「許せん……」

俊作「ですが石原さん、あなたの読みは間違いではなかったことがこれで証明されましたね。会田さんは怪しいと思います。ここは我々に任せてください。石原さんの無実を晴らすためにも、絶対犯人を叩き潰してやりますよ」

伸子「キミの無実もでしょ、柴ちゃん」

俊作「わかってるよ」

石原「柴田さん……高根さん……」

石原は目頭が熱くなるのを感じていた。

石原「ありがとうございます。絶対やつつけてください！」

俊作「わかりました！ 約束しましょう！」

固い握手を交わす俊作と石原。

すると、石原は唐突にこんなことを言い出す。

石原「よかった……。これで心おきなく結婚できる」

俊作「え？」

伸子「結婚？」

石原「あ、私、来年の春に結婚することになりました。今、準備中なんですよ」

伸子「そうなんですか？」

まさかの結婚報告に、思わず素っ頓狂な声色になる伸子。

俊作「それはそれは、おめでとうございます」

石原「これも運命かもしれません。柴田さん、感謝します」

俊作「あ、いやあ、どうも」

俊作も、なんだか複雑な照れ臭さを感じていた。

バイディング・ダイバーを後にし、ビルの階段を降りながら伸子がつぶやく。

伸子「石原さん、結婚するんだあ……」

俊作「まあ、よかったじゃねーか。あの人も幸せいっぱいだったことだ」

伸子「ふふっ、そうだね」

ビルを出て明治通りと川越街道がぶつかる交差点に差し掛かったが、信号が赤色を灯しているので先へ進めない。

伸子「ねえ……会田さんなんだけど、あたし、正直信じられない。まさか裏で石原さんにあんなことやってたなんて……」

俊作「驚いてるヒマはねーかしんねーぜ。裏でもっとえげつないことやってる可能性が高けーんだからよ」

伸子「やっぱ……怪しいよね？」

やや不安そうに、俊作の顔を覗き込みながら伸子が言う。

俊作「ああ、怪しい」

俊作は、伸子に視線を合わさず真つすぐ前を見ながら答えた。

俊作「オレは、会田さんが“エクストラ・マジシャン”を作ったんじゃないかって睨んでる」

伸子「何で？」

俊作「今朝、戸川と同じ大学出身の同級生が事務所に来てくれたんだ。その人の話だと、戸川弁護士はサークル内で会田さんと特に仲

が良かったらしい。そしてヤツは大学在学中に司法試験をパスしたエリートで、卒業後すぐにそこそこの名のある法律事務所就職したんだけど、ある案件で依頼者とトラブルになったのが原因でその事務所を辞めちまったらしい。それから約1年後、突然独立して自分の法律事務所を設立した」

伸子「独立？ そんなに貯金あつたの？」

俊作「いや、資金は会田さんが援助したらしいんだ。当時、会田さんや戸川は20代中盤。独立するための金なんて、普通に働いてりゃそんな簡単に作れねえ。でも会田さんはその金が用意できたということ、会田さんは何らかの理由で金の蓄えがあつたつてことだ」

伸子「うんうんと頷きながら聞いている。更に俊作は続けた。

俊作「そして、羽村のいたキャバクラに現れた“サム”と名乗る客。こいつは有名企業に勤めるサラリーマンで、パソコンと法律に詳しくあつたつて話だ。そのうえ、副業もやつていて金もかなり持つてるらしい。この“サム”が会田さんだとすると、あの人が“エクストラ・マジシャン”を作つたつて推論が成り立つだろ？」

伸子「えー？ どういうこと？」

俊作「戸川が最初に勤めてた法律事務所を辞めた頃、会田さんはマグナムコンピュータに勤務する傍ら、既に“エクストラ・マジシャン”を作り出し、それを売り捌くことで副収入を得ていた。その金で戸川の独立も援助することができたつてことだよ」

伸子「ああ、なるほど。それだと納得だわ。弁護士が身近にいれば、法律にも詳しくなれそうだもんね。でも、どうして“サム”が会田さんなの？」

俊作「まだわからない？ あいちゅうじや 会田修だから“サム”。学生時代のニツクネームだろうな」

伸子「そうかあ、意外とシンプルだね」

信号が、ようやく青になる。

しかし、俊作と伸子は歩き出すことができなかつた。

突如、黒いセダンが2台、縦一列になつて俊作たちの行く手を阻むように現れ、目の前に急停車した。

そして、ドアが開いたかと思うと、黒いスーツに身を固めた男たちが一斉に飛び出し、俊作と伸子はあつという間に囲まれてしまったのだ。

俊作は、とつさに伸子を庇う形で、彼女の前に立った。

俊作の真正面にいた目つきの悪い男が、何やら手帳のようなモノを懐から取り出した。

一目でわかる。それは警察手帳だつた。この男たちは刑事だ。そして、俊作の真正面にいる男は小堤こつみという名前らしい。そのわりには大柄な体格だ。

小堤「警察の者です。柴田さん、あなたに業務上過失傷害の疑いがかけられています。これから我々と同行願えますか？」

俊作「断る。任意なんだろう？」

小堤「待つてください。すぐに終わりますから」

そう言つて小堤は俊作の肩を掴んだ。

俊作「離せよ。オレは忙しいんだ」

小堤「後ろにいらつしゃるのは高根伸子さんですね？ あなたにも

同行してもらいますよ」

伸子「えっ？」

俊作「何故だ？」

小堤「あなたに名誉を傷つけられたと訴える女性がいるんですよ。だからいろいろ事情を聴取しなければなりません」

俊作「なっ、何だと！ 彼女は何もしちゃいねーぞ！」

小堤「連行しろ」

残酷にも小堤は周りの刑事に伸子から連行するよう命じた。一瞬にして両脇をガツチリ固められる伸子。

伸子「きゃあつ！」

俊作「やめろ！ 彼女は関係ねえ！」

俊作は小堤に掴まれた肩を振りほどこうとした。だが、数人がかりで取り押さえられてしまう。

小堤「公務執行妨害で逮捕しますよ」

それを言われると何もできなくなってしまう。

もはや、俊作と伸子は警察に連行されるしかなかったのであった。

その頃鴨川ヒナコは、この日は創の店が休みだったので創の家に行った。

リビングルームで何気なくテレビを観ているヒナコ。創は、業者との商談があるために外出している。あと1時間は帰って来ない。

突然、ヒナコの携帯電話が鳴る。

メールではなく、電話だ。

ディスプレイを見ると、「公衆電話」と表示されている。誰だろう。ヒナコはとりあえず出てみることにした。

ヒナコ「…もしもし？」

？『あ、ヒナコちゃん？ オレだよ！』

ヒナコ「え…？ あ、もしかして、秋池さん？」

？『そうだよ、秋池だよ！』

なんと、秋池から電話がかかってきたのだ。思わずヒナコは耳を疑っていた。

ヒナコ「あ、秋池さん？ どうしたの？」

秋池『今まで黒野たちに捕まっていたんだけど、隙を見て逃げ出して来た。ケータイもヤツらに取られてしまった。キミの店へ行こうと思ったけど、渋谷や原宿は危ないと思って、池袋まで逃げて来たよ』

ヒナコ「池袋？ ちょうどいいわ。実はあたし、家を空けてるの。今は板橋にある、柴田さんのお友達のウチにかくまってもらってるの」

秋池「柴田……？」

ヒナコ「ほら、こないだあたしと一緒にいた人！」

秋池「ああ、あの人が」

ヒナコ「秋池さんも、事情を話してかくまってもらったら？ 連中もまさか板橋まで逃げて来るとは思わないよ！」

秋池「うむ…そうだな」

ヒナコ「じゃあ、そのまま東武東上線に乗って大山まで来て！ あたしも駅まで迎えに行くわ！」

それから1時間後に帰宅した創は、ヒナコが秋池を迎えに大山駅まで行ったことを母親から聞かされた。

しかし、ヒナコはまだ戻って来ていない。

黒木家から大山駅まではそれほど遠くない。ヒナコが家を出た時間から推測して、まだ秋池を連れて黒木家まで戻って来ていないというのはおかしい。

創（鴨川さんに何かあったな……！）

創は家を飛び出した。

とりあえずは大山駅へ行ってみる。だが、ヒナコと秋池らしき人物は見当たらない。

次に、ヒナコの携帯電話を呼び出してみる。

……繋がらない。

「お客様がおかけになった番号は……」という音声案内が流れてく

るだけだ。

もしかしたら、追手に気づいてどこかに隠れているのかもしれない。
創は大山駅周辺を捜し回った。

だが、やはりヒナコと秋池は見つからない。

まずいぞ。

創は、このことを知らせるため、湊に連絡を入れた。

午後8時過ぎ、警視庁豊島東署。

俊作と伸子は、それぞれ個別に取り調べを受けていた。

俊作は第一取調室で取り調べを受けている。
担当刑事は、あの小堤だ。

小堤「あなたは、ご自分の上司である笹倉さんとは日頃から折り合いが悪かった。会社を解雇されたことを根に持って笹倉さんを陥れようと画策し、ついには笹倉さんを事故に見せかけ負傷させた
そうですね？」

俊作「違います。事実ではありません」

俊作はきっぱりと否定した。

小堤「同期の仲間たちや笹倉さんの上司でもある藤堂部長をも利用し、ご自分が有利になるよう証拠を捏造した」

俊作「いいえ。証拠を捏造したのは連中の方です」

小堤「本当は笹倉さんに対する殺意があった」

俊作「…あのよお、いい加減にしてくんねーか？ さっきから何回言わせんだよ。事故に見せかけてケガさせたとか、自分で証拠を捏造したとか、全部ウソだつて言つてんじやねーか！」

小堤「いいですか柴田さん？ あなたが早く罪を認めればいいんですよ」

俊作「ウソを認めてどうする」

小堤「確かな筋からのタレコミがあつたんです。ほぼ事実間違いないと踏んでいます」

俊作「ケツ、どんな筋だか知らねーがよお、そのタレコミとやらがウソだつたら覚悟しとけよ！」

小堤「覚悟？ 何を言ってるんですか？ あなたが罪を犯している可能性は極めて高いんですよ」
俊作「フン！ おめーらが何て言おうがオレはシロだ！」
俊作は腕組みをすると、そっぽを向いてしまった。

第二取調室でも、伸子に対する取り調べが行われていた。

刑事「羽村佐知絵さんとは普段から仲が悪かったんですか？」

小堤以上に大柄で太った中年の男性刑事が伸子の担当だ。

伸子「…いえ、今回の事件が起きるまでは特に仲は悪くありませんでした」

伸子はうつむきながら、無気力な声色で返答した。長時間に渡る取り調べで散々悪者扱いされ、そのたびに否定し続けたので気力をかなり消耗していたのだ。

刑事「羽村さんはあなたに名誉を傷つけられたとお怒りですよ」

伸子「そんなことしてません」

刑事「大勢のしている前で、ものすごい剣幕で羽村さんに対してあることないこと言ったそうじゃないですか。どうしてそんなことを？」

伸子「そんなこと言ってません」

刑事「じゃあ、羽村さんがウソをついているとでも？」

伸子は力を振り絞るかのように顔を上げ、刑事を睨みつけた。

伸子「いい加減に信じてください！ あたしは無実です！ どうしてここまで犯人扱いされなきゃいけないんですか！ ただ、柴田くんの無実を晴らそうと協力してるだけなのに……」

伸子の目に涙が浮かび始めた。いくら訴えても通じないもどかさや悔しさが限界を超えたのだろう。そのうちに伸子は再びうつむき、今度は両手で顔を覆ってしまった。そして、その両手の下から、彼女のすすり泣く声が漏れてきた。

刑事「……」

さすがに担当刑事も、これには困り顔だ。

突然、第二取調室のドアが開いた。

伸子も、取り調べを担当した刑事も一斉にドアの方を注視した。

湊だ。

なんと、湊刑事が豊島東署に姿を現したのだ。

湊「いた！」

湊は伸子を見つけるなり、そう大声で叫んだ。

刑事「何です、いきなり？ 今取り調べ中ですよ！」

刑事が立ち上がり、湊の行こうとする道を塞ぐ。

湊「本庁捜査一課の湊だ。彼女の身柄を引き渡してもらおう」

刑事「はあ？」

湊「何の容疑で引つ張って来たか知らんが、その子は何にもしちやいねーぜ」

刑事「いや、確かな筋からのタレコミでここへ連行したんですよ。引き渡すわけには……」

湊「所轄がでしゃばるんじゃないやねえ！ わかつたらそこをどけえ！」

湊が一喝すると刑事は立ちすくんでしまった。その間に伸子を取調室から連れ出す湊。

部屋の外には、既に身柄を解放された俊作がいた。

俊作「のぶちゃん！ 大丈夫だったか？」

次の瞬間、伸子は無意識的に俊作の胸に飛び込んでいった。

俊作「お、おい……」

俊作の胸で涙を流す伸子。すすり泣きからむせび泣きに変わりつつある。

伸子「…柴ちゃん、ウチらのやってることは間違ってるの？ どうしてこんな目に遭わなきゃいけないの？」

俊作「……」

警察の取り調べを受けたことがなかった伸子にとっては、相当辛い

モノだったのだろう。それを悟った俊作は、伸子の頭を優しく撫でた。

俊作「のぶちゃん……よく頑張った。辛かったよな。でもオレらは何も間違っちゃいねえ。本来ならこんな目に遭っちゃいけねーんだ」
湊「おそらく、お前らが連行されたのは戸川弁護士との圧力だろうな。お前らをブタ箱にぶち込んで、その間に全てをうやむやにしちまおうってハラだったんだ。たぶんな」

俊作「……」

俊作は、取調室のドア付近で立ち尽くしている小堤たちをなめるように睨む。

俊作「てめーら……無実の人間にこんな思いをさせやがって！ 覚悟はできてんだろうな！」

ドスのきいた咆哮が建物全体に響く。小堤たちは緊張し、思わず身構えた。

湊「おい柴田、今は相手が違うだろ。こいつらだってホントの事情は知らないんだ。それより急ぐぞ！」

湊が、俊作に急いで外へ出るよう促す。俊作は殺気を残すと、伸子の手を引いてその場を後にした。

湊「邪魔したな」

湊もその後を追う。

俊作「湊さん、急ぐって、どこへ急ぐんすか？」

後ろから追いついてきた湊に、俊作が尋ねる。

湊「ロック・ボトムのアジトだよ！ 鴨川ヒナコがヤツらに捕まっただかもしれん！」

俊作「えっ！？ 彼女ならロッキーの所にいたはずじゃなかったんすか！？」

湊「さつきその黒木から連絡があつてな。どうやら自分が家を空けてる間に秋池を迎えに行ったらしいんだが、あまりにも帰りが遅いから捜しに行ったら見当たらなかったんだそうだ」

俊作「そうか、秋池は隙を見て逃げ出した。身を隠すために鴨川さんの所へ行こうとしたんだな。だが、その途中でヤツらに見つかっちまって……」

湊「しかし、さつき神宮前署に秋池だけが駆け込んで来た。傷だらけでな」

俊作「えっ？ どうやって…？」

湊「一度は2人とモアジトへ連れて行かれたらしい。だけど、秋池はアジトに、ヤツらも知らない抜け穴があることに気づいていた。初めはその穴から2人で脱出しようとしたようだ。だが、一度秋池には逃げられてるからヤツらも見張りは徹底するようになって、隙について逃げるって方法は不可能に近かったらしい。そこで鴨川さんが自ら囿になって、秋池だけを逃がしたんだ」

俊作「鴨川さんは、何でわざわざ危険を冒してまで秋池だけを……」

湊「わかんねーか？ 秋池がこの事件の裏事情を知ってるからだよ。せめて秋池だけでも逃げて、柴田に事実を伝えて欲しかったんだ」

俊作「何てことを……！」

伸子「ヒナコさん……」

湊「そういうわけだ。さつさと行かないと彼女自身も危険だぜ！」

その時、ちょうど豊島東署の玄関を出た。

目の前に、湊の乗って来た覆面パトカーが停まっている。

俊作「む？」

俊作が、覆面パトカーの後部座席に浮かぶ人影に気づいた。

俊作「湊さん、車に誰かいますよ？」

湊「ああ、お前らの上司も連れて来た」

俊作「上司？ ……まさか！」

その「まさか」だった。

後部座席には藤堂が座っていたのだ。

伸子「ぶ、部長！」

藤堂「柴田、高根さん、大変な目に遭ったな。オレも一緒に行かせてもらうよ」

アイボリー色をした、薄手のVネックセーターの下にホワイトのシャツを着込み、茶色のコーデュロイパンツを合わせた藤堂の私服は、シンプルだがどこか品のある感じがした。

湊「よし！ シートベルトは締めたか？」

湊がアクセルペダルを勢いよく踏み込んだ。

車は、あっという間に明治通りへ躍り出る。湊の視界は、既に学習院大学を前方に捉え始めていた。

俊作「それにしても……ど、どうして部長まで……」

湊「お前の無実を証明するには証人が必要だろ？ 黒幕の正体はつかめたが、お前らだけだと、いくら有力な証拠を提示したところで会社側に信じてもらえない可能性がある。だが管理職に就いた人間が証人になれば、信憑性も増す。だからついて来てもらった」

俊作「藤堂さんが証人になる必要があるってことは……まさか黒幕は……！」

湊「会田修。お前らの先輩だ」

藤堂「何だって？」

俊作「そうか、やつぱり」

湊「なんだ、気づいてたのか」

俊作「はい」

俊作は、岩殿のことや“サム”のこと、そして伸子の調査したことを話した。

湊「なるほど、会田と戸川が大学時代の同級生で、それにIT系のサークルに入っていたとはな。じゃあ、ソフトを作る知識があっても不思議じゃない。しかもキャバクラで副収入があることを公表し

てりやなおさらクサイな」

俊作「それだけじゃないですよ。会田さんは、“エクストラ・マジシャン”を使つてかつての同僚　　つまりのぶちゃんの元先輩を退職に追いやつた疑いがあります」

湊「何？　それ、ホントか？」

俊作「はい。その人はのぶちゃんに片想いをしてました。でも、会田さんがしゃりり出て来て、“エクストラ・マジシャン”を悪用し、その人がのぶちゃんにまるで付きまとつてるかのように仕立て上げたんです。それで気を病んだ元先輩は……」

湊「何て野郎だ！」

藤堂「どうということなんだ？　まさか会田がそんなことをするなんて……」

湊「犯行に至つた動機まではわかりませんがね、ちゃんと状況証拠は出て来てるんですよ。まずは秋池の証言。彼は今回の事件が全て会田の計画だったこと、“エクストラ・マジシャン”を作つたのも会田だったことを知つたために拉致・監禁されたんです。それだけじゃない。秋池はあの日　　つまり柴田が羽村と飲んで帰つた日のこともしっかり記憶していました。羽村は柴田と別れた後、会田や黒野と落ち合つて、急に泥酔状態から回復し、何事もなかったかのような態度で“作戦は成功だ”と報告したそうですよ」

俊作「なるほど、それで会田さんだけ先に帰つたのか。でも、何で秋池があの日のことを？」

湊「…実は、あの写真を撮つたのは秋池だったんだよ」

俊作「秋池が？」

湊「無理矢理やらされたそうさ。彼は黒野に表立つて逆らえなかつたんだ。自分のクラブを営業停止にされてるからな」

俊作「その話ならチラツと聞きましたよ。ただ営業停止までの詳しい経緯はわかんないんですけど」

湊「…秋池のクラブに黒野たちが現れ、好き勝手暴れて迷惑かけたもんだから、見かねた秋池がそれを注意したんだ。それを根に持つ

た黒野は秋池を“反逆者”として戸川と結託し、“クラブで出された酒を飲んだロック・ボトムメンバーが食中毒になった”と云いがかりをつけた。保健所はちゃんと事実を確認しないまま、秋池のクラブを営業停止処分としてしまったって話だ」

俊作「メチャクチャやりやがるな、あの野郎め」

湊「だけど、秋池は完全に服従したわけじゃなかったんだぜ」

俊作「？　どういうことです？」

湊「昨日聞き込みをしたラブホあったら？　あの後公安に問い合わせたらよ、案の定3ヶ月も前に廃業してやがったのよ。で、秋池は写真の背景にわざとあそこを選んだんだ。あのホテルが廃業してるって知ってたな」

伸子「何でわざわざそんなことを？　ウソの証拠だつてばれたら何されるかわからないのに」

湊「秋池は柴田に“あの写真が捏造された証拠で、いつか真実を暴いて欲しい”という無言のメッセージを伝えたかったんだって」

俊作「無言のメッセージ……」

湊「写真の背景が廃業したホテルだと知った連中は大慌てで偽装に取りかかったそうさ。あの防犯ビデオも、よく解析したら柴田とよく似た別人だった」

俊作「まさに悪あがきですね」

伸子「だけど、保健所もいい加減ですね。ちゃんと調べれば秋池さんって人の店も営業停止なんかしなくてもよかったかもしれないのに」

湊「それは、戸川が“エクストラ・マジシャン”を使って保健所上層部のプライベートに侵入し、弱みを握って黙らせたのさ。今回と同じようにな」

伸子「今回と同じように？」

湊「戸川は“エクストラ・マジシャン”を使って本庁刑事部長の不祥事を知った。そしてそれをネタに警察を脅し、自分たちに口出しをさせないようにした」

俊作「何が目的で…？」

湊「黒野たちを街で好き勝手暴れさせるためだって。あいつら、S E Tで働く傍ら戸川の事務所でバイトもしてたらしいぜ。だから、ロック・ボトム誰かが警察に連行されるとすぐにすっ飛んできたし、柴田たちも簡単に引つ張って来ることができたんだ」

俊作「そうか、前にクラブで羽村たちにバイトがどうとか言ってたのはそれか。そのバイトの内容ってのは、秋池の店に言いがかりをつけたり、黒野をウチの会社で暴れさせたり　　そういうた実力行使的な仕事のことなんですかね？」

湊「どうやらそうみてーだぜ」

俊作「じゃあ、前にオレが神宮前署で戸川に会ったのは何だったんすか？　あの時はロック・ボトムの連中なんかいやしなかった」

湊「あれは単にロック・ボトムの誰かがケンカに巻き込まれたって聞いて、ヤツが勝手に勘違いしただけの話らしい」

俊作「なんだ、そうだったんすか」

湊「だが、戸川が警察を脅したのには“黒野たちを好きに暴れさせる”意外にもう一つ理由があるんだ。それは、今回の計画の下準備だ。どちらかといえばこっちの理由がメインらしい。会田は警察にばれた時のことも考えてたんだな」

俊作「用意周到っすね」

湊「ああ。だが、もうその手は通じねーけどな。刑事部長の不祥事はマスコミに密告したし、下足痕やあの車の鑑定結果からも会田の犯行は明白だ」

俊作「結果出たんすか？　早いつすね」

湊「ああ。会田はいつも朝9時15分頃にトイレへ行くから特定がしやすかったよ。見事に秋池のマンションで採取された下足痕と会社のトイレで採取した下足痕が一致した。ヤツの場合、ビジネスシューズでも日本国内じゃなかなか売ってない高級な靴を履いてたつても早期特定の一因だったけどな」

俊作「車のほうは？」

湊「車内に会田の指紋はなかったが、ボディにはいくらかあった。それとお前、あの時小さなボタンを見つけたろ？ あれ、会田のスーツのジャケットの袖についてたボタンだったことがわかったぜ」
俊作「ジャケットの袖？」

湊「ああ。ボタンにくつついてた糸から繊維を分析して、スーツのメーカーを割り出してたらそこへ行き着いたんだ。心当たりないか？」

俊作「…そういうば、秋池のマンションで会田さんに会った時（第41話参照）、右の袖のボタンが一つなくなってた！」

湊「お手柄だったな、柴田！」

俊作「いやいや、気づいたのは純の方ですよ」

湊「…それから、あの車から身元不明の指紋が出てな。ずっとわからないままだったんだが、鳴海の協力でその身元がわかった」

俊作「身元不明…いったい誰だったんです？ オレも知ってる人ですか？」

湊「マグナムコンピュータの前岡って知ってるか？」

俊作「前岡……？」

伸子「え？ 前岡さん？」

サイレンを鳴らし、明治通りを渋谷方面へ影を縫うように突き進む覆面パトカー。

もうすぐ東京メトロ副都心線・西早稲田駅の入口が見えてくる頃だ。

先刻、神宮前署に駆け込んできた秋池の証言や純の報告を俊作たちに伝える湊。その純からの報告の中で、総務部時代の伸子の先輩だった前岡の名前が出て来たのだ。

伸子「前岡さんが、どうかしたんですか？」

湊「結果から言うと、前岡って男は今回の事件で金の受け渡しを任されていたらしい」

俊作「金の受け渡し……あの腕時計の男か！ 確かのおぶちゃんが総務にいた頃の先輩で、会田さんと同期だっていう……」

伸子「お金の受け渡して、どういうことですか？」

湊「今回の事件で、首謀者の会田はいろんな人間を動かした。協力者には報酬を払うと約束していたそうだ。その報酬の受け渡し役が前岡だったというわけだ」

俊作「協力者の中には笹倉もいたってことか」

湊「ところで、のおぶちゃん」

伸子「はい？」

俊作「待った。何で湊さんまで“のおぶちゃん”って気易く呼ぶんすか！」

湊「細かいことは気にすんなよ。のおぶちゃん、鳴海から聞いたけど、キミは昨日、前岡と柴田のパソコンを捜しに行ったそうだな。“エクストラ・マジシャン”の割り出しをするために」

伸子「はい。ですが、どこにも見当たりませんでした。後で前岡さんから“既に業者が引き取った”と連絡をもらいました」

湊「そうか。キミはそのことを鳴海に伝えただよね？」

伸子「はい。そうですけど……」

湊「実はな、あれは前岡のついたウソだったんだ」

伸子「えっ？」

湊「ヤツは、柴田のパソコンを前もって地下3階に隠しておいたんだ。のぶちゃんからの報告を受けた鳴海は、パソコンを返してもらおうと業者に問い合わせた。しかし業者は“パソコンは引き取っていない”と言った。おかしいと思った鳴海は今日の午前中に柴田のパソコンを捜索しに行ったところ、地下3階で前岡にバッタリと遭遇したそうだ。そこでヤツを問い詰め、前岡は関与を認めたってわけ。そして同時に鳴海は柴田のパソコンについた前岡の指紋を採取し、オレの所へ持ってきてくれた。そのおかげで身元不明の指紋が明らかになったんだがな」

藤堂「しかし刑事さん、ちよつと妙じゃないですか？ どうして柴田のパソコンだけが隠されるんです？ 私や、人事部にいる米本くんのパソコンもあのソフトに侵入されていた。条件が同じなら、わざわざ隠す必要はないでしょう？」

湊「柴田のパソコンとあなたがたのパソコンとは、明らかに違う箇所があるんです」

藤堂「明らかに違う箇所？」

湊「ええ。それは、パソコンを覗いた人物です」

藤堂「え？」

湊「あなたや人事部の米本くんのパソコンには笹倉が侵入していた。柴田のパソコンにも笹倉は侵入していましたが、ヤツ以外にも侵入者がいたんです」

俊作「……！ 湊さん、それってもしかして……！！」

湊「会田だ。ヤツもあのソフトを使ってお前のパソコンに侵入してたんだよ」

俊作「……！！」

伸子「ウソ……」

藤堂「会田のヤツ、何てことを！」

湊「…何故ヤツがそんなことをしたのかまではわからん。だが、会田が柴田のパソコンを遠くから覗いてたのは事実だ」

俊作「ちっ……。湊さん、急ぎましよう！ これ以上ヤツらに好き勝手させたくねえ！」

湊「よーし！ そんじゃあ行くか！ 佐藤が鳴海と黒木を連れて既に現場へ行ってる。あいつらを待たすわけにもいかねーしな！」

俊作「え？ 純たちも向こうへ行ってるんすか？」

湊「おう。外からヤツらの様子を探らせてる」

俊作「そうか……」

湊「どうした？」

俊作「湊さん、オレに考えがあります。あいつらを先に潜入させましよう」

湊「なっ、何だと？」

俊作「それと、秋池から秘密の抜け穴の場所は聞いてますか？」

湊「あ、ああ。あのアジトは坂の斜面に建ってるから、裏から回るとちょうど目の前が2階の非常階段になる。そこを3階まで上がると、壁に秋池が監禁されてた部屋へと繋がる穴が開いてるそうだ」

俊作「よし、それらを使いましょう」

湊「お前、いったい何を考えてるんだ？」

場面は変わり、ここは道玄坂にあるロック・ボトムのアジト。

3階の、秋池が監禁されていた部屋で椅子に座らされ、ロープで縛りつけられているヒナコ。

そして、それに向かい合う形で、使い古しの革製ソファーにどかと座り込み、ヒナコを睨む佐知絵と戸川、そして会田。

佐知絵はいわゆるギャル系ファッションに身を包み、戸川は黒のブルゾンに黒のパンツでまとめている。そして会田は黒のレザーテー

ラードジャケットに黒のレザーパンツといった、レザーアイテムで身を固めている。

そして、黒野や瀬高、その他の手下たちがヒナコを囲むようにして立っている。手下の中には、あのヒップホップ男もいた。ロック・ボトムは、ざっと10人ほどのメンバーが部屋の中にいた。下のフロアには6〜7人ほどのメンバーがタバコを吸いながらダラダラとだべっている。

黒野「…おい、秋池はどこへ行った？」

ヒナコ「……」

黒野「知ってるんだろ？」

ヒナコ「……」

黒野「言えよ」

ヒナコ「……」

黒野「オレの言うことがわかんねーのか！」

15人は余裕で入るほど広い部屋に、黒野の怒号が鳴り響く。しかし、ヒナコはそれでも答えようとしなかった。

しびれを切らした黒野は、ソファから立ちあがり、ドスドスと一歩一歩踏み鳴らしながらヒナコに近づいて行った。

黒野「どうあっても答える気はねーってか」

ヒナコ「……」

ヒナコは、黙秘を続けるどころか黒野と視線すら合わそうともしなかった。

そのような態度が余計に黒野の癪かんに障ったのだらう。黒野がヒナコの髪の毛を力いっぱい掴み、無理矢理顔ごと自分の方へ向けさせた。黒野「お前、オレの怖さを忘れたわけじゃねーよなあ？ オレに逆らうとどうなるか、思い出させてやるうか？」

ヒナコ「うぐ……」

佐知絵「黒野くん、女の子に乱暴しちゃダメよお」

その瞬間、黒野がヒナコの髪の毛をパツと離す。

佐知絵「ヒナコ、あなたが質問に答えないと、思い切り恥ずかしいことしちゃうからね！ イヤだったらちゃんと秋池の行き先をしゃべることよ」

ヒナコ「何考えてるの！？ バカじゃないの！？ そんなことしたって無駄よ！」

佐知絵「あらあ、“バカ”なんて、負け犬のあなたがよくもそんなこと言えるわねえ」

ヒナコ「あら、あたしはあんたに負けたつもりはないわよ？」

戸川「鴨川さん、あなたまだ負けを認めてなかったんですね。ここまで往生際が悪いと、かえって尊敬してしまいますね」

ヒナコ「どうして認めなきゃいけないの？ あたしはもともと無実なのよ！」

会田「関係ねえ。言ったモン勝ちなんだよ、大人の世界ってのは。お前の負けだといったら負けなんだよ」

ヒナコを見据えながら会田が言う。その目には、あの営業マンとしての爽やかさは既に消え失せていた。その代わりに、何ともいえない不気味さが顔を覗かせていたのであった。

会田「柴田のヤツもそうだったけど、どうしてこう物分かりの悪い人間がいるのかね。自分で自分を窮地に立たせてることが理解できてねーんだろうな」

そう言つてほくそ笑む会田。

ヒナコ「…何がおかしいの？」

会田「…いや、こんな滑稽なことはないなと思ってよ」

ヒナコ「どういうこと？」

会田「もう、オレらの勝利は決まっているからだよ。柴田がいくら自分が無実だって証拠を見せようと、あいつの有罪が覆ることはない。オレたちは法律をも支配した。まさに神の力だ！」

ヒナコ「……」

ヒナコは、唇を噛みしめながら会田の高笑いを見ているしかなかった。

が、その高笑いが突然ピタリと止んだ。

会田のこめかみに、何やら鉄のようなごつごつしたモノが押しつけられていたのだ。

それは、拳銃だった。

佐藤刑事が、拳銃を会田のこめかみに突きつけていた。

会田「何のマネだ？」

佐藤「警察だ。そこを動くな」

黒野たちが一斉に身構える。

佐藤「お前ら動くな！ 動くと撃つぞ！」

すかさず、会田が両手をあげてホルドアップの姿勢を示す。

会田「よせ。やめろお前ら」

佐藤「お前も動くなよ、会田修。お前の悪事はもうわかってる。

おとなしく警察まで来てもらおうか」

会田「よく警察がここまで来れたな」

佐藤「警察をなめんなよ。お前らのやることぐらいお見通しなんだ。

みんな逮捕してやる」

会田「そうか、もうお手上げか」

佐藤「そういうことだ」

会田「なあ刑事さん、せめてオレの話を聞いていかないか？」

佐藤「何？」

「ドゥッ」

鈍い音が佐藤の脳内に響いた。

佐藤「あ……」

いつの間にか、戸川が佐藤の背後に回り込んでいた。佐藤は床に落ちていた石で殴られたのだ。

ゴロリと転がるように倒れる佐藤刑事。

戸川「愚かな刑事だ。単身乗り込んで来るとは」

会田「オレを捕まえたところで、こっちは弁護士がいる。無罪放免は確実だ」

黒野「会田さん、こいつどうしましょう?」

会田「そうだなあ、オレたちの恐怖を味わせてやれ。ただし殺すなよ。命までとつちまったらかわいそうだからな」

黒野「へい!」

佐藤「ま…待てよ……」

なんと、佐藤が起きあがった。

黒野「まだそんな元気があるのか!」

黒野が佐藤の顔面を足蹴にする。今度は仰向けに倒れ込む佐藤。

佐藤「ぐふっ……あ…会田、何故だ? 何故こんなことを……」

黒野「うるせえっ!」

黒野が佐藤の顔をもうひと蹴り。

佐藤「な…何故なんだ……? お前は、できる営業マンだって話じゃないか……」

黒野「この野郎……!」

三度蹴りにいこうとする黒野を、会田が制する。

会田「オレができる営業マンだと? 笑わせるな。あんなモン、オレにとつちやガキの遊びと一緒なんだよ」

佐藤「ガキの…遊びだと?」

会田「ああ。オレには容易いモンさ。パソコン関係の商品とか売っ

てても何の刺激にもならん。もっとスリルのあるモノを売らなきゃな」

佐藤「…“エクストラ・マジシャン”か…！」

会田「ほう、さすがは刑事。よくご存じで。あれを作ったのは何を隠そうこのオレだ。ははは」

佐藤「何で、あんな恐ろしいモノを作った？」

会田「あれのどこが恐ろしい？ 素晴らしいじゃないか。他人の行動が読める。こんな快感は今まで味わったことはなかった」

佐藤「そ…そりゃ幸せなことだ。だが、どうやったらそんなソフトを作れるんだ？」

会田「最初は偶然だった。適当にプログラミングして遊んでたらできちゃったんだ。まあ、その瞬間はさすがに恐ろしくなったがな。

しかし、こいつを売れば金になる。オレはそう確信した。他人のプライベートを知りたい人間なんてこの世にはごまんといえるからな。そうやってインターネットを利用して売り始めたのが7年前。オレが会社に入って間もない頃だった。当時はまだ不十分な部分もあったが、それでもよく売れた。その金で戸川の独立も援助できたんだからな」

佐藤「そ…そうか。じゃあ普通の仕事じゃ満足できないかもな。そ…それなら、何で今もマグナムコンピュータにいるんだよ？」

会田「オレの営業先でもあのソフトを必要としている人間がいると思っただのさ。マグナムコンピュータの商品をカムフラージュにすれば、ばれずに売り捌くことができるだろうとオレは考えた。それは当たるには当たったが、大幅に売り上げを伸ばす結果にはならなかった。オレはソフトのバージョンアップを繰り返したり、サイトに工夫を凝らしたりして売上アップに努めた。その甲斐あって“エクストラ・マジシャン”は着実に売り上げを伸ばしていった。そして1年前、オレは強力な販売ルートを手に入れることができた」

佐藤「そ、それが、SET…だったんだな？」

会田「そうだ。笹倉課長の親の会社は倒産寸前で形骸化していた。

こいつを利用しない手はないと思ってな。実は2年ぐらい前から目をつけてたんだが、戸川と笹倉の協力で手に入れることができた。もちろんオレは裏から仕切るんだがな」

佐藤「その、笹倉って男は、前妻と別れる時に戸川が相談にのつたらしいな」

会田「オレが笹倉に紹介したんだ。あの会社を手に入れるためにな。ソフトは売れる。会社は持ち直す。一石二鳥じゃないか」

佐藤「その時に黒野たちがSETに入社しているな」

会田「こいつらの噂は前々から聞いていた。こんなイキのいい連中を放し飼いにしとくのはもつたいないだろ？ いいパートナーになれそうだと思つてた時に、ちょうど黒野が揉め事を起こしたって情報を嗅ぎつけたんだ。そして戸川を介入することによって問題を解決させ、黒野たちをオレたちが引き取った」

黒野「オレは会田さんと戸川さんに感謝してるぜ！ いつもいい仕事させてくれるからよ！」

会田「まあ、これで億万長者も夢じゃなくなつたってわけだ」

佐藤「……な……なるほどな。お前らが儲けてるのはよくわかった。

だ……だが、それと今回の事件と、ど……どう関係がある？ 何故柴田を陥れた？」

会田「“陥れた”だと？ 人聞きの悪い言い方はよしてくれ。別にオレが悪いわけじゃない」

佐藤「どういう意味だ……？」

会田「……例えばだ。大雪が降ると雪かきをするよな？ 何で雪かきなんかしなけりゃならない？ 生活に支障が出るからだろう？ それと一緒に。つまり、柴田は大雪だ」

会田は、不気味なほど誇らしげな笑みを浮かべてみせた。

佐藤「……し……柴田が邪魔だった……ってことか……？」

会田「だから、そういう誤つた見方はやめろつての。支障のあるモノは排除しなきゃいけないだろうが。違うか？」

佐藤「わからない……どうして柴田が……？」

会田「あいつはな、オレがどんなに“エクストラ・マジシャン”で儲けても手に入れることのできなかつたモノを二つ持ってやがったんだ。一つは“客”だ」

佐藤「客？」

会田「あいつはマグナムコンピュータにとっての上客をいくらか担当していた。そのうちの一つに、白鷺堂という広告代理店があつてな。この白鷺堂は、仕事柄いろんな業界に太いパイプを持っている。そこに“エクストラ・マジシャン”を持ち込むことができればマーケットは一気に広がる。オレはそう考えた。その頃から、オレは白鷺堂を我がモノにするため柴田を陰から観察することにした。“エクストラ・マジシャン”を使って柴田のパソコンを覗いたりもした。だが、いくら待っても一向にチャンスは来なかつた。そこで目をつけたのが笹倉だ」

会田は気分がのってきたのか、次から次へと事の経緯を語り続ける。

会田「　　笹倉は社内でも有名な危険人物だが、コネ入社であるために悪さしても会社は簡単に罰則を与えられない。それにヤツは自分の派閥も抱えている。こいつを利用して柴田の客を奪つちまおうとオレは考えたんだ」

佐藤「笹倉派：だな？」

会田「ほう、そこまで知ってるとはな。そうだ、笹倉派だ。まずオレは笹倉に羽村のキャバクラを紹介し、何度か通わせた。次に大成人事部長を抱え込むために、昔営業部で一緒だった笹倉を大成に接近させた。下地作りはできた。そこへ笹倉が営業部へ戻って来るという情報をキャッチした。チャンスだと思った。オレは“エクストラ・マジシャン”を笹倉に与え、柴田の悪評を吹き込んで個人攻撃の対象にさせた。そうしたうえで笹倉に柴田のパソコンを遠隔操作させて白鷺堂向けの発注書をちよいと改ざんした。そしたら見事に責任は柴田一人のモノになり、白鷺堂がオレの手中に飛び込んで来

た。これは気分がよかつたな。しかし、あいつには藤堂部長という大きな後ろ盾がいる。再び白鷺堂の担当が柴田に戻ることは目に見えていた」

佐藤「そうか…それでセクハラ騒動も……」

会田「まあ、そんなところだ。まずオレは羽村に目をつけた。黒野が羽村のいたキャバクラへ出入りしていたことから、羽村の本性は知っていたからな。この女は金のためなら何でもする。すぐさまオレは羽村にこの話を持ちかけた。当然多額の報酬つきでな。しかし、最初は断られた。信用を得られていなかったから、当然といえば当然だ。そこで必要になってくるのが、デモンストレーションだ」

佐藤「デモンストレーション？」

会田「ああ。ちよいと実力を見せてやったのさ。その鴨川って女と秋池にはその材料になってもらったんだ」

佐藤「な…何い…？」

ヒナコ「…や…やっぱり…畏だったのね…！」

会田「デモのためだ。悪く思うな」

佐知絵「さすがは会田さんね。この生意気な女を店から追い出すために、“とりあえず黒野さんとカップルになってくれ”って言われた時は正直不安だったけど。でも、これでキャバクラにいる必要を感じなくなったのは確かね」

会田「すまん。柴田を追い出すために、いずれは必要な工程だったからな」

佐藤「ちょ…ちょっと待て！ お前たち本物のカップルじゃないのか…！？」

佐知絵「あら、今頃気づいたの？ あたしは昔も今もセレブ好きよ」
黒野「こいつはとんでもねーバカだぜ！ まあ、たまにOLとつき合うのも悪くはねーけどな」

ヒナコ「じゃ、じゃあ、初めからあたしや柴田さんを畏にはめるのが目的で佐知絵に乗り換えたっていうの……？」

会田「そうだよ」

61・俊作の作戦

黒野と佐知絵は偽装カップルだった。
全てはこの計画のためだった。

会田「はっはっはっ。どうだ、いいアイディアだろ？ 彼氏持ちの女にセクハラやらかしたんじゃあ、柴田の節操のなさが露わになるしなあ！」

ヒナコ「あたしが店を辞めた後、佐知絵目当てに妙な客が来てたって聞いたけど、それはあんたね？」

会田「ああ、そうだ。柴田追放作戦の打ち合わせをするために通ったんだ」

佐藤「何故キャバクラを使った？」

会田「あくまでオレは裏方に徹しななければならない。決してオレが関与した痕跡を残さないためにだ。普通に外で会うと誰かに見られるかもしれない。それと、あの店に笹倉を通わせていたことも理由の一つだ」

佐知絵「笹倉課長、だんだんあたしに夢中になっちゃったのよ。“会社には黙ってやるからデートしよう”とかよく言われてたわ。あの人それが元で離婚しちゃったみたいだけ。まあ、作戦は実行しやすくなったわ」

会田「そうだな。わりとスムーズにいったよな。この作戦は短期決戦だったからな」

佐藤「どういうことだ？」

会田「……短期決戦といっても、実際にあいつを追い出す時だけ急げばよかつたんだけだな。“状況証拠”はそれまでに準備できていたし」

佐藤「写真…か？」

会田は静かに頷く。

会田「オレは秋池に命令してあの写真を撮らせた。いかにも柴田が羽村をホテルに連れ込んでるような感じに見せるためにな」

ヒナコ「秋池さんを利用したの!？」

会田「悪いか? あいつは黒野たちに粗相をしたんだぜ? 罪は償わないと。そのために道玄坂の“源”で働かせたんだ。損害賠償代わりにな」

ヒナコ「ひどい…秋池さんを悪事に巻き込むなんて……!」

会田「オレたちは“源”ともう1件の店にいる仲間に、後々柴田が聞き込みに来た時のことを考えて口止めを命じた。しかし、秋池は裏切った。あいつが写したホテルは既に廃業してたんだ。それだけじゃなく、秋池は今回の計画を知ってしまっていた。これはオレのミスだった」

佐藤「そうか…だから秋池を拉致する必要があったんだな。じゃあ、実行を急ぐ必要があったのは何故だ?」

会田「さつき、“柴田には藤堂という後ろ盾がいる”と言ったよな。藤堂がいると作戦に失敗する恐れがある。だから、藤堂が不在になる時を利用したのさ。あの時、ちょうど出張が入っていたからな。出張でいない間に全ての処理を済ませれば、いくらヤツとて文句も言えまい」

佐藤「…笹倉を車ではねたのもお前らだな? 何故はねた?」

会田「邪魔になったから。万が一のことを考えると口を封じといた方がいいだろうと思ったまでだ」

ここまできて、会田の横で話を聞いていた黒野がしびれを切らしたようだ。貧乏ゆすりをしたり、意味もなくその場をうろついたりし始めた。

黒野「会田さん、そろそろやっちゃいましょうよ! これ以上こんなヤツらにつき合う必要ないっすよ!」

瀬高「そうですね。早くオレらの恐ろしさを思い知らせてやりましょー!」

会田「うむ…それもそうだな。やっちゃうか」

黒野たちの目がどす黒く光る。だが……

ヒナコ「待って！ まだ話は終わってないんじゃない!?」

黒野「あ?」

ヒナコ「残りの一つを聞いてないわ。“あなたがどうしても手に入られなかったモノ”の、残りの一つよ」

黒野「何言ってるんだよ！ そんなこと聞いてどうする！ おめーには何の関係もねーだろうが！」

ヒナコ「二つあるうちの一つをあたしたちは既に聞いてちゃってるのよ? そうなるともう一つも聞きたくなくなるのが人の心でしょ?」

黒野「黙れ！ おめーらに聞く権利はねえ！」

ヒナコ「話してくれないかな? 是非聞きたいわ」

戸川「鴨川さん、我々もヒマじゃないんでね。くだらないおしゃべりにつき合っていられないんですよ。そろそろ覚悟を決めたらどうですか?」

ヒナコ「覚悟?」

佐藤「鴨川さん、ヤツの話術につき合うな。話題をそらされて肝心なことが聞けなくなるぞ……!」

黒野「てめーは黙ってる！」

黒野が佐藤刑事の腹を蹴り込む。

佐藤「がっ…! げほっ! ぐはっ!」

腹を両手で抱え込み、痛みでのたうち回る佐藤。

ヒナコ「ちよつと、何するの!? 話の途中じゃない!」

黒野「おめーも黙れ！」

黒野はヒナコの頬を平手で打ちつけた。

佐知絵「あーあ、やっちゃった」

会田「おいおい、フライングかよ。まあ、やっちゃったもんはしょうがないな」

黒野「よーし！ オレらの恐さを思い知らせてやるぞ！」

ロック・ボトム連中が二手に分かれ、ヒナコと佐藤刑事をそれぞれ取り囲む。

ヒナコ「最低ね。あんたたちこんなことして恥ずかしくくないの？」
会田「どうして恥ずかしがる必要がある？ 邪魔者は排除する……それだけだ」

佐知絵「ヒナコオ、あんたもうゲームオーバーだよ。思いつきり恥ずかしいことしちゃうから。おとなしく秋池の行き先をしゃべってればよかったのに。まあ、あんたはあたし程じゃないにしろ、そこそこかわいいから、それなりに見応えはありそうだけど」

ヒナコ「佐知絵、あんた、もしかして自分がかわいい女だとも思ってるの？」

佐知絵「だって、かわいくなかったらいろんな男が寄って来ないじゃない？」

ヒナコ「バカじゃないの？ 笑わせないでよね！」

佐知絵「はあ？」

ヒナコ「あたしに言わせれば、あんたは醜い！ 醜さが顔からにじみ出てるのがよくわかるわ！」

佐知絵「何よ、あたしに嫉妬してるの？ そりゃ、あたしはお店での指名率もトップだったし、毎日キレイになるための努力は欠かさないからひがむのも無理ないとは思っけど」

ヒナコ「そういう問題じゃなくて、心が醜い人は自然と顔にも表れてくるものなのよ！」

佐知絵「失礼ね！ このあたしにエラそうな口聞いてんじゃねーよ！ 負け犬は負け犬らしくおとなしくしろよ！」

怒鳴り方がまるでヤンキーだ。会社の人間が、今の佐知絵を見たら驚くに違いない。

ヒナコ「化けの皮がはがれたってトコね。だいたい失礼なのはあんなのほうよ」

黒野「いちいちうるせー女だなあ！ 街を歩けねーようにしてやつてもいいんだぞ！」

佐知絵「黒野くん、そうしちゃってよ！ この女、いい加減頭にきた！」

黒野「よおし……」

黒野が、イヤらしい薄ら笑いを浮かべながらヒナコに近づいていく。ヒナコは、ただ黒野を睨みつけているだけだった。

佐藤「黒野！」

不意に、佐藤刑事が黒野を呼び止める。

黒野「あ？」

佐藤の方を振り向く黒野。

見ると、佐藤刑事が黒野に銃口を向けている。先程、戸川に殴られた際に落としてしまっていたのだが、ヒナコと佐知絵が口論をしている隙を見て拾い直していたのだ。

佐藤「動くなよ。そこを1mmでも動いたら撃つぞ」

黒野「やってみる。フラフラのてめーに何ができる？」

佐藤「フン、引き金を引くことぐらいならできるさ」

黒野「状況を考えるよ。周りにてめーの味方はいねーんだぞ？ ま

た頭力チ割られてーのか？ 次割られたら死ぬぞ？」

確かに佐藤の頭部からは血が出ており、早急に病院で手当てをする必要があった。頭痛や吐き気もしている。しかし、今の彼にはそれを気にしている余裕はないのだ。いち警察官として、暴漢から鴨川ヒナコを救わなければならない。

とはいえ、黒野の言うとおり今の佐藤刑事は味方が周りにいない。更には頭部に打撃を受けて大きなダメージも負っているのだ、素早く動くこともできない。ヘタに引き金を引こうものなら、再び多方面から攻撃を受ける可能性は非常に高い。「自分が早撃ち名人だったら、おそらく敵を一掃できただろう」と、佐藤は思った。もっと射撃の訓練をしておけばよかったという後悔の念もあった。

どれぐらい睨み合ったんだろうか。

佐藤刑事も黒野も、時間の経過を忘れていたようだ。

佐知絵「何やってるの！？早くやっちゃって！その刑事は何もできないから！」

黒野「おっと、そうだったな」

我に返り、再びヒナコに向き直る黒野。

佐藤「やめる黒野！動くんじゃない！」

その時だ。

階下から、何やら騒音が聞こえてくる。

戸川「…何だ？下が騒がしいな」

会田「んん？そういえば……」

だんだんとその騒音は大きくなっていく。どうやらこちらに近づいてくるようだ。

佐藤「…湊さんだ……湊さんが、柴田たちを連れて来てくれたんだ！」

会田「何だと？」

俊作「いたぞ！この部屋だ！」

全員が部屋の入口に注目する。

会田「！」

俊作だ。俊作、伸子、湊、そして藤堂の4人がついに到着したのだ。

湊「佐藤！大丈夫か！」

湊が佐藤のもとへと駆け寄る。

佐藤「み…湊さん、遅いじゃないですか。どこで道草を……」

湊「すまねえ。宮益坂交差点の辺りが工事の影響でちょっとばかり混んでてな」

佐藤「でもよかった…。これで連中を逮捕できる……………」

佐藤は、それだけ言うとそのまま気を失ってしまった。おそらく、緊張の糸が切れてしまったのだろう。

会田「フン、所詮はその刑事もヘタレだったか。それにしても、お揃いで来るとは意外だったぞ」

藤堂「会田、バカなマネはもうやめろ！ まっとうなサラリーマンに戻ってくれ！」

会田「藤堂さん、あなたにそんなことを言われる筋合いはないですよ。別にオレは何も悪くありませんからね」

俊作「てめえ…藤堂さんに対して何て言い草だ！」

会田「おい、口の聞き方に気をつけるよ。オレはお前の先輩だぞ」

俊作「もうさん付けはやめだ。てめーは敬う価値もねーからな」

会田「何を根拠にそんなことを？ オレは何も悪くないと言っただろう？」

俊作「今までのやり取りは全部聞かせてもらった。こいつでな」

俊作は懐から携帯電話を取り出した。

会田「ケータイだと？ それでどうやって今までの会話を聞き取ってたんだ？」

俊作は電話に向かってしゃべり始めた。

俊作「おい純、ご苦労だったな。おかげで会話は全部聞き取れたぜ！」

すると……

「そうか、それは何よりだ」

部屋の奥から、甲高い声が返ってくるではないか。

瀬高「なっ、何だこの声は？」

ヒップホップ男「瀬高さん、あいつ…！」

ヒップホップ男が、奥にいた見慣れない男を指差した。

ニットキャップを深めに被ったその男は、俊作と同じように携帯電話を手にしている。

黒野「誰だてめえ！」

男がキャップを勢いよく取る。

純だった。純がロック・ボトムのメンバーになりすまして潜入していたのだ。

純「抜けてるなあ、お前ら。オレが潜り込んでることに気がつかねーなんてよ。念のため、ばれそうになった時のことを考えてロックキーにもらったヘリウムガスを吸い込んでおいたけど、わざわざ声を变える必要はなかったな」

純の声が甲高かったのはこのためである。しかし、もう効き目が切れる頃だ。だんだんと元の声に戻りつつある。

会田「あいつは…会社にいた清掃スタッフ！」

純「残念だったな会田さん。会話は全部筒抜けだったってことだ」

俊作「オレも聞きてーなあ、あんたが“どうやっても手に入れられなかったモノ”をよ」

会田「……」

会田は、チラリと戸川を見た。視線に気づいた戸川は小さく頷く。

会田「この女だよ」

俊作「え？」

会田は、伸子を指差していた。

伸子「あたし……？」

ヒナコ「え？ 伸子さん……？」

伸子もヒナコも、目を丸くした。

会田「キミが新卒で入って来た時から、オレは気になっていた。総務にいた同期の前岡に頼んでどうにか仲良くなろうと思ったが、当

時キミには彼氏がいた。オレはいい相談役としてキミの近くにいれば、いつか自分のモノになると思っていた」

「いい相談相手」から恋愛に発展する、というのはよくある話だ。

会田「石原のヤツは運が悪かった。高根さんは彼氏がいた身なのに好意を持つちまったんだからな。同じ職場の仲間としてやっっちゃあいけないことだ。そうなるよ、もう石原を排除するしかないだろう？ 石原は会社を辞め、キミも彼氏と別れた。次の相手にふさわしいのはオレしかない。そう確信していた。だが、どうだ。キミのそばにはいつも柴田がいるじゃないか！」

伸子「別にウチらはつき合ってるわけじゃ……」

会田「わかってるよ。けどな、それならオレだって条件は同じはずだろ？ 条件が同じなのに、オレより柴田と仲良くするなんてどういうことだ？」

伸子「柴田くんとはただの同期で……」

会田「2年前にキミが営業部に来たのは奇跡だと思ったよ。柴田を会社から追い出せばキミも落ち込む。そこでまたオレが相談にのれば気持ちも傾くだろうと思った。でも、状況は変わらなかった」

純「会田さんよお、あんた前にのぶちゃんを笹倉から救ったことがあったな。あれ、ホントはあんたの自作自演だろ？」

伸子「え？」

会田「……どうしてわかった？」

純「タイミング的に無理があるんだよ。あれは朝礼終了直後に起きた。朝礼が終わった後、あんたは喫煙室でタバコを吸ってた。笹倉に連れて行かれるのぶちゃんを目撃しない限り、素早く彼女を助けることは不可能だ。あんたは笹倉がのぶちゃんを連れていくところは見えていない。喫煙室から出て来た時にオレとぶつかってるからな。それに、今朝検証してみたんだけどな、1階のエントランスホールから会議室がある2階の物音を聞き分けるのは非常に難しい。例えば物音を聞きつけたとしても、いくつもある会議室からピンポイントで1室だけを当てるのは至難の業だ」

会田「ちつ、まさかあれを見られるとは思わなかったな」

伸子「会田さん……ホントに自分で仕組んだの？」

会田「キミを振り向かせるためだ。笹倉に頼んでキミを襲わせた。だが、やっぱりキミはオレより柴田の方がいいんだな。新宿で一緒に食事をしたり、こいつの無罪を晴らす名目で味方についてるものな」

伸子「新宿で食事……？ やだ、あれ見てたの……？」

詳しくは第21話を見て欲しい。

会田「ちよくちよくキミの行動は見ていた。つけ入る隙を見計らってたんだ」

伸子は絶句した。これではまるでストーカーではないか。いや、伸子だけではない。俊作や純たちも呆れかえっている。

俊作「おい、自分が何をしてるのかわかってるのか？ そんなことして人の気持ちを惹きつけられるわけないだろう？」

会田「黙れ！ オレを不快にさせるモノは全部視界から消えればいいんだ！」

俊作「 だから、オレと彼女を警察に連行させたのか？」

会田「そうだ。お前は往生際が悪いし、この女はオレに興味がないみたいだからな。揃って社会から脱落させてやろうと思ったんだ」

ここまでで、会田の気持ちを理解できる読者はいるだろうか。今の会田は、夕チの悪いガキと一緒にいる。しかし、会田は体だけは大入であるので、「駄々っ子」というレベルではない。

湊「しかし、それは叶わなかったようだな」

会田「あ？」

湊「自分で全部悪事の限りを吐いちゃっただろうが。オレらは全員それを聞いてしまった」

会田「無駄だ。お前らを黙らせればいいだけの話」

湊「無駄な努力をするのはお前らの方だ」

会田「何？」

湊「あそこを見てみな」

湊は、純が立っている所よりも更に奥、つまり部屋の入口とは反対側の壁を指差した。

ちようど壁と床の接合部分に、人一人が通れるぐらいの穴があいている。

湊「あの穴はな、秋池がここに監禁されてる時に見つけた“秘密の抜け穴”なんだそうだ。あの穴からも外に出られる　ということ　は、逆にあそこから建物の中に入ることもできるってことだ。鳴海はあの穴からここへ潜入した」

会田「何が言いたい？」

湊「スパイは一人とは限らないってことだ」

会田「何ッ？　どういうことだ？」

俊作「ロッキー！」

俊作が抜け穴に向かって呼びかけると、それに答えるかのように、穴からひよいと人の手が伸びてきた。続いて、創の顔が出てくる。

会田「なっ…？」

創「いやー、窮屈だったぜこの穴は！　まあ、おかげで貴重な証言が録音できたけどな！」

創は、手にICレコーダーを持っていた。

俊作「よく考えてみる。警察は組織捜査が信条なんだ。この佐藤って刑事が一人で乗り込んでくること自体疑ってかからなきゃな。つまり、佐藤刑事には申し訳ないが囿になってもらって、その間に純とロッキーが潜入し、純はやり取りをケータイで実況中継してもらい、ロッキーにはICレコーダーで録音してもらったんだ。証拠を集めるためにな」

これが俊作の考えた作戦だった。手堅く証拠を集めてから叩くつもりでいたのだ。

湊「それに、いろいろ状況証拠だって出てきてるんだ。秋池を拉致

した際、彼のマンションに残された下足痕と会社で採取した下足痕が一致したこと、会田のスーツのボタンが秋池の拉致や笹倉をはねた時に使われた車の中から見つかったこと、それに秋池やお前の同期である前岡の証言。廃業したホテルを営業中と見せかけたことも命取りだったな」

会田「前岡のヤツ……」

純「前岡はあんたに借金があった。“手伝えばチャラにする”と言われたから断れなかったと言っていた。後悔してたぞ、金の受け渡し役や俊作のパソコンを廃棄する役を引き受けたことを。オレだって、あんたに殴られた後頭部がまだ少し痛むんだ」

俊作「観念しろ、会田」

戸川「しかし、いくら証拠を収集したところで意味はないぞ。オレたちは警察にも影響力を持っている」

俊作「バカめ。肝心なことに気づいてねーらしいな」

戸川「何？」

俊作「どうしてオレらがここにいると思う？ 警察に連行されたはずのオレらがよ」

戸川「……はっ！ き、貴様、何をした!？」

これまで冷静を保ってきた戸川弁護士に、初めて動揺の色が見え始めた。

戸川「何をしたんだ……！ どうして貴様らがここにいるんだ……！」
湊「何をした……って、おめーが仕掛けたカラクリをバラしたただだよ」

戸川「何だと……？」

湊「おめーは、“エクストラ・マジシャン”を使って警視庁上層部のプライベートを探り始めた。その結果、刑事部長の不祥事を知った。それをネタに警察を脅し、自分らのやることに一切口出しをさせないようにした。つまり、どんな悪事を働こうがおめーらだけは罪に問われることがなくなるってことだ。柴田やのぶちゃんを豊島東署に連行させたのも、おめーが直接連絡したんだろ？ でっちなおめーの容疑で警察が動くってことは、おめーが依頼したことを裏付けている」

会田「だからどうした！？ オレらの邪魔をするヤツは痛い目を見ればいいんだよ！」

湊「まだわかんねーのか？ もう“警察封じ”は使えねーんだよ」
会田「何だと？ どういうことだ？」

湊「オレがマスコミにリークした。もう間もなくこの事実が公になるだろう」

戸川「ウソをつくな！」

湊「ウソだと思ったらマスコミか警視庁に問い合わせてみるよ。今頃てんやわんやの大騒ぎだぜ。こうなると警察もごまかすわけにはいかねえ。おめーらの悪行が明るみになるのも時間の問題だ」

戸川「うぐ……」

戸川は返す言葉がなくなっている。

会田「殺しちまおう」

戸川「え？」

突然飛び出た会田の発言に、驚きのあまり目を見張る戸川。

戸川「殺すのか？」

会田「問題ないだろ？ 後で正当防衛だとか何とか言えばいい」

戸川「……まあ、それもそうだな」

会田「よし……」

会田が、不気味すぎるぐらいの微笑を見せた。

会田「こいつら全員、皆殺しだ！ 一人残らずチ殺しちまえ！」

藤堂「何だと！」

伸子「ちよつと、何考えてるの!？」

俊作「心配すんな！ オレが返り討ちにしてやる！」

湊「おい柴田、殺すんじゃねーぞ！ 後でこいつらに事情聴取をしなけりやいけねーからな！」

俊作「わかつてますよ。ちよつと懲らしめるだけですから」

湊「懲らしめる……ねえ」

湊は苦笑いをした。

俊作「純！ ロッキー！ 久々に暴れるぞ！」

純「All right！」

創「よしきた！」

ヒップホップ男「生きて返すわけにはいかねーんだよ！」

ヒップホップ男が、真っ先に俊作を狙って殴りかかってきた。

伸子「きゃあ！」

しかし、そこへ俊作のカウンター右フックが眉間にヒット！

「ガッン」という鈍い音と共にヒップホップ男がひっくり返る。そのままヒップホップ男は失神してしまった。

一瞬にしてざわめきが起こる。

黒野や瀬高も例外ではなかった。

会田「何をうるたえてる！ さつさとやれ！」

黒野「そうだ！ 人数じゃこっちが上なんだ！」

湊「あーあ、おとなしく投降したほうがいいと思うけどなあ……」

黒野「いくぞ！」

俊作「かかってきやがれ！」

ロック・ボトムメンバーが、俊作たちに襲いかかる！

黒野と瀬高は俊作を狙う。

それ以外のメンバーは純と創が相手をする。

黒野「やっとケリつけられるなあ、柴田」

俊作「……」

瀬高「鴨川んトコの用心棒だと思ってたら、まさかあの柴田だったとは」

俊作「マスターをよくもやってくれたな」

黒野「あの兄妹はオレらに逆らったからな。罰を受けて当然だ！」

俊作「相変わらずわけわかんねーこと言ってるやがるな」

瀬高「まあ、お前もすぐに後悔させてやるよ」

瀬高は俊作の右肩に、自身の左手をポンと置いた。

約10秒後、瀬高は目を回した後に気を失っていた。

もちろん本人は何が起きたのかわかっていない。

瀬高が俊作の肩に手を置いた瞬間、俊作がその手を素早く掴み取ってひねりあげたかと思えば、一気に瀬高の体勢を崩し、みそおち鳩尾への前蹴りと眉間へのヒザ蹴りを連続で見舞った後に後頭部へ掌打を放ち、床へ叩き伏せたのだった。

黒野「なっ……！」

うつ伏せに倒れ、わずかに全身を痙攣させている瀬高を見て、黒野は言葉を失いかけた。

黒野「おっ、おいっ！ おめーら、こっちにも手を貸せ！」

慌てて、純と創が相手をしているメンバー数人に応援を要請する黒野。

俊作「同じことだ。何人束になるうがオレには勝てねえ。あいつらの運動不足に拍車をかけるだけだ」

俊作の殺気が、静かに黒野を捉える。

結局、黒野には4人のメンバーが加勢した。

創「あーらら、親分の助太刀に行っちまいやがったぜ」
少し拍子抜けした様子の創。

純「まあ、いいじゃないの。こっちは相手が減ったんだから」

メンバーの男「何雑談してんだよッ！」

メンバーの一人が純を殴りつけた。少し痛かったらしい。

純「Shit…！ そーいやお前、秋池のマンションにいた野郎だな」

メンバーの男「あ？」

純は、今自分を殴った男の顔をしっかりと覚えていた。

純「あの時の借りを返してやるぜ！」

純と創の猛攻が始まる。黒野への加勢で4人減ったとはいえ、まだ人数では敵側のほうが多かった。しかし、純と創の攻撃はまるでアクションゲームの雑魚キャラを倒すかのような勢いだった。おもしろいように敵がひっくり返っていく。

俊作が言った通り、黒野に加勢したメンバーはあっという間にやられてしまった。

予想を超える強さだ。

歯ぎしりをする会田の後ろで、傍観者のように立ち尽くしている戸川弁護士はそう思っていた。戸川に至っては、恐怖すら感じていたことだろう。自分は恐ろしい男を敵に回してしまった。この男にはもはや法律すら通じないのではないか。

湊「お前らの負けだ」

戸川「何ッ？」

そんな戸川の心を読んだかのような湊の発言。

湊「お前らは柴田の逆鱗に触れちまったんだ。あいつは昔から卑怯なやり方が大嫌いだな。確かに十代の頃は血の気も多くてケンカもよくやってたが、無駄なケンカや集団リンチは決してやらなかった。弱い者いじめなんてもつてのほかだ。リンチやいじめの加害者は容赦なく柴田が成敗した。“そんな理不尽な方法でしか問題を解決できないのは人として惨めだ”って考えてるんだよ、柴田は」

戸川「……」

湊「あいつにはあいつなりの正義感があつて、それに従つて動いた。そんな柴田を慕う人間は当然多かった。オレも何度か事情聴取をしたことはあつたけど、あいつの人間性がわかつてたから逮捕まではしなかったよ。そんなことしたら鳴海や黒木に怒られちゃうもんな」

戸川「……」

湊「……なあ、お前さんは何で法律家になった？ 正義のためじゃないのか？」

戸川「……いや、オレに正義などない。オレが弁護士になつたのは、“武装”して世の中を上手く渡るためだ」

湊「何だつて？」

戸川「法律の知識があれば、違法行為を回避できる。法律の力を使えば必ず自分が優位に立てる。トラブルに巻き込まれても自分が傷つくことはない。そのうえ金まで稼げる。天職だと思つたね」

湊「どうやら、天職というほどのモノでもなかったみたいだな」

戸川「何だと？」

ツト！

背中から、大の字になって倒れ込む黒野。完全にのびている。

佐知絵「…そんな……」

会田「な…何故だ！ 何故なんだ……！」

自分でもうまく言い表せない感情がこもったような目を血走らせ、俊作を見張る会田。

自分に対して最低・最悪な仕打ちをした会田に対し、ただ怒りをぶつけるように睨む俊作。

俊作「何故だつて？ いちいち説明しなきゃなんねーのかよ？ めんどくせーからてめーで考えやがれ」

会田「……」

俊作「かわいそうだから一つヒントをやるよ。“因果応報”だよ。考えな」

会田「野郎……とことん生意気なヤツだ！ このオレは簡単にやらねえ！」

戸川「おい会田、もういいよ。オレらの負けだ。おとなしく警察へ行かないか？」

会田「あ？ お前ここまできて何言つてんだよ？」
意外な人物が口を挟む。これには俊作も驚いて目を丸くした。

戸川「既に勝ち目はない。この状況を見てわからないか？ オレらのほとんどが柴田たち3人に倒されてしまった。3人だぞ？ オレらは最初に何人いた？ 数では圧倒的有利だったのにもかかわらず形成を逆転されてしまったんじゃあ、もう降参するしかないよ」
実は、純と創のほうもほぼ打ち止めといった感じだった。

会田「戸川、お前オレに負けを認めろつてののか！」

戸川「認めるしかないだろう！ そもそもこの柴田俊作という男はオレらが仕組んだ罠をことごとく見破った。信頼のおける仲間や警察をも味方につけてだ。こんな短期間で罠を見破るところを見ると、チームワークもよさそうだ。どうしてだと思おう？ みんなこの柴田

という男の人格をわかっていないからじゃないのか？ 信頼しているからじゃないのか？ オレらとは違う。少なくとも、今までのオレは信頼という言葉とは無縁な生活をしてきた」

会田「…それがどうした」

戸川「え…？」

会田「柴田の人格なんてとっくに知ってるよ。5年も同じ会社で働いてきたんだぞ？ だからどうしたってんだよ！ オレは天才だ。」

“エクストラ・マジシャン”で神の力を手に入れたんだ！ 柴田がどんな人間だろうと社会的に葬り去ることなんて余裕でできる！ 戸川「し、しかし、これ以上抵抗を続ければ続けるほど罪は重くなるぞ！」

会田「何だ？ それはオレが捕まるのを前提に言ってるのか!？」

佐知絵「そうよ！ 捕まっちゃダメだって！ こんなに稼げる仕事はないのよ？ それに、あたしのお金はどうなるの？ まだ払ってないでしょ？」

伸子「羽村さん！」

伸子が佐知絵の両肩をがっしりと掴んだ。

佐知絵「何よ！ 離して！」

伸子「あんた、お金のことしか頭にないわけ!？」

佐知絵「離してよ！」

伸子「お金さえもらえれば、あとはどうだっていいの？ 何の罪もない柴田くんが、仕事なくなってもいいっていうの!？」

佐知絵「うるさいわね！ あたしには何の関係もないことよ！」

伸子「……本気で言ってるの？」

佐知絵「…早く離してくれませんか？ 高根さん」

伸子「あなた…ホントにお金さえあればそれでいいの？ ねえ？」

熱くなりつつある伸子を、藤堂がなだめる。

藤堂「高根さん、彼女を離してやりなよ。今は何を言っても無駄だ」

伸子「部長……」

力なく、佐知絵の両肩から伸子の手がするりと離れていく。佐知絵

はこれ見よがしに、手でホコリを落とすような感じで、両肩をポンポンとはたいた。しかし、伸子は気づかないふりをしていた。

会田「おい戸川、警察へは行かせんぞ。オレらは絶対に捕まらねんだ」

戸川「会田……」

それを聞いた俊作は、ペツと唾を床に吐き捨てた。

俊作「野郎……とことん救えねーヤツだ。いいだろう、てめーのバカさ加減を思い知らせてやる！」

63・牙城崩壊(前書き)

ついに俊作と会田の一騎打ちが始まる……！

63・牙城崩壊

会田「オレのバカさ加減だと？　じゃあオレはその言葉をそっくり返してやるるか！」

会田は不敵に笑い、上着を脱ぎ捨てた。

俊作「前置きはいいいからとととかかってこい。オレを殺すんだろ？」

会田「死ぬ前に遺言を残すチャンスを与えたただけだ」

会田が、ゆつくりと俊作の方へ歩いていく。

俊作も身構える。

右構えのため、左手が前になる。両手の高さはアゴのやや下辺り。

打撃・関節・投げ・武器のあらゆる攻撃に対処するにはこの構えが最適だという俊作独自の判断である。

俊作「……」

俊作まであと約2mの所まで来て、会田が立ち止まる。

会田「フン……それがお前の構えか」

会田は両腕を真上に上げたかと思うと、それをまっすぐこめかみの辺りまで下げてきた。そしてアゴを引き上目遣いでこちらを睨む。

俊作「むっ」

この構えは　！

会田「シッ」

会田がジャブを放つ。

不覚にも俊作の鼻にヒット。

立て続けにジャブを放つ会田。あろうことが全弾ヒットしてしまう。

俊作「ちっ」

やむなくバックステップで距離をとろうとする俊作。

しかし、右ストレートで追撃をしかける会田！

左腕で、自分の体の内側に向かうようにして受け流す俊作。これぞ空手の受け技「内受け」である（流派によつては「外受け」と呼ぶ場合もある）。

会田の猛追！ 次は左フックだ！

ダッキング（屈んでよけること）でこれをかわす俊作。

更に会田は右ミドルキックを放つ！

俊作「おっと！」

スウエーでこれも見事によける。

そして再び構え直す俊作。

俊作「……キックボクシングか」

会田「そうだ。オレも格闘技をやってたんだよ。昔な」

俊作「今はやってねーのか」

会田「幸か不幸か、“仕事”が忙しいもんでね。なかなかトレーニングできないのさ」

俊作「なるほど、そういうことか」

会田「だからオレは簡単には倒せないってことだ！」

俊作「…たいした自信だ」

今度は俊作から攻撃を仕掛ける。

左順突き（左ジャブ。「追突き」ともいう）を数発放つ。バックステップで後ろへよける会田。

続けて俊作が右上段逆突きを放つが、またもバックステップでよけられる。しかも、よける際に左太ももに右ローキックを食らってしまふ。

俊作の死角に回り込もうとする会田。しかしその作戦、俊作は既に読んでいる。左下段回し蹴り（左ローキック）で牽制しつつ、会田を自分の死角へ行かせないようにする。

そこへ、会田の右フック。俊作の頬にヒット！

続けて左アップパー。これもヒット！

伸子「柴ちゃん！」

俊作が、少し後ろへのけぞる。

俊作「やべえ、二つももらっちゃまった……」

会田「やっぱりお前も空手家だったようだな。空手家は顔面へのパンチ攻撃に弱いって話はホントだったか」

俊作「フン、たいしたダメージじゃねえ」

会田「強がるな。弱点を見つけた以上、オレの勝ちは決定した！」

会田が更に突進してきた。

左ジャブ6連発！

右ストレート！

左フック！

右ミドルキック！

なんと、上記全ての攻撃を俊作は食らってしまった！

会田「……フフフ……だから強がるなど言っただろう」

俊作「……そんなもんか？ ええ！？ 会田さんよオ！！」

俊作の右中段回し蹴り（右ミドルキック）！

会田、難なくこれを左腕でガード。しかし、衝撃が体内にまで響く。

会田「おお……痛い痛い。こんなのまともに食らったら……」

俊作の右下段回し蹴り！ これはクリティカルヒット！

会田「うぐ……」

俊作「無駄話してる暇はねーんだよ。ボケが」

会田「うるせえ！」

会田の右フック！

俊作の右下段回し蹴り！

両者相打ちだ！

再度、会田が右フック！

俊作がそれに右下段回し蹴りで合わせる！
再び相打ちだ！

しかし、今度は俊作が左中段回し蹴りを繋ぐ！

会田「ぬおっ」

身体をくねらせ、衝撃を逃がす会田。

すかさず左ジャブで反撃する会田。スウエーでかわす俊作。

続けて右ストレートを打つ会田。あてられるものの、スウエーで威力を逃がす俊作。

会田の左フック。これはダッキングでかわす俊作。

そして会田の右ミドルキック。

ここで再び俊作の目がカツと見開く。

会田「！！」

俊作は、会田の蹴り足を掴んだ！

会田「ぐ……！！」

俊作「バカが。おめー攻撃がワンパターンなんだよ」

会田「はっ……離せ……」

俊作は、床についている会田の左足に自分の右足を引っかけて、会田を思い切り床に転倒させた。

「ドンッ」という、重い塊のような音が鳴り響く。

会田「うぐっ」

どうやら後頭部を打ったようだ。一瞬だけ、会田の意識がとんだ。

しかし、本当に一瞬だけだった。

次の瞬間には俊作の追撃に気づいていたのだ。

慌てて、仰向けに寝た状態から俊作に向けて両足をバタつかせる会田。ちょうど、総合格闘技の試合でグラウンド状態の選手がスタンディングの選手を蹴るという場面をイメージしたのだろう。

俊作「何やってんだ、早く立てよ」

どうやら俊作にはふざけているようにしか見えなかったようだ。

会田「くっ……」

俊作「オレはてめーと遊ぶ気はねーんだ。せつかくてめーの闘いやすいように立ち回ってやってんだから、もっとビシッと動いたらどうなんだ」

会田「何だと！」

会田はしゃがんだまま蹴りをくり出した！ 格闘ゲームでよくみる

「しゃがみキック」だ。

しかし、俊作はこれをバツクジャンプでかわす。

俊作「ゲームじゃあるまいし、そんな蹴り、あたってもきかねーぞ」

会田「し……柴田ア……柴田ああああああ……！！！」

会田、怒りのオーバーハンドフック！

しかし、俊作のスウェーにより空を切る！

会田「しィィィィばアアアアアアアアアアアアアア！！！」

今度は左のロングフックを放つ会田。

しかし、これも俊作のダッキングにより空を切る。

会田「うおおおおおおおおおおああああ！！！」

会田の右ストレート！ 俊作の顔を捉えた！

俊作「きかねーよ！」

俊作が左のショートフックを返す。アゴ先にヒット！

すかさず、俊作が右中段回し蹴りを見舞う！

俊作「！！！」

なんと、今度は俊作が蹴り足を掴まれた！

会田「へっへっへっ！ どうだ！ てめーから学習したヤツだぜ！
オレの勝ちだあ！！」

俊作「…そんなの予測済みだよバーカ！」

会田「何？」

俊作は、右足を掴まれた状態のまま会田に向かってジャンプした！

会田「！？」

会田に飛びつく気なのか、俊作は？

俊作「うらあ！」

なんと、俊作は会田に飛びつくのと同時に右のヒジ打ちを会田の額を目掛けて放つたのだ！

「ガツツ！」という、鈍いけれども抜けの良い音が響く。

会田「うがあああっ！」

両手で額を押さえ、その場にしゃがみ込む会田。その両手から、血が滴り落ちていくのがわかる。

俊作「固定観念に囚われ過ぎだ。“顔面へのパンチが苦手だ”なんてエラそうなことぬかしやがって。確かにオレは長いこと空手やってるけどな、キックやムエタイの技術だって学習してんだよ。顔面へのパンチだって苦手じゃねーし、蹴り足を掴まれた時の対処法だって知ってる」

会田「……」

俊作「ハッキリとわかったぜ。てめえ、基本的なことしか習ってねーな？」

会田「黙れ！」

会田が右ストレートを放つ！

しかし、俊作も会田の拳を目掛けて右の逆突きを放つ！

「ドッッ！」

かち合う拳と拳。しかし……

会田「ぐあああああ……！！！」

拳を押さえ、悲鳴をあげたのは会田だった。

俊作「ほらな。拳だつて十分に鍛えてねえ。これじゃ強えーパンチは打てねえ。現に、てめーのパンチはさっきから全然きいてねーぜ」

会田「何イ……！」

俊作が更にラッシュをかける！

左順突き！

右上段逆突き！

左下突き（左ボディーアッパー）！

右上段回し蹴り（右ハイキック）！

全ての攻撃が会田にヒット！

会田は伸子の約1メートル前までふっ飛ばされた！

俊作「……最初はてめーのマネでもしてやろうかと思っただけど、なんか同じ穴のムジナみてーでイヤだから自分なりにアレンジ加えちまった」

会田「ぐ……」

会田は起き上がるうとして、ふと動くのをやめた。

目の前に伸子がいる。

会田「は……」

伸子「え……？ なに……？」

会田「へっへっへ……！！！」

俊作「？ 何だ？」

俊作が会田の意図に気づいた時はもう遅かった。

会田が、伸子を腕で抱え込むように捕まえ、そのうえバタフライナイフを突きつけたのだ！

万が一のために、レザーパンツのポケットにバタフライナイフを忍ばせておいたらしい。

伸子「あつ、会田さん！ 何をするの！？」

湊「会田！」

俊作「クソツタレめ……！ 何考えてんだこのバカタレ！」

会田「ふははははははは……！！ 動くなよ柴田！ 動いたらこの女を殺すぞお！」

藤堂「何だと！？ 正気が会田！」

湊「おい！ 何を考えてんだ！」

伸子「やめて会田さん！ バカなマネはやめて！」

会田「バカなマネだとお！？ お前らの存在がオレにこんな行動をとらせたんだろつがあ……！」

伸子「え？ 何言ってるの！？」

会田「オレは何も悪くねええええ……！！ 悪いのはオ・マ・エ・ラだあ……！！」

湊「くそ……」

「これは迂闊に手出しできない」と湊は思った。今の会田は完全に気が狂っていた。喜怒哀楽が判別できない表情のまま、時より奇声を発し、伸子を引きずり回しつつ、バタフライナイフを四方八方に向けていた。下手に飛び込めば伸子の命にも関わる。

創「おいおい、とうとう会田の野郎が発狂しやがったぞ」

敵を全て倒した純と創は、俊作の闘いを見届けていた。

純「ありやあ、説得しても効果はなさそうだな」

創「ちよつとマズイかな……」

伸子「いい加減離して！ こんなことしたってもう柴ちゃんには勝

てないのよ!？」

会田「柴ちゃん? どうしてそんな親しげに呼ぶの?」

伸子「は!?! 親しくしちゃいけないの!?!」

会田「ダメに決まってるだろおおお! オレという先輩がいるのに
イイイイ! 金あるよお? 贅沢させてあげるよ?」

伸子「いらぬ!」

会田「なんでえ? どうしてよお?」

伸子「お金は自分で働いて稼ぎます!」

会田「お前……………先輩の好意を踏みにじろつての
かよオオオオオオオオオオオ!!」

ついに、会田のバタフライナイフが伸子の喉元にまで迫る!

俊作「気持ち悪りーから離れろつてんだよ!」

ナイフを突き立てた会田の手がピタリと止まる。

会田「……………あ?」

俊作「さっきから見てりや何だ? 見苦しいぞ! 何で堂々とかか
つてこねえ?」

会田「柴田あ、いいところなんだ。邪魔するなよ」

俊作「会田、一つ忠告しとくぞ。お前に彼女は殺せねえ」

会田「あ? 殺せないわけないだろうが」

俊作「ぜつてー無理だ。例えてめーが今そのナイフを突き刺したと
しても、のぶちゃんは死なねえ」

会田「どういうことだ!」

俊作「てめーに殺せる器じゃねーんだよ、その高根伸子つて女は」

会田「わけわかんねーこと言うんじゃねえ!」

俊作「“殺す”つて言葉は、てめーのような社会の脱落者がそう軽
々しく言える言葉じゃねーつてことだ!」

会田「オレが……………脱落者だあ?」

俊作「そうだろうが! てめーは“エクストラ・マジシャン”を作

ったことで自ら悪魔に魂を売っちゃった。その時点でもう脱落して
たんだ！」

会田「違う……オレは神だああああああ……!!」

俊作は、会田のナイフが伸子の顔から離れていくのを目で追うと、
伸子に目配せをした。

俊作「のぶちゃん、今だ！」

叫びながら、俊作は右足を激しく踏み鳴らした。

伸子が力強く頷く。

俊作の言いたいことが瞬時にわかったようだ。

大きく息を吸い込み、そして吐き出す。

伸子「えいつ！」

伸子は、右足の踵で会田の右足、しかも小指の辺りを思い切り踏み
つけた。

会田「ひいぎいやあああああ……!!」

黒野よりも騒々しい断末魔の悲鳴をあげる会田。

伸子の履いているパンプスはヒールが付いている。しかも踏まれた
のは小指だ。相当に痛いはず。

俊作「のぶちゃん、今すぐそこをどくんだ！」

伸子が脱兎の如く会田から離れる。

会田「あつ!? 何故逃げる! 待て！」

俊作「待つのはてめーだあ……!!」

会田「……!!」

会田の目の前に、こちらへ突進してくる俊作が見える。

次の瞬間、その俊作が華麗に舞い上がった。

「ゴッ」

柴田俊作、渾身の真空飛びヒザ蹴り！
見事、会田修の眉間に命中！

2 mほどふっ飛ばされたところで、会田は大の字になって倒れた。
既に気を失っているようだった。

純「…やばい、あいつカツコよすぎる」

俊作「ふう…。とりあえずは静かになったか。湊さん、片付きましたよ。全員殺してません」

湊「よし。よくやったぞ柴田」

伸子「柴ちゃん、やったの？」

俊作「ああ。もう大丈夫だ」

伸子「やったあ！」

伸子が、喜びのあまり俊作に飛びついた。

俊作「おいっ！ 何だよ！」

伸子「だって怖かったんだもん！ ナイフ突きつけられたのよ？」

俊作「そうだな。でも、まだ自由になってない人がいるぞ」

伸子「え？」

俊作が、椅子に座らされ、縄で縛られているヒナコを指差した。

当の本人は伸子を見て微笑んでいる。もちろん本気で怒っているわけではないのだが。

伸子「……あ（汗）」

俊作「早く解放してやらないと」

俊作に促され、伸子は急いでヒナコに巻きつけられた縄をほどいた。伸子「ご、ごめんなさいヒナコさん、助けるのが遅くなっちゃって」ヒナコ「いいのよ伸子さん。ひとまず、真実がわかってよかったわ」湊「そうだな。これで柴田の無実だけじゃなくて、キミの無実も晴れるだろうからな」

ヒナコ「ええ。とりあえずは安心しました。あとは秋池さんのケガの具合が……」

湊「ああ、彼なら心配ない。今は病院で手当てを受けてるから」

純「そーいや湊さん、今回の事件のために、秋池まで濡れ衣を着せられたんですよね」

湊「そうだったな。でも、これで彼のクラブも営業を再開させることが出来るだろうよ」

純「そうですね。そしたらオレ、遊びに行ってみようかな」

ヒナコ「それなら、兄の退院を待ってから、みんなで行きましょう

！ お祝いも兼ねて」

創「そうだな！ それがいい！」

湊「しかし、今回の事件は柴田たちの活躍がなかったら解決できなかった。礼を言うよ」

俊作「いやいや、オレの方こそ、湊さんがいなかったらたぶん行き詰まっていたよ」

純「お前、オレには感謝しねーのかよ？」

俊作「い、いや、もちろん感謝してるよ。お前がいなかったら何もできなかっただろうしな」

創「オレは？ いっぱい情報屋動かしたぜ？」

俊作「お、おう。助かったぜロッキー」

純「よし……」

創「じゃあ……」

俊作「まさか……」

純 & amp ; 創「今夜は俊作のおごりで飲みに行くぞーっ！」

俊作「待て待て待て！ オレが全員分か？ そんな金ねーって！」

創「だって、ビジネスは“ギブアンドテイク”だろ？」

俊作「……」

俊作は何も言い返せなかった。

伸子「大丈夫よ柴ちゃん、あたしがちよつと援助してあげるから」

純と創に聞こえぬよう、伸子が俊作の耳元で囁いた。

俊作「え？ いいよ。オレが何とかするから」

伸子「人の好意は素直に甘えときなさい。ね？」

伸子はニコリと微笑み、俊作の肩を軽く叩く。

俊作「……おう。サンキュー」

俊作も、笑顔でそれに応える。

63・牙城崩壊（後書き）

敵將、討ちとつたり！

64・「マグナム・スパイチーム」

ついに会田たちを撃破した俊作たち。

俊作、ヒナコ、そして秋池の無実は晴れるだろう。とりあえずは安心といった俊作たちだが、ここで藤堂が湊に話しかける。

藤堂「そうそれはそうと刑事さん、早く連中の身柄を確保しないと、そのうち息を吹き返して逃げてしまうのでは？」

湊「ああ、それでしたらご心配なく。もう間もなく応援が到着しますので。あとは我々に任せて、今日のところはお帰り下さい。また明日から事情聴取があるでしょうから、今のうちに体を休めておくといいですよ」

藤堂「そうですか……」

そう言うと、藤堂は部屋の隅でうつむきながら立ち尽くしている佐知絵を見やった。

俊作「どうしたんですか？」

藤堂「いや……今後も会田や羽村さんのような人間がウチの会社で出てくる可能性があるのかな……なんて思ってたね」

伸子「ああ……そうですね……」

俊作「万が一今後も似たような手合いが現れたら、早急に事態を収拾させないといけませんね」

純「藤堂さん、それだったら、会社に頼んで社内スパイチームを新しく作ってもらったらどうです？」

藤堂「スパイチーム？」

純「ええ。会社という所は何かとトラブルが起きやすい。迅速に事実関係を調査し、平和的なトラブル解決を目的とした特別チームです。決して表向きにはできませんが、これからの会社にとって必要不可欠なチームになるかと」

藤堂「なるほど。鳴海くん、それは名案だね」

伸子「それならあたしやりたいです。今回みたいに、理不尽な圧力に苦しんでる人をもっと助けたいですし」

藤堂「そうか、ありがとう。ところで柴田、お前はとうするんだ？」
俊作「え？ “とうするんだ？” って、どういうことですか？」

藤堂「無実が晴れる可能性は高いんだ。お前はほぼ間違いなく会社に戻れるぞ」

俊作「藤堂さん、それってまさか……」

藤堂「そうだ。お前もスパイチームに加わるんだよ。月曜の朝イチでお前の復帰と、お前と高根さんをメンバーに含んだ社内スパイチーム新設を会社に頼もうと思う」

俊作「……」

純「おいおい、いい話じゃん。やれよ、社内スパイ。お前は探偵に向いてるぜ」

俊作「……わかりました。やります。会社にかかけ合う際は、オレもご一緒させてください」

藤堂「おう、いいぞ」

純「あの、藤堂さん、オレもご一緒してもいいですか？」

純が、申し訳なさそうに申し出る。

俊作「お前も？」

藤堂「何か理由でもあるのか？」

純「ええ。本音を言うと、マグナムコンピュータと業務提携ってことで、スパイメンバーの研修やアドバイスをやりたいな……と考えております」

藤堂「なるほどな……」

創「へッ、実際は今のままじゃ食っていけないからだろ？」

純「ロッキー！ 虚偽の事実を言うな！」

創「何が虚偽の事実だ！ お前半分ウチの店のスタッフみてーなものじゃねーか！ 本業での仕事が少ない証拠だろ！」

藤堂「はっはっはっ。そういう事情なら構わんよ。今回はキミたちにも助けられた。大いにウチをビジネスパートナーとして利用して

くれ」

純「マジすか！ ありがとうございます！」

純は、深々と頭を下げた。

創「“キミたち”ってことは、オレも入ってんすか？」

藤堂「ああ。もちろんだ」

創「あつ、ありがとうございます！」

創も、深々と頭を下げた。

俊作「さて、そろそろ帰るか」

こうして、会田や戸川、佐知絵に黒野、その他ロック・ボトムナンバーは警察に逮捕された。これを受けた会社側は、後に会田と佐知絵に、当然ながら懲戒解雇を言い渡した。

金の受け渡し役を引き受けた前岡は、依願退職という形になった。

笹倉は、一命はとりとめたものの、腰の骨を粉碎骨折しているうえに脊髄を損傷している可能性もあるため、再び歩けるようになるのは相当難しいとのことだった。とりあえずは会社を辞めて静養に努めるらしい。

踏み込みの際に負傷し、頭部から出血した佐藤刑事は、応援部隊が到着してすぐに病院へ運ばれ、現在は順調に回復している。

週明けの月曜日、手短に朝礼を終えた藤堂営業部長は社内スパイチーム新設を願い出るため、俊作、純、創、そして伸子を伴って社長室を訪ねた。

今回の事件と社内スパイの必要性を熱心に説く俊作たち。

社長の木暮も、身を乗り出して俊作たちの話を食い入るように聞いている。

約2時間に及ぶ説得の結果、社長は社内スパイチーム新設を了承するのだった。それに伴い、俊作の無実も認められた。徹底した調査活動の賜物といっても過言ではないだろう。

チーム新設プロジェクトは藤堂が責任者に任命され、木暮社長と極秘協議のもと、たった2日で発足までこぎつけた。

現時点での正式決定事項は次の通りである。

チーム名「マグナム・スパイチーム」。

このチームは人事部が統括するものとする。

このチームは秘密裏に作られたものであり、決して公にはならない。したがって、普段は通常業務を行うものとする。

このチームは、株式会社 マグナムコンピュータの全社員に関わるトラブルを迅速に調査し、事実関係を明らかにしたうえで平和的に解決することを目的とする。

提携パートナーとして、ホットスパイス・エージェンシー代表の鳴海純氏がアドバイザーや研修等を適宜行うものとする。

同じく提携パートナーとして、リサイクル&バラエティーグッズ・ロッキー店長の黒木創氏に業務用ツールの提供を依頼するものとする。

同じく提携パートナーとして、ハワイアン・クリーン株式会社の従業員を派遣調査スタッフとして配置するものとする。

鳴海氏においては、ハワイアン・クリーン株式会社の従業員と共に派遣調査スタッフとして週に3日程度の調査業務を行うものとする（ただし、当社でトラブルが発生した場合や別件で調査依頼があった時はこの限りではない）。

基本的に業務の範囲は社内に限られるが、鳴海氏または黒木氏からの調査依頼があった場合は、この限りではない。

社内チームメンバーは以下の通りである。

チームリーダー：藤堂 謙三（ 1 ）

チームメンバー：柴田 俊作（ 2 ） 高根 伸子（ 3 ） 米

本 幹夫

1：営業部部長の任を解き、新たに人事部部長を命ずるものとする。

2：営業部法人営業一課付ではなく、人事部付として復帰させるものとする。

3：営業部法人営業一課付の任を解き、人事部付を命ずるものとする。

ちなみに、復帰後も部長のポストが約束されていたはずの大成だったが、「間違いを犯した人間が部長職に就く資格はない」として、自ら人事部長としての復帰を拒否したのであった。

そして、事件から半月が過ぎた。

この3日ほど前から会社に復帰した俊作は、新しい仕事を覚えるのに必死だった。

その日の昼休み、俊作は伸子や米本と共に会社近くの定食屋で昼食をとりつつ、詰め込み作業のような業務説明から一時的に解放されていた。

俊作「 いやあ、人事も大変なんだな」

伸子「 ホント。覚えることが山ほどあるんだもん」

米本「何言ってるんだよ。これぐらいで音を上げるんじゃないっつーの」

伸子「だけどさあ、柴ちゃんが会社に戻って来れてホントによかったよね」

米本「そうだな。オレも安心したよ」

俊作「オレもさあ、自分の無実を証明できてよかったと思ってるよ。一時はどうなることかと」

米本「柴田、お前相当激しい立ち回りを悪党相手にやらかしたらしいじゃん」

俊作「え？」

伸子「いや、柴ちゃんすごく強かったよ！ 相手なんか手も足も出なかつたんだから」

米本「そうなの？ オレも見たかったな」

俊作「やめてくれ。恥ずかしい」

俊作が、恥ずかしそうに玄米茶を口に流し込む。

伸子「あ、そうそう。昨夜ヒナコさんから電話があったの。お店再開したんだって！」

俊作「おっ、マジか？ じゃあ、マスターのケガも完治したってことだな。今度行ってみるか。秋池については何か言ってたか？」

伸子「言ってた。来月にもクラブを再開できるって。ヒナコさんの声、すっごく嬉しそうだったよ」

俊作「そうか……」

俊作はそれを聞いて、自然と微笑んでいた。

米本「何笑ってたんだ？」

俊作「いや…別に」

伸子「もしかしたらヒナコさんは秋池って人が好きなのかも」って思ってたでしょ？」

俊作「えっ？ 何でわかったの？」

俊作は目を丸くした。

伸子「あたしも同じこと思ってたからよ。その後30分ぐらい秋池

つて人の話をしてたもん」

俊作「なるほど、そうだったのか」

米本「ふーん…彼女がねえ…」

その時、俊作の携帯電話が鳴る。

純からだ。

俊作「どうした？」

純「お前、今から代々木公園に来れるか？」

純の声がせわしなさそうだ。何かあったのだろうか。

俊作「代々木公園？ どうかしたのか？」

純「犬山さんトコの猫がまた逃げ出したんだよ！ 前みたいに代々木公園で散歩中にな！」

俊作「また？ じゃあ、前みたいにたこ焼きでおびき寄せればいいんじゃないねえ？」

純「それが、そのたこ焼き屋がなくなってるんだよ！ だから今、エサがなくて困ってて……」

ものすごい必死なのが電話口からでもわかる。恐らく純は、電話の向こうで眉間にシワを寄せ、鼻の穴を少しだけ広げていることだろう。

俊作「ホントか？ そりゃ困ったな」

純「頼む！ ちょっと手エ貸してくれ！ 早く猫を捕まえないと、今日の夕方6時半からお前の会社でやる探偵の講習会ができなくなるかもしれない！」

俊作「あ……そりゃ大変だ。よし、今すぐ行くから待ってる！」

電話を切った俊作は、再び玄米茶を口に流し込んだ。

この日注文した日替わり定食も、もうすぐ食べ終わる。早くかき込もう。

伸子「どうしたの？」

俊作「純が、“今すぐ代々木公園まで来てくれ”ってさ」

米本「代々木公園？」

俊作「あいつん家の^ち近所さんが飼ってる猫が代々木公園を散歩中に逃げ出したらしく、それを一緒に捕まえて欲しいんだって」

米本「へえ…探偵ってそんな仕事も請け負うんだ」

俊作「早く行かねーと、今日6時半からの講習会がなくなるかもしんねえ」

伸子「あつ！ それは大変だわ！ 柴ちゃん急がないと！」

俊作「ああ」

食事を終えた俊作は、伸子と米本を定食屋に残し、自分は先に代々木公園へ直行することにした。

食べたばかりなので、思い切り走ることはできない。だが、早歩きで代々木公園を目指す。

左手に渋谷区役所が見えてきた。代々木公園は目と鼻の先だ。

ここで俊作は、ふと空を見上げた。特に理由はない。なんとなく空を見上げた。

季節は晩秋。明らかに空気が冷たくなってきている。

冬の足音がすぐそこまで聞こえてきているような、そんな気がした。

64・「マグナム・スパイチーム」(後書き)

最後までご覧いただき、誠にありがとうございます！

制作当初は30話程度で終わらせる予定だったため、話が無駄に長くなって申し訳なく思っております。物語を作るのは奥深く、一筋縄にはいきませんね(笑)

まだまだ至らない部分も多々ありますが、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4499d/>

SPICY GAME ~ 辛口的遊戯 ~

2011年8月3日17時50分発行